

粟田口霧笛竹（澤紫ゆかりの咲分）

粟田口霧笛竹（澤紫ゆかりの咲分）

三遊亭圓朝
青空文庫

一

さて 今 日 から 寛 保 年 間 に ござ い ま し た 金 森 家 の 仇 討 の お 話 で、 ち と お 話 に し て
 は 堅 く る し ゆ う ざ い ま す か ら、 近 い 頃 あ り ま し た お 話 の 人 情 を と り あ わ せ、 世 話 と 時 代
 を 一 つ に し て 永 ら く お 聞 き に 入 れ ま し た お 駒 染 の お 話 で ござ い ま す が、 ち と 昔 の 模 様 で ござ
 い ま し て、 草 双 紙 じみた 处 も ござ い ま す。 粟 田 口 國 纏 と 云 う 名 剣 が 此 の 金 森 家 に ござ
 い ま す。 こ れ は そ の 北 條 時 政 の 守 刀 で 鬼 丸 と 申 し ま す 名 刀 が ござ い ま す。
 こ れ と 同 作 で ござ い ま す。 か の 國 纏 の 刀 の 紛 失 か ら 末 が 敵 討 に な り ま す。 この
 お 話 の 発 端 は、 寛 保 三 年 正 月 の 五 日 で ござ い ま す。 昔 も 今 も 変 り ま せ ん の は、 御 婦 人 は 春
 羽 根 を つ き 球 を つ い て お 遊 び な さ い ま す。 男 の 児 は 紙 鷺 とい つ て 凧 を 揚 げ る と い う の
 が 春 の 遊 び で、 ど こ も な く 陽 気 な も の で ござ い ま す。 一 体 空 を 見 る の は 薬 だ と い う の で、
 皆 仰 向 く よ う な 遊 び で ござ い ま す か ら、 紙 鷺 を び い く く と 揚 げ ま す れ ば、 是 非 子 供 は
 空 を 見 な か れ ば な ま せ ん。 ま た 羽 根 を 突 け ば 必 ず 空 を 見 る。 只 今 あ の 皆 様 が 椅 子 に か
 つ て コ ッ プ で 御 酒 を 飲 る 時 は、 仰 向 い て グ ッ ツ と 飲 ま な か れ ば な ら ん よ う な 事 に な つ て 居

りまする、つまり人間の健康のために致すことで、アノ羽根を突くのをよく聞く聞いて見
ますれば、あれは蚊に喰われないまじないと申しました方がござりますから、どういう
訳かと質ねましたらば、子守が児を負いまして、カチーリーと羽根を突くと云うと、む
くれんじの玉の返る処が蜻蛉とんぼという虫に似て居りますから、蜻蛉とんぼ返りと云つて、くる／
＼ツと返る、蜻蛉とんぼと云うものは蚊を捕り喰う虫だと云うので、赤ん坊の頭を蚊に喰わさん
がためにカチーリと羽根を突き、くる／＼ツと返ると蚊が逃げるんだそうですから、一体
は夏つかなればならんものだが、何ういう訳か正月羽根を突くことになりましたが、昔
の羽子板は誠に安っぽいものでござります、只今でも何うかすると深川八幡ふかがわはちまんの市で売
つて居りまするのは、殿さま、かみさま、さんじやさまとか云う昔風の絵が書いて有ります
が、只今は役者の押絵で誠に美しい大きいのが流行ります。近年は羽子板の外へ刀を持
つた手などの出たのが有りまして、羽子板の大きさはやが六尺三寸と云うので、まさか、朝飯前
には中々持ち切れません、それでカチーリ／＼と突きますが、能く突けたもので、親の教
より役者の押絵の方が大事だと見えて、

女「いえ、これは貸しません、私のは大切な新駒屋しんこまやのだから中々貸されません、似顔へ
吉野紙を当てゝしまつて置くのですから」

男「そんな事を云わないで貸しておくれよ、追羽根をするんだから」

おいばね

女「顔を汚すといけないからさ」

男「じゃア宜い、塵取ごみとりでも持つて来よう」

と正月は必ず追羽根を突きます。丁度其の頃湯島ゆしまきりどお切通しに鍊鍛冶はさみかじ金重かねしげと云う名
人がございました。只今は刈込かりこみになりましたが、まだ鬚の有る時分には髪結床かみゆいどこで使う
大きな鍊でござります。鍊きなえが宜しいから、ジョキリと一鍊ひとはさみで剪れるが、下手な人の
こしらえた鍊で剪ると、バラ々こまツに先が散ばつて幾度こいても揃いませんから、また剪る
と額の処へ細かい毛がはらく落ちて、余りぞつと致しません。金重の鍊うつた鍊はジョキ
リと一鍊で真直まっすぐに剪れるので大層に行われました。金重は六十五になりますが、無慾な
爺さんでござります。只た一人年寄子としよりごでお富と云う娘がございましたが極別嬪ごくべっぴんでござ
います、年は十八に相成りますが、誠に世間でも評判の好い娘で、少し赤ら顔の質たちだが、
二重瞼ふたえまぶたで鼻筋の通つた、口元の可愛らしい、笑うと齶えくぼと申してちよいと頬に穴があきま
すが、どういう器械であくか分りませんけれども、その穴は余程深く、二分五厘有つたと
云います、誰が尺を突込んで見たか、髪の毛の艶つやが好く、中肉中丈ちゅうにくちゅうぜいで、お臀の小さ
い、踵の締つた、横骨の引込んだ上ものでござります。一人娘ゆえ秘藏に致し気儘に遊ば

して置きましたが、日暮方から羽根を突きに往つて帰りません。此の家に恭太郎うち きょうたろうという弟子がございましたが、親方にも当人にも年の分らない、色気もなく喰い氣一方の腑抜な男でござります。金重は大人たいじん ゆえ愚おろかなものほど愛して居りました。

金「恭太や／＼」

恭「えゝ」

金「お富はどこ何処へ往たのう」

恭「表のての字の前で羽根を突いてたよ」

金「往つて呼んで来な、日が暮れるからさつさと御飯おまんまを食べてお寐ねなさいと云つて呼んで来な」

恭「あいよ」

と云いながら外へ出て参りました。その横町を真直まっすぐに出ると、ての字と云う居酒屋の前が広く成つて居りまする処で、カチーリ／＼とお富は友達と羽根を突いて居りまする傍そばへ恭太郎が来て、

恭「おい、お富さん、お富さん」

富「何なんだよウ」

恭「あの親方がもう止せつてえから、羽根を突くのは明日におしよ、日が暮れると暗く成るよ、お飯を喰べないと腹が空へるとさ、早く寐ないと眼く成るとさ」

富「何を同じような事をいうのだよ、あいよ今直ぐに帰るから少し待つておいで……きいさん上げますよ、宜うござりますか、さア上げますよ」

カチーリとはずれで駆けて突く機みに通り掛りの人の腮あごをポンと突きましたが、痛いもので、年始廻りの供の帰りが、首に大きな風呂敷を掛け、千草の股引白足袋に雪踏せつたはを穿いた小僧が腮を押え泣声を出して、

小「あの娘でございます、突然だしぬけに来て私の腮を払つたので、あいた／＼」

若「宜いや仕方がない、腹ア立つもんじやアないよ」

小「腹ア立つたつて立たないツて、人の腮を払つて置きながら謝りもしないで、彼処あすこのお飾松の処へ隠れて、そうしてお前さん私を見て居やアがる、あんな奴は有りません、いや此処へ来て謝まれ」

若「そんな事を云うもんじやアない、笑い顔をしろ」

小「痛くつて笑い顔は出来ません、小言を云つて下さいよ」

若「彼方も面白なくつて間が悪いから、慌てゝお飾松の蔭かげへ隠れたのだが、若しお前の方

が板で彼方が腮ならばお前が謝らなければなるまい」

小「詰らない事を仰しやる、あたりまいでござります、小言を云つておくんなさいよ、私の腮を払われたから」

若「払われたら目出度いではないか、宅の安兵衛うちやすべえが去年の暮に払われないとつて心配をしてえたが、まだ松もとれないので払われたら結構じやアないか」

小「ウーン、掛けまわ廻りじやアありませんし、若旦那はあんなことばかり云つて、鳶頭かしら小言を云つておくれよ」

鳶「おゝ娘さん冗談じやアねえぜ、羽根を突くならもつと端はしぱたへ寄つて突きねえ、人に怪我をさせて何うするんだ、冗談じやアねえぜ、広え處ひれどこで羽根が突きたけりやア地面を買つて突くが宜いや」

小「鳶頭これ御覧、腮から鼻から耳へかけて払われたんだ」

鳶「それじやア、正月の耳み鼻はな腮あご痛いただ」

小「鳶頭まであんなことをいうのだものを」

若「そんな事を云うもんじやアない、何でも春は心を柔やさしく持つて賑にぎやかにしてなければいけない」

と宥めて居ります。息子の年頃は二十三四で、色のくつきりと白く、鼻筋の通つた、口元の締つた眉毛の濃い、薄く青髭あおひげが生えて居りまして、つやくしい大結髮おおたぶさで、けんぼう行義ぎょうぎあられの上下に、黒斜子くろななこの紋附を着、結構な金蒔絵きんまきえの印籠いんろうを下げ、茶柄ちゃづかに蟬鞘るざやの小脇差を差して居りますから、年始帰りと見えます。

若「さあく往こう、これから腹を立つものじやアないよ」

と小僧を宥めている、物の云いよう男振りと云い、眞に情の有りそうなお方と世間知らずの生娘うぶもぞつと身に染む恋風こいかぜに、何処の人だか知れませんが好い息子さんだと思い初め、ぼんやりとして後姿うしろすがたを見送つて居りました。これが因果の始りでございます。無闇に男振や顔形を見て人に惚れべきものでは有りません。姿形じやア心意氣が分りません。心意氣を見ないで惚れてはならんと圓朝とがが咎める訳は有りませんから惚れても宜しいが、実は何處町何丁目何番地何の誰と云うことを区役所へ往つて戸籍をあらつて、其の人の身分を調べた上に、智慧が有るとか財産かねが有るとか、官員に成つても勅任ちよくにんにでもなれる人には惚れても宜いが、只顔の綺麗なのを見て浮気な岡惚おかぼれをするのは、今開化の世の中には智慧のない話でございますが、そこがそれ恋は思案の外で、お富は彼の息子は何処の方とも知らず、只何時までも立止まつて見て居りました。

恭「おい、お富さん、だから親方が早くお帰りと云つたんだよ、お侍さんの腮などを払つて」

富「お侍さんじやアないよ」

恭「でも上^{かみしも}下^{しも}を着て、はさみ箱を担いで、お槍を立てゝ居たぜ」

富「なアにあれば、年始^{うち}帰りのお人だよ」

恭「早く家へお帰りよ」

富「今帰るよ、きいさん、みいちやん、左様なら、また明日^{あした}」

と云い捨てゝ宅へ歸つて臥りましたが、何う云う因果か寝ても覚めても現^{うつ}にも、彼の息子の顔が眼先を離れませんで、漸々^{だん／＼}鬱^{ふさ}ぐような事に成りましたゆえ、親父も心配いたしましたが、金重はもうこれ六十五でござります、不図風を引いたのが原因で漸々病が重くなり、僅か二十日ばかり煩つて死去^{みまか}りましたが、江戸表には別に身寄り親類も有りませんが、下総の矢切村から金重の妹が出で参りました。お富のためには眞実の叔母ゆえ、後懸^{ねんざら}に野辺の送りも済ませてから、丁度七日の達夜^{たいや}の日に、本郷^{ほんごう}春木町^{はるき}の廻りの髪^{かみゆい}結で長次^{ちようじ}さんと云う、色の浅黒い、三十二三になる小粋^{こいき}な男^やが遣つて参りました。

長 「え御免ねえ、 真平御免ねえ」

恭 「あい、 いでなさい」

長 「兄さんの名は何とか云つたつけ、 ポン太さんじやアねえ恭太さんか、 親方にそう云つておくれ、 去年の十月あつ逃あつらえた二挺の銃はもう出来上つたかつて」

恭 「銃は出来やアしないよ」

長 「出来やアしねえって、 親方が請合うけあつたのだぜ」

恭 「請合つたつて出来ねえよ、 何うしたつて出来やアしねえ」

長 「困るナア、 出来なけれア出来ると云つて請合わなけりやア宜いに、 困るナア、 親方にそう云つておくれ、 お老爺じいさんは何うした」

恭 「何うしたつて眼を眠つて固くなつて、 冷たくなつたから、 桶の中へ入れツちまつたのだ」

長 「フウーン……じやアお老爺さんは死んだのか、 これはどうも惜いことをしたのう、 名人を一人なくなしちまつた、 日本中にっぽんじゅうの髪結おじしが何のくらい困るか知れやアしない、 そう

いう事と知つたら二十挺ばかり逃らえて置いて、後で売れば何のくらい儲もうかつたか知れねえのに、惜いことをした、此の人は、斯う云う氣だから力を落さねえのだな、おいお老爺さんが死んだら困るだろう」

恭「ウ、親方が死んだつて哀しくはねえが、親方のいる時分にア何か喰いてえと云えば直すぐに買つてくれたが、親方が死んじやア何も買つて喰えねえから、己おれも一緒に桶の中へ入れて呉れろつてつたが、生きている中うちはいけねえつて入れて呉れねえのだ、いけアしねえ」
長「可愛そうに、それが人情だ、娘さんはさぞ力を落したろう」

恭「なにそんな物はおつことしやアしないよ」

長「さぞ泣いたろうね」

恭「毎日泣いてるよ、だからね、矢切村の叔母さんが出て来て、そう泣くんじやアない、今日は精進もんで御おまんま飯なぬかア食わせるとよ」

長「そんなら今日は七日か」

恭「なに今日は二十六日だ」

長「はゝ面白いことを云う人だなア」

と云ううちに奥から店へつかくと出て参り、

富 「親方おいでなさい」

長 「誠に何うも、^{わっち}私ア些とも知らなかつたのですが、今恭太さんから聞いて驚いたなんですが、あんなに御丈夫でおいでなすつたのにね、とんだ事でござえやした、^{さぞ}嘸まアお力落しでござえやしよう」

富 「有難うございます、お逃らえの鍼はまだ出来ずに居りまして誠に相済みません」

長 「どう致しやして、鍼どこじやアござえやせん、實に惜いことをいたしやした、寶物をなくしたようなもので、何のくらいい^ど私^{わっち}共^{ども}は困るか知れやせん」

小 「おい長次さん何うしたんだ」

長 「あゝ^{びつく}悔りした、後から突然^{うしろだしぬけ}に突ツついちやアいけねえ」

小 「おまえくらい怠ける髪結はないつて、大旦那が大層腹ア立つているぜ、嘘ばかり吐いて丁場を明けたり、若旦那を遊びに誘い出したりして悪い髪結だつて」

長 「嘘を吐いて明けるわけじやアねえが、此家の親方がおめでたく成つたので悔に來たんだが、明日は^{あした}屹度^{きつ}往きますから宜しく、また濱田へお使いかえ」

小僧はけぐんな顔にてお富を見ながら、

小 「おや、この娘^{ねえ}さんだ、此の間私が若旦那のお供して年始廻りに歩いた帰りに、私の腮

を払つたのは」

富「おやまアどうも、誠に相済みませんでした」

小「あゝ、この姉さんは口を利く、私は啞かと思つた」

長「何をいうのだ、それじやア明日は屹度往きますから宜敷よろしく、左様なら、姉さん、あの小僧さんを宜く知つておいでゞすね」

富「なに此の間五日の日に、私が羽根を突きかけて、あの小僧さんの腮を払つて氣の毒とは思いましたが、間が悪いから隠れてお詫わびもしませんでしたが、あなた宜くあの小僧さんを御存じですねえ」

長「わづち　だいじ　たな　きのくにや
私の大切なお店で、紀伊國屋という質両替屋です」

富「あなた其店へ入つしやるの」

長「えゝ」

富「そこに二十二三で色の白い好い男の若旦那よがいらっしゃいますか」

長「え、伊之助さんと云う一人子息いのすけで好い若旦那ひとりむすこでいい
いますか」

富「有るくらいでは有りませんの」

長「私は毎日往つて、撫で附けて上げ、一日置きに若旦那の髪を結います」

富「お前さんのような汚ない方が、おや御免なさいよ、あなたが若しその若旦那のお髪をお結いなさるのならば、過日羽根を突いて小僧さんの腮を払つた娘がござりますが、お詫をしたくも間が悪いのと恥りしたので、御挨拶も致しませんで、誠に馬鹿な娘と思召しましようが、間が悪いのでお詫も致しませんと、宜くあなたからお詫をなすつて下さいし」

長「若旦那は男が好いから岡惚れをしてはいけません」

富「あら、そんな訳では有りませんが、お内儀がお有んなさいますかえ」

長「えゝ、嫁を探してゐるんだが、お世話アするような嫁さんがねえんです」

富「おつこちが有りましょうね」

長「そんな事はどうだか知りません、だがね堅え子息さんでございますが、此の頃足を近く廓へどんくと花魁おいらんを買いに往つても、若旦那が惚れて何うの斯うのと云う方ではない、たゞ浮れに往きなさるが、ほんの保養で、松葉屋の八重花花魁を買つてゝ、これへ時々往くばかりなのさ」

富「花魁などと云うものは本当に仕合せでござりますねえ、あんな美しいお方がお金をも

つて遊びに来て下さるのねえ」

長「その代り忌いやなのが有りますから埋合せでございましょう、花魁は随分苦しいことも有りましよう、傍そばに居るのも忌な客でも一緒に寝なけりやアならないからねえ」

富「本当にそうでございますね、松葉屋の八重花さんと仰しやるのは吉原でござりますか」

長「えゝ、京町でござります」

富「親方少し待つて下さいまし」

と云いながら奥へ這入り、暫くして鍔を手に持ち出て参り、

富「是はアノ宅うちのお父とうさんが鍛うつつて置いたお逃あづらえのすえが一挺残つてあるんですが、お役に立つか立たないか知りませんが、お使い料になすつてくださいな」

長「えゝ、これは宅のお爺とうさんが鍛うつつた、これは有難い、大切に遣つかいやす、それじやア若旦那ことづへの言附ことづけは八百ばかり云いましよう、大きに有難う、左様なら」

と長次が帰りました。お富は本郷春木町の紀伊國屋という質両替屋の若旦那と初めてわかりましたが、あの若旦那にお目にかかるのは、吉原の花魁でなければ逢われないことがと不図思い違いをいたしました。何かの本に浮氣娘は女郎を羨ましがると云うことが有りましたが、それに父の金重は無慾の人でございますから、娘へ残します処の物とてもござ

いません。少しく借財が残つたぐらいの事で、死にます時の遺言に己も人に知られた金重だから恥がしくない石塔を建てゝくれると云うので、立派な石塔を建てゝ借財の極りをつけ、是でちゃんと自分の身の立つというよう以致しますには、金子が入りますことゆえ、お富が叔母と相談して私を吉原の松葉屋へ娼妓に売り、その身代みのしろでお父さんの石塔を建てるゝ吊い料とむらにして下さいませんと、お父さんの耻になりますからと申しますと、田舎氣質かたぎの叔母ゆえ泣いて止めるのを聴入れず、お富は自身に松葉屋へ駆込んで頼みますと、半藏はんぞうも感心して、

半「誠に親孝行な事だ、器量と云い姿と云い申分がないから、お前さんの入用だけの金子いりようを上げますが、親類が得心でなければ証文は出来ません」

と云うので、叔母を呼び相談のうえ談がつき、其の頃百二十両に身を売つたと云うから、余程別嬪べっぴんでございます。身の代しろは皆な叔母に預け、金子かねを持たして帰す。叔母は残らず跡の始末を致し、金重の家うちを仕舞つて下総の矢切村に帰りました。

お話二つに分れて、是も同年正月五日の話でございます。紀伊國屋伊之助の許嫁いいなづけの娘は、深川万年町ふかがわまんねんちょうに岡本政七おかもとまさという諸侯方のお目利めきをする小道具屋で、この妹娘が紀伊國屋の息子と許嫁の約束に成つて居ります。此の家に重三郎じゅうざぶろうという番頭が居り

ます。年齢二十七まで奉公を致した堅い人でございますが、御酒の上が悪いので、御酒をたべると様子が違う。酒は謹まなけりやならんから止せと、親にも云われて、弁天様へ願掛けをして酒を断ちましたが、扱こうなるとまた飲みたいものと見えます。金森さまへ主人の代として年礼に参りまして、御馳走にお屠蘇とそが出ましたが、三合入の大盞おおさかずきで目出度く祝せというので、三杯続けたから三三が九合とそで、後あとは小さいお盞と云われたが、屠蘇でも余計に飲めば何なんものでも酔えいますが、重三郎も酔いましたが、昨年の十一月お下げになりましたお刀を書き入れを致して、二日の研初とぎぞめに研上げも出来ましたから、一度御覽に入れて、それから廿日正月までに、お鞘さやの塗から柄つかいと糸を巻上げますのは間に合いますと、そこは酔ついても商売さいめいゆえ、後藤祐乘ごとうゆうじょうの作にて縁ふちに赤銅斜子しゃくどうななこに金の二足ひきのくるい獅子の一輪牡丹、金の目貫めぬきは英一蝶はなぶさちようの下絵を宗珉そうみんが彫りました銘作でござります。鍔つばは信家のぶいえ在銘ざいめいで山水に釣り人物で、お鞘に塗は相違なく間に合いますから、柄糸は黒の五分に致しますと申し上げ、お下げになつたのを自分が大切に脊負つて外へ出ましたが、屋敷内うちにいた時は気が張つて居りますから酔えいが出来ませんが、外へ出ると一時に酔よいが発したから、歩くにも足元が定まらんので、小僧が心配を致し、介抱しながら漸く永代橋えいたいばしを担いで通つた様なもので、佐賀町通りさがちょうどおりをひよろく参りまして、佐賀町

川岸から仙台川岸を向うに見て、十間ばかり往くと、番頭は袴を穿き羽織を着たなりでベタ／＼と大地へ坐つてしまい、動きません。今と違つて若春は余寒も強く、松の内は夜よに入ると人ツ子一人通りませんから寂として居りまして、往来はぱつたり有りません。日光嵐がビー／＼と吹来る。

小「番頭さん／＼、もう少しだから往きましょう、番頭さん／＼
と呼んでも重三郎は正体なく醉ぱらい、まわらぬ舌で、

重「あゝ宜しいよ／＼」

小「宜しくは有りませんよ、其処へ坐つちゃアいけません、此処は家の中じやありません、表でございます、こんな処に居ては淋しいし、寒くつて堪りません、もう少しだからサア往きましょう、直にお店でござりますよ番頭さん」

重「常吉／＼」

小「此処に居ますよ」

重「あゝ有難いナア、今日往つたのは何というお屋敷だか知つてるか」

小「芝の金森さまのお屋敷でござりますよ」

重「能く覚えて置け」

小「覚えていりますよ」

重「芝だぞ」

小「知つてますよ、もう少しだから、さアお出でなさいよ」

重「宜いじやないか、今日は己が旦那に二百両も三百両も儲けさせる事をして居るから、少しごらゐ酒を飲んで酔つても宜いんだ、有難いことだ、金森さまの御重役もんで稻垣いながき小左衛門こざえさまというお方は七百五十石お取りなさるお方だ、そのお方がちやんと上下かみしもを着けて己の前へ手を突いてお辞儀をして、重三郎目出度いのうと仰しやるから、へえ御意にござります、毎年相変らず主人の代りに手前が参り誠に目出度いナア、へえくお目出度うござります、相変らずどうぞと云うと、手前は主人政七よりも馴染が深いなア、御意にござります、格別のお馴染で有難う存じます、酒たを禁つたかえ、禁ちました、そんなら屠蘇おおさかずきで飲め、殿様から拝領の松竹梅の大盞おおさかずきで飲め、己が酌いで遣ろう、へえ有難うござりますと云つて己は三杯飲んだ

小「お前さんは酒を三杯飲んだろうが、私は待つてゐ間にお餅かちんを二タ切焼いて呉れたがりだから腹が空へよつつて仕様がない、もう直に戌刻になりますから早く往きましよう」

三

重「こゝに脊負つてこれを見えて置け、刀屋になるのなら是を覚えて置かなければならんぜ、粟田口國綱という勝れた逸物だ、刀屋にならば能く覚えて置け、五郎入道寶龍齋正宗、伯耆の安綱、皆神棚へ上げて御神酒おみきを供え拝んでも宜いくらいの物だから、よく覚えて置け、あゝ有難い」

小「番頭さん、犬の糞ふんの上へ手を突いちゃアいけませんよ」

重「なに犬の糞結構有難い目出度い」

といつて動きませんから、小僧も呆れ果てた故、早く帰つて主人へ知らせようと思いまして、ばた／＼駆出してまいりました。番頭は何か独り言を云いながら彼方あちらへパタリ此方こちらへパタリ遣つて参ると、五六間先に一挺の四ツ手駕籠が下りてゐる様子、只今では人力ですが、其の頃は駕籠に乗つて歩いたもので、正月のことゆえ、ちよつと輪飾わかなざりが後に附いて居ります。駕籠の煽りあおをポカリと揚げて中から出た侍は、山岡頭巾まぶかを真深に冠り、どつしりした無紋の羽織を着、仙台平せんだいひらの袴はを穿き、四分一揃えの小長い大小を差し、紺足袋で駕籠から足袋はだしの儘つか／＼と重三郎の傍そばへ寄るより早く、粟田口の這入つた箱へ

手を掛けて無理に取ろうと致します。重三郎は小僧にも持たせずに自分が負って来るくらいですから、驚いて大声を揚げ、

重「泥坊／＼」

と呶鳴ると、彼の侍は突然腰に帯して居た一刀を引抜く刃の光に、重三郎は堪らんと心得て逃げたが、横へ切れゝば宜いのに真直に往つたから仙台堀へ駆込んだが、暫くして浮み上り、がぶ／＼遣つてる処を上からスーと一刀浴せたが、水の中ゆえ鋒銛が肩へ中つたか何うだか様子は分りません。侍は刀を提げたなりで水面を透して見て居り、暫く経つて後へ退り、懷中から小菊の紙を出して刀を拭いましたが血染もない様子ゆえ、其の儘鎧鳴をさせてピタリと鞘へ収め、刀箱の風呂敷包を解き、中から取出して見ると、白茶地亀甲形古錦欄の結構な袋に這入つて居ります。其の儘袋ぐるみ腰に差し、箱も風呂敷も川に投込みまして悠々として後の方へ下りますと、昇夫が一人駕籠の後に肝を潰して小さくかたまり、真青になつて居ります。

侍「これ、そこに居るのは何者だ」

昇「へい／＼、へい／＼只今往つて参りました」

侍「おゝ若い者が、小菊や煙草を買つて来てくれたのか」

昇「へえ直^{じき}に往つて参りますつもりでございましたが、大きに遅くなりました」

侍「いや存じの外早かつた、手前先程から其処に居たが、また今帰つて來たか」

昇「へえ今……もう少し先刻^{さつき}のような……今のような、ちよいと廻つて直^{すぐ}に帰りました」

侍「何を申す、それでは只今の様子を見たな」

昇「へえ少しばかり拝見を致しました」

侍「これには少し仔細の有る事だから口外して呉れるなよ」

昇「決して他言は致しません」

侍「その代り手前^{てまい}には多分の手当を遣ろう」

昇「なに旦那さま、お手当さえ下されば随分お手伝も遣るくらいで」

侍「中々氣丈な奴だ、サ、こゝへ来い、手当を遣ろう、向うの仙台侯のお長家下に二人ばかり頭巾を冠つてる奴が居るようだが、氣を附けてくれ」

昇「へえ、二人、何処に」

と、うつかり昇夫が向川岸^{むこうがし}を見る隙を覗^{ねら}いすまし、腰を居合に捻^{ひね}つて不意に昇夫の胴腹へ深く斬りかけ、アツと声を立てる間もなくドンと足下にかけたから、昇夫はもんどりを打つてドブリと仙台河岸へ落ると、傍^{そば}に一艘の荷足船^{にたりぶね}が繫^{つな}いで居りまして、此の中に

居たものは伊皿子台町の侠客で荷足の仙太という人で、力は五人力有つて、不死身で無鉄砲という危険な人で、始終喧嘩の仲人をしたり、喧嘩をするので生疵の絶えない人ですが、親父が死んでから余程我も折れましたが、生れつきの侠だから、斯うい悪人を見ると我慢が出来ません、船の中へザブリと水が跳込んだから苦を上げてもうろく頭巾を冠つたなり、と見ると侍が抜身を提げて立つて居りますから、心の中で人を馬鹿にしやアがる、こんな野郎が此の町中をのそ／＼歩きやアがるんで、夜商人の蕎麦屋だの家台店などは何のくれえ困るものがあるか知れねえから、殴り倒してやろうと思い、手頃の板子を一枚持つて、止せば宜いのに、上潮ばなで船がガツシリ岸へ着いて居りますから、仙太は身軽にひらりと岸へ飛び上り、彼の頭巾を冠つた侍の後へ廻る、途端に向うから提灯を点つけて駆けて来る人があります。

政七「何処だ／＼、常や」

小「何でも此処の地べたへ坐つてたんです」

政「お下げになつた大切な御刀を脊負つてながら本当に何てえことだろう」

小「何でも此処らに違ひないんです」

と云いながら提灯を振廻し、うろ／＼方々を見廻す中に、侍が閃つく長いのを持つて立

つて居たのを火影に見たから、小僧は驚き提灯を投り出して向うへ逃げ出したから提灯は燃え上る、政七は何が有つたのか分りませんけれども、小僧がキヤーと云つて逃げるに驚いて、無闇にこれも一緒に後から逃げました。荷足の仙太は提灯の燃上る火影に熟々と侍の姿を見済まして板子を取直し、五人力の力を極めて振り冠り、怪しい侍の腰の番を覗い、車骨を打碎こうという精神でブーンと打込みますると、悪事をいたすくらいの侍ゆえ腕に覚が有ると見え、ひらりと飛び上りながらスーツとまた長刀を引抜き、仙太郎の鼻の先へ、ひらめくところの鋒尖を突き附けられ、流石の仙太郎も驚き慌てゝ船の中へ飛込み、繩縄を解いて是から無闇に船を漕いだが、後から追掛け来るような心持で川中へ漕出しが、上潮始で楽ゆえ段々漕上つて、よう／＼万年橋の下へ船を突込みました。此の時に彼の刀屋の番頭重三郎は川の中へ投り込まれたが泳を存じておりますといは、羽根田で生れた人ゆえ少い時から海の中に這入つて泳ぎつけて居ります。なれども、袴羽織に小袖を着て、小脇差を差している上に印籠を下げて居りますゆえ、泳げるものでは有りませんから、がぶ／＼しながら石垣へよう／＼這い上ると、万年の橋詰でございます、河岸へ立上りますに、ブーと吹きおろす寒風に袖も袂もつらゝのように冰つて、ずぶ濡れゆえ、酔いが醒めてみると夢のような心もちで、判然分りませんけれども、お刀は慥か

に己が脊負つてお屋敷から出たに違ひないが、河岸縁へ来て、己が正体なくなつて土地へ坐つた時に、常が往こうくと云つた事は微かに覚えて居るが、泥坊が脇差を抜いたから驚いて己が川へ駆け込んだのか投り込まれたのか些とも分らないが、お刀を脊負つて来たに違ひないのが、無いからには取られちまつたのか、あゝ飛んだ事をしちまつた、これが小僧の使いじやアなし、三十近い年をして、お大名からお下げになつた大切なお刀を泥坊に取られると云うは、災難とは云いながら、お屋敷さま御伝来の大切な御宝刀で有るぞよと、稻垣さまが仰しやつた事を慥に覚えているが、これが紛失るとお屋敷の方も大騒ぎになるだろうし、また主人へはお屋敷から何んな難題がかゝつて来るか分らない、こりやア逆も生きている事は出来ないて、面白ないから寧^{いっ}そ一思^{ひとおも}いに死ぬより外に仕方がない、寧^{なま}そのこと身を投げようか、いや己は身を投げても死ねゝえや、斯ういう時には生じいに泳ぎを知つてるのはいけないナア、首を縊^{くく}つて死のうかしらん、併し能く往来中の松の樹^{しき}の枝などへぶら下つてゐるが有るけれども、随分ざまの悪いもんだ、己の耻を曝^{さら}すばかりじやアない、主人や親までの恥になる、困つたなア……あゝ好いことがある、この橋の欄干に帯を縛つてぶら下れば、船で通る者ばかりしか見られない、船頭などに見られたつても構わないから、此処からそうしよう、併しナア正月五日に首を縊ることになろうとは思わ

なかつた。と云いながら羽織を脱ぎ、袴を取り、帯を解き、真田の下締さなだしたじめを締めまして、黒紬くろつむぎの紋附を着たなり欄干へ帶を縛り附け、脇差や印籠を一緒にして袴の上へ取捨て、片手にて欄干へ捉まり、片手にて輪にしたる帯を首に巻き附け

「あゝ己の死ぬのは心柄だから仕方はねえけれども、己が此処で死んだという事を、羽根田にいる親父が聞いたらば嘸さやづく恂じゆりするだろう、虫が知らせたのか去年の暮の二十日だつて、久しう振りで親父の処へ尋ねて行き、一両小遣を遣つたらば、何で己に小遣をくれるのだ、己は梨子なしを一荷かかづ抱いて歩き、幾籠売つても一両の金は儲からないのに、己に一両も小遣いを呉れられるような身の上に成つたは、御主人さまのお蔭だから、御主人を大事に思うなら、好な酒だから飲むなじやアないが、手前まへが一己立いっしきだちになるまでは酒だけ止めてくれよ、と手を突いて頼むと云われたから、お父さん、そんなら私は羽根田の弁天様べんてんさまへ酒を禁たまとうと云つて、親父と手を引合つて弁天さまへ参詣して願掛けがんがくをしたが、酒を禁つて置きながら味淋みりんでも呑んで醉えば同じことだ、味淋酒みりんしゅというからこれも矢張酒やつぱりしゅだ、どうぞ堪たま忍しておくんなさい、どうも済みませんが、災難で、これも皆約束事と諦めておくんなさい、先立ちます、また万年町の御主人も嘸悪い奴にくと思召おぼしめしましよう、後でお屋敷から難題いたしかたが掛つて来たら、何のくらい御立腹ほどになるか知れませんが、どうも私には致方いたしかたはござ

ざいません、その代り私が死にましてもお刀の処は私が幽靈になつて尋ね探し、御難儀のかゝらないように致して…お係りの稻垣様のようなおやさしい御重役を、しくじらせるような無調法^{ぶぢょうほう}を致し、事に依つたら切腹でも仰付けられるようなことが有つては済まない、あゝ何んと云つても酒からだ、意見を云われても是だけが止まないからだ、何たる因果なことだなア」

と男^{おとこなき}泣^{なき}に後悔して居りましたが、また氣を取直し、何程思つたつて悔んでも返らぬ事だ、仕方がない南無阿弥陀仏^{くく}と口の中に念仏を唱えながら、スーツと手を放す、途端にグッと縊^{くび}れるものだそうで、行つて御覧なさい、何のくらい苦しいか知れますまい。

四

すると、橋の下に繋いでいた船の舳^{みよしばた}端^端に立つて居ました男が、此の体^てを見て、重三郎の腰を抱えて、

男「おい、これさ待ちねえ泡ア喰つちやアいけねえつてば」

重「お放しなすつて、どうぞ殺して下さい」

男「おい、そう動いちゃアいけねえと云うに、まあ氣を落着けて己のいうことを聞きねえ」

と云いながら首ツ玉へ巻き附けた帶を解き、船へ下し、

男「どうせ死のうとするからにやア種々事情が有つて能々の事だらう」

重「へえ、どうしても生きては居られません、種々深い訳がござりますので、お止めなすつても中々一通りの訳じやアございません、みんな私の不調法から多數の人の難儀になる事ですから、どうかお殺しなすつて」

男「これさ、お前が獨りで悔んで居たのを皆な聞いたが、泡を喰つちやアいけねえぜ、死ぬのは何時でも死なれる事だ、斯うやつてお前を助けて置き、そんなら死になさいとは云えねえじやアねえか、膝とも談合という事があるから、まあ着物でも烘つて温けえ物でも喰いながら緩りと話をするが宜い、慌てゝも仕様がねえ、己が屹度お前の助かるようにして遣つたら宜かろう」

重「そう致しますには肝腎の紛失した物が出なければいけないのでございます」

男「だからよ、※物が出るように己がするから、それまで己の云うことを聞いてくんna、炭団の頭を叩つて見な、まだ少しは火が有るだろう、泡ア喰つてまた川の中へポカリをきめちやアいけねえよ、そんな事をすると苦へふん縛るよ、宜いか、紛失つた物は出るよう

な工夫をするから、その相談をするまで待つてくんna」

と船を漕出し、永代橋を越して御浜沖へ出て、あれから田町たまちの雁木がんぎへ船を繋けまして、男「エヽコウ潮時わりが悪いもんだから滅法界めっぽうけいに遅くなつた、なにしても寒くて堪らねえから何処かで一杯ペいや飲ろうか」

重「いえどう致しまして、私は御酒と聞くと敵かたきでござります」

男「違えねえ、そんなら温あつたけえ御飯おまんまでも喰いな」

と口の利きようは粗いようだが眞実の男で、手を引いて馴染の夜明しの居酒屋へ這入つてまいり、

男「お爺さん」

爺「いや親方大層遅く、今夜は深川へお泊りのような話だつたが」

男「泊る積りだつたが帰けえつて來た、爺さん其の衝立ついたてを二重に建てゝおくれ、そうして火を沢山入れて、火鉢を二つばかりよこしてくんna、何か温かい物が出来るかえ」

爺「蛤鍋かにが出来ます」

男「それアいけねえ」

爺「独活鱈うどたらが出来ます」

男「そいつは強気だ、他に何か出来るかえ」

爺「柱豆腐」

男「そりやア結構、それから熱くして一本燶けて来て呉れ、兄さん此方へお這入り、己がお前をマア〜と云つて無闇に船の中へ押込んで漕ぎ出したから何処へ連れて往くのかと思つたかも知れねえが、己ア伊皿子台町にいる仙太と云うもので、船も五六艘あり、野郎共も宅に居て、何うやら斯うやら暮して居るものが、餓鬼の時分から喧嘩ツ早く、無法で随分親父に苦労させたが、彼処の喧嘩の中人に這入つて謝つてくれと頼まれ、中え這入り、出刃庖丁でジョキ〜遣られた事も有つて、何のくれえ親父が苦労をしたか知れねえが、三年あとに親父が死ぬ時に、短慮功を為さずと遺言され、それから些とばかりおとなしくなつたが、氣の暴えのは性質だから止まねえのよ、今日高輪から乗合船で客を送り、深川へ上げて佐賀町の友達の処で用を達し、仙台河岸へ船をもやつて一服喫つてると、船の中ヘザブリと水が跳ね込んだから、何だと思つて苦を撥ねて向うを見ると、頭巾を冠つた侍が長えのを引抜いて立つて、投り込まれたのは昇夫のようだツけ、斬つて投り込んだのだかどうだか様子は分らねえが、何しても斯んな侍を打棄て置けば、多勢の人の難儀になると思つたから、板子を持つてそツと其の侍の後へ廻り、どや

そうとすると、ひよいと飛びやアがつて引っこ抜いたから、驚いて船へ逃込み、慌てゝ川中へ漕ぎ出しながら、と見ると船の中に財布^{せふ}が一つ有つた、縞の財布よ、其の中に金が三両二分に端たが些とばかりと 印形^{いんぎょう}が這入つてたから、遣し主へ知らせて遣りたいと思つて、万年の橋間^{はしま}で船を繋つて、また一服喫つてるとお前が上でよめえ言を云いながら帯を首へ巻き附けて、了簡違^{ちげ}えをしたので、屋敷の役人は腹ア切るとか、主人に何んな難題が掛るとか、親父^びが洟りして死ぬだろうとおろく、泣いてると、その落る涙が己の額へポタリ／＼^{あた}中つたので、あゝ氣の毒な人だ、己も腹一杯^{ペえ}親に苦労をさせたが、此の人は嘸^{さざ}マア困るだろうと思つて、いらざる事だが無理にお前を助けたのだ、お前の物を盗んだ奴は己が打ん殴^ぶろうとした侍だ……此の財布は事に寄つたらお前が落したもんじやアねえか」

重「はい／＼」

と云いながら手に取上げて見ました。

重「誠に思い掛けない事でござります、この財布の中には印形に金が三両二分と二百五六文這入つて居りますので」

と打返し見て、

重「これでござります、あなたがこれをお拾いなさるというは誠に不思議なことでござい

ます」

仙「そればかりじやアねえ、よく聞きねえ、その侍を打ん殴ろうとしたから侍の姿形は悉^{なり}_す皆^{つき}知つてゐるから、宜いかえ、お前が幽靈になつて刀の詮議をするよりか、生きていて知れりやア死ぬにやア及ぶめえ、刀せえ出れば死なくツても宜いんだろう、己も乗り掛つた船だ、殊に侍の姿を知つてゐるんだからお前と二人で方々詮議に歩こう、その刀は滅法に善い刀だという事だから、無闇と質に置いたりする事は出来めえと思う、また質に置けば斯ういう品が何うとか、質屋へ、着物ならば古着屋へお触が廻るから、売ることも質に置くことも出来ねえに違えねえから、その侍は当分自分の差料にして居るだろうという考え方だ、違つてるか知れねえがお前と己と二人で手拭で鼻ツ冠りをして、矢ツ張己のようないなせな股引腹掛けで、半纏^{はんてん}を引掛け人繁^{ひつか}しい處を歩いて、もし怪しい侍が居たら、己の方から^{つきあ}タボカリと突^{つきあ}當つて置いて悪^{あく}體^{たい}を吐^つくと、怪しからん奴だ斬ツちまうと云う隙^{ねら}を覗つて、その刀を挽取^{もぎと}つてお前に渡すから、紛失した刀だと思つたらそれを持つて何処へでも逃げちめえねえ、己は後^{あと}で其の侍と喰い合おうと死に合おうと構わねえからよ」

重「へい、それは誠に御親切な事で有難う存じますが、あなたがまたお怪我でもなさるような事があると誠に相済みませんが」

仙「なに己アふじみだから二寸や三寸斬られても痛くねえという妙な性質だから、無法に喧嘩を仕掛ける心底だ、お前が死んでしまえば役人に主人にお父さんにお前と四人が死なゝけりやアなるめえから、己が一人死んでも四人助かる方が割じやアねえか、だから己の云う事を聞いておくれ」

重「でも見ず知らずのあなたに御迷惑を掛けとは相済みません」

仙「見ず知らずだツて宜いから己に任せねえ」

と云つてる処へ表から昇夫さんでございましようか、十二分に酔つてヒヨロ／＼しながら這入つて参り、

昇「お爺さん今晚は」

爺「いや安さん、おくれ仕事でたんまり有つたね」

昇「甘え仕事もねえのサ……親方御免なせえ……お爺さん熱くして一本酔けておくれ、お爺さん、カラどうも醉えいが醒めちやア生地いくじがねえんだ、寒い時こいと怖え時は酒でなくツちやア凌しのげねえから、熱くして一本酔けておくれ」

爺「大分御機嫌ですね」

昇「親方どうも大きな声をしてお八金やかましゅうゞざいます、え、おいお爺さん、己ア此處迄

に四度飲んで来たが、直ぐに酔が醒めるんだ、醒めるから又居酒屋へ飛び込んで飲つて來たが、丁度五度目だよ、慄えて仕様がねえから、もつと熱くしておくれ、肴ア何か一品ばかり摘んで持つて来ておくれ、何でも宜い、塩氣せえ有れば宜いやア、おいお爺さん、今日のう寅の野郎と己と二人で新橋に客待をしてえると、え、おい駕籠に乗る人担ぐ人と云うが、おらッちは因果だな、若え旦那が通つたから御都合まで廉く參りましょと云うのだ、辻駕籠の悲しさには廉くつても仕事をする方が割だぜ、オーそうだと云う訳だ、え、おいお爺さん、頭巾を冠つた侍が来て、おい若衆深川の木場までやれ、へい畏りました、駕籠賃はいくら遣ろう、御如才はござえますめえが、此処から余程ありますから六百遣つて下せえ、もつと沢山遣るから氣を附けろよ、有難いツてんで……おい此方を向いて聞きねえよ面白え話だ、そうするとお爺さん、ピヨコ／＼坦いで靈岸島まで往くと、鰻で飯を食うから駕籠を下せと云うから、旦那大黒屋は疾うに売切れて有りません、春は早く仕舞いやすというのに、宣いから下せ、ヘーツてんて下すと、その侍が鰻屋へ這入ると、此の通り売切れ申候という札が出してあります、存じて居る、貴様の所の鰻は宜いから態々來たのを、己に食わせんと云う事はあるめえ、手前の家になければ外の鰻屋から買つて来て割いて焼いて出せ、望みだと云うと、侍でおつかねえもんだから大黒屋の

番頭がそれから奥へ通した、若衆は縁側へ廻れというから縁側へ廻ると、彼家の事だから井は出来ねえや、あれえのを焼いて酒を一本ずつ出してよ、待たして氣の毒だから待貢を二分ずつ遣るつてえんだ、え、おいお爺さん、辻駕籠に出てよ駕籠貢が六百で祝儀が二分宛ツてえのは無えや、寅が目度てえ正月だという訳だ』

と一口飲み

「もう少し好い酒を売れば宜いに、少し悪くなつたな」

とまた飲みました。

五

安「お爺さん、そうするとね、其処へ一本差した海鼠襟の合羽を着た侍が這入つて来てね鰻を食いながらコソ／＼話をして、その侍が先へ帰つちまつてから飯を食つてサ、若衆遣れ、へえ畏まりましたツてんで、ヒヨロ／＼坦いで永代橋を渡つて、仙台河岸の手前の佐賀町から河岸の方へ廻つて往くと、若衆駕籠を下せ、大黒屋の床の間の側の棚へ紙入を忘れて來た、金は沢山じやア無えが、書物が大切だから取つて來いよ貴様、へえツ

てんで此方こうかは取りに帰けつて、これこく」というと、若衆飛とんだ云い掛かけつたことを云うな、有ればちゃんと取つて置くよと云うから、そう仰ほかしやるが外ほかのお客と間違まちがやアしませんか、売切れ申候めいこうといふ札を出して置く処へ無理に上つたのだから、他にお客はねえ馬鹿野郎、そう御免めいねえ、初手から小言をいわれに帰つたようなものだ、佐賀町河岸へ帰つて見るとお前まへ、その侍が長いのを抜きやアがつて棒組の寅の野郎をポカーリと斬りやアがつて、川ん中へポンと投ぼうり込んだから、フウというわけだ」

爺「フウーンそれはとんだ事だね」

安「飛とんだにも跳ねたにも、己おらア転とつがつちゃツた、え、おいお爺さん、初めツから怖こええ侍ならば油断なめえをしねえが、やさしい声で若衆や氣を附けて遣つて呉れツて、鰻屋で一本酔酔つけて二分の祝儀だ、畏りましたと云うと、金は宜いいが書附でえじが大事大事だ、棚へ上げて來たから取つて來いよ、へえツてんでお前往まへつて、これこく」というと大黒屋だいこくやでは飛んでもねえ事をいう、大黒屋の名前に障るから、そんな物が有れば取つて置く、何んだ、へえと云つて仕方がねえから。ピヨコこく帰けつて来て、佐賀町から河岸へ廻まわつて往いくと、おいお爺さん、そこの侍が鼻の先へ長いのを引つこ抜いて、ポカリと寅の野郎を斬つて、川の中へ投ぼうり込んだから己あウンと云つて這まつちまつたよ」

爺「怖かつたろうねえ」

安「それを云うんだ、怖え時と寒い時は酒でなければ凌げねえから幾度も飲んで来たんだ、
思え出しても身の毛立つようだ、最初から胡散な侍だと思えば氣を附けるが、やさしく若
衆や砂打場……じやアねえ、ナニ木場まで遣つてくれ、御飯は食わせるよ、へえ有難
うござえやすツてんで、二分ずつの祝儀だからうめえと思つてると、大黒屋へ紙入を忘
れて来て、金は宜いが書附が大切だと仰しやるから、帰つて来てそう云うと、お前冗談い
うな、へえと小言を云われに来たようなもんだ、詰らねえと思つてヒヨロ／＼帰つて、仙
台河岸へ廻ると、おい其の侍がスーツと長いのを鼻の先へ」

爺「それはもう度々聞いたよ」

安「嘘をつきねえ、これからさきを知つてるか」

爺「さきは存じません」

安「それ見ろ、ポンと寅を川ん中へ投り込んだ時にやア、己あフーツてつて這ツちまつた、
あの長え永代橋を四ツ這に這つて向うまで渡つて、箱崎の鐵爺さんの屋台店へ飛び込
んで、一杯／＼と云つてグーッと引掛けたが、錢がねえんだが馴染の顔だからね、これ／＼
の災難に逢つて布団の間へ財布を忘れて来て、取りに往く事が出来ねえから明日の晩ま

で貸しておくれというと、安さん何時でも宜いってえから安心して飲んで、酔つて見ると
気が強くならア、何んでえ籠^{ペラボウ}棒^{さむれえ}め侍^{めし}が何んでえという訳だ、外へ出て酒が醒めるとまた
思^{おも}出^{えだ}して怖くなるからまた飲みくして、丁度五度目だ」

爺「さぞ怖かつたろうね」

安「だからよ、それを云うんだ、酒を飲めば凌^{しの}がアさ」

爺「そうだろうね」

という話を此方^{こちら}で聞いていた仙太郎が重三郎に向い、

仙「えゝ重さん、妙な事があるもんだね、刀は出るぜ、おい若衆^{わけばしゆ}」

安「へえこれは何うもおやかましゅうごぜえやす」

仙「今聞けば飛んだ災難^{せえなん}だつたね、おゝ初々^{はつつく}しく飛んだひどいめに逢つたね」

安「へえひどいめに逢いやした、寅の野郎は川ん中へ投^ほり込まれて 懈^{かええ}然^{そう}でごぜえやす、

嫁^{かわ}アが泣くだろうと思ふと懶然^{かええそう}でね」

仙「うん、併^{しお}しお前^{めえ}が斬られ無えのがめつけもんだ」

安「へえ命の助かツただけが此方^{こつち}の儲けもん^{めん}でごぜえやす」

仙「その侍は初^{はじ}ツから頭巾^{かぶ}を冠^{かぶ}つてたかえ」

安「えゝ冠つていやした」

仙「そうか」

と云いながらいくらか金を紙へ包んで前へ差出し、

仙「これは誠に少ねえんだが縁起直しに上げるから一杯遣べえつておくれ」

安「これは誠に有難ううご」ぜえやす、宅うちのお爺とうさん、此処においでなさる親方さんは何處の親方さんか知らねえが、わっちのような者に金を呉うれるてえのは何だか危險けんのんだ」

仙「ハヽヽ、なに危険なことはねえ、大丈夫でいじょうぶだよ、若え衆わけしゆ己は伊皿子台町いさらごでえまちにいる荷足の仙太だよ」

安「えゝ仙太親方だえ、こりやどうもお見それ申しやした、道理で一両呉れたと思つた、御免なすべつて下せえやし、私は初音屋はつねやにいる安てえ者ですが、此の土地にいて親方を知らねえと云うのは本当に外げえぶん聞ねの悪りいくれえのもので、吉原でも日本橋でも何処の川通りだつて、荷足の仙太と云やア随分なでえ名代の無鉄なきつ……ナニ誠にその剛い人だと云つて誰でもお前さんは知つてやす、いつか五十軒で喧嘩あおのけの時に、お前さんが仰向あおむけに寝て、サア殺せと仰しゃつた時は誰も殴ぶてなかつたとね、仕事師手合ばくでええが五十人許ばかり手鍵くみええを持つて來たが、打ぶてなかつたれえだから組合みんの者が皆なそう云つて居やす、あのくれえな無法ふぽく……ナニ誠

に気丈な人だつてね、これはどうも誠に有難うござえやす」

仙「時に少し聞きたいが、今の侍の容貌は何ういうのだえ」

安「袴ア穿いて、大小を差して、羽織を着て、頭巾を冠つてたから顔は分りやせん」

仙「成程頭巾を冠つてちやア顔は見えめえ」

安「だがわつち私は縁側へ腰をかけて居たが、侍が鰻を喰う時にやア頭巾を取つて喰いやした」

仙「違えねえ、些とは覚えてるか」

安「ちつと処じや有りやせん、あの侍の面は死んでも忘れねえ」

仙「こいつアどうも有難え……いゝ事がある、兎も角今夜は己の処え来て泊んねえな」とけ

安「親方の処えかえ」

仙「少し話が有るんだ、御馳走するぜ、頼みてえ事も有るから一緒に往つてくんねえな」

安「私などは宅の無えものだから、へえ有難うござえやす、じやアどうか願えやす」

仙「お爺さん、此の若え衆さんの勘定も一緒に取つてくんな……なに、つりはいらねえよ」

とはから仙太郎が駕籠屋の安と重三郎の二人を連れて我家へ立帰りました。此方は岡

本政七は翌朝早く重三郎を捜しに出ますと、万年の橋詰に袴印籠脇差と羽織が脱ぎ捨て、あり帯が欄干に縛り附けて有りますから、これは大方重三郎が、大切なお刀を取られ、言

訳なくして身を投げて死んだに相違有るまい、なきない事である、死んだ記しるしに衣類を脱ぎ捨て帯を縛り附けて置いたものだろうと、旧来奉公していた者ゆえ、主人始め家内も娘も皆心配致し、涙をこぼして搜しましたが、何うしても大切のお刀ゆえ何うしたら宜かろうと気を揉んで居りました。すると翌六日の夕方に、稻垣小左衛門という粟田口國綱のお係りの役人が、年頭のお帰りがけと見えて、麻上下の上へどつしりとした脊割羽織を召し、細身の大小を差して、若党草履取をつれて岡本政七の宅へ参り

「頼もう」

「どなたさま……稻垣さま」

と云うので驚いて廻り縁から奥の座敷へ通し、茶煙草盆を出し、政七も出て参り下座に坐り、慇懃に両手を突き、

政「へえ新年御目出度う存じます、旧冬はまた何かと段々お引廻しでございまして、お屋敷の方を事無うお勤めを致しましたのも、偏に旦那さまのお蔭さまと蔭ながら申しあげて居りました、当年もまた相変らずお願ひ申します」

小「はい新年で誠に目出度い、旧臘はまた相変らず歳暮を自宅の下の者までへ心附けくれられて、誠に有難い、また相かわらず重三郎を其の方の代としての年頭で、年玉

の品々をかたじけ添けのうござる」

政「何う致しまして……え、まあ／＼お天氣も続いて宜しく、夜に入つては寒いようでございますが、先ずまア誠に善い春でござります」

小「はい左様で」

と云つてゐる処へ出てまいりましたはお雪という政七の妹娘いもとむすめでござります。正月の事ゆえこつてりと化粧おしまいが出来、結構な着物を着て居りますから猶な更おさら美しく見えます。尤も近辺でも評判の娘で、しとやかに遠山台とおやまだいを持つてまいりまして、小左衛門の前へすえて、挨拶をいたします。

小「ハヽア政七、これが其方の妹か、ウーン成程美しい器量だ、慥か本郷辺の紀伊國屋という質両替屋とかへ縁附ける約束になつて居るとかいう事を、ちらりと番頭から聞いたが、嫁入盛りだの……はいお目出度う……就ついてはソノ火急な事であつて嚙さぞ困つたろうが、昨日番頭が國綱のお刀を持つて帰られたろうな」

政「へえ」

小「二十日正月までに拵える事に相成つたが、彼の國綱は存じて居るであろうが、鬼丸同作であると云うは、北條のもとめによつて國綱山城やましろの粟田口おより相州そうしうう山の内きたに來り、

時頼ときよりの為に鍛きたえたる鬼丸、其の時に一口打つたるを、一腰ひとこしが鬼丸にて、一腰ひとこしが今御当家にある國綱なれば、どうか鬼丸作りに致せとの仰せなれば、至急の事には相成るまいのう、政七」

政「へえ、成程先達せんだつて集古しゅうこ十種と申す書物で見ましたが、一端たんかき入れを致して其の上を栗色の革にて包みまして、柄はかば糸にて巻き、目貫は金壺笠きんつぼがさに五三の桐でございまして、餈袋もやはり栗色革、裏は浅桐絹あさぎりぎぬの切をつけ、紫紐は一尺九寸でございましたと存じます」

小「成程其の道とは申しながら詳しく述べて居るのう、それに付今一度取寄せる様にとの仰せゆえ至急取りに参つたが、是へ出してくりやれ」

政「へえ」

と云いましたが、忽に面色たちまちかおいろが真青まっさおになり、おど／＼口もきかれません様子。

小「何う致した政七」

政「へえ……」

小「イヤサ、早く是へ出してくれよ」

政「へ……」

小「コレ政七、昨夜重三郎はお刀を脊負せおつて帰つたか」

政「サ……左様でござります」

小「それで安心致した、それなれば早く是へ持つて参れ」

政「へいへ、何ともハヤ申上げようもございませんが、重三郎は余りお屠蘇を沢山に頂戴致しまして、前後も分りませんように酩酊致しましたが、お屋敷に居るうちは気が張つて居りましたから、御刀おかたなは丁稚にも持たさずに自分が脊負せおつて参りましたが、途中から酔えいが出て頓とんと歩かれませんようになり、漸く佐賀町の河岸まで参ると正体なくなりまして、地びたへ坐つて仕舞い動きませんので、小者が駈けけて来て知らせましたから、私が直ぐに駆付けましたが、重三郎の行方は知れませんで其傍そばに怪しい侍が抜身を提げて立つて居りましたを見て、小僧は驚き提灯を投ほうり出して逃げ出しますから、私も驚き、共に逃げ帰りましたが、今朝程万年橋の上に重三郎の衣類脇差印籠などが取捨ててございました、行方が知れませんから、重三郎は大切な御刀を取られて申し訳なく、万年から入水したものと見えます、誠に相済みません事で」

小「これは怪しからん、これ政七、余の品とは違い、当家伝來の御宝劍ごほうけんを失つて只相済みませんでは置かれんぞ」

政「へえ、誠にどうとか致そうと存じまして、種々心配致して居りまするので、此の上ともまた何の様な詮議も致しまして、お刀を見出して、お屋敷へ持参致す心得でござりますからどうか切めて一月もお日延が出来れば願いたいものでございます」

小「ウン……それは紛失したもので有るから日延を願つて見まいものでもないが、一月経つうちに其の國綱が出れば宜いが、若し出ん時は何う致す」

政「へえ」

小「必らず出るという目途はあるまい、慥に認めた処はないのだろう」

政「へえ、確かりした認めはございません」

小「何うも当惑致したなア……いや是は私が悪い、この稻垣が行届かななかつたのだ」

政「いえ、何う致しまして左様でございません」

小「いや左様でない、禁酒致しおる重三郎に、祝酒とは云いながら屠蘇を勧めたは私が悪かつた、又酔つておる者に大切な物を持して帰し、殊に夜中なり、何うも私が過だ、重三郎はお刀を失い申訳なき為め万年橋から入水したと上へ届をした処が……重三郎は如何にも氣の毒な事だ……飛んだ災難であつたが、屋敷からまた其の方に何の様な御難題が掛つて来ましいものでもない、それで済めば宜いが、私は係り中の事ゆえ何の様なお咎めが

あるか、切腹仰せ付けられるか、お手討になるか、癩癖の強い殿様だから軽くいつても追放仰せ付けられるには相違ない……これは斯う致そう、兎も角も屋敷へ帰つて私から家老までへ斯様に申し入れよう、稻垣小左衛門小屋に於て賊が忍び入つて紛失したと、私一人の越度おちどにして、貴様や重三郎へ迷惑の掛らない事にしよう、何の道しくじる稻垣、致し方はない、私が家事不取締不埒至極ごせきという厳しい御沙汰ごさたを受けて切腹仰せ付けられるも知れないが、それより外に致し方はない、誠に困つたが拠よんどころないから宜しい、其の趣むきに届けるから、屋敷から何んな問合せがあつても、お刀はまだ此方こちらへお下げにはならんと云い張れ、そうせんとまた宅うちに障るばかりでなく、親の代から年来の出入も差止められたら難儀をするだろうから、左様心得ろ」

と云い渡され、政七は氣の毒が一杯にて漸く顔を上げ、

政「貴方さまお一人へ御迷惑をかけましては済みません」

小「掛けても致し方がない、それまでの事だ、マア宜い、年来馴染よったが、これがもう手前てまいの顔の見納めになるかも知れん……どうも仕方よがないから直ぐに帰りましょう」

と心ある侍ゆえ少しも荒い小言も云わず、覚悟を極めて屋敷へ帰りまして、是からお届けになるという、一寸ちよつと一息つき吐きます。

六

引続きます、粟田口國綱の事からして主人の難儀になると思い、入水致して相果てようとした重三郎を仙太郎が助け、昇夫の安吉を連れまして宅へ帰り、其の晩二人を泊めましたが、仙太郎の女房お梶には何事だか頓と分りません。翌朝になりますと、昇夫の安さんは知らん処へ泊つてきまりが悪いから早く起き、寝衣のまゝで水を汲んだり表を掃いたり、掃除の手伝を致して居ります。

梶「ちよいとあにさん、昨宵泊つた人は何に」

仙「あれが、一人は深川の万年町の刀屋の番頭さんだ」

梶「あの、もう一人の裸体^{はだか}で働いてる人は何に」

仙「あれは辻駕籠の安という者だ」

梶「あの人は水を汲んだり板の間拭いたり、キヨト／＼間の悪そうな顔をして働いてるよ……申し安さんとか、もう宜いから足を洗つて此方へお上んなさいなねえ」

仙「おい安さん此方へ来ねえ」

と云われ、安吉はおずくく上つて参りましたが、窮屈そうに頭ばかり撫でながら、

安「こりやア誠にどうも姐さんあねでござえやすか、碌々御挨拶ごええさつも致しやせん、目が醒めて見ると
は喰え醉つてやしたから、何う云うわけで此方こちらへ泊つたか分りやせん、目が醒めて見ると
きまりが悪くつてね、へえ何か乱暴でもやりやアしねえかと心配しんぱいでござえやす」

梶「なにも済まない事は有りません、甲斐うち／＼しく骨惜みをしないで宜く働いておくれ
で、お氣の毒だから良人うちのに聞いてた処ところで、まあお休みなさいよ」

安「へえ有難うございやす」

仙「番頭ばんつさん、重じゅう助すけさん……じゃアねえ重三郎さんかえ、此方こちらへおいでよ／＼」

重「へえ」

と立つて参り、仙太郎の前へ坐る。

仙「お梶、此の人がソノ刀屋の番頭ばんつさんの重さんと云うのだ」

梶「おやそいかい、お初にお目にかかります、昨夜ゆうべおいでなすつて碌々御挨拶ごええさつを致しませ
んで、何にも構い申しません、何んだか酷ひどく鬱ふさいで、隅の方ひつこへ引込んで考えてばかり居
なさるが、何ういう訳で」

仙「これには種々いろく深い訳のある事だ、重さんマア心配しんぱいしずに此方こちらへおいでよ」

重「へい、昨夜は出ましてまだ碌々御挨拶も致しませんが、此の度はまた何ともお礼の申そうようはございませんが、親方のお言葉に甘えて飛だ御厄介に相成り、誠に有難う存じます」

仙「そんなに丁寧にしちやアいけねえ、ぞんぜえ者もんだから……安兄こけい此処こけえ来ねえ、此の人がソノ、万年町の岡本という刀屋の番頭ばんつさんで此の芝の出入り屋敷へ……重さん何とかいう屋敷だつて、ウン金森さ、其の屋敷へ年始に往つた処が、帰けえりにお逃あつらえの刀が下さがつたのだ、それが先祖から伝わるところの滅法に好い物なんだ……すると、此の人は酒嗜さけずきで、酒を禁たされてる処へ無理に屠蘇を勧められて、一升許りなぐつたのだ、屠蘇ぱかだつて沢山飲んめば酔たうからね、酷く酔たつちまつて、佐賀町川岸で動けねえ処を怪しい侍にその刀をふんだくられちまつて、宅うちへ帰けえる事も出来ず、主人や親に済まず、お屋敷へも言訛ねが無えからつて、万年橋の欄干へ帶を掛けて首を縊くくろうとする処を、己が思おもえ掛けなく助けて船へ入れ、お連れ申して來たのだ」

安「そりやア初はじ々つくしく飛とんだ御災難ごせえなんでお氣の毒様な」

仙「安さん其の刀を盗ぬすんだ侍は、昨夜のう己も佐賀町河岸で見たが、お前めえがソノ新橋から乗せたという頭巾を冠かぶつた侍だ」

安「えゝ、それは驚きやしたねえども、ソノ寅の野郎をポカリと斬つたのも其の侍だが、侍と聞くと身の毛がよだつようだ、フーン成程」

仙「己も番頭さんを助けて何うしたら好かろうと云うと、その取られた刀が出なければ何の道言訳がねえから死ぬと云うので、己も困つたが、一旦助けたからにやア何うかして其の刀の所在を詮議をして、刀を此の人へ戻して遣り、万年町の店へ帰して遣りたいので、段々其の刀の事を聞いて見れば、大層名高えものだから、何処へ売つても直に知れちまい、世の中に少くねえものだから、当分質に置くことも、売ることも外へ預けることも出来ねえ品で、預けたところが直に足が附くから、己の思うには当分は自分の差料にするより外に仕様がねえ、そこでその侍の形恰好は己が知つてゐるが、安さん面ア知つてゐるだらうな」

安「知つてゐるぐれえじやア有りやせん、酔つてゝも忘れやせん」

仙「お前が見知人よ、姿形は己が知つてゐるし、刀の目利は此の番頭さんが自分でなくしたのだから知つてゐるから三人で人ざかしい処を歩いて、お前は侍の面を知つてゐるんだから、あの侍だと教えてくれゝば、己は咬りついても差してゐる刀をふんだくるつもりだ、もし長えのを引こ抜きやアがれば、自身番へ引摺つて往く、また頭巾を冠つてやアがれば、此方から突當つて、なんでえ太え奴だと喧嘩を吹つ掛けて、其の侍と喰い合つても刀をふん

だくつて番頭さんに渡して遣れば、後で死に合うとも何うしても宜いのだから、番頭さんもいなせな拵えでゴテ／＼をきめて、鼻ツ冠りで人ざかしい処へ刀の詮議に歩くが好い、安さんは日に幾らになるか知らねえが、日当は己が払うから、駕籠を休んで己と一緒に刀の詮議に往つてくんねえな」

安「こりやア驚いた、そいつは御免なせえ、いけやせん」

仙「いけねえッてお前めえが喧嘩アするんじやアねえ、己めいがするのだ」

安「ですがね親方の乱暴……ナニ強いのは知つてますが、侍に此方から突当るんだから親方怪我アしやすぜ」

仙「大丈夫でえじよぶだよ、性うま来れつき不死身だから斬られても大丈夫でいじよぶだよ」

安「ですがね私は不死身じやアねえから」

仙「教えてさえくれりやアお前めえは逃げても好いんだ」

安「そう旨く逃げられりやア好いが、昨夜ゆうべで覚えが有りやす、悔りして、どんと腰ひづくが抜けちまッて、あの長え永代橋ながえよんじょうを這い続けに這つて逃げたくれえだからね」

仙「己みことが斯う遣つて力を入れるのは、この人の命が助かる許りじやアねえ、主人や屋敷の役人まで皆都合が宜くなる事だ、己みことだつて見ず知らずのもんだ、みんな人の為だぜいやだ

と云えれば了簡が有るぞ」

安「なに出掛けます／＼」

と仕方がないから請合いました。番頭重三郎は氣の毒に思いますから、

重「申し親方、何卒そればかりは勘忍して下さい」

と云つたが聞けません。女房も心配だから小声で、

梶「ちよいと／＼何ういう訳なんだえ」

仙「なにイもつと大きな声して云え」

梶「お前まア宜く考へて御覧よ、お父さんが死ぬ時に何と云つたえ、短慮功をなさずと云
われて、彼あからはお前も懲りて喧嘩のけの字もしないようになつたが、人の為と云つた
ツて今聞けば侍へ此方から突当つて喧嘩アするとお云いだが、そんな事をしては死んだお
父さんの位牌に済むまい」

仙「生意気なことをいうな、己が醉興でするんじやアねえ、此の人の命が助かる人の為に
するんだ」

重「どうぞ親方姐ねえさんだツて御心配でござりますから御尤もで」

仙「そんな事はいけねえ、云い出しちゃア聞かねえ」

と何うしても聞かず、仕方が無いから重三郎も安吉も仙太郎の跡に従いて歩きましたが、重三郎は着つけない袴袍^{どてら}を着、股引^はを穿き、手拭を鼻ツ冠りにして仙太郎の跡から従いて歩きますが、心配な事で、なれども更に似た侍も見当らず、空しく尋ねて歩いて居りました。お話二つになりますて、粟田口國綱の刀紛失致しましてから重三郎の行方知れず、主人も心配致して居りまする処へ稻垣小左衛門が参りましたが、重三郎の罪を身に引受け、別に厳しゆう咎めもなく屋敷へ帰られました事で、實に岡本政七方では一通りの心配ではございません。また此の重三郎の親父は梨子壳を致す重助と申す者で、川崎在の羽根田村に身貧に暮して居りまするが、去年の暮から年の故^{せえ}か致して寒氣^{さむき}に中^{あた}る、疝氣^{せんき}が起つたと見えまして寝て居ります。丁度正月の七草の事でございます、独身者^{ひとりもの}ゆえ看病人も有りませんが、近所の人が来ては看病をしてくれますが、万事行届^{ゆきとゞ}かん勝でございます、なれども田舎氣質^{かたぎ}のものは親切でござりますゆえ、村方の者が代る／＼來ては世話をいたしてくれます。

重「申しお婆アさん、もう宜いから帰^{けえ}つておくんなせえ、もう大概^{てえげえ}で宜いよ」

婆「なに心配^{しんぱい}しねえでも宜い、私ア帰^{けえ}つてまた後から金右衛門^{あときんえもん}どんとこの婆アさまが来る」と云つたが、お前^{めえ}も老^とる年じやアあるし、大切^{でえじ}にしなければなんねえからね」

重「はい有難う、こう遣つて代りく御親切にマア皆様が来ちやア、やれこれ云つておくんなさるので、はい、誠に有難うござえます、私も定命より余程生き延びて居りますから、もう死んでも惜しくねえ身体ですが、只た一人の悴がマア堅えもんでござえまして、万年町のお店たなへ奉公に遣つて、永く勤めて居りますが、来年れいねんは年ねんが明けるから、店みせを出して下さると御主人さまが仰しやるから、そればかり樂みにねお婆さん、私も重え梨子かづを担いで其の日たのしを送りますが、ナニまだ死ぬ了簡れいげんもねえけれど、斯うやつて年とイ老おめつて煩らうとねえ心こころ細ほぜえが、定命より十五年も生延びてるから、何時死んでも好いようなものゝ、若しもの事があつて死に目に逢わねえと悴あどが後で愚痴よきちイ出ひまようかと思えますのさ、イヤハヤもういけませんがね、ちよつくりお暇ひまを戴きに興吉よきちどんを頼んで遣つたが、まだ帰けえらねえが、不斷とは違たがい正月はお忙しいから、悴にお暇を下されば好いが、下さるめえとは思うが、あゝ云う行届いた旦那だんさまゆえ、親の病氣と云つて遣つたんだからお暇を下さるかも知れねえのさ」

婆「お前めえんとこの息子しゃわどんはおとなしくつて仕合しゃわせだが、おらの宅うちの新太しんたの野郎なんざア、ハア放蕩どらべえぶつて、川崎しゆくべえ往つてハア三日も四日も宅へ帰らねえで困るが、お前とこんの息子とこどんは本当にやさしげで仕合せだよ」

重「ハア誠におとなしくして居ります、去年の暮などは忙しい中を態々来てくれて、私に小遣こづけえを一両呉けえれましたが、それも是も皆みな御主人さまのお蔭だから、御主人さまの御恩ごおんを忘れねえで奉公でえじを大切たいせつにしろと云いつけて遣つけえりましたよ、もう使けいは帰けいりそななものだ」

婆「いまに帰けいるべえ」

と話をして居る処へ帰つて来たのは、此の村の人で、年齢とし二十二三になる男で、尻はを端はしに折り、寒さをも厭いとわざずスタ／＼帰つて参り

男「爺おとうイさま案あんじて居さしつたろう、大きに遅くなつただアよ、店てんへ往つた処が重さんは昨日の晚出おとといたきり帰けいらねえてえ、何処どこえ往つたか知んねえかと聞いて見たが、何処どこえ往つたかいまがに知んねえから、方々搜し廻まわつてるが、解らねえから今日宅うちのお内儀うちみさまが川崎の大師様でいしざめへお参まいりながら此方こちらへ寄るよつてつたから、いまに来れば分わるだよう」

重「はい大きに有難う、誠に遠とおツ処に御苦勞くらうさま、婆アさま腹はらア空うつつたろう、何もないがお飯まんまア喰くつて往いくが宜えいい」

婆「己おらア帰けいるからお前めえ大切たいせつにおしなせえよ」

重「お婆アさん誠に有難う、大きに御苦勞くらうさま、癒なおるとお礼れいをしますよ」

婆「なにそんな事を心配しんばいしなえでも宜えいうがアす、また後に来るのちだよう」

と出て行きました。

重「親切に宜くまア毎日^{めえにち}来ておくんなさる、有難いことだ、それに付けて重三郎が
出たぎり帰らねえと云うのは、道楽でも始めやしねえか、そんな奴ではねえが、なにしろ
お内儀さんが入らつしやるくれえでは、先さまでも能々^{よくよく}案じなさる事が有つて相談に入
らつしやるんだろうが、何ういう失策^{しきじり}をしたか知らん、併しおいでなすつても己^{あんべ}が塩
梅^えが悪いから、お茶も上げる事は出来ねえから、水気は抜けてるが、へえしでもむいて
上げよう」

と云いながらようく床から這い下りてへえしという匂い梨の這入った籠をそばへ引寄
せる途端に表へ下りたのは、其の頃の山駕籠でございます。駕籠の脇に連添う一人の老女
は、お高祖^{こそす}頭巾^{きん}を冠り、ふツくりと綿の這入りし深川鼠三ツ紋の羽織に、藍^{あい}の子もち縞の
小袖^{こうしゆ}の両^{りょう}袴^{づま}を高く取つて長襦袢^{じゆばん}を出し、其の頃ゆえ麻裏草履^{ゆわ}を結い附けに致しまして、
鼠甲斐絹^{ねずみがいき}の女脚半^{おんなきやはん}をかける世の中で、当^{たゞ}今ならば新橋の停車場^{すてえしょん}からビーと云えれば
直に川崎まで往かれますが、其の頃は誠に不都合な世の中で、川崎まで往くのに、女の足
では一晩泊りでござります。小僧さんが風呂敷包みを脊負つて草臥足^{くたびれあし}で後から参ります
と、駕籠から出たのは娘でござります。これもお高祖頭巾を冠り縞縮緬^{ぬしゆくみ}のはでやかな小袖

に、上には寒さ防^よけに是も綿入羽織を引掛けて居ります。

母「お前何うした、草臥れやしないかい」

娘「いゝえ、お母さんこそお草臥れでございましょう、あなたはお寒かろうと存じまして、お代り申しますと云つても、お代りなさらないで、歩いて入つしゃいましたから」

母「いえ、わたしは歩くから寒くはないが、お前は駕籠の中だからさぞ寒かろう」と云いながら後^{うしろ}を振かえり、

母「常吉や重助の宅は此処かえ」

小「へえ私は一遍お使いに参りましたから存じて居りますが、此処でございます、誠に汚ない宅で」

母「これ、そんな事を云うもんぢやないよ、御免なさい、重助さんの宅は此方かえ」

重「はい／＼、どうぞ此方へ、お跡は私が閉めますから、お閉めなさらないでも宜しゅう

ござります、戸がガタピシ致しますから、さア此方へどうぞ、マア宜くこんな汚い処へ入らしつて下さいました、おや／＼お嬢さんも御一緒でござえますか、どうぞ此方へ、おゝ／＼小僧さんもか、どうか其処へ腰をお掛けなすつて、さア／＼此方へ」

と上座^{かみざ}へ据え、慇懃^{いんぎん}に両手を突き、

重「まことに御無沙汰を致しましてごぜえます、私もたいした事でもござえませんが、去年の暮の押詰りに寒さを引込みまして、少し疝気が発つて腰が痙りますので、商売にも出られませんで引込んで居りますので、春はお忙しかろうと存じますが、塩梅の悪いので彼に逢いたいと存じまして、重三郎を少しの間お暇を願いに遣りました処、一昨日出たぎり帰らねえとの御沙汰で恥り致しました、ヒヨツとして道楽でも始めてお店を明けるような事が有りますりやア私が合点致しません、何だつて十二の時から大恩を受けた御主人に御苦労をかけるような事が有りますりやア、私は只ア置かねえと、そう申して居りましたので、おやまだ御挨拶も致しませんで、まず明けましてお目出度う存じます、旧冬はなにかと何角有難う存じます、私もまア一寸ねお歳暮に上ろうと存じて居りますうちに煩い付きまして、毎年二十八日に上るんと云いますが、お歳暮にも御年頭にも出られません、礼が欠けますと何だか気になります、折角お出でなすつてもお茶も上げられませんような訳で」

母「いえもう構つておくれでない、お前も案じて居るだろうが、お前の処から人が来たので、政七も心配してね、どうぞ往つて話をしなければならないが、人頼みの口上ではわからぬ事、他の者は出されないと云うので、私が来たのだが、重三郎は昨日の晩出たぎ

り帰らないのは何うした事かと思つて、私も心配して諸方を尋ねたが、居ないのだが、重三郎は主人の代に毎年芝の金森様のお屋敷へ年始に往くのだが、一昨日も其のお屋敷へ往くのもお逃えのお刀を下拵えをして御覽に入れたのが、またお下げになつたのを、其のお刀を持つたなり帰らないから、恃も心配していると、此の常吉が遅く帰つて来て、小僧の云うには、お屠蘇を戴き過して動けないように酔つて仕舞い、常吉の手に合わないから、仕方なしに重三郎を佐賀町河岸へ置いたなりに宅へ知せに来たと云うから、政七も驚いて駆けて往くと、其処に重三郎は居なくつて、怪しい侍が頭巾を冠つて刀を抜いて立つて居たから、驚いて逃げ帰つたような訳で、すると翌朝万年橋の上に重三郎の袴や帯脇差と印籠が捨てゝ有つたから、重三郎はその侍に大切な御刀を取られ、言い訳なさに万年橋へ目標を残して身を投げて死んだろうかと云うのは、此方の鑑定だよ」

重「へえ、あの野郎……あの野郎、誠に申訳もございません、何んと何うも飛んだ事になりますてござります……重三郎の死骸は何処へ上りましたか」

母「死骸はまだ知れないから、屹度身を投げて死んだと極きつとった訳ではないけれども、何処を搜しても行方の知れない処を見れば、多分身を投げたろうという鑑定だが、お前が聞いたら嘸さゑ惚つくりするだろうと思うと、誠に云うのもお氣の毒だけれども、云わない事は分らないが、お係りのお役人さまも其のお刀ゆえに御切腹になるかも知れない程の事、また私の方へも何んな難題がかゝつて来るか知れないから、重三じゅうざが死んでも申し訳の立つ訳ではないのだから、実に宅は転覆ひっくりかえるような騒ぎで、それに丁度政七も重三郎も厄年だから、川崎の大師さまへ参つて護摩ごまをあげて厄除やくよけをし、どうぞ一刻も早く重三の行方の知れるようにお願い申そうと思つて、私が娘を連れて大師さまへお参りをし、お籤みくじを戴きながら来て、お前に知しらせる訳なんだよ」

重「はい／＼そんな事とは些ちつとも存じませんで、お店もお忙がしかろうけれども、私も老年としよりのことだから、ポツクリ死ぬような事が有りますと、あの野郎が後で死目に会わなかつたと愚痴ぐちでも出ちやアならねえと思いまして、虫が知らせたのか急に会いたくなりましたから、お忙がしい処とは存じながら、お暇を取りに使いを頼んで遣りましたので、お内儀さん毎度申します通り、彼が四才の時に母おぶくろ親しにめが亡なりましたが、乳呑のみ盛りでございますから、わたくし私が梨を両方の籠へ入れるのを、一方の籠の梨を少し減へらしまして、それへ

彼奴を載せ、悴と梨とを私がこう担いで、乳を貰いながら商売を致して、何うやら斯うやら十二の年齢まで丹誠して、お店へ奉公に遣りましても、種々御丹誠下さいましたから、段々と私などより物も覚え、来年は暖簾を分けてやると仰しやつたと申しますから、私もそれを楽しみに毎日重い梨を担いで歩き、六十の坂を越しながら斯うやつてわくくして居りますのは、仮令何んな死ぬ程の事が有つても、これくの訳で死なゝければならないと一言ぐらい相談に参つても宜いのでござります、親を残して先立ちます其の上、御主人様へ御心配をかけ、自分は死んでも追付かないような事をして、姿の見えないような事を致しましたは、誠に親不孝な奴で、皆さまへも何ともハヤ申そうようのない不忠でございまして相済みません、今朝も七草粥を祝おうと存じますとピシリと箸が折れましたゆえ気にかけて居りますと、隣の婆アさんが箸は木で拵えたものだから、折れることも有ろうと申して、祝し直してくれましたが、矢張それが前表で虫が知らせたのでございましょう」

内「私も少さい時分から丹誠して、悴と同じように生い立つたものゆえ、何んな事が有つてもお内儀さん何うしたら宜かろうと云うのも、私に云い難い事は雪に云いさえすれば相談になるものを、併しそれはお酒をたべるとどうも御酒の上が悪いが、不斷は猫のようなお

となしい男だから、思案に余つて軽はずみな事でもしたかと思うと可愛相だから、私も娘も実に心配して居るのだよ」

重「はい／＼私は他に子はございませんから、若し彼の野郎が身でも投げて死んでしまえば定命より十五年も生き延びた私故、直ぐに身でも投げるか首でも縊つて死ぬより外に仕方はございません」

内「あれサ、そんな事を云つては困るよ、重三は死んだか生きたか分らない内に、お前が軽はずみな事でもした後へ、ひよつくり重三が帰つて来て御覧、それこそ却つて嘆きを掛けるようなものだよ、時節を待つておいで、私も出入の者に頼んで川筋を捜さして見るから、余り心配して身体に障つちやアいけないよ」

重「はい／＼、自分の申す事ばかり申しまして済みません、旦那様へお目に懸つてお詫びごとも致しませんが、あなたさまから宜しく仰しやつて下さいまし」

内「私も永く話をして居たいが、気が急^せくし、まだ是から川崎の大師さまへお参りに往くのが遅くなるから帰りましょう、遅くなつたら新田屋^{につたや}へ泊つて帰ろうと思ひます、お前身体を大切におしよ、重三の事も案じずにおいて、出入の者へ頼んで置いたから、多分死ぬような事も有るまいと思うよ、大方^{めんぱく}面目ないので何処かへ身を匿^{かく}して居るかも知れない

よ」

雪 「重三が帰つてさえ来れば私もお母さんと共にあに兄イさまの方は願つてお詫びごとをして上げるから、余り気を揉まないでおいでよ」

重 「はい誠に有難う存じます、実に何ともお詫の申そよ様もございません、何うぞあなた……左様でござりますか、お帰りで、誠に何もお愛想もございませんで」と云いながら梨の籠をひきよせて、

重 「これでも剥いて上げましょと存じましたが、私のような汚い手で剥くのは何でござりますから、小僧さんは、お土産にお持ちなすつて下さいませんか」

内 「おゝ／＼有難う、折角だからお貰い申します、沢山は要らないがお珍らしいから少し貰つて参りましょう」

重 「かこいゆえ味はわるうございましょうが、素性の宜いのでござりますから、小僧さんお前さんは重うございましょうが、持つて往つて下さいまし、お前さんにも二個上げますから」

小 「これは有難う、歩くと喉が渴くから袂たもとへ入れて咬りながら往きます、この風呂敷は大きいから大丈夫、宜うございます」

内「じゃアお前気を附けておいで、駕籠やさん、どうぞお頼み申しますよ」

雪「お母さま少しお代り遊ばせな」

母「私は歩きたいから歩いて往くが、おまえ寒くはないかえ、海端うみばただから風がピューノ

＼吹くから、宜いかえ」

と云いながら重助に向い、

母「左様なら、じゃアお前どうぞ今云つた通り身体を大切だいじにしなければならないよ」

重「はい有難う存じます、どうぞ旦那さまへ宜しく仰しやつて下さいまし、お嬢さま御機嫌宜しゆう、若い衆さん氣を附けて下さい、小僧さん御苦労さま」

小「へい、お辞儀をしようとして屈むと梨が転がり出しますから頭を下げませんが、ちゃんと心の内でお辞儀をして居ります」

内「そんな事を云うじゃアないよ」

と云いながら出て行くのを、重助は上り端あがはなまで這い出して見送る。昇夫はトツトと急いで参る。母親と小僧は後から心を附けて、すた／＼と羽根田の弁天の方へ参りますすると駕籠を見失いました。

小「駕籠が見えなくなりましたよ」

内「見えなくなる訳はないが何処へ往つたろう」

小「あの昇夫はいけない奴だと思います、全体宅から連れて来れば宜かつたんですが大森から乗つたもんですからいけないんです、悪口計りきいて居ましたよ、皆な一緒に駕籠へ乗つてくれゝば宜いに、女や小僧の足と附合つて一緒に歩くんだから本当に担ぎ難くツていけねえ、それも祝儀でも沢山呉れゝば宜いが呉れねえツて忌な奴です、人の悪そうな奴でしたよ」

母「宣いから急ぎなよ、羽根田の弁天さまの武藏屋むさしやに居るに違いないから、先へ立つて急いで往いきなよ」

小「へい宣しゆうございます」

と小僧は梨を脊負つたなり駆けて参ります。突当りは海で、一方は磯馴松いそなれまつの林の堂、手前に武藏屋と云うちよつと小料理を致す家が有ります。正月は大師さまへのお参りは有りませんから客を致しませんので、表はピタリ障子たたが閉つて居ります、処へ小僧が参り、

小「御免なさい、真平御免下さい」
まっぴら

女房「はい蛤を上げますかえ」

小「なに、あの、駕籠へ乗つた嬢さんが此方こうちへ来やアしませんか」

女房「今においでなさいましようからマアお掛けなせえましよ、蛤を上げますかえ」

小「蛤などは何うでも宜いが、お高祖頭巾を冠つて羽織を着たお嬢さんが来やアしないか」

女房「まあだおいでなせえませんが、まあ明けて一服お吸いなせえましよ、蛤を上げますかえ」

小「このお内儀さんは蛤に取附とつかれて居るか知ら」

母「此処へ来ないたつて一筋道じやアないか」

小「だからへんてこらいな昇夫だと云うのです、お嬢様さんを何処どつかへ連れて往いきアしませんか」

母「まさか道を間違える事も有るまい」

と云いながらスツと中へ這入り、

母「お茶を一杯おくれ」

女房「蛤を上げますかえ」

小「私が來ると蛤々わたくしツてえますが、可笑おかしな内儀さんだ」

母「蛤も御酒もようございます、何も喫べたくはないが、私は駆けて來たので恐ろしく草臥れたよ、したが大森の山本で逃えてくれたのだから、まさかに間違いは有るまいが、草

臥足ゆえお茶でも呑んで待つて居よう、今に来るだらう」

と云つてると、表はピッタリ障子が閉つて居りまするが、障子越に聞える一節切で、只今は流行らんが、其の頃は大層流行致しましたもので、既に日光様のお吹きなさいましたのをまむちと申し、里見義弘の吹きましたるを嵐山と名付け、一休禅師の所持を紫と申し、文屋康秀の持ちましたる一節切を山風と申します、其の頃は大いに流行りましたが、田舎に参りまして一節切を吹くのは稀で、其の音古雅にして、上手な人が吹きますと修行者とは思われませんような音色でござります。

八

母「これ常吉や、あの修行者に私は手の内を上げましようよ」

女房「通つてお呉んなせえよ、錢は出ないよ」

母「いえ私が上げますから」

と云いながらお揃りを拵えて小僧に渡す、小僧はこれを持つて参り、障子を明けると鼠無地の道行振のようものを着て、下は木綿か紬か分りませんが、矢張鼠無地の小袖

でござります、端折を高く取つて木劍作の小脇差を差し、二十四節の深編笠を冠り、
合切囊を斜に掛け、鼠の脚半に白足袋に草鞋で、腰に大きな包を巻き附けて居ります、
極く人柄の好い服装の拵え、品格のよろしい修行者でござります。

母「何うぞ其処から上げておくれ」

小「へえ、お修行を上げますよ」

とお捻りを手に渡すと、修行者は手に報謝を受けながら、笠の内から暫く覗いて居りましたが、お捻りを懷に入れて編笠を脱ぎ、右手に提げながらズツと中へ這入つて来たのを見て驚きましたというは、此の人は金森家で四百五十石頂戴致した稻垣小左衛門の嫡子こさぶろう小三郎と云うもので、とつて二十三歳、色白くして鼻筋通り、口元の締つた、眼のきりツとした立派な人ですが、服装が変つて居りますから岡本の内儀は肝を潰して、

内「誠に思ひ掛けない、何うして、斯ういう処でお目にかゝろうとは存じませんでしたが、何うもお見掛け申したとは思いましたが、貴方さまとは気が附きませんでした」

小「私もおまえが此処に居ようとは思わなかつた、一昨日重三がお屋敷へ参り、災難とは云いながら誠にお氣の毒な事に相成つたから、早速右の次第を上へお届けをした処が、家事不取締り以ての外と云う厳しい御沙汰で、父親は百日の間謹慎を仰付けられ、百日間

に國綱のお刀の出ん時には父は切腹仰付けられるか、追放仰付けられるか知れん、それゆえに重役渡邊外記と相談のうえ、実は少々心当りの事も有つて、美濃の群上へお刀を搜しに参るのだが、私は常にこの羽根田の弁天を信心致すからこれへ参つて、刀詮議のため今晚は此の弁天堂へ通夜をして、祈念を致す心得で参つたが、これへ来ると図らずお前に逢つたが、誠に思いがけないことで」

内「どうも重三郎の不調法からあなた方さまへとんだ御苦労を掛けまして、立派な御方さまが修行者のお服装に成つて遠国へ往かッしやる事になりましたのも、皆な彼が不調法からでござります、私も実は重三郎の親が此の羽根田に梨壳をして居りますから、それへ重三郎のことを知らせる心得で、政七も厄年でござりますから、厄除に川崎の大師へ参詣ながら参りましたのでございますが、娘を駕籠へ乗せて連れて参りましたが、昇夫が何処へ担いで参りましたか見失いましたので、今に参ろうかと存じまして此処に待受けて居りますので」

小「ふーむ、娘を乗せた駕籠を、羽根田から川崎へ渡る渡口より北に当る梨畑の下で一寸見掛けたが、お前の娘の乗った山駕籠には、上に百合形更紗の派出な模様の風呂敷包が結い附けては無かつたか、駕籠の中には頭巾を冠つた婦人が一人居る様子であつたが、

顔は分らなかつた』

内「あれまア、それでございます、渡の方へ参りましたか」

小僧「だから彼はあれいけないと云うので、危険な奴ですよ、強請言ばかり云つてました

から、お嬢さんが勾引かどわかされるといけませんぜ」

小「お前は川崎の大師へ参詣して宿屋は何処へ泊る積りだ」

内「はい、新田屋でござります」

小「それでは新田屋の方から名主へ掛り、手を以て尋ねれば知れん事も有るまい、私も又見当ることが有つたら新田屋まで送り届けるから急いで往ゆくが宜い」

内「はい、有難う存じます、種々いろくお話もしどうございますが、娘のことも心に掛りますから御免こうむを蒙ります、常吉や、さア急いで往ゆきな」

常吉「こんな時に梨なぞをくれるから重たくつて駆かけられやアしません」

と云いながら二人とも一生懸命に駆けて参りました。するうちに日は段々と暮れかゝつて参りますると、田舎の人は頑固いっこうでござりますから、

女房「お気の毒でござえますが、困りますから外へ出て往つておくんなせえましよ」

小「大きにお邪魔を致しただいぶ大分早く暮れて来ましたな、宜しい今出ますよ、決してお

邪魔は致しません」

と云いながら其処を立ち出で弁天堂へ参りまして、包みを下ろし、賽銭を上るゝに心の内に弁天を祈念して、何卒粟田口國綱の刀一刻も早く手に入りまして、親父の百日間の謹しみの速かに免れるように、弁才天女の御利益を以て粟田口國綱の行方の分るように守らせたびたまえ。と頻りに弁天を念じて居りまする内に、日はトツプリと暮れ切りました。あゝ今夜は此の弁天堂へ通夜をして、夜が明けたれば出立しようと心得て居ると、どうノヽツと松ヶ枝に中りまする風音、どぶりくという春の海では有りますけれども、岸へ打付ける海音高く、時はまだ若春のことで、人ツ子一人通りません。すると裏手の松林の中で、

「ヒー人殺し」

という金切声、何うも女の声のようだが、人殺しと聞いては捨てゝ置かれんことだと云うので、荷物を其処へ置いて木劍作りの小脇差を帯したなりで、つかくと出て来て見ると、文身ほりものだらけのでツぶりと肥つた奴が、腰の処へ襦袢よ様なものを巻き附け、一人は瘦せこけては居るが骨太な奴と二人で、一人の娘を松の根株へ押え附け、

甲 「娘さん泣いても騒いでも仕様はねえ、此の浜には船一艘繋いで居ようじやなし、人ツ

子一人通りやアしねえ、なにを泣くのだ、ぐずくしやアがると殺してしまうぞ、さ命が
惜くば己^{おし}うちのいう事を聞け」

乙「こゝの名物□□を賞翫しようか、ギヤア／＼泣いても仕様がねえ」

と云いながら一人が娘の□□□□□り、既に□□めにかゝる様子を見て、小三郎は驚き、
いきなり飛^{とび}かゝつて、娘の上に乗し掛つている奴の褲の結び目と領^{えりくび}首^{とつか}を取捕^{うしろ}まえて後^{うしろ}の方へ投^{なげ}ると、松の樹^きへ打附^{ぶつづ}けられ、脊筋^{せすじ}が痛いからくの字なりになつて尻餅^つを搗^{つき}、腰^{さす}を撫^{さす}つて居ります。一人が

「おや」

と見る所を草鞋^{わらじばき}穿^{うしろ}の足を上げてドンと腮^{あご}を蹴^つつたから

「アツ」

と云いさま後^{うしろ}へひツくりかえる。

乙「こん畜生^{ちきょうじょう}、やい何処^{どつ}から出やアがツた、ヤア安^{やす}起^{おき}ろよ、やい、手前何処^{てめえ}から出
やアがツた此ん畜生^{ちきょうじょう}」

小「不届^{かよわ}至極^{さみ}の奴だ、軟弱^{はずかし}い娘を斯様^{かどわかし}な淋^{はづかし}い処へ連れて参り、辱めようと致す勾引^よだな、
許し難い奴なれども修行の身の上だから何事も神仏に免じて許して遣る、殺しても宜い奴

だが其の儘許して遣るから、さつさと往け」

甲「おや此ン畜生、生意氣な事を云やアがる、出し抜けに出やアがツて何んだろう」

乙「先刻羽根田の商人家の前で笛を吹いてた乞食だ、生意氣な此の野郎殴れ」

と原文に三島安はらぶんという東海道喰い詰めの奴で、息杖いきづえを取つて打つて掛つたが、打たれるような人じやア有りません、真影流の奥儀おくぎを極めた小三郎なれば、少しも騒がず左から打込んで来る息杖の下を潜りながら、木剣作りの小脇差くわせを引抜いて刀背みね打ちに一人の肩口かんぐちをしたゝかに打つ、打たれて一人は斬られたかと心得、ドツと前へのめるようにして逃出す、これを見ると一人は驚いて息杖ほうを投り出し、同じく跡からパラ／＼と逃げ出す。

小「不埒至極な奴だ、これ女中さざなわ驚いたろう」

娘「はい何方どちらのお方様か存じませんが、危あやうい処をお助けくださいまして誠に有難う存じます」

小「お前の母さんは川崎の新田屋に参つて居るから、心配なく私わしと一緒に往ゆきなさい、私は怪しい者ではない、私は金森家の侍で、親父はお前の宅へ往つてお前の親御とは馴染なじの事だから心配なく、まア／＼一緒に往ゆきなさい、私が新田屋まで送り届けて上げよう」

とはから小三郎がお雪を新田屋へ送り届けると、母も小僧も大きに悦び、

母「思い掛けないことでお助け下さいまして、お礼の申そうようはございませんから、お餞別代りに聊かではございますが」

と金子を差出しが、小三郎は金子を受けませんで、

小「何うか私が國から帰るまで丈夫で居なさい、私は直に立ちますゆえ、此処から早く三人共に帰るように」

と申し残して出て往く。翌日に相成ると早々母は娘のお雪を連れて万年町の宅へ帰りました。これから稻垣小左衛門は百日経つてもお刀が出ません処からお暇が出ると云う、稻垣小左衛門浪々のお話でございます。

お話二つに分れて、松葉屋に抱えになりました鍊鎧冶金重の娘お富は、まだ目見え中でございますが、目見え中と云うものは主人が内所ないしょに置いて様子を見ます。

主「何うも女は美いが歩きつきが悪いな、ちと屈む癖があるから反らせるが宜い、お前烟草を人に付けて出すのに、それでは色氣がない、斯うすると宜い」

と教えて貰う。種々主人が様子を見て、親族得心の上で印形を致しますのですが、其の頃の証文というものは何うしても損のいかないような手堅いもので、証文が極きると二

階の大きい花魁おいいらんのお世話になると云う、大きい花魁と云うのは其の家の^{しょく}お職とか一枚目とかいう立派な仲の町なかちようば張りの花魁が、若いおいらんを^{つきだ}突出しますので、抑突出しの初めからという文句が有りますから、大きい花魁が万事突出し女郎の支度をして遣るんだそうで、夜具布団から襷しがけから頭飾あたまのものから、新造禿しんそうむろの支度まで皆その大きい花魁が致します。主人は一両でも出しません。主人と云うものは徳なもので。若緑わかみどりという二枚目の花魁がお富の世話を致しますが、誠に親切もので、お富は時々内所へ来て小さくなつて居ります。愈々証文が極つて、此の三月の宵節句と節句の二日の内に突出して、五町ちようを廻らなければならんので心配致して居ります。処へ縁と云うものは妙なもので、彼の紀伊國屋の伊之助が髪結の長次を連れて、八重花と呼ぶ花魁のところへ浮れに参りました。

新造「若旦那お風呂に這入んなまし」

と云うので長次と一緒に下の廊下を通ると、内所の暗い処にぼんやりして居たお富がふいと見ると、伊之助ゆえ飛立つように思いましたが、おぼこゆえぐずくして居るのを長次が見附け、

長「もし／＼若旦那／＼」

伊「えゝ」

長「あの暗い処にいる娘は鍛鍛治金重という上手な爺さんの娘ですが、親が死んで石塔料の為に自分から此家へ駆込んで身を売つたと云うことです」

伊「美しい器量だのう」

長「余程美しい娘です。何かお前さんに物云いたそうに此方こっちをジロ／＼見てモジツカして居ますが、お前さんに余程惚れていますぜ、なに本当の事さ、私わっちを追かけて来て鍛を一挺呉れて、何うか若旦那わっとうに宜くお詫をツてんで、どうも余程よつほど惚れていますよ、私が浮世の義理よしり一寸ちよつと逢つて来ますから、あのなに、花はなの香かさん、若旦那わっとうをお連れ申しておくれ」と云いながら長次はお富の傍そばへ遣つて参り、

長「お富さん」

富「おや親方、まア面白次第めぐらしだいもございません、私は斯こんな處ところへ這入とこりました」

長「面目ない処どころじやアない、皆みんなが誉ほめて居ゐやす、錙いかりどこ床てつの鐵てつが来て、あの娘ねえさんのような感心かんしんなものは無ねえ、親の為に自分から駆込んで身を売るというのは實に感心かんしんだ、世間には浮氣こゝをして茲こゝへ来るものは多いが、親の為に来る者は少いツつてね、口の悪い野郎のらうだがお前さんは驚いて居ゐやすよ」

富「有難うございます、あの今親方と一緒におりでなすったのは紀伊國屋の若旦那わっとうでござ

いますか」

長「忘れねえネ、八重花という花魁と馴染んで遊びにおいでなすったんですが、若旦那の方では惚れも何もないが花魁の方ではポツと来ているくらいだが、若旦那は堅いから、ツンとしまつて居て、時々私が合図だもんだから、長次往こうと仰しやつてお供で来るけれども、何うかすると日暮れ方から来て戌刻前に帰る事もあるし、夜来れば翌朝は店を開けねえ内に帰らねえと大旦那の首尾が悪いのだが、大番頭さんが粋な人で合図をしてくれるから、斯うやつて時々来られるのださ」

富「親方私はあなたに少しお願いが有りますが叶えてくださいますか」

長「なにを私に」

富「あのね、私は此の三月のお節句から何うしてもお女郎に成つてお客様を取るようになるのでござります」

長「フン、へえ結構でござえやす」

九

富「どうも始めてお客様を取る時が怖くていけないから、私が始めて出ます時に……あのね……若旦那が……私を可愛相と思召して……買って下さる事が出来ましようか、貴方願つて下さいませんか」

長「紀伊國屋の大将をかえ、それはいけねえ、どうして厳ましい、茶屋へでも知れた日にやア大騒ぎだ、それはいけねえ、私共が登る處のチヨン／＼格子なら、あのお多福と見立替みたてがえという事が出来るけれども、只玉きょくを二つ払えば宜いという訳にはいかねえから、それはいけねえ」

富「どうぞお願ひですからそうして下さいな、私は本当に怖くていけませんから、後生ですから願つて見て下さいまし、其の代り私の身みづかが立ちますと屹度きつとお礼ごれいをしますから」

長「お礼ごれいたつて、それは私にはいけねえから、若旦那のお気に入りの帮間たいこの正孝しょうこうに談はなしをして見ますから、待つておいでなさい」

と慌あわてゝ立上り柱へ頭をコツリ、

長「あゝ痛い何うも」

と座敷へ参り、

長「大きに遅くなりました」

伊 「強氣に長いな、馴染の女とたかいぜ」

長 「お前さんのお蔭で大黒柱へ才槌頭さいづちあたまを打附けやした」

と云いながら伊之助の耳元へ口を寄せ、

長 「大変な訳です、素人の時分からあなたに岡惚おかぼれで、此の三月の節句から仲の町へ出る
と云うんで」

番新 「あら長次はん、何んだねえ若旦那わかどなへ智慧工附けてさ、憎らしいよ、花魁が心持が悪いよ、大きな声で云いなましなね」

長 「大きな声では云われんことだ、質店の若旦那わかどなだから」

と瞞ごまかしながらまた小声あとどで、

長 「後生お願いだから後あとで何んな御馳走ごしやくでもしますからつてヤイノノくでしよう」

番新 「なにを智慧工わざわく附けるんだよ、長次はんコソくばなしく話ばなしなどをして」

と云つてる処へ 櫻川 正孝さくらがわ まさひでという幫間ほうかんが襖を明けて這入つて参りました。

伊 「いや師匠待つてたよ」

長 「正孝さん遅いじやアねえか」

正 「これはどうも、へい、花魁御早く御上りなさいまして、前夜は仲通りきんの相変らず

の癖でしよう、大きいので続けて五杯遣つたので大変に酔つちまつて、大きに失礼を致しました、そろく何か取掛りやしようか」

長「なに師匠一寸ちよつと此方こつちへおいでよ」

正「若旦那此の間此の親方が、旦那遊びをするつてんで、安尾張やすおわりか稻いなべん弁ひいへ往こうというのですが、可笑おかしい何んだッて、長次さんの踊を始めて見ました、変な形の踊りでしたが、あのぼつてりしてえるのは余程よつほど親方に初会惚ほれですぜ」

長「そんな事は宜いから此方こつちへ来ねえ」

と云われ正孝は長次の口元へ耳を差附け、

正「え……なに……何んだか小声でさつぱり分りません……くすぐつたいね、他聞はづかを憚はばかる儀ですと……ウン成程……へえくそれはいけません……へい成程……フン……それはいけませんや、何うしたつて是れはどうもいけません、お取持をした事が知れた日にやア私が直に茶屋をしくじり、二階を止められるぐらいは仕方がないが、そんな事をすればどうしたつて正孝の首が三つ有つても足らないから、是はどうもいけません」

と極ごく小さな声で云うと、

番新「花魁見なましよ、長次はんがまた正孝はんを捕つかまえてコソく話をしてえるよ、横

着ものだよ」

正「いえなに長次さんが正孝に岡惚と来てえるんで、正孝此方こつちへ来いつてんで、こう傍そばへもたれ掛り、たいこ帮間たいまんと耳こすりをしたいつてんで」

と云い紛らし、また長次に向い低声こごえにて、

「八重花花魁あじかはなが此の月末にはお目出度スーツめでたくとお身請になりますから、花魁が素人に成つちまって、後あとへ下さのがニユーッと出る処つけを突出つきだしの初日からなんすれば、何も障りがなくつて宜しい、其の時にはそれはまた心得て居やす」

番「あれ見なまし、じれつたいよ、何時までもコソ／＼話をしてさ、正孝はん傍そばへ往いきなますな」

正「いえ此方が親方に岡惚てるんで、こう親方の膝ひざへ手を突いて見たいんで」

と瞞かして其の場は済まして帰りましたが、成程此の月末になると八重花は身請になりましたから、お富は若草わかぐさと改名して、翌月よくげつの宵節句から出ましたが、突出しの夜から伊之助はお富の若草を揚げましたが、初会惚れ処ではないのでございます、素人の時分から思い染めている伊之助でありますから眞実に致しますこと一通りでない。仲の町の花魁の見識で、お客様に烟草をつけて遣るなどということは余程馴染よつぱんにならなければ出来ませ

んが、はじま初りから伊之助の足袋の洗濯までもしようと云う真実ゆえ、伊之助も悪からず思い、足を近く来ますので、此の事が仲の町にぱツと致しました。若草さんは外のお客に出ない花魁、まるで紀伊國屋の伊之助さんのお内儀さんかみのようだ、御新造だという噂が立ちましたから、別に買いに来る客も有りません、稀たまにあつても座敷切りで、お客様へは出ないとい書附を伊之助と取合つた仲でございます事がぱツと致しますと、芸妓げいしや幫間に仕着しきせ出さなければならず、総羽織そうばおりを出すと云うので、廓さとの金には詰るが習い、伊之助も漸だん々家の方も不首尾うちになり、金に手支えて参りました。すると九月になり、節句前とうの事でお父さんの耳へ這入つたから、固い人ゆえ中々承知致しません、何んでも勘当をしなければ許いいなづけ嫁わたくしの万年町の岡本へ対して済まないから、久離きゆうり切つて勘当をするというので、番頭の安兵衛は粹な人ゆえ、兎に角私に預けて下さいまし、当分懲こらしめの為に二階住居すまいをなさればそれで宜しい、私が見張つていて外へ出さんことに致しますと云う事になりますたが、伊之助は番頭に向い、

伊「どうぞお願ひだから、もう一遍遣つておくれ、これつ切に往かないから昼遊びだけ許しておくれ、黙つて往かないで居ては少し義理が悪い事がある、紀伊國屋の伊之助と云やア仲の町でも知られた顔だから店のひけるまでには屹度帰つて来るが、後生だから昼遊び

だけ遣つてくれろ」

と頼むので、番頭の安兵衛が幾らか金を工夫して、

安「これだけ上げますが、其の代り店のひける前に帰つて入つしやらないと、もう私は決してお詫びごとを致しません、御勘当に成つても知りませんよ」

伊「宜いとも、屹度帰つて来る」

とはから金を懷中して髪結の長次を誘い、遊びに参りましたが、若草は勤めの中で懷妊して五月目でござりましたが、是れは滅多に無い事で、余程惚れなければ身重になる事はござりますまい。若草は素人臭く懷妊したとも云兼て居ります。伊之助は別れの遊びでござりますから、どうも賑やかにはいきません、何を見ても可笑しく無いから早く切上げ、伊之助と若草は屏風の中へ這入りましたが、伊之助はぼんやりして居ります。

若「申し若旦那く、伊のはん」

伊「え」

若「どうしてもこれつきりしか来られないの」

伊「そうサ三百七十両という大穴を明けた処七十両だけは安兵衛が償つて呉れたが、あと三百両だけの始末の出来る間、二階住居をして居て、流れの質や両替の方でどうか工夫

をして、穴を埋めるようにして上げますと安兵衛が親切に云つてくれたから、親父の方の首尾はおつ着いたが、今日は番頭に頼んで何んでもかんでもひけ前には屹度帰るからと云つて、漸々暇を貰つて来たくらいだから、もう三年ばかりは何うしても来る事は出来ないので』

若「おまはん茲こゝで金こゝが出来て、お父さんとの首尾さえ附けば、今までの通り主ぬしが来られるような事になりんすか、そくなら私がわちきお金わちきを才覚わちきしようじやア有りまへんか」

伊「その金こゝは何うして出来るんだえ」

若「外ほかに出来る目途あてもないけれども、仲の町の井桁伊勢屋いげたいせやから来るお侍の、青髭あおひげの生えた色の白い丈せいの高いお客様は、来てく／＼来抜くが、わちきは厭いやでなりまへんから、碌々氣休め一つ云いまへんが、あの客とりとを取留めれば三百両みツつや四百両よツつの才覚わちきは出来ますから、そうしてお金を拵え、三百両みツつだけ主かへに上げるから、身の立つようにして呉かえんなまし、主の来られないものを無理に来てくれると云うと、却つて主の身に障りんしようから、月に三度ずつは屹度逢いに来てくんまし、茶屋まで来て顔だけ見せて呉かえんなまし」

と云われ、何と思つたか伊之助は急に氣色けしきを変えました。

伊「此方こっちだつて月に一遍か二遍忍んで逢いに来たいが、来られるか来られないか知れない

から、その井桁伊勢屋から来る色の白い美しい男の客をお取りな」

若「主の身の立つ事だし、月に三度ずつも逢われる事なら、そのお客様を取留めて見ようじやア有りまへんか」

伊「取留めるとも取留めないとも御勝手ごかつてにおしな、私も紀伊國屋の伊之助だ、お前に深く
買い馴染んで、持物のようになつてお前が、外の客を取つて、それから金を引出して私
の身を立てる様な見つともないことは出来ないが、そのお客様を取りたいならお取りな、是
迄も他ほかのお客は取らないと云つておいたつて、内々ないく取つてたか何だか分るものか、お取
りな、何うせ女郎の千枚起請たとえという誓わちきの通りで、屏風ひとえ一重中で云つた事は、皆反故同様だ」
とあらへしくいう伊之助の顔を若草は怨めしそうに見て涙声になり、

若「あら伊のはん私もたゞならぬ身の上に成つていますから、月に一遍ずつでも主の顔を
見るのを苦界くがいのうちの樂みにしているのざますから、年に一度でもようござりますから、
顔でも見せておくんなましな」

伊「顔を見せ度くつても三年ばかりはもう来られないのだ、今日も無理に來たくらいなの
だから、そんな事を云われちやア心持が宜くないじやアねえか、末は夫婦と仮にも誓紙ま
で取り交した仲だのに、そう云う了簡では仕様がないから、私はもう是ぎり逢わねえとし

て帰るから、お前は其のお客を取るが宜い、善いお客様だからお取りよ、私が馬鹿だから是まで誑されてたんだ、帰るから羽織を出しておくれ」

若「あゝいう事を云いなます、おまはんが帰るつたつて帰しまへんよ」

伊「帰さねえつて帰らなければならぬのだよ」

若「帰るんなら私の身上を極めてつから帰んなまし」

伊「お前の身上どころか此方の身体が極らねえのだ、二階住居になるか勘当をされるか分らねえのだから、お前は勝手に其の客をお取りな、仲の町の花魁が何んなお客を取ろうが、毎晩替る枕だもの、お客様を取つたつて此方で何んとも云えない訳だから仕方はないが、苟めにも書いた物を私に渡して置きながら、それを反故にして……反故にされても何んともいうことは出来ないから、あの客を取るが宜い、結構だ、子供が出来たというのも誰の子だか分りやアしない、疾うからあの客を取つてるのかも知れやアしない、私は帰るよ」と云い放ち立ち上る。若草は泣きながら、

若「申し若浪はん、若旦那がお帰りだと云いますよ」

番新「あい何うしたんだね」

と屏風をあけて、

番新「何うしたの、帰るの、お戯けふざけなますな、坐んなまし」

伊「坐れませんよ」

番新「そんなことを云わずに寐て往きなましよ、花魁何を腹ア立たしたの」

若「あの井桁伊勢屋の客衆しうの事を若旦那に話したら腹を立つて、これぎり来ないと云いますから悲しくつてなりまへん」

番新「そう、若旦那それは斯ういう訳なんです、花魁がおまはんの事を心配して泣いて騒いでいなますが、他の座敷ほかの花魁とは違い、おまはんの胤たねまで出来て、他のお客へは出ないから、主人の首尾も悪いが、これまで随分主人の為にも成つてるけれども、どうも極りが悪いから、それにまたおまはんの身の上が、金でお詫が出来るなら、何うかして拝えて上げたいが、馴染なじんで来るお客様は無し、困つたものと心配して居なますから、主の為なら仕方がないから井桁伊勢屋から来る客をお取留めなましと、私が花魁に勧めたのざますのサ、前から取つての何んのつて、そういう心の花魁か花魁でないか大概分りそうなものざいますね」

伊「合あい槌づちを打つて旨く云つて、花魁と番頭新造は極つて居るぜ」

十

番新「あゝいう事を云うんだもの、本当におまはんは花魁殺しだよ、時々おまはんは花魁ぶを打つて帰る事があるが、他の花魁なら只は置きまへんが、座敷の花魁ばかりは些ちつとも逆らわずに泣倒れて、打たれながらも嬉しがつてゝ、おまはんが帰った後あとで何時でも癪しゃくを起し、わちきが介抱するんざいますが、五日か六日も経つとおまはんが来ると癪しゃくが治まるんです、今度は三年も来られないとお云いなますなら、三年の間癪しゃくが治りまへんと、世話をするのは私わちき一人、辛うります、素人の嬢さん見たような花魁に世話ばかり焼かして苦労ばかりさせて、本当に悪らしいよ、床へ這入つて緩ゆつくりと寝物語りをして、相談づくりにしていきなましよ」

伊「いやだよ帰けえるよ」

番新「仕様がないね、あの、長次はんを呼んで来なよ、あの娘こや、何んだつて今ツから居ゐねむ睡ねむりをしているんだよ、いけねえ餓鬼きせがわだよ、長次はんを見て来て呉んなましよ、喜勢川はんの座敷に居なますよ」

禿「あい、長次はん／＼

長「おい／＼何んだ、どうしたの、えゝ申し若旦那何んだつてお帰んなさる」

伊「お前は遊んでおいでよ」

長「お前さんが帰るなら私も一緒に^{わっち}帰りやすが、亥刻までに^{けい}帰れば宜いんでしょう、何うなすつたのです」

伊「何うなすつたツてお前は遊んで往きなよ、喜勢川は^{ほんもの}眞物だから泊つて往きねえ」

長「眞物も何も有りやアしません、あなた何をそんなんに腹ア立つたの」

伊「何んでも宜い、己は^{けえ}帰るよ」

長「若旦那そう癪癩を起しちゃアいけねえ、若浪さん、なにを……ソレお気に入りの正孝さんを呼んで来なよ」

番新「あい、あの娘や、ちよいと正孝はんを呼んで来てくんましよ」

と正孝を呼びに遣ると、他の座敷に居りましたから直に^{すぐ}飛んで参り、ピヨコ／＼しながら

正「若浪さん何ういう訳で……フーン、それはいけません、若旦那先ずトロリとお寝みなさい」

伊「トロリも何もいらないや」

正「何ういうお腹立か知りやせんが、私は誠にお帰し申し度くない、実はな、あれが何時もの通りまた十日か五日目においてになつてお顔が見られるなら何んですが、三年も来ないと仰しやると此方は島流しにでも逢つたような心持ですから、お帰し申したくない、花魁も泣いて入らつしやるから、ちよいとおよつて入らつしやい、花魁の心を安めてからお帰りとなさい」

伊「何んでえ、仲の幫間だから花魁の巣廻ひきをしねえな「幫間ドラを打たして陣を引き」と云う川柳の通りで、己が勘當にでもされたらば睡つけも引掛けやしめえ」

正「是は恐入りやす、貴方が御勘当になれば私はあなたをベロく甜まろめますよ、あなたが御勘当になれば揚屋町あげやまちの裏辺あたりの小粋な処しょたいへ世帶しよたいをお持たせ申して、私が仕送りをして御不自由はおさせ申しませんで、万事お世話を致しやしよう」

伊「己は帰る、己の足で己の宅うちへ帰るに何も無理に引止める訳は有るめえ」

正「お引止め申す訳では有りませんがあの通り花魁が泣いて入らつしやるから」

番新「申し若旦那をお帰し申すと聞かないよ」

正「若旦那が帰る／＼と仰しやるのは何う云う訳なんです」

番新「ナニ井桁伊勢屋のお客の事からさ」

正「これはどうも、これは恐入った、若旦那それでは貴方まるで花魁を苛めるようなもので、花魁がお可愛相です、あのお客に花魁が惚れるのなんてえことがありますものか、彼奴は何処ともなしに女に嫌われるよう生れ附いてるんでしょう、女除けのお守りでも持つてゐるのか、変に色が白くつて、じゞむさくて妙でげす、ハゝそれはあなたが無理でげしよう、そんな事を仰しやるようではまだお遊びがお若い」

と云われ、伊之助は勃^むツとしていきなり扇で正孝の頭をピシャリ。

正「アゝ痛い」

伊「どうせ己は遊びは知らないから、馬鹿にされて斯んな目に逢つたのだ、帰^なるツたら帰^ける」

と止められると猶^な帰^るというが見得の場所の習いで、ドン／＼と梯子^{はしご}を駆け下る、若草は本間の方へ泣き倒れる。番頭新造は泣きながら跡から追いかける。正孝も長次も続いて参ります。

番新「藤助^{とうすけ}どん、お願ひだから若旦那の履物^{はきもの}を出すと聽かないよ」

伊「早く履物を出せといふのに」

若者「へい」

番新「出すときかねえよ」

伊「出しねえといふに」

と無理やりに履物をひツたくつて表へ飛び出し、無闇に駆出して 大門おおもんを出る。跡から続いて正孝と長次が追いかけ、

長「若旦那わかよし」

正「これはどうも恐入つた、大変にお飯まんまとを喰べ過ぎて居るから駆けないと 横腹よこつばらが張つて堪らない」

伊之助はズンズンく土手の方へ参る。兩人はドシドシく追掛け田町へ下りずに先の方へ無闇に駆出しましたから、

正「若旦那何處どこへ往くのです」

伊「何んだッて一緒にくつついて來たんだよ」

正「でもあなた、花魁が前からあの侍を取留めて居るならお断りは致しませんが、客にして居るだろうとお疑りでありますようが、あの花魁に限つて決してそんな事の無いというは正孝が知つて居ります」

伊「惚けのろをいうようだが互に書附まで取交とりかわして、私は決して他の客へは出ないから交つきあ

際あがでも他へ登あがつてくれるなど云うから、己も他へは登つたことはありやアしない、互に斯う云う書附まで取替とりかわせて置きながら、他の客を取りたいと云うから、勝手に取れと云うのだ」

正「花魁あんが何んで彼あなお客に惚れましよう、私は大嫌い、あの屁屁つぴり侍の屁屁ツチヨロな、
彼あのくらいいやなお客は有りません、あの屁屁つぴり侍」

と云つてゐる後に頭巾を冠つてどつしりした羽織を着、大小を落し差しにした立派なお侍
がいきなり正孝の袖を取り、

侍「屁屁つぴ放り侍とは何んだ」

正「オヤ、これはどうも、イエ誠に恐入りました、御免遊ばせ」

侍「コレ屁屁つぴ放り侍とは何んだ」

正「イエ殿様、貴方の事を申したのではございません、他に屁屁ツチヨロの様な人が有りま
すから、貴方が後に入つしやる事とも知らず、つい申しましたが、お侍さまで入つしやる
から貴方の事を申したと思おぼしめ召めしましようが、決して左様ではございませんので」
侍「イヤ、己のことを云わんにしろ武士は相見互いだ、貴様は吉原町たいこもちの帮間ひょうまんじやアないか、
客の機嫌きづま気き棟むねを取つて、祝儀を戴き、其の日を送る帮間たる身の上でありながら、何んだ

屁つぴり侍とは、不埒な奴だ

正「どうぞ御勘弁遊ばして」

侍「幫間の分際で武士に悪口を申す不届奴、勘弁相成らん、打ツ放しちまう」と云われ正孝は真青に成つて謝つて居りますから、伊之助も心配し長次も驚いて居りました。

伊「おい長次や、お前ちよつと詫ごとをしてやんなよ、正孝が可愛相だから」

長「ですがね、連れだと云つて私も一緒にやられると詰らねえから」

伊「それだから往来の通りがゝりの積りで詫に這入るが宜いじやねえか」

長「大事おおごとですね、あなたが出て來たから、こんな事になります」

と云いながら遣つて参り、

長「へー／＼」

侍「なんだ手前は」

長「へえ、わっつ私はホンの往来の通りがゝりの者でござえやすが、へえ、何か此の者が殿様に對して不調法を申し上げて、御立腹を受けまして驚き入りまして、見兼て仲へ這入りました訳柄わけがらでござえやすが、へえ、どうか御勘弁を願いたいもので」

侍「ナニ往来通りがゝりのもので連でないと申すが、兩人で悪口して居たのを存じて居る、
兩人ともに捨置かれん手打ちにするから参れ」

と云われ二人ともかたまつてしまい、口も利けません。すると日が暮れてまだ間がない
頃でございますから、追々人が出て参り、忽ち黒山のようになりました。

甲「何んですか？」

乙「何だか侍が幫間たいこもんを斬ると云つてるんです」

甲「何を不調法したんです」

乙「何でも帮間がソノ何ですね、お客様に屁工放ひつけたとか云うのが始まりで」

甲「へえお侍に屁を放つ掛けたんですとえ、酷いぞんざいな事をしたもんですね、おなら
をお侍に放つ掛けたんですか」

丙「いえ然そうじや有りません、お侍さんの方でおならを致したので」

乙「へえ」

丙「帮間は口が悪いもんですから屁放へっぴり侍と云つたので、侍が後あとへ帰つて来て、何だ出も
の腫れものだ、したら何うした、屁放り侍とは何だと斯ういうのが喧嘩はしまの初りで」

甲「理不尽な、自分でして置きながら何も斬るほどのことはない、たかがおならじやア有

りませんか、酷い奴もあるもんですねえ」

丁「ナニ然うじやアない、もと居た奉公人だそうで、あの幫間もとが旧時もとあの侍の処に奉公した仲間ちゆうげんで、それが何か持逃げをしてトイと居無くなつてたのが、幫間に成つて居るから、捨置かれん、何故なぜ己の事を蔭で悪くいうと怒おこつてるので」

戊「然うじやアないそうで、酷い事をするもので」

甲「何でげす、何したんです」

戊「ナニあの侍の物を取りに掛つたので、幫間ふりの振すりで掏摸すりをしたんで」

甲「そう此方こっちへ押おさしちやアいけませんよ」

巳「何でげすく、転覆ひっくりかえしたのかえ、もう燃え出したかえ」

庚「何です」

巳「鍋なべ焼やき餃ぎ餉どんが荷おろし始めた処で転覆ひっくりかえしたと云うから」

辛「もう生れましたかね」

壬「何だえ」

辛「何だか乞食ごじきが産うぶをしてるツていうことを聞きました」

と何だか解らざにごた／＼して居りまする処へ、通りかゝつたのは、昇夫かぶの安吉と重

かづ夫や

三郎を連れて荷足の仙太郎が刀の詮議に土手へかゝつて参ると、人ひとだち立たちが有りますから、仙太郎も立止り覗いて見て、

仙「安、安」

安「へえ」

仙「あの侍は仙台河岸せんでえがしの侍に似てえるようだが、何うだろう」

安「へえ……あれじやアありますめえ」

仙「誰を見ても怖がつて彼かれじやアねえ」と云やアがる……何うしたんですエ……幫間ひょうかんが……成程、悪口わるくちを利いたんで……安、己おのがあの侍に喧嘩ア吹ツかけて、あの頭巾をふんだくるから、汝遠てめえくて面ア見てえて、仙台川岸せんでえがしの侍だつたら、大きな声そいつで其奴そのやつだアーと呶鳴れ、そうしたら己おのが咬かぶり附くから、重さん、しつかりしなくツちやアいけねえぜ」

と云い捨てゝ、

仙「え御免ねえ」

と多勢おおぜいの人を搔き分け侍の傍そばへ摺り寄り、

仙「えお侍、訳は知りませんがこれは仲の幫間ひょうかんで、一人は通り掛りの者だ、弱よええ町人まちにんを捕つかめえて御託ごたくを云わなくツても宜かろう、エお侍」

侍「汝は何だ、何をいう」

仙「私は通りがゝりのものだが、見兼たから仲へ這入つたのだ、弱え町人を斬るの殴るのと仰しやるが、弱えものを助けるのが本当のお侍だ」

侍「なにをいう、怪しからん奴だ、汝は此の者の詫に這入つたのか、何に這入つたのだ、此の者どもは悪口を申して無礼を働いた故、捨置かれんから手打にするんだ、汝は何だ」
仙「エ、色里へ来て塗箸見たような物を一本半分差して、斬るの殴ると威張つて、此の頃道哲へ来て追剥をするのは手前かも知れねえ」

侍「此奴棄置かれん事を申す」

仙「棄置かれんなら己を斬れ、サア抜け」と云いながら後を見返り、

仙「オー重さん抜くぜ、安や宜いか」

侍「イヤ余程白痴たわけた奴だ、強いて斬られたいというならば斬つて遣る」

仙「サア斬れ！」

侍「宜しい、望みに任して斬つて遣る、命がないから左様心得ろ」

仙「サア抜け！」

と身体を摺り附ける。

侍「無礼至極な奴だ」

仙「汝の方が余つ程無礼だ、己が仲人ちゆうにんに這入つたのに頭巾を冠つて、挨拶ええさつをするつてえ事があるか、頭巾を取りれヤイ、面ア出して見せろヤイ」

侍「其の方は棄置かれんが両人は助けて遣る」

と突き離され、長次正孝の両人は悦び、實に竜の口たつのくちを免れたような心地にて、

正「有難うぞんじます、何処のお方が存じませんが、この御恩は決して忘れません」

と二人は厚く礼を云い、伊之助を引ばつて連往つれゆきます。伊之助も怖いから三人で漸々だん／＼逃げて、また大門を這入つて松葉屋あがへ登りました。それなら出て来なければ宜いに。あとに仙太郎は侍の傍そばへ摺り寄つて来ました。

侍「望みに任して斬つて遣るから覺悟をしろ」

仙「サア斬れ！」

侍「此奴棄置かれん」

と云いながら刀の柄へ手をかけました。是から刀を抜くという詮議の処でござります。

十一

さて引続きのお話は寛保三年九月二十日の晩に、吉原土手で荷足の仙太郎が頭巾目深まぶかの怪しの侍に出逢いまして、どうも仙台河岸で見た侍に似て居るからと云うので、無法に喧嘩をしかけたが、たとい人の為でも、侍に喧嘩を仕掛けて刀の詮議をしようと云うのは實に剛胆な事でございます。左様な男達おとこだてという様な馬鹿らしい人は近年開けてなくなりました。今侍は刀の柄へ手を掛けて抜きにかかりましたが、仙太郎の身構えが如何にも気象な奴でござりますから、心うちにて此奴中々尋常たゞの奴ではない、少し何か心得て居る奴であろう、殊に胆力の据わつた者、生じいな事をして耻を搔いてはならんと、心有る侍と見えまして、

侍「イヤ町人免ゆるしてくれ、これは私が悪かつた、成程お前のいう通り吉原土手の色里わいへ参つて長い物を差して、斬るの殴はると云つたは、酒興しゆきようの上とは云いながら大きに私が悪かつた、其の方の云う処は至極もつとも尤だ、此の通り手を下げて詫てめえるから免してくれ」仙「ナニ免さねえ、手前抜くと云つたからサア抜け、武士に二言は有るめえ、抜くと云つたら抜かずにはア居られぬえから、サア抜け」

侍「私が悪いから何うか免してくれ、醉が醒めて見れば白刃を振つて町人を嚇かし、土地を騒がしたは私が悪いから謝まる」

仙「いやだ、抜くといつたら抜きねえナ、エオイ、武士に二言は有るめえ、ナニ免してくれと膝まで手を下げて詫るというなら、コレ頭巾を冠つて謝まるものもねえもんだ、本当に詫言をするんなら頭巾を取つて詫びなせえ、頭巾を取れ」

と頭巾／＼と云われるだけに彼の侍も無氣味になつたと見えたか、大声にて、

侍「免せ」

と云いながら追掛け打つぱら雪踏を脱ぎ捨て、跣足のはだしの儘駆け出す。

仙「此の侍」

と云いながら追掛け往くと、野次馬が大勢居りますから、

野「あの侍逃がすな」

と後からバラ／＼付いて参ります、侍は土手下へ駈け下りましたが何処を何うしたか見失いました。仙太郎は大門を這入り、仲の町から京町揚屋町と段々探しましたが、残念ながら見失なつてしましましたが、何でも出るに違ひない、吉原に這入つたからにや、女郎屋へ登つたろうから、明日の朝は大門を出るに違ひねえと、五十軒の武蔵屋へ泊つて

侍の出るのを附けて居りましたが、取逃がしたか見失なつたか知れませんから、仙太郎は空しく立帰りました。伊之助は其の晩また松葉屋へ登りましたが、一旦喧嘩をして出た跡ゆえ、向むこうでも容易には帰しませんから遅くなり、遂に大引け過ぎまで居りましたから、伊之助不図気が附き、

伊「サア遅くなつた、店が引けるまでには屹度帰る、そんならと云つて来たんだから」と長次と二人とも慌てゝ外へ出ました。

伊「ア、飛とんだ事をした、店の引ける前に帰ると云つたのに、斯んなに遅く今時分帰つたら、番頭が腹を立つて、親父に此の事を告げれば勘当になるかも知れない、それとも今夜の内に帰るか／＼と首尾をして置いてくれたか、何にしてももう仕方がないから、堀へでも往つて駕籠へでも乗つて帰ろうか、何うしようか」

長「番頭さんの方は余り遅くなりましたが、何しろ駕籠へでも乗つていらつしやいな、先さづきあなたは腹を立てたからいけねえんです、侍の事で詰らねえちん／＼などを起したから、斯んなに遅くなつて仕様がありやアしません、あんな侍などに何んで花魁が惚れる訳は有りやアしませんや」

伊「己きもまさか惚れる氣遣きづけいは有るめえと思うが、これツ切り来られねえもんだから、ツ

イちゃん／＼を起して、無理な事を云つたのよ」

長「そんなら駆出さなければ宜うござえやすいに、私も一遍見やしたが、忌な侍で、本当にあんな馬鹿侍は有りやアしません」

「うしろ」というと、後で

「馬鹿侍とは何んだ」

と云われ、二人は恥りして道哲の方へ無闇に逃出しましたが、跡から侍が追掛けているので、己おのが足音か跡から追掛け来る侍の足音か分りませんが、何だか傍へ来たような心持がいたしますから、急いで道哲を駆下りる時に、運の尽きか髪結長次ゆきが転んだが、伊之助は跡へ帰つて助けることは出来ないから無闇に逃げて往くと、後の方でバタリ、キヤーと悲鳴を上げましたから、若しや長次は斬られやアしないかと思ひましたが、あとへは帰られませんから、一生懸命に堀まで来て、竹屋の家を叩き起して、侍に追いかけられたから泊めてくれろというと、内儀かみさんがそれは飛んだ事でござります、御心配なしにお泊んなさいと云うので、其の晩は泊つて、翌朝よくあさ小船で帰りましたが、本郷の宅では大騒ぎで、翌朝になると髪結の長次が斬殺きりころされて居るので、女房が紀伊國屋へ泣声で参り、

「若旦那のお供をして参りましたから斯様な目に逢いましたので、御検死沙汰から何や角かや貧乏の中で仕様が有りませんから、私は死ぬより外に仕様が有りません」

とキヤア／＼狂氣のようになつて騒ぐゆえ、捨て置かれんから、お店から多分の金子を出して長次の死骸を引き取り、葬式まで出して遣るような事でござりますから、世間に對して伊之助を捨置くわけには参りませんゆえ、久離きつて勘当するというのを、番頭の安兵衛が宥めて、

「只た一人の若旦那ゆえ、私が氣を附けて外へお出でなさらないように致しましよう、またお母さまも御心配な事でしようから、懲らしめの為に当分のうち窮命なさるように、私が万事計らいましょう」

と云つて堀切村に別荘がございますから、伊兵衛という固い番頭を附けて、伊之助を堀切の別荘に押込めて置きましたが、今まで遊んだ子息さんが押込められて、頑固な番頭さんが附いて居るのでござりますから、只吉原の事ばかり案じて、若草は何うして居るか、九月が腹帶だと云つたから、来年の二月は臨月だが、首尾よく赤ん坊が産れるか、まだ己の此処に押込められてる事は知るまい、切めて手紙でも遣りたいと硯を引寄せ、筆を取り上げ文書を書こうとすると、

伊兵衛「若旦那、何をなさるのです」

伊「そんな怖い顔をしなくつても宜いじやアないか、私が悪ければこそ斯んな淋しい処に来て、小さくなつてるので、余り徒然だから発句あんまとぜんでも詠ほつくろうと思つてちよいと筆を取つたのだよ」

伊兵衛「そんなら宜うございますが、吉原へ文でも贈る思召おぼしめしかと思いまして、心配いたしました、あなたお句が出来ましたら拝見致しましょう」

伊「止めましょうよ」

伊兵衛「若旦那どちらへいらつしやる」

伊「何處へ往くつたつて些ちつと庭でも歩かないと毒だらうじやアないか」

伊兵衛「御一緒に参りましよう、生垣いけがきが低うござりますから、跨またいで逃出しでもなさると私がしくじりますから……若旦那何處へいらつしやる」

伊「あんまり退屈だから本でも出しに蔵へ往くのだよ」

伊兵衛「お蔵へ御一緒に参りましよう」

伊兵衛「お蔵へ御一緒に参りましよう」と世の中のことを知らない人間だから、何を見ても分らんで仕様がありません。芝居の櫓やぐらを見て烟突けむだしと間違えるような人で。

伊兵衛「若旦那どちらへいらっしゃる」

伊「便所へ往くのだよ」

伊兵衛「御一緒に参りましょう」

と便所まで附いて行くというようなわけで、伊之助は段々鬱々致しまして、これが病氣の原因に相成り、どッと寝付くような事になつても、看病人が有りませんから手当が行きません事で、幾ら可愛い息子でも懲しめのために押込めて置くのですから、お母さんにも看病は出来ません、何うしたら宜かろうと心配をすると、番頭の安兵衛が、

「好い事が有ります、幸い万年町の刀屋のお嬢さんを若旦那の枕元へ呼んで、看病をおさせ申せば、若い同士ゆえ手がさわり足がさわりして、若しそう云う事になりますれば、吉原のことも遂に去るもの日々に疎く、忘れるような事になりましようから、早く御新造をお持たせ申すが宜うございます、万事私にお任せなさい」

とこれから安兵衛が万年町へ参り、政七に面会し、伊之助は病氣のところ看病人が無いので困りますから、嬢さまを貸して下さいと云えば、政七も義理でございますから、お連れなさいというのでこれから娘が来て看病をいたしました。

十二

お雪の看病は真の看病で、手当の行届きますこと一通りでありません。一体看病といふものは婦人に限りますな、どうも男ではいけません。看病婦と申して、どうも婦人の方が手当りが宜しい、男の骨太の手で抱き上げられると痛いが、婦人の嫋やかなむツくりした手や何かですと余程心持が宜いと云います。殊に許嫁の娘さんで、年齢は十八でございまして、別嬪べっぴんではあるし、譬えにもいう通り饑ひもじい時のまずい物なしで、お腹の空いた時においしい物が来たようなもので、若旦那がめしあがる事に成つたが、素より許嫁だから誰憚たれらぬめしあがつても、何も仔細は有りません。漸々病氣も癒なおり、遂にこのお嬢さまがぼてれんと成りましたが、吉原の若草は九月帶くがつおびと云う時に別れたぎり、嬢さんが来て翌月身重になりましたから、両人ながら身重に成りましたが、自然と吉原の方は忘れがちになるような事で。若草は左様なこととは知らず、伊之助の音信のないは春木町の二階住居すまいに成ったことか、切めて髪結の長次さんでもよこしてくれゝば宜いにと、世間の事を知らん花魁はなゐでございますから、伊之助の事を思い細る内に、漸々病氣になりますと、松葉屋の主人は粹すいな人ゆえ、

主「花魁決して心配おしでない、氣から病が出るというがお前の病氣は氣から出たのだが、来年の二月は屹と癒るから心配しずに山谷の別荘に往つて緩り養生をするが宜い、若浪や（番新の名）詰らないものを食い合わして、身体に障るような事ではならないよ、喰べ物に氣を附けて遣んな、軽はずみな事をしてはいけないよ、伊之さんの顔を潰すような事はしないから、安心して養生をしな」

と云うは堕胎薬などを飲んで身体に中るような事が有つてはならんから、産み落した曉には伊之助さんの方へ小児こどもを渡して、お前の身の立つようにしてやると云わぬばかりの謎で、若草、若浪も嬉しく思いましたから、その儘山谷の別荘に参りまして、養生をして居ります。とフト耳に這入つたのは、堀切の別荘に伊之助さんが押込められて窮命して居ると聞きましたから、お可愛そだと思いましたが、吉原の者を頼んで遣つては、却つて若旦那の身の為に成るまいから、誰が宜かろうというと、若浪が

「私の考えでは矢切村の叔母さんを遣んなまし、叔母さんを遣ななますと、あゝいう堅氣の叔母さんが往くんですから、先方むこうでも訝しく思わないで、却つて事が解りましょ」と是から急に手紙を書いて下総の下矢切村へ出し、どうか伊之助さんの方へ談はなしをつけてくれると云うので、早速矢切の叔母さんが出て往きました。これが間違いの始めて、解

る人ならば相談の埒が明きますが、分らん人で、お釈迦さまから渡わたしを越えると直すぐに向うが下矢切村でござりますけれども、江戸へとては十六の時に来た切ぎりで、浅草の觀音さまを其の時初めて拝んだという人で、供に附いて来た男は、鍛錬冶金重の宅に居た恭太郎きょうたろうという馬鹿な奴で、先方むこうは奉公中一晩でもお店を明けたことのない頑固かたくねな番頭さんがちゃんと扣ひかえて居りますする所へ掛合かけあいに参つたのでございますから、余程面倒めんとうで、

叔母おば「恭太や、少し其處そけえ待ちて居ろよ、はい御免ごめんなせえましよ、紀伊國屋の伊之助さんいのすけの別荘は此方こちらでござえますか」

伊兵衛「はい入らつしやいまし、何方どちらさまから入らつしやいました」

叔母「はい私は下総の矢切やきりから参めえりましたが、伊之助さんがの別荘は此方こちらでござえますか、あの矢切村のおしのという婆アめえが参めえつたとそう仰しやつて下せえまし」

伊兵衛「左様でござりますか、下総の矢切などという処には別に御懇意ごんぎなお方はないわけで」

しの「マア御免ごめんなせえまし」

と上へあがり振ぶりかえ反そけつて、

しの「恭太や、其處そけえ腰イかけて待ちて居ろよ……能く天氣イ続きます」

伊兵衛「手前は紀伊國屋宗十郎の手代伊兵衛と申すもので、若主人伊之助は昨年より少々不首尾なことがありまして、只今まで斯様に淋しい処に押込められて窮命に成つて居りますから、誰方どなたがおいででも若主人にはお逢わせ申しません、手前が預つて居る事でござりますから、斯様な次第で有ると一々私に仰せ聞けられますが、また私から若主人へ申し聞けますから、私がお取次を致しましよう」

しの「左様でござえますか、始めてお目にかかります、私は矢切村のおしのと云うやくざ婆アわたくしでござえますが、幾久しくお心安く願ねがえます」

伊兵衛「ハイ／＼、お茶を持つてお出で、ヘー何／＼なに御用で」

しの「私は吉原の松葉屋の若草の眞実の叔母わたくしでござえますよ」

伊兵衛「へえ、これは飛とんだ事で、花魁の叔母さんが何しにおいでなさいました」

しの「ハイ／＼私も暫く音信おとづれも致しません、また参めえりもしませんが、此の夏の植付頃うえつけごろに一度其の話の事に就て参つゝいりまして、伊之助さんがにもお目に懸つたこともござえますが、此度ア手紙めえが来て、叔母さん、ちょツくら来てくんろ、相談ぶちてえ事が有ると云うから、参めえつて見た処が、若草は吉原には居ねえで、松葉屋の寮とかいうのが山谷にござえまして、其処え這入つて、塩梅あんべいが悪くつて打ツ転うがつて寝て居るでござえますから、私も魂消たまげて

塩梅が悪いかと尋ねますと、叔母さん面目ねえが勤めの中で赤子が出来たよと云うから、私も魂消て、何うして赤子を出来したかと尋ねると、伊之助さんと夫婦約束をして、他のお客様へは出ねえから、素人同様の身体ゆえ赤子が出来たが、主人の慈悲で養生しろつてえから、こうやつてるが、来年の二月は臨月だアけれども、子を生んだ暁にやア伊之さんは赤ん坊の父親だから引取つて貰わなければならねえのだが、伊之さんも堀切の寮で窮命してえるというから、私も案じられて、焦れて塩梅が悪くなつたれえだが、他の者を使えには遣れねえが、叔母さんは堅気だから往つて貰えてえが、伊之さんの処へ往つて、子供を引取つてくれるか、私の方で里へ遣るか、他へくれようかという処は、伊之助さんがお目に懸らねえれば分らねえこんだし、それが極らぬ内は産む事も出来ねえし、伊之助さんの様子も案じられるから、塩梅が悪くはねえかと尋ねながら、相談をぶつて来てくんろツて頼まれて参つたのでござえますから、どうか伊之助さんに逢わしてお貰え申し度いもので」

伊兵衛「それは怪しきらん事で、何うもお前さんの様な物の理合の解らん御方は有りません、若主人は全くその若草花魁のために斯んな淋しい処に窮命して居る身の上ですから、その花魁は若主人のためには敵です、悪魔でござります、その何うも花魁が身重に成つた

つて、毎晩替る枕の勤めの身でありながら、きっと伊之助の子と定つた事はありますまい、貴方は此方こちらを大家たいけと心得て入らしつたか知りませんが、今の伊之助も前々まえくの身の上ではありません、只今にも勘当をされる次第に成つて居りますから、息子株では有りません、今にも追出されゝば乞食になるかも知れませんから、こゝへ何百両とかいう金を出して、斯う云う事にしようと云うことには、只今の身の上では三文も出来ません、へえ何う致しましてへえ、只今では伊之助も後悔致して、吉原のよの字も若草のわの字も忌いやだと申してへえ、驚ろいて居りますへえ、何う致しましてへえ、何うぞお帰りなさつてへえ」

しの「いえ私は無理に金を貰えに來た訳じゃねえから金はいらねえが、他ほかのお客には出ねえ若草だから、伊之助さんがの児こと定つてるが、産み落した暁にお前の方で育てる事が出来なければ己ア方おらで里に遣つても大えくするが、それともお前の方で引取るとも、金を附けて他わきへくれて父おれなし児こにするのは不便ふびんだが、伊之助さんがの為にならねえなら、仕方がねえから、その金も己おれの方で出すが、その相談だから伊之助さんに逢わなければ相談が出来ねえのでござえます」

伊兵衛「それが解らんじや有りませんか、どうか他わきへ遣つて呉れろ、里に遣つてくれろと伊之助の言葉が掛れば伊之助の児こと定りましよう、伊之助が春木町に居た時分に、お前さ

ん一人に惚れてるとか何とかいう欺しに乗り、それが為に斯ういう窮命をして居りますのに、そんな強請騙り見たような、へ：変な事を云つても三文も出来ませんへえ、手前が此処に居りますのは、吉原から左様な事を申してくるかと思つて、それが為に附け置かれる身の上ですへえ、何う致しまして、只たたゞ今お帰りなすつて」

と云われおしのは少しく氣色けしきを変え、

しの「何んだッて、強請騙りとは何んだえ、己ア矢切村でハアおら小畠こっぱたけの一段ひとつも持つてゐるものが、堀切くんだりまで強請騙りには参りませんよ、そんな人情の解らねえ事をいつても駄目だ、伊之助さんることを心配しんぱいして、塩梅あんべいは悪くはねえかと、若草は瘦こけて煩字わざらも忌だといえた義理じやあんめえ、慥かに夫婦約束の書附まで取替わせた間柄だから、何も無理に金を貰いに来たわけじやねえよ、お前さまのような人には何を云つても話が解らねえから、伊之助さんがに逢わなければア私は帰りませんよ」

伊兵衛「オヤ、此の狸婆アグズ／＼わしいうと表へ突出つきだすぞ」

伊兵衛「なにを云やアがる」

と訳の解らんものは仕様がありません。おしの婆さんを表へ突き出そうとすると、供に来たのは馬鹿の恭太郎ゆえ、いきなり草履下駄を脱いで、

恭「此の野郎見ろ」

と番頭の頭を殴つ、番頭も怒り出し、無茶苦茶に胸倉を取つて表へ二人を突出し、ポンと掛け金をかけてしまう。叔母は地べたへ転り、

しの「ア、若草は斯んな事とは知らないで、伊之助のことを思つて病み耄けてるが、伊之助は吉原のよの字も若草のわの字も忌に成つたような不人情な心だから、自分が逢わないで物の解らねえ奉公人を出して、己を外へ突出しやアがつて、斯んな疵まで出来しやアがつて」

と口惜涙に泣き沈む。

恭「叔母さんお泣きでないよ、今己が柿を買って遣るから」

しの「なにをいう此の馬鹿野郎」

と立上り、杖をついて漸く若草のもとへ帰り、右の一伍一什を煩らつてゐる若草に話すと、そんなら伊之助さんの心がかわりはしないかと思い詰め、カツと逆上せて熱い涙をこぼし、身を震わして騒ぐのを見て、

番新「花魁間違いだよ、伊之はんはそんな方ではないが、あゝいう人だから奉公人任せにして置くから、訳の解らない奴が出て何か云つたんでしょう、腹も立ちましょううが叔母さん間違いざますよ、お前さんが其様にそんないうと猶々花魁の病氣に障ります、花魁今云つた通り伊之助はんは決してそんな人ではありません」

と云い宥め、叔母には小遣を持たして帰しました。跡で若草は弥々伊之助の事が心配になり、クヨ／＼思うから、漸漸だん／＼と御飯も食べられないようになりました、永煩いの処へ食が止つたゆえ若草は次第に瘦せ衰え、ホンと云う息遣いが悪うございまして、泣いてばかり居ります。若浪も心配して種々な事を云つて慰めるけれども聞入れません。間違いの出来ます時にはいけないもので、たいこもち幫間の正孝が若草の処へ見舞に往こうと云うので、ちよつと紅更紗べにさらさの風呂敷に二葉屋の菓子折を包んだのを提げて山谷橋へかゝりました。

十三

其の時此方から來たのは表徳ひょうとくと云う人で、表具屋の徳兵衛さんというのですが、誰いうとなく表徳ひょうとくと呼び、たいこもち幫間でもないのに幫間の真似をして、世間の人にはひろく交

際が有る、有名な人は皆知つて居る、此の間芝居見物のとき成駒屋の部屋で饅飯を喰つて昼寝をして来たなどと嘘ばかり吐いてる人で、酷く酒に酔い、向からヒヨロ／＼やつてまいり、正孝を見て、

徳「イヤ 大師匠」
おおし、よう

と言葉をかけられ、正孝は誰だッけ、顔は二三度見たが名が分らねえと考えながらも、

正「相変らず 大景氣で」
おおけいき

徳「師匠誠に暫らく、お忘れかえ」

正「イヤどうも忘れる処じやアねえが、誰だつけ、強氣ごうぎと不器用だからチヨイと胴忘れを

したが、お前の名前は」

徳「イヤお忘れかえ、表徳ひょうとくだアね」

正「ウン表徳さんよ、違ちがえねえ、相変らず、何處なへへ」

表「今日は五名ばかりで善四郎さんへお飯まんまア喰いいに往かねえかというから、有難えありがてえツ

てんで往つて見ると、一杯に塞ふさがつて、上も下もいけねえと云うので、是れから上手うわてへ往こうというのだが、腹が空へつて堪らんから、ちよいと底を入れようというので重箱せんぱへ往つて、鮓なますで飯を喰つたが、あの連中は上手へ往つて、柳橋やなぎばしのおちよと千吉せんきちを呼んで

浮れる訳だが、表徳は御免を被り廓へ往つてチヨン／＼格子か何かで自腹遊びをする積りで御免を被つて師匠に逢おうと思つてると、此処で出でで会すなんざア不思議でしよう」正「今日は強氣こうぎと野暮に（折を上げて）アノそれ売出しの若草花魁の病氣見舞に往くのです」

徳「師匠一緒に往こうじやア有りませんか」

正「君は若草花魁を知つてゐるのかえ」

徳「存じませんよ」

正「知らなけりやア往つても無駄だぜ」

徳「ナニネ、お客様のお供をして二階でも通る時に花魁から表徳さんとでも声をかけられゝば強氣わっちと私も沾券こけんが宜しいじや有りませんか、だから師匠が往くなら後あとから従ついて往つてサ、師匠から聞きましたが花魁は御病氣だそうで、お大切だいじになせえツよてナなことを云えば宜いんでしょう、是非御一緒に」

と云うので正孝も荷になりますが仕方がありませんから、

正「そんならば連れて往くが神妙にしなくつちやアいけねえぜ」

徳「宜しい心得た」

正「さア此処だ、へえ御免なさい／＼」

寮番男「おやおいでなさい、お上りナ」

正「新助どん誠に御無沙汰を致しました、実は桐生へ往きました、一昨日帰りました、新八松屋で聞いて驚きましたが……これは詰らないものですがお土産に」と差出すを男が受取り、

男「少し待つておいで」

と云い捨てゝ奥へ這入る。と間もなく番頭新造の若浪が出て参りまして、

番「おや能く来なましたネ、上んなましよ」

正「佐羽さんに誘われて慾張り 旁々 桐生へ往きましたが、一昨日帰つて松新で聞きましたと、花魁が御病氣で山谷のお寮に在つしやるという事ですから、早速お見舞いに出ましたので」

番「やっぱり一件の事だから仕方がないの、九月の一件から段々と病氣になツちまつて、本当に可愛相に、他の花魁と違つて素人も同じ事だから、一時に思い詰るのは尤もだが、氣の晴れることは些^ちツともないんざますよ、まあ正孝はん上んなましよ、彼処に立つてゐ人は何」

正「あれは途中でヒヨイと逢つたんですが、大変な奴なんですが、ズボラな酷い奴で、先方から慣々しく一緒に連れてツて呉れろというからお前花魁を知つてゐるのかえと云うと、お目には懸らないが、ちよいとお目に懸つて置くと、廊下でお目に懸つても沽券が宜いツんで無理に従^ついて来たんで」

番「宜^ようざますよ、淋^{さみ}しい処だから呼びなましよ」

正「中々大変な奴で、御病氣の処なぞへ呼ぶ奴じや有りやせん、変なやつなんで、表具屋徳兵衛とかいうので、表徳^{こうぢ}というんだそうで」

番「宜うざますよ、此方^{こっち}へ上んなまし、ちよいとヒヨツトコさん、おや御免なまし表徳さん這入んなましよ」

徳「へえ御免なさい、誠にどうも、今山谷橋で大師匠に逢つて聞いてすっかり驚いちまして、只アーツと云つて鬱^{ふさ}いじまつて、小さくなつて師匠^{あと}の後から従^ついて来るくらいな事で花魁の御様子^{うかげ}を伺い、お脈^みを拝見したいというわけで」

正「そんな大きな声をしてはいけないよ、花魁は鬱ぐ病だから、チト神妙にして、少し待つておいで」

徳「好い屏風だネ、金地に牡丹の花があつて、赤い尾を振り舞してるのは猩々^{しょうじ}でげす

かえ

正「ナンノ石橋だよ、え御免なさいまし」

番「此方へ這入んなまし、花魁正孝はんが来たの、そこへ這入んなましよ」

と い う の で 、 通 つ て 見 る と 、 病 間 は 入 側 附 き の 八 置 の 広 間 で 、 花 月 床 に 成 つ て 居 里 ます 。 前 に 褐 を 取 り 、 桐 の 胴 丸 形 の 火 鉢 へ 切 炭 を 埋 け 、 其 の 上 に 利 休 形 の 鉄 瓶 が かゝつて 、 チンくと湯が沸つて居ります。十一月の事で寒いから二つの布団の上に小蒲団を敷き、藤掛鼠の室着の上へ縫もようの搔巻袍を羽織り、寒くなると夜着をかける手当が有ります。床には抱一上人の横物はとりまして、不動さまに道了さまと塩竈さまのお輻と掛け替り、傍に諸方から見舞に来た菓子折が積んで有りますが、蒸菓子の方は悪くなるから先へ手を附け、干菓子の方は下積に残つて居ります。其の他道了さまのお丸薬に帝釈さまのお水が有ります、此方の唐木の違棚には、一切煎茶の器械が乗つて居りまして、人が来ると茶盆が出る、古染附の茶碗古薩摩の急須に銀瓶が出る、二ツ組の菓子器には蒸菓子と干菓子が這入つてありますという、万事手当が届いて居ります。若草は藤掛色の室着を羽織り、山繭の長襦袢に、鵠色のしごきを乳の下から、巾広にして身重の腹を締めて居ります。髪は乱れたのを結び直して、また毀

れたので鬢の毛が一杯に顔から襟に掛つて居りますが、美人の煩つてるのは酷く美しいもので、色の青い上に少し黄ばみが有ります、身重になりますと、いやアに生白くなりまするもので、黒檀柄の火箸を一膳火鉢の中へ突入れて之を杖に額を当てゝ、只伊之助の事ばかりくよくと思ひ続け、泣いてばかり居ります。

番「花魁アノ正孝はんが来なましたよ、松新で花魁の病氣のことを聞いて、好なものを持つて来なましたから起直つて、些と氣の紛れるようにしなましよ、花魁お起きなましよ、そう遣つて居ると火氣が顔へ当つて逆せ上るから顔を上げなましよ涙で灰がかたまるざますよ、正孝はん此方へ這入んなましよ」

正「へえ花魁誠に御無沙汰を致しやした、斯んなにお悪くはないと思いましたが、大層お悪い御様子で、時々お起きなすつて、斯う遣つて坐つて入らつしやるのですか」

番「しようがないの、おまはんは知るまいが、本当に腹の立つ事があつて花魁の病氣も重るだろうと思う事があるの、あのね此の間田舎の叔母さんを呼んで向へ遣つた処が、突転ばして返し、吉原のよの字も若草のわの字も忌だと云つたとかいう事を、叔母さんは正直だもんだから其の通り花魁に話したから、それから些ともお飯がいけないの」

正「若旦那の堀切に入らつしやる事を些とも知りませんでしたが、一昨日帰つて間もなく

桐半^{きりはん}で聞いたくらいの訳で、お見舞に往^ゆきたいと思つてますが、そんな奴が這入つて、詰らねえ事を云うから困るんです、尾に尾を附け、輪に輪をかけて事を大きくするようなもので」

番「花魁、正孝はんが面白い人を連れて来なましたよ、ヒヨツトコさんとか何とか云うお酒に酔つて、面白いことを云うの、正孝はん呼びなましよ」

正「あれは此処へ入れる人間じやございません、花魁の御様子を見ます所では中々入れられませんから止しましょう」

番「這入んなましよ、アノ、チヨイと表徳さん這入んなましよ」

徳「へいこれはどうも、御免を蒙ります、これは始めて表徳で、只モウお酒が好きだから、表徳^{ひょうとくたいしゆ}大酒^{だいしゆ}のお開帳が始まりましたくらいのもので、花魁の御病気の御様子を聞いて……お医者さまをと仰しやれば、私は余程名医を知つて居りますから、佐藤先生でも橋本先生でも淺田先生でも、直に往つて來いと仰しやれば、ヘーツてんで直に先生の手を持つて引張つて参ります……これは驚きました、これは大変な御病氣で」

正「神妙にしてくれなくツちやアいけねえぜ、御様子が是れだから」

徳「これはちょっと驚きました、両国の花火で船と川ばかりで」

正「詰らねえ洒落を云つてはいけねえ、若旦那は堀切へ押込めにおりでも、お宅がお宅だから何うかなりそなものですよ」

徳「堀切へ押込められたといふ若旦那は、紀伊國屋の若旦那かえ」

正「イヨ是れは感心くだ、公^{きみ}は紀伊國屋の若旦那のことを知つてるのは感心だ」

徳「師匠、工お前は知つてゐるのかえなどゝ云われるくらい強氣^{こうぎ}と詰らねえものはないがネ、私も紀伊國屋の若旦那を知つてゐるどころじゃアない、紀伊國屋は幫間^{たいくちも}の方ではないが、経^き師屋^{ようじや}の方でお出入だ、あの十畳の広間は、表徳当月の二十八日までに天井を凸凹^{むら}なしに遣つてくれ、へえ、宜しい心得たといふので遣つたが、あのくらいな若旦那は沢山ない、男が美くつて厭味^よが無くつて、身丈恰好^{せいかつこう}が好くつて、衣服^{なり}が本当で、持物^{本筋}が本筋で、声^声が美くつて、一中節^{ちゅうぶし}が出来るといふのだから女はベタ惚れ、うツかり外を歩くと女が打突^{ぶつつか}つて来て女の瘤^{こぶ}が七つも一緒に出来るといふくらいの若旦那だが、済して、其様^{そんな}に安く売^{すま}る身体^{だいじ}じゃアねえと云つてゐるくらいのもので」

正「實に若旦那の事を知つてるのは感心だね」

徳「あのくらいな若旦那を押込めたのは解らねえので、併しお父さんは固いから大切にしてる處へ、芸者だかなんだか知らないが惚れた奴が出来て、其處へスター^{そこ}／＼コラ／＼を始

めたゆえに堀切へ押込められた処が、心持がわるいもんだから塩梅が悪くなり、看病人は誰が宜かろうというと、深川の刀屋のお嬢さんは許嫁だからと云うので、これが看病人に来た」

正「イヤこれは何うも驚いた、饒舌家おしゃべりだから直じきにすっぱ抜きをして困る、大変なものを連れて來た、表徳さん下したがろう」

徳「花魁に聞かし度たいねえ、若旦那の飯の喰くいツ振ぶりが氣に入つちまつた、鰯かれいのお肴か何かの時は其の許嫁のお嬢さんが綺麗に骨を取つて肉みをむしつて、若旦那私がむしつて上げますと云つて、丁寧にむしつて出すのを、甘えうめくと喰うくらいの事じやねえ、余り仲あんまが好過よすぎてネ、遂とう々赤ん坊わらわが出来た」

正「おや大変くくお出でよくく」

と無闇に外へ連れ出し、

正「恐入つたネ表徳さん、主ぬしは困るじやア無ぬえか、主は伊之さんの事を知つて居ながら花魁の事を知らずかえ、伊之さんと花魁とは夫婦同様の仲で、勤めの中うちで伊之さんの胤たねを宿してゐるのに、伊之助さんから何とも音信おどずれが無いので、花魁は煩つてゐるのだ、公酷きみいネ、許嫁のお内かみさん儀まんまが来て居るばかりではなく、御飯おまんまの喰くいツ振から赤ん坊の出来たなどは余り

手酷いじやないか」

徳「これは恐れ入った、そういうことは知らずに云つちまつたが、これは驚いた、もう一遍往つて云い直して来ようか」

正「猶悪い」

とようく二人が表へ出た跡で、若草は事の間違いより伊之助を怨み、伊之助のところへ若草の怨靈が出ますというお話でございますが、一寸一と息吐いて申し上げます。

十四

幫間(たいこもん)の正孝と表徳が帰つた跡で、若草は伊之助が許嫁の女房を呼んで、
我物顔(わがものがあらしら)に樂ん(よろし)
で居る、それゆえ叔母さんが往つた時にも、自分が出て逢おうでもなく、不待遇(ふあしら)いをした
うえ、叔母さんの胸倉を取つて表へ突出し、疵まで附けて帰すような不実な人とも知らず、
生涯身をまかせようと力に頼んだは私の過(あやま)り、主人にも朋輩にも義理の悪いようになつた
は、皆(みんな)私が思い違いであるが、そればかりでなく、七月(なつつき)になる胤まで妊(たね)したは情(なき)ない、
何うしたら宜かろうと、胸に迫つて只身がこうブル(ふる)と顫(ふる)えるほど口惜しかつたと見え

ます。若浪は眞実に介抱を致します。番頭新造というものは只今ではございませんが、前には有りましたもので、この若浪は花魁の為に身を粉に碎いて心配を致します眞実なものでございます。

番 「申し花魁、おまはん今あの話を聞いて嘸口惜しかろう、あの正孝も正孝だよ、くだらない奴を連れて来てサ、いけ騒々しいベラ／＼喋べつて、彼様な奴を連れて来たからいけねえのだ、悪らしいよ、花魁ばかりでなく私も本当に腹が立つたの、能く考えて見なまし、これまで伊之はんの事で気を揉んでいるのも知らないで、許嫁の女房を自分の傍へ引寄せているということを聞けば、誰だツて腹の立つのは尤もざます、私もしみじみ腹が立つたから、花魁伊之はんのことをフツツリ諦めてしまいなまし、伊之はんの事を諦めて、胸にさえ思う事がなければ、おまはんの病氣は癒るとお医師様いしゃさまがそう云つたじやア有りませんか、兎も角も身二つに成ツちまつて、病氣も癒り、元のように仲の町へ出てサ、おまはん善い人よしとを取留めて立派なお客に身請をされて、あんぽつにでも乗り、黒鴨くろかもを連れて紀伊國屋の前これみを見よがしに通つてやんなまし、本当に口惜しいんざますが、おまはんのようになこうクヨ／＼してえると身体に障るばかりじやないよ、たゞの身体じやアないから、確かにしておくんなましよ、花魁、何うしたの、しつかりおしよ……花魁……花魁」

と云われ若草は苦しい様子で、

若「あいよ、私は本当に馬鹿に成ったの、能く素人は女郎じょうろうはお客様だまを詭すなどゝ、私も素人の時分には云つたけれども、私ばかりはお客様だまに欺だまされて、主人にも朋輩にも済まない義理になり、其のうえ斯んな身重に成つて、今更何うする事も出来ない身の上に成つた者を振り棄てゝ、許嫁のお内儀かみはんを自分の傍へ呼んで置き、私の方へは文一本遣よこさずに、そのお内儀はんと樂たのしんでいる伊之はんの心がしみ／＼怨めしい、私は考えれば考えるほど口惜しゆうざます、伊之はんに欺されたのが口惜しゆうざますよ」

番「アヽそうとも、本当に可愛相ざますよ、本当におまはんは口惜しかろう、だが彼様な人は諦めておくんなましよ、確かりしなましよ、おまはんも親族兄弟みよりもなし、私も親族兄弟がないから、お互に素人に成つたらば姉きょう妹だいになろうと、おまはんがいいなました時には嬉しいと思つていたんざますよ、済まないがおまはんを妹いもどのように力に思つてるのだから、伊之はんの事さえ諦めておくんなはれば、おまはんの病氣も癒るのだよ、身体が達者にならないと身二つになる事が出来まへんよ、お願ひざますから確かりしておくんなまし……花魁何うぞしなんしたかえ……花魁、花魁」

若「あい……思えば／＼不実な……怨めしいは伊之助はん」

と四辺を見れば腹の立つは、伊之助と若草の比翼紋の附いた物ばかり、湯呑から煙管の彫から烟草入から、傍にころげて有る塗枕の金蒔絵の比翼紋を見て、

若「アゝ此の比翼散しも徒ら事になつたか、怨めしい、それほど不実の人とは知らず、勤の中一夜でも外の客へは交さぬ枕」

としけ／＼枕の紋を視詰めて居ましたが、火鉢の中へ黒檀柄の火箸を突込み是を杖にして居た故、力が這入つて火の中へ這入り、真赤に焼けて居る火箸を取つて、

若「おのれ伊之助さん、譬え許嫁の女房でもおめく添わして置こうか、怨めしいのは伊之助はん」

と塗枕の比翼紋の、男の紋の方へ火箸をあて、ジーッと力に任せて突ツ通すと、プーと烟が顔へかゝりました。若草は鬢髮を逆立て、片膝を立て、怨めしそうに堀切の方を延上つて見詰めた時の凄いこと、實に生ながらの幽靈でございます。

番「申し花魁、確かりしなましよ花魁……何うしなましたの、確かりしなましよ花魁、そんな姿になつて氣でも狂つたら何うしなますえ、しつかりして呉んなましよ花魁……エゝ、あの娘や、何うしたんだねえ、御嶽山のお水を持つておいでの、なにをグズくしてゐんだよ、今ツから居寝りなんぞしやアがつて、花魁、しつかりしなましよ、サこれを呑ん

で氣を附けなけりやいけまへんよ花魁」

若「あい／＼」

若浪は若草を抱き上げ、湯呑を口に宛てがうとゴツクリと一口水を飲み、フー／＼とい
う息遣いでござります。暫くして、

若「若浪はん、私は伊之さんことは、今日からフツツリと思い諦めたから、サバ／＼し
たんざますよ、今夜はとけ／＼／＼と寝られようかと思うんざますから、少し脊中を撫つて
くんまし」

番「宜うざます、少し落着いて寝てくんましよ、落着くとおまはんの病氣もなおるんざ
ます」

若「じやア枕に着いて横に成りましよう」

番「然うしなまし、私が附いてるから大丈夫ざます」

と慰めながら若浪が頻に撫つて居りまする内に、次第／＼に若草はスヤ／＼と疲れて寝
る様子ゆえ、伊之さんの事を諦めて能く寝てくんまますかと若浪も心嬉しく、看病疲れに
グツスリと寝附くと、真夜中に若草そつと起上つて匿してある手箱の中から取出したは、
親鍊鍛治金重が鍛えたる、小刀には大きいが短刀には少し小さき、金重と銘の打つた合口

で、金重の歿るときに、女の嗜みだから、これを形見にて譲られた合口を持つたなり、
褥をいざり出て、そつと音のしないように雨戸を明け、室着の儘で裾を敷いたなりで、そ
ろくと飛石伝いに、敷松葉の一ぱいに敷詰めて有る横庭に下りると、余り大きくは
有りませんが、葉のこづんだ赤松が一本有りまする処まで参り、ホツと漸く息を吐いて、
鉢前のゴロタ石を拾つて左の松ヶ枝に合口を宛がい、片手には石を持ち、
若「口惜い伊之助はん、人に怨みが有るものか無いものか、今に思い知らせる、覚えて居
なまし」

と云いながら打附けると、若草は病に疲れて居りますから其の儘コロくと敷松葉の上
に転がつたが、また松ヶ枝に掴まって漸く起き上り、石を持ってまた打つけて伊之助を呪
る、精神の恐ろしいことには、伊之助は瞬く間に左の足が痛んで来るという怪談の処は後
に致して、此処でお話が二つに分れて、稻垣小左衛門は百日経つても國綱の一刀の行方が
知れず、手掛けが頓とないので、家事不取締り、不埒至極の至りで有ると云うので、追放
仰せ附けられ、致し方がないから旧来居りまする家来は残らず暇を出し、諸道具は知る者
の処へ預けたり、要らん物は皆売払いました。すると丈助と申す新参ではござります
が忠義な家来が有りまして、

丈「私は貴方のお傍は離れません、若旦那のお帰りまではお傍にお附き申します、何うぞお連れ下さいまし」

小「連れて往きたいが何処へも往く処がない」

丈「私の在所は葛飾の真間の根本ゆえ、明家が有りましよから往かッしやいまし」

小「私は商いを仕様とも、日雇取をいたしましても、あなた御一人だけはお過し申します」

というのでこれから、入用の手荷物だけを船へ積んで、真間の根本へ参りますと、幸い明家が有りましたから、名主へ話をして店を借りましたが、其の頃は武家というのでお百姓は驚いて居りますと、鎗が来たり 鐙櫃よろいびつが来たりするから、近辺では大したお方だと尊むことで、小左衛門は金も沢山持つて居りましたらうが、坐して食えば山も空しの喻えでござりますから、何か食い続きの出来るようなことは有るまいかと云うと、丈助が私が商いをいたしましよう、少し店を直せば宜うございますと、是から大工を呼んで来て模様替の造作をして、商売の出来るように致しました、この丈助は男でありながら煮炊をしたり、すゝぎ洗濯までいたします。夜は御老体ゆえに腰などを撫つて上げるという、實に忠義一団なことでござります。商売を致しますところが、勝手を心得ませんが、稻垣小

左衛門は重役のことでの困らんかた方ゆえ、丈助や商いをするなれば高く売つてはならんぞ、廉う売れ、そうすれば買う者も助かり此こちら方も益になるのだ、何でも身体に骨を折つて施しと心得て廉う売れと言付かり、滅法安く売るので、諸方へ知れて方々から買いに参ります。大した繁市川新田、八幡、船橋、国分村、小松川、松戸辺から買いに来ます。大した繁昌で、田舎の店では種々な物を卖ります、酒、醤油、味噌、飴菓子、草履、草鞋、何となく売ります、末には丈助は朝から晩まで手廻らないように卖れますと、近辺の商人あきんどが売れなくなつて困るところから、寄合を附けました。

甲 「帳元さん、マア何ういう考えか知んねえが、先方むこうへ往つて話いしたとこが、元侍さむれだから駄目だよ、商あきねえ売などはしたくはねえが、食い続きが出来ねえからするんだ、廉く売つたツて、なにもお前等めえらの方とがで咎める理合りええはあんめえて工さむれいつて掛合かけええに往つたつて駄目だハア」

乙 「お侍さむれえでも仮令たとえ百姓ひやうべえでも理合りええに於て二つはねえ、おらツちが商しょうべえ売べえをするツて、えらア田地でんじイ持つてるものはねえから、世間並に卖れば宜いに、法外ほうげいに廉く売るもんだから、己おのがの方が暇になるのだから、何も商しようべい売べいを止めるじやアねえが、仲間入をして帳元並みに売つて貰もれえてえといつたら解わかろうに」

甲「それを云つたがだめだよ、廉く売つたつて己を咎める理合は有んめえ、何で咎めるか
サア返答ぶて、斯う云う、己ア元侍さむれえだ、百姓風情こうじやうが兎や角う咎めだてをすれば打ぶちきつ斬ちぎつてし
まうと脅かすだア」

丙「だからよ商あきねえ売ねえを止めるじやねえが、仲間入をして世間並に売つて貰もれえてえて云うに、
打ぶちき斬ちぎつるてえ理合りええは有んめえ」

甲「此處でそんなに呶鳴がなつても先方まで聞むこうえねえ、作右衛門さくえもんどん、お前さんは年寄おめえでは有
るし、月番だから先方へ往つて言ことやわら柔じゅうかに話をぶツて来て貰もれえてえが、往つて来ておく
んなせえな」

作「先方せんぱうへ往つて話はなをするんだがネ、元は侍さむれえだが食くい方に困こまるから商しょう賣べえをするツて、
それを咎める理合りええは有んめえと云う処を押しつして、此方こっちで兎や角こくういえば殺さつされると云う
だ」

と評議の永い事滅多に押附おづつきません。作右衛門は頼まれたから仕方なく遣つて参りまし

た。

作「ハイ御免なせえ」

丈「入つしやいまし、何を上げますナ」

作「買物買いに来たのじや有りませんが、少し旦那様にお目に懸つて、お談し申してえ事が有つてめえりました」

丈「なる程、何方のお方で」
どちら

作「ハイ当村で酒渡世を致します作右衛門と申すものでござえます」

丈「左様でございますか、旦那さま村方のお方がおいでございます」

小「そうか、さア〜此方こっちへ御遠慮なく」

作「先ず天氣イ続きます」

小「ハイ私は新参もので、当所不慣ゆえ何かと又村の衆には御厄介になります事もございましよう、幾久しゆう御別懇に願います、只今では改名して 稲垣屋小助いながきやこすけと申す、慣れない商売をいたしまするもの、何かとまたお指図を願います」

作「ハイ今こんにち日出ましたのは他の訳でもございませんが、ソノマアお前様まへさまはお侍のことさむれえで商売あきねえのことは御存じも有りますめえが、江戸の商売しょうばいと違えまして、田舎では商人あきんどの仲間に帳元じゆうやと云うものが立つて居りやして、その帳元へ寄合よりあいをして、何処に市が有ろうとも十夜じゅうやが有ろうとも、皆帳元の方から、何の品物は幾らに売れと云う割合わりあいを持つて出る訳で、帳元へ這入らねえと商は出来ねえ訳でござえますが、それを御存じねえから、成るなる

たけ廉く売るので、遠くから買いに来るようになったので、村方の小商こあきない売をするものに田地をえら持つてものは有りませんから、おらア方へ買えに来ねえで誠にハア食い方にも困るような訳でござえますから、何うかマア商人並に仲間入りをして、其の上で何うか帳元並に売つて御貰もれえ申せば宜いので、帳元が立つて居りますから、私と一緒に直においでなすつて、商人の仲間入りを願えてえで、帳元総そう代でえに作右衛門が出てめえりました訳で、どうか何分御聞き済みを下されば、誠にハア皆も悦ぶことでござえます」

十五

小「至極御尤もなことで、イヤモウそうで御座いましが、とんと手前商いのことは知りません、家来がやると申すので始めましたのだけれども、廉うやす売るのを咎めるのは些ちと訝おかしいように心得ます、私が物を廉く売ると申して無闇に廉く売るのでは有りません、多分に買い出すと廉くなる上に、多分の利を見ずに廉う売るので、諸方より多人数買いに来るから、骨は折れます、斯ういたせば買うものも益になれば、私も益になります次第、それを悪いとおツしやれば、それは商人の仲間入もしたいが、ちと致しにくい、何故なぜと

申すに、商人の仲間入を致しては何うも私が古主へ帰参の妨げになりまする、今にもお召返しになれば鞍置馬に跨り、槍を立つて歩く身のうえ、然るに食い方に困つて十夜や祭の縁日なぞに出て、香具渡世の仲間入を致したといわれては、何うも同役の者に聞えても恥るわけなれば、仲間入の儀は平にお断りを申します、あなたも廉く売るときつと売れますよ、高く売れば品は沢山出ない、たまく一か二つ出ればそれで沢山儲けて沈着いて在らつしやるが、私どもはガチくして廉く売つて、利を数で見て居りまする、あなたの方でも廉く売れば屹度売れますから廉くお売りなさい、だが仲間入の処は平にお断り申す、何うぞ帳元へ宜しく」

作「ハア駄目だア」

と仕方がないから立帰つてこの由を話すと、皆な腹を立てゝ、これは捨置かれん、何うしたら宜かろうと云うと、国分村に萩原束はぎわらつかねという浪人が居りまして、貸金の催促方などに頼まれて掛合に往きました、長柄ながつかへ手を掛け、威かして金を取つて参りますから、調法ゆえ百姓が頼みますので、萩原さんを頼んで掛合に遣ろうと云うところから多分の鼻薬つかを遣わしたので、

束「宜しい、武家と申してお百姓を威かし不法な事を申す、手前掛合つて仕儀に依つては、

素首すこうべを打ち落して見せる」

と是から萩原束が真赤まっかに酔つて、耳のあたりまで真黒まっくろに頬鬚ほゝひげの生えている顔色がんしょくは、赤狗あかいぬが胡麻汁を喰つたようでござります。盤台面ばんだいづらの汚い歯の大きな男で、朴齒ほうばの下駄はを穿き、脊割羽織せわりばおりを着て、裊ひだの崩れた馬乘袴うまのりばかまをはき、無反むそりの大刀を差して遣つて参り、

束「御免下さい」

丈「入らつしやいまし、何を上げますな」

束「買物買かいものかいではない、御主人へ会いに来た、国分の萩原束と申すものである、宜しく」
丈「旦那さま、国分の萩原束とかいう浪人ろうにんものがお目に懸りたいと申して、真赤な顔をして、袴こぢらを穿いて、長いのを差して、居合抜き見たような方が参りました」

小「此方こちらへお通し申せ」

と、こので丈助は出て参り、

丈「此方へお通りなさい」

束「御免を蒙る」

小「さアどうぞこれへく、好ようこそそのおいで、手前てまいは稻垣屋いながねや小助と申す小商売を致すも

の、此の後ごとも御聴廻に御用向を仰せ聞けられますように」

束「ヤア是は始てまめまして、手前てまいは國分に居る萩原束という浪人の身の上で、其の日の食い方に困る、それが為に実は御繁昌な商人あきんどへ無心に参るので、あなたは大して御繁昌で、實に何なうもお忙ふびんがしい事で、それゆえ御無心に参つたのだが、何なうか浪人の身の上を憐れ不便おぼしめと思召してお恵みを願いたい、お聞きこ済きくすみ下さい」

小「ハヽヽヽ左様しかでござりますか、併し何なう致いたしまして、人さまへお恵み處では有りません、自分の食い方に困るところから漸く小商売を致しますくらいで、自分の腮あが干上あがりますくらいの訳ゆえ、外ほかの又御繁昌なお商人あきんどへ往むかつてお頼みが宜しい」

束「イヤ是非とも願い度たいネ、何処の店でも店開き当日には先方から手前てまい方かたへ頼みに参り、間違ゆいで也有つてはならんからと、店番をして呉れると云つて、拙者わざわざは何処へも頼まれて往むかく、と申して酒が貰はないたいという訳ではないが、貴公は村方の帳元はなへ一言の談はなしもなく、勝手次第ねすに窃ほんで来るか知らねえが、方ほう外がいの廉やす売うりをするので、村方の商人あきゆうど一同迷惑ぼしめしを致して居おるくらいだから、是非とも願う、お思召おぼしめしを下さい」

束「宜しい」

小「これ丈助」

丈「へえ」

小「錢_{せにざる} 笠の中から錢を三文持つて来い」

丈「へえ」

と持つて来ましたのを態わざとからかいに小左衛門は束の前へならべて、

小「甚だ軽少ではござるが、ホンの心ばかりで」

といわれ萩原束は怒氣おもて面に現われて、

束「此奴愚弄致すな、此の方も武士でござる、イヤサ拙者を三文や四文の錢を貰いに参つた乞食と心得て居るか、宿無じやア有るめえし、三文計りの錢を出すとは無礼至極な奴だ」

小「でござるから只今承わつたので、心持で宜いと仰しやつたから、私の上げたい心持は三文で、モウ五文とは進げられん心持で、それゆえに多分のことは出来んと前々からお掛合申したところ、心持で宜いと仰しやつたから出したが、それが悪くば其の余はなりませ

ん」

束「黙れ、これ手前は錢せにかね金を無心に参つたのではないが、村方の商人あきんどが難渋を致す処から再度掛け合に参つても侍を権にかい、土民輩ぱらあなどと侮つて不法な挨拶をして帰すので、村方

の商人が難渋致すによつて、拙者に掛合つてくれると申して参つたから出たのだが、今
日から商人の仲間入をして帳元並に売ればよし、左もなくば三文出して束を乞食扱いに
したから容赦は致さんぞ、拙者も武士だ、免さんぞ、浪人しても萩原東大小を質には入れ
ん」

と云いながら眼を怒らし肩を張り、長刀を引附ける。

小「ハヽヽヽヽそれじやア何んですかネ、侍は浪人を致すと皆大小を質に入れて、お前
さんばかり質に入れんと云うので、貴方は鼻高々と然う云われるか知らんが、手前も元は
侍、今は浪人して斯く零落の身に成つても大小は未だ質入れは致しません、幾口もござ
います、先祖伝来の品もござる、御覽に入れましようか、鎧櫃も有る、鎗も是に懸り
居ります、傍らにはこの通り種子ヶ嶋の鉄砲に玉込もして有る、狼藉者が来てゴタ／＼
致す時は、止むを得ずブツ払う積りで、火繩を附ければ直に射てることに成つて居る、そ
れが如何致した」

と束の胸先へ狙ねらいを附けましたから驚いて、

束「暫くお待ち下さいまし、手前喰醉てまいたべよつてまいりまして、兎や角、御無礼を申し上げ、お
氣に障つたかも知れませんが、其の段は幾重にもお詫をいたしますが、暫くお待ち下さい、

何ういう機はずみで玉が出まいものでもない」

小「いえ／＼狼藉こうじ者が参つて兔や角申せば、この引金をガチリと押せば玉がパチンと出て、貴方の鳩尾みぞおちあたり辺あたへ中るよう…」

束「マア／＼暫く、何ういう機みで玉が出まいものでもない、拙者喰醉ささつて参り御無礼を致した段は幾重にもお詫び申すからお気に支えられませんように危いと申すに」

小「左様なら拙者が心ばかりの三文を持って往つて下さるか」

束「へえ頂戴致します／＼、有難いことで、何れまた出ます、鉄砲は危ない、怪我という事がありますから」

と萩原束は真青になつて帰りました。

小「丈助何方どつちの方へ帰つたの」

丈「国分村の方へ帰つて往きましたが、馬鹿な奴ですナ」

小「村方の商人あきんど人に頼まれて來たんだの、悪い奴だ」

丈「來た時には真赤な顔をして來ましたが、帰る時には真青になつて帰りました、逃げて帰る時には刀の長いのは見つともないもので」

小「馬鹿な奴を玉込もしない鉄砲でおどして遣つた」

と此の事は稻垣小左衛門が勝つて笑つて居りましたが、さて物は負けて置きたいもので、これが稻垣小左衛門の災難の始まりで、遂に命を落す程の事になるという、仇討の端緒でござります。

十六

さて引続いてお聞に入れました松葉屋の若草は、伊之助を咀のるいまして、庭の松の樹きへ小刀を打ち付けるという処まで弁じましたが、この小刀には金重と銘が打つてございます。これは若草の親の作で、女の身みだしな嗜みだと云つて、小刀には余程大きい、合口には些ちつと小さいが作物さくものでございます。是を形見として娘お富へ呉れましたのを打ち付けたので、先達せんだつても福地先生から承わりましたが、大宝令たいほうりようとか申しまして、文武天皇さま時分に法則も立ちまして、切物きれものは仮令鍊たとえでも小刀でも刀でも、我銘わがを打つ事に致せという処の法令で、是だけは、只今漸だん／＼々世の中が開けまして、外国の法に成りましたけれども今に残り居りますのは、鍊たびでも、ちよつと十錢ぐらいの小刀さすがのようなものでも銘が打つてございます、二千年も昔から幾世いくせ将軍の代たびる度に法則は変りましたが、こればかり今に

残り居るというのは誠に妙なことでござります。此の若草が松ヶ枝に金重の銘のある小刀を打付け、精神を凝して呪いましたが、丁度廿一日目の満願の日に当つて、伊之助の足の左の親指が痛み始めてまいりましたが、酷く痛み出し、堪え兼ます程でござります。親父も一人息子の事だから心配致し彼方あちらこちら此方こちらこちらから名医を頼んで来て見せましたが、其の頃はまだ医術も開けません時分ゆえ頓と分りません、是も敢て若草が松の木へ小刀を打ち附け、伊之助の足を呪つたためでもござりますまいが、或お方は理が有ると仰しやいました、樹きと云うものは逆さまに立つて居るので、根の方が頭で、梢こずえの方が足だと云いましたが、そうかも知れません、根の方で水氣すいきを吸い揚げ、漸々手足へ登るように枝葉の繁りまするので、人間も口で物を喰い、胃でこなし、滋養分は血液に化して手足へ循環致すと同じことで、相そうという字は木篇に目の字を書きますが、坐相ざぞう寝相ねぞうなどゝいいまして、相の字は木へ目を附けた心だといいますが、御婦人の寝相が能くなくつてはいけません、男の坐相の宜いのは立派なもので、お立派な方が坐ると、ウンと両膝を開き、下腹を突き出し、腰を据えていらっしゃりますから、山が揺り出して來たようで、押おしても突いても動かんよう見えまするは誠にお立派なもので、私どものように膝を重ねて坐り、ヒヨイと触つても仰あ向むけにひツくりかえるような危い形は余り好く有りません、又御婦人の寝相は至つて大切

なもので、お嫁に入らしツてもお寝相が悪いために追い出される事が有りますから、夏^{なつむ}向^{むき}なぞは寝相を能くしないといけません。悪くするとお母^{つか}さんからお前枕を頭へ結い付けて置きな、足を結^{しば}つてお寝なぞとお小言が出ますが、これは誠に感心致しませんもので、伊之助は何ういう訳だか左の足が痛み出しましたが、これは若草が松の枝へ小刀を打ち付けたのが感じましたものか、また、然ういう病が発する時節になつたのかも知れませんが、一通りならん痛みでございますゆえ、名医が来て段々これを診^みると、脱疽^{だつそ}という病で、其の頃脱疽の療治などは長崎へ往かなければ見ることは出来んそうで。

医「先ず是はどうも極難症で、脱疽に相違ない、至極の難症にして多く鬼籍に入るを免れずと医書に有る、鬼籍^{きせき}というのは過去帳のことと、仏さまの過去帳につくを免れずと云うのは死ぬより他に仕方は無いが、最初の内に早く切断法を施せば全治^{ぜんぢ}を万^{まん}一に見ることが出来よう」

と、種々^{いろく}むずかしい講釈^{こうせき}が有りましたれども、切るのは否だから、神信心を致したり同^{うかゞい}を立てたり、種々な事を致しますと、何処^{どこ}で伺^{うかゞ}を立てゝも御^{みくじ}覆^{ふく}判断をして貰つても死靈^{いきりよう}と生^{いきりよう}との祟りだと云われて見れば、神經だから家中^{うちじゅう}が心配致し、事によつたら吉原の花魁が怨んでは居ないか、遊女^{うわめ}というものは能く人を祈るなどというから、祈つた

のではないかと大番頭の安兵衛、伊兵衛始め一同心配して居りますが、チラリと耳に這入りましたから主人も気にし始めると、トロリとする夢に見る。また伊兵衛という番頭は若草の叔母を突出したので、一層心中で怖つて居りますと、二階から毛が落ちて来たから手に取上げて見ると、ねばくと血が附いて居たなどというは、女中が室から下へ落したのかも知れませんが、然うなると、する事為す事怪しいことばかりでございます、翌年の二月になつても何うしても伊之助の足は切らんければならんと云うので、御名医が恐ろしく能く切れる刃物を持つて参り、御親類立合でなければならんと云うのですが、当たるなぞは切るのは造作もございません。順天堂の佐藤進先生は切るのは御名人でいらっしゃいます、先達で私がお宅へ上りました時に、鼻を高くして貰いたいと云うお方が来ましたから、無理なことを仰しやると思つて見て居りますと、高く成ったから不思議で、何うなさるかと思うと、額の肉を殺いで鼻へ附けて、段々高くしたんですが、飴細工みたようで、少し腫物できものが痛いと云うと、フと斬つて、イヤ癒なおつたろうと云うのですが、自由自在な事でござります。なれども昔は開けませんから苦しんで居りますが、今親類立合と云うので、仕方がないからお父さんとうも出て来るようなことに成りまして、皆心配して居りますと、吉原の櫻川正孝こうかんという帮間は親切な男ゆえ、菓子折を持って、其の頃のことだ

から小舟で見舞に堀切の別荘へ来ましたが、たいこもち 帮間なぞというと、ごく 極堅気の宅では嫌う者ゆえ、正孝は来は來たが、昇つて宜いか悪いか知れませんから、そ 窺つと覗いて見ると、かたく 頑固な番頭の伊兵衛さんが上り口の次の間に坐つて居りますから、こわ／＼／＼に門の中へ這入り、

正「へえ御免、御免下さいまし」

伊兵衛「ハイおいでなさい」

正「え、本郷の春木町の、え、紀伊國屋の伊之助さまの、え、御別荘は慥か、え、此方こちら でござりますか」

伊兵衛「へえ紀伊國屋の別荘は此方こちら でございますが、あなたは何方から入らつしやいました」

正「へえ私は、へ……廊の帮間なかほうかん でございまして、櫻川正孝と申しますので、若旦那様には種々御贔屓いろく を戴きましたから、疾うにお見舞に上りませんければなりませんのでございますが、斯ういう身の上でございますから遠慮致しまして、是まで伺いませんでしたが、大分お悪い御様子だと承りましたから、一寸御病間ちよつと で、お顔だけでも拝見して帰りたいと存じまして参りました、これは誠に詰らないものではございますが、旦那様はお嗜すき あが

で入らつしやいますから、少々ばかりですが、ホンのお見舞のしるしまでに」

伊兵衛「ハア左様ですか、これは何うも、お名前は何んと仰しやいますえ」

正「廓の幫間で櫻川正孝と申します」

伊兵衛「少々お待ち下さい」

と伊兵衛が折を持つて病間へ参ります。嫁のお雪が十畳の広間を往つたり来たりして不動さまへお百度をあげて居りますると、其の内だけ伊之助はトロ／＼寝ねむられますから、寂しづとして居る処へ伊兵衛が参り、

伊兵衛「若旦那様おやすみでござりますか、若旦那さま、若旦那さま」

伊「あい／＼、あゝ今少し寝付いた処だのに、おおき大な声をして起しちゃア厭いやだよ」

伊兵衛「何だか吉原から法印さまが入らつしやいまして、御祈祷をして上げたいと仰しやいます」

伊「法印さまなぞを呼んじやア厭だよ、枕元でガチャ／＼お加持をするので、尚お逆せのほ上

つて痛くつていけねえから止してくんna」

伊兵衛「何だかお見舞の印にお供物を少々計りだが、有難いのだから差上げると申しました」

伊「吉原から法印さまの来るつてえのは変だの、坊さんかえ、総髪かえ」

伊兵衛「いえ、それがどんずり奴^{やつこ}なので」

伊「何んと云うお名だえ」

伊兵衛「正孝院さまとか云いました」

伊「ハヽア分つた、お前は世の中のことを知らない人間だの、それは吉原の^{たいこもち}帮間の正孝が
来たのじやアねえかえ、^{たいこもち}帮間の事は^{ほうかん}帮間というぜ」

伊兵衛「ヘイ左様でござりますが、一寸往つて聞いて見ましょう」

と云いながら出て参り、

伊兵衛「へえ只今ツイお名前を伺いそくないましたが、あなたは法印さままでいらつしや
ますか」

正「へえ〜これは何うも恐れ入りやしたネ、法印さまと間違えられたのは始めてゞ、尤
も法螺を吹くから法印の形は少し有りますが、私は櫻川正孝と申します^{たいこもち}帮間でございま
す」

伊兵衛「へえ道理で、そんな事を仰しやいました、まあお上りなさいまし」

正「御免下さいまし」

伊兵衛「さア此方こつちへ」

と案内して廊下伝いに病間へ連れて参りまして、

伊兵衛「申し若旦那、正孝院という御方が入らつしやいました」

伊「此方へお這入りくく」

正「これは何うも大変にお悪いんでげすナ、其の後は誠に御無沙汰を致しました、一寸ちよつと
お見舞に上りたいと存じながら、斯ういう身の上でございますもんですから遠慮をするだけ御無沙汰になりましたが、今日はお顔だけ拝見して、御病気の御様子を伺う心底で出ました」

伊「正孝能く来てくれた、たいこもち幫間も多い中で来てくれたのはお前ばかりだ、己も足を切ると云う訳だが、みんな皆道楽をして親に苦労させたばち罰ばちだと思つてゐるがネ、能く来てくれた、緩り遊んで往ゆきねえ」

正「御おみあし足あしを切るといふのは強氣ごうきといけませんから、切らずに御全快になるような事をお話し申したいんですけど」

と傍かたわらに人の居るを憚はゞかる様子を眼で知らせました。

十七

伊「伊兵衛や彼方あつちへ往つてお茶でも入れて菓子の好いのを貰つたのがあるから、あの甘味で茶の佳いのを持つて来てくんな、用が有れば呼ぶから……。ピツタリ襖を閉めて行つてくれ……。師匠、もつと傍そばへ寄りな」

と云われ、正孝は前へ摺寄り、伊之助の足の腫はれあが上りし様子を見て、

正「これはどうも大変な色に御脚おみあしが腫れましたね」

と云いながら四辻を見まわし、小声になりまして、

正「時に若旦那お話を致しますが是れは御脚を切るにやア及びませんぜ、若旦那、あなたは松葉屋の花魁こぢららがおなくなりに成つたことを御存じないのでしよう」

伊「え、……若草が死んだかえ」

正「ホラ、御存じない、それだから知らないことぐらい仕様のないものは無い、知らずに居ればボヤくもえ出しますからね、何ういう行間ゆきまちが違いか知りませんが、花魁はあなたのお胤たねを宿してゝも、あなたが此方こちらへ御窮命になりましたから、日文矢文ひぶみやぶみを送りたくつても、そもそもなりません処から、花魁がくよく思ひ詰め、お塩梅あんぱいが悪くなりました、て

もなく恋煩いで、あなたの処へ人をよこしたくつても無闇のものを出されないから、堅気の田舎ものが宜かろうと云うので、下総の矢切村にいる花魁の叔母さんを寄越しました、堅い叔母さんですが、全体若浪さんの思い付が悪いんで、その田舎の叔母さんを此方へよこしたのが間違いの種で、叔母さんが談はなしを付けにまいると、此方の奉公人が出て、強談ゆすりに來たとか云つて、御門の外へ投ほうり出したので、顔を摺剥すりむき、叔母さんが大変に怒おこつて花魁に焚き付けたのが始まりで、する事なす事がみんなへまに成るもので、私が花魁の病氣見舞に往く積りで出掛けると、途中で表徳に出おこつくわし何んでも一緒に連れて往つて呉れろというから、苟にして山谷の御寮へ往くと、其奴そいつが詰らない出でがたり語ごをしやアがつて、伊之助さんはお内儀さんを持つて、赤さんまで出来たなぞと喋あんまつたもんですから、花魁が貴方を怨み出し、夫婦仲好く楽しんで居るから、それで手紙も寄越さないのだな、余りな不実な人だ、口惜くやしいと口へ出しちやア云わないが、腹うちの中で火の燃える様に思つてゐる中に、この二月臨うみづき月の時なぞは、一通りならねえ口惜がりようで、矢切村の叔母さんが花魁の枕元に坐つて居て、紀伊國屋の伊之助のお蔭で斯んなになつたのだから、死んだら屹度きつと取殺せよ、己も祈り殺すぞよといふと、花魁はそれでなくつても貴方を取殺そうと思つての処へ、叔母さんにけしかけられたもんですから、むつくりと病褥とこの上へ起き直り、利かない

身体で膝へ手を突いて、此方こっちを睨にらんだときの顔つきというものは、若浪さんが然ういいま
したが、恐ろしい顔をしましたつてネ、叔母さん永い眼で見ておいでなさい、屹度私は伊
之助さんを取殺すよと、叔母さんが取殺せよ、取殺すよ、取殺せよと掛けにいうの
だから恐ろしいじやアありませんか、其の儘にお前さん花魁ひきつが引附ひきつけかゝる時にオギヤア
と産れたのは貴方のお胤お胤で、可愛らしい男の児こだつたと云いますが苦しみの中で産れた赤あか
子こだから育つわけはありません、一聲ばかり泣くとそれつ切り息が絶えたので、花魁
はそれを見ると直すぐに血あがが上あがつておめでたく成つちまつたんですが、その死んだ花魁に死ん
だ赤子あかこさんを抱かせて、早桶はやおけへ入れる時には、實に目も当たられない始末で、叔母さん
が紀伊國屋を絶やさないで置くものかと云つて、船で其の早桶を持つて田舎へ帰つたとい
いますが、それからというものは氣味が悪いので、あの美しい花魁のお座敷が明いて、も誰
もいやがつて這入らないと云うは、花魁が床の間の処にチヤンと坐つてゐんで、私も此の
間座敷を勤めて遅く廊下を通ると、こんな大きな顔おほが出たから、驚いて尻餅はげを搗きながら、
能く見たら台屋だいやが大台を持つて帰つて往ゆくのをお化ばけと間違えたのですが、一切そういうも
のが見えるようなわけで、余程よつほど怖いんです、そういう訛ずずですか、私の考えますには、
貴方足などを切るより、何でも其の田舎の叔母さんの機嫌きげんをスッカリ取つちまつて、重々

済みません、どうか堪忍しておくんなさいって、叔母さんを此方へ抱き込み、親類に成つちまつて、お前の云うことは何んでも聞く、頬辺ほっぺたでも甜めさせるから堪忍してくれると繩り附いて、機嫌すがを取つて、花魁の御法事御供養をなさい、お金はかゝりますが、仕様が有りません、藤沢寺とうたくじの遊行上人ゆぎょうしようじんか祐天和尚ゆうてんおしょうでも弘法大师こうぼうだいしでも有難い坊さんを大勢頼んで来て、大法事か何かして、花魁が成仏得脱とくだつさえすれば、貴方の御病氣は癒るんですぜ、この事を早くお知らせ申すのは知つてますが、鈍剃奴どんざりやっこがピヨコ／＼参るのも何んとか思われるだらうと御遠慮をして居るくらい苦しいことは有りません」

伊「そうかえ、實に有難う、然う云えば師匠夢ともなく現うつともなく、この月始まりから若草わいそばが私の傍そばへ来て、黙つて夜中に坐つてるが、その時は私の足が痛い事ひどは酷いよ」

正「これは御免を蒙ります、話しを聞くぞとします、早く帰りましょう、船で来ましたから」

伊「まあ宜いじやアないか、日まんまが暮れたからお飯まんまでも喰べたていいきねえな」

正「まあ御免を蒙りましよう、本当に驚きましたナ、叔母さんが掛合に來たときには、突然つっけ倒たばして歸すような、頑固かたくねなものを飼つて置くから、貴方の御病氣を引出したんで、貴方にも似合わねえ、其様そんな奉公人を置いてはいけませんよ」

伊「その番頭は今取次に出た伊兵衛というものだ」

正「道理で私を法印と間違えました、これは空飛しましよう、彼の様子では、あんな奴をなぜ飼つて置くのです、早く追い出しておしまいなさいまし」

など云つてゐるところへ伊兵衛が出て参りましたから、正孝は驚きながら、

正「これは入らつしやいまし」

伊兵衛「誠に遠方の処々お訪ね下され御真実なことで、私は伊兵衛と申しますものでございますが、只今お次で残らず御様子を伺いました」

正「これはどうも大変私は直にお暇をいたしましよう……ナニそれはソノ何んで、本

町の伊兵衛さんと同じ名が不思議ですな」

と間が悪いからごまかしてピヨコ／＼帰りましたが、伊兵衛も怖いから大番頭の安兵衛とも相談して、早く花魁の御法事御供養をしようと云うので、これから伊兵衛安兵衛の二人は、下総の下矢切村の若草の叔母の家を尋ねてまいりまして、此処だと思い、と見ると生垣が有りまして、這入口に大きな榎が有り、土間も小広うござります。安兵衛が生垣の外から怖／＼々覗いて見ると、金重の弟子の恭太郎という馬鹿な奴が上り端に腰を掛け、足をブラン／＼やつて遊んで居ります。奥に叔母のおしのが居ります。

安「伊兵衛どん、お前少し其処に待つておいで、お前が不調法をしたんだから、私が中へ這入つて、一通り詫びわびごとを云つてからお前を連れて往くから」と云い捨て、中へ這入り、

安「御免下さいまし〜」

恭「何だえ」

安「え、若草さんという花魁の叔母さんのお宅は当方ですか」

恭「おいらの叔母さんは彼處あそこに居るよ」

安「イエ松葉屋の若草花魁の叔母さんのお宅は当方ですか」

恭「おいらの叔母さんは彼處に居るつてえに」

しの「恭太郎や何んだよ」

恭「何んだか知らねえが、おいらの叔母さんだとよ」

しの「何んたか知りませんが、馬鹿野郎で取次一つ出来ねえもんがすが、何か御用が有らば此方へ這入つておくんなせえましょ」

安「左様なら御免なさい」

と怖々安兵衛が上り端へ手を突いて見ますと、叔母さんは夜なく祈ると見えまして、

祈り勞れたか小鼻も落ち、眼も窪み、頬肉も殺いで取つたように落ちてしまい、胡麻塩まじりの髪が領のところへ纏い附きまして、瘦せた手を膝へ突き、息遣いが悪く、ハツくと云いながら、

しの 「さア此方こっちへお上んなさいまし私は少し塩梅あんべえが悪くつてネ、其処まで立つて往くも苦難くがんでござえますから、何うかあんた此方へ這入つておくんなせえましよ」

安「へイ／＼」

と中へ這入り、丁寧に辞儀して、

安「あなたが松葉屋の花魁若草さんの叔母さんで入らつしゃいますか」

しの 「はいわい私が若草の叔母でござえますが、あんたは何処どこから」

安「へイ手前は本郷春木町の紀伊國屋宗十郎の手代安兵衛と申します、主人の伴伊之助の事に就いて、今こんにち日わざ／＼御当家様へ出ましたわけで」

と いうより叔母は氣色けしきを変え、

しの 「何だと、本郷春木町の紀伊國屋の番頭おらうちが己おのア宅うちへ何しに来た」

安「これまでとんと花魁のおかくれになりました事を存じません、と申すは、若主人伊之助が放蕩致しました事について、堅気な家でござりますから奉公人の示しにもなりません

し、本家や親類の前へ対しても捨置かれんと申して、堅い気象の主人でござりますから、
 恪を堀切の別荘へ押込めて、窮命させて置きましたので、花魁の方へ手紙一本上げる事へ
 出来ないわけで、すると昨年の十一月から伊之助が業病に取附かれまして、その足へ
 睡物が出来まして、どうも痛んで堪えられないばかりでなく、放棄つて置くと漸々
 腹の中まで腐れ込むと医者が申しますで、種々と加持祈祷も致しましたが、どうも
 思うように全快致しませんから、愈々不具になるまでの事と諦めまして明日は切る、明後日は切ると医者の方はいい延べて置きました」

十八

安「昨日吉原町の帮間がまいりまして、だん／＼の話の末全く花魁の念で然ういうこと
 になつたのだから、足を切るには及ばない、叔母さんに詫ことをして、花魁の御法事御供
 養をして上げたら宜かろうと、真実に教えてくれましたゆえ、伊之助も其の時始めて花魁
 のおかくれになつたことを聞いたので驚きました、私は些とも存じませんわけで、花魁は
 御懷妊になつておいでなすつたという事でしたが、私が存じて居れば何うにでも成りまし

たものを、そんなことは心得ませんで、堀切の別荘を預かつて居ります伊兵衛と申すものが、叔母さんのおいでの時に何か不調法を致しましたそうですから、さぞ／＼御立腹でございましょうが、一団に伊之助を守つて居りまして、他の者がまいつても若主人へは逢わせんようと、おおしゅじんから云いつけてございますので、訳の解らん人間ゆえ、一団に主人大事と思い詰めましたところから、叔母さんに怪しからん御無礼なことを致しましたという事ですが、どうか一つ御立腹でもございましょうが、幾重にも私がなり代りましてお詫をいたします、あなたのお心持も解け、花魁の御法事御供養をいたしますれば、伊之助の病気も癒りますわけゆえ、実は伊之助が参るべきですが、何分駕籠でもまいられんくらい、それがため私が出ましたが、何うか御勘弁をねがいたいもんで、私がなり代つてお詫を申し上げますから」

しの「なにお詫をするつて、今になつて魂消たまげてそんなことをいつて来てもだめだよ、若草は勤めの中うちでも他のお客様へ出て肌を触ふらねえ、汝工家われうちの伊之助を亭主ていしと思って、夫婦約束の書付まで取替ほかさせた仲だから、伊之助が押込められたてえことを聞いて、ハア気の毒なことだと思つて心配しんぱいぶつてだん／＼塩梅しおばいが悪くなり、殊に勤めの中ね、つこで赤子あかこまで出来でかして居るだから、己おれも可愛相かわいあいだと思つて掛合かけあいに往けば、ムシヤクリ出しやアがツて、己

の身体へ傷までつけて帰すけえような事をしたアだもの、若草だつても此の怨みを霽さはらすに置くものか、若し此の儘に死ねば三日経たねえうちに伊之助を取殺すと云つて死んだから、伊之助は足ぐれえ腐れましようよ、足どころじやアねえ今に頭迄腐れますべえよ、氣味ア宜いだよ、おれも今に見る、伊之助の宅うちへ草を生やさずには置かねえと思つてるくれえだから、若草の念おもいでも其のくれえのことは有りましようよ、今更死んだ者の心の解けようも機嫌の直りようもねえから、とやかく云わずに早く帰けえれ」

安「どうも重々御尤ごともでござりますが、何うか其処を一つ幾重にもお詫わざをいたしまして、叔母さんのお身の上がお便りのないお方ならば、伊之助の方から何の様どようにもお手当を致します、引取られるのが否いやと仰あつしやるのならば、田舎でいらっしゃはえつても、月々のものでも差上げて、叔母さんを伊之助のお母さん同様に御孝行をつくしたいと申しまして、へえ」しの「駄目だよ、伊之助から何を貰つかつたって快く口へ這入はえるかえ、今になつて兎や角そんなことを云つて来やアがつても駄目だ、サツサと帰かえれ、今に取り殺して遣るから、其の時になつて魂消るな、兎や角云われえば汝汝も只は置かねえぞ、早く帰けえらねえと此の薪割を叩き附けるぞ」

安「いえ何うぞ御勘弁を願います……困りましたナ、御立腹は御尤ごともでござりますが、私も

子供の使つかいじやアなし、主人の代りにまいりましても、御立腹が解けませんで、へえ然うでござりますかと云つて此の儘は帰られませんから、切せめて花魁のお墓参りでもいたし、お花でも手向けて帰りませんでは、私の参りましたかどが立ちませんから、御立腹でもございましょうが、花魁のお寺さまだけ教えて下さるわけにはまいりませんか』

しの「伊之助の手から線香一本手向けて貰つても、若草は嬉しくは受けめえが、お前は何にも知らねえで使に來たんだから、汝われがには氣の毒だから、寺の名前だけ教えてくれる、中矢切の法泉寺といいやす」

安「ハイく有難うございます」

と慄ふるえながら外へ出て参りまして、伊兵衛に向い、

安「おい伊兵衛どん、お前が往かなくつて本当に宜かつた」

伊兵衛「どんな様子でした」

安「實に驚いた、ア一怖い、田舎氣質かたぎの叔母さんが思い詰めて祈つてるに違いない、實に怖い顔だつたよ、不思議だネ、何うも何処で見ても死靈しりようと生靈いきりょうの祟りだという処はあたつてるじやアねえか、私を突出しやアがツつて恐ろしく怒つて、私に薪割おこぶつつぶつつを打付けるといったが、お前が這入れば大変だつた」

と話しながら往く後から、だしぬけに、

侍「ヤイ、これヤイ」

伊兵衛「ヘイ、真平御免下さいまし」

侍「不埒至極の奴だ、何と心得る、エー江戸市中とは違うぞ、かかる田舎の反圃たんぽなか中で侍に突当る奴が有るかえ」

伊兵衛「へえ、うツかり此方こちらを向いて話をして居りましたものですからツイ……何うも誠に相済みません、何うぞ御勘弁を願います」

侍「勘弁相成らん、侍たるものへ突当つて」

安「旦那さま御立腹でございましようが、私の連わたくしつれでございます、二人で怖い話をして、此こ方たちを向いて参りましたゆえ、つい旦那さまに突当りましたか知りませんが、何うか御勘弁を願います」

侍「イヤ勘弁罷まかりならん」

と云いながら二人の胸倉を取り、

侍「サア兩人とも己と一緒に矢切山ゆへ往け、斯う押おさえたら雷が鳴つても放さん、暫く人を斬らんが、丁度幸い新刀あらみが手に入つたから試して遣るから、己と一緒に矢切山へ往け、両

人ともに首を打落してやる」

と云われ、二人はワナ／＼慄えて居りますと、此の時矢切の渡場へ舟を繋けて上りましたのは荷足の仙太でござります。人のうわさには金森家の浪人が八州のお捕方を斬払つて、矢切山へ隠れたという噂を聞いて、刀の詮議の手掛りにもなろうかと、仙太郎が重三郎と昇夫の安吉とを船に載せて、矢切の渡口へ船を繋いで、三人上へ上り、

仙「何だえあれは、喧嘩かえ、お百姓さん何だえ」

村の百姓「何だか知んねえが、侍が町人を打つ斬るてえだよ、あの二人は成田参りかも知んねえが、通りがかりに侍へ往き当つたとかいうので、侍が腹ア立つて、侍に往き当たるてえことはねえ、両人とも打つ斬るから矢切山へ歩べつてえんだが、可愛相でがんすネ」

仙「乱暴な奴だな、あの侍は何だえ若衆」

甲「あれは国分村の萩原束という浪人もので、方々の人を打つ斬る／＼ってえやアがツて嚇かしたり、何処の料理屋へ往つても、錢なしで酒をクン呑んじまツてから、国分の束を知らねえかと威張るおつかねえ人だよ」

仙「然うかえ、安ヤイ、あの侍は顔ア出してやアがるが、あんな奴では有るめえ」

安「エー、まるで変つて居やす」

仙「あらみ新身の刀を試すといつて居やアがるから、ヒヨツとして彼様な奴が持つて居めえもんでもねえから、己が一番あの侍のところへ飛び込み、殴り付けて、あの刀をふんだくるから、重さん逃げてはいけねえよ、曰外いつぞやの怪しい侍の手下かも知れねえ」

重「親方まるで違いますからお止しなさい、怪我あんでもなさるといけませんぜ」

仙「ナニ大丈夫でえじょうぶだ、工御免さむれえねえ、ヤイ侍てえげえ大概だいがいにしろ、殴うるぞ、ヤイ」

侍「何だ手前てまいは」

仙「己は通りがゝりのものだが、弱い町人つかを掴つかめえて嚇しやアがツて、長えなげのを振り廻わし、斬はるの殴うるのツはて、ヤイ此さむれえなぐの侍し、殴うり付けるぞ」

侍「イヤこれは何うも怪けしからん奴だ、侍たるものに向つて無礼を働くと、この兩人と共に手前てまいも手討うそにいたすぞ」

仙「ナニ生意氣な事をいうと殴り付けるぞ」

侍「オヤ此奴無礼至極こいつゆる免ゆるし難い」

仙「免し難ければサア己を斬れ、其の新身の刀を引ツこ抜けさむらい、侍」

侍「斬はらんでウヌ、兩人は免して遣るから往ゆけ」

と突放つきはなされて、安兵衛も伊兵衛も悦びまして、栗林の間へ逃げ込みましたが、吉原土

手で仙太郎に逢つた侍は心有るものゆえ、振ッ払つて逃げましたが、国分の束は心がないから、いきなり引ツこ抜くが早いか、仙太郎は少しく起倒流きとうりゆうを習つて居りますから、飛び込んで侍の足柄を撈すくつて投ほり出すと、バタリと仰向けに倒れる上へ乗しかゝりましたので、萩原束は組み敷かれ、苦しそうな声で、

束「御免を蒙る」

仙「黙れ、ウンー」

束「これは痛い、御免……アヽ痛い、参つた」

仙「こんなものを振り廻わしやアがッて、重さん逃げちゃアいけねえ、何処へ往つたんだ、
安ヤイ」

安「オーイ」

仙「あんなとこ処に居やアがる」

といううち、安吉も出て参り、

「親方しつかりなせえ、わツちが居るから大丈夫でえじょうぶだ」

仙「重さん物は試しだ、これを見ねえ」

と束の刀を投り出すを受取り見て、

重 「これは踏めません、鈍刀^{なまくら}で、稍く一両二分ぐらいなものでございます」

仙 「こんなものを差しやアがツて、斬るの殴るのツておどしやアがツて畜生^{ちきしょう}め、此の村には己の親類があるから、向後暴す^{こうごあら}ときかねえぞ、てめえの面^{づら}を見覚えのために印を附けて置こう、刺青^{ほりもの}をして置いて遣るから然う思え、重さん、矢立を差してゐるなら此処へ出しねえ……斯う十文字にして、汝の根性^{ためえ}は曲つてゐるからまた……斯う三角なものを刺^ほつて置いて遣る」

束 「これは御免を蒙る、御丁寧な御挨拶で」

仙 「これで宜いからサッサと往け」

と突放されて、侍はホウ／＼の体^{てい}で逃げて往く。これから仙太郎は重三郎を連れて矢切山へ乗込み、刀の詮議をいたすという、一寸^{ちよつと}一息致しましよう。

十九

さても稻垣小左衛門は、家来の丈助と共に葛飾の真間の根本へ参りまして、荒物渡世をいたして居りまする内に、其の年も相果て、翌年の二月になりますると、真間の藤梅も散り、

桃や桜がそろく咲き初めましたが、小左衛門はとんと外出を致しませんで、奥にばかり引籠り、うつ／＼致して居りまするので、家来の丈助も心配でござりますから、

丈「もし旦那さま／＼」

小「あい」

丈「あなたはお野掛けがお嗜^{すき}でいらつしやいましたが、此の程はさっぱり野歩きもなさいませず、河岸端^べへもいらつしやいませんが、些^ちと御保養を遊ばしては如何^{いか}でござります、あなたのお案じも私は能く存じて居りますが、さっぱり若旦那さまの方からお音信^{たより}がございません、昨年から引続き満一年の余になりますのに、お手紙一つまいりませんから、お案じは御尤と存じますけれども、屹度^{きつと}若旦那さまからの御書面は芝のお上屋敷へ届いて居るに違^たいありますまい、大旦那様はまだお屋敷に居らつしやると思つていらつしやるに違^たいありませんから、渡邊さまの処に御書面^{とゞこお}が滞つて居ましようと考えますが、私もお上屋敷へは参られませんけれども、買出しかた／＼江戸へ参り、お出入の八百屋にでも頼んで、渡邊さまへ御手紙が届いて居りましたらば戴いてまいりましようと思ひますが、あなた余りくよ／＼と若旦那様の事をお案じ遊ばして、御病気にでもお成りなさいますと、実に私は心配でござりますから、何うか貴方些^{あんま}と御保養遊ばしてお気の散りますようにな

すつて、お身体を養つて下さりますのが何よりでござります、今日是からお野掛けは如何で、私がお供を致しますから」

小「あい／＼、丈助誠に忝けない、旧来居つた家来共も皆暇いとまを取つて別れ／＼になれば、私が此處に居ることを知つて居るものも有ろうけれども、一人も訪ねてくれる者も無いに引替え、手前は新参でありながら、主従しゅうじゆう苦楽を共にして、斯様な処に来て、商いの買出しから、殊に男の手で濯すぎ洗濯すすぎまでもしてくれるので有難い、手前がいなければ小左衛門は實に困るのだ、誠に忝けない、家来とは思わない、今予は家来に助けられて居いるが、時きた來つて失つた國綱のお刀がお屋敷へ返るような事になれば、手前には何の様にも此の恩返しをせんければならんノウ」

丈「アヽ旦那さま、勿体ないことを仰しやいます、何う致しまして、私は旦那さまの御高恩を戴いて居りますから、身体で出来まする事なれば、何の様な事でも致しまして、旦那さまお一人だけの事は御苦労を掛けません心得で居りまするが、若旦那さまは御氣象が御氣象でいらっしゃいますから、お煩いは有るまいとは思いますが、何分お案ひとじ申し上げますゆえ、旦那さまは猶なおさら更御心配でいらっしゃいましようと存じます」

小「あい、伴も慣れぬ旅をしたのだが、あの氣象だから山に掛るとも峠を越そとも、何

の様な者が出ても、是まで丹誠して置いたゆえ、武芸は一通り心得居れば、五人や八人狼藉者が討つて掛けられても驚くような腕前ではないが、怍の留守中に追放を仰せ付けられたから、斯様な片田舎住居をして居る事を、怍も知らずに居るかと思うと、こゝが親子の情で、雨に付け風に付け案じられて、今頃は何処に居るか、こう云う雪の降る時には何処の宿屋で冬籠をして居ることか、それとも難所を越えて雪中に病でも求めなければ宜いがと存じて心配するが、お前にまで心配させてはならんから、今日は気を変えてブラ／＼と八幡の八幡宮へでも参詣致そうか」

丈「へい、それが宜しゆうございましょう、左様なれば彼のお蒔絵のお瓢箪へ、宜いお酒が参りましたが、高くつて売りにくうございますから、あのお酒を入れて参りましょう、多量は召上りませんが、私はお下物拵らえをいたしましょう」

小「それじゃア兎も角野掛けの支度をしておくれ」

丈「へえ畏りました」

とこれから丈助が種々の物を拵えまして、小左衛門は野掛け装束になり、丈助を連れて八幡の八幡宮へ参詣をして、ブラ／＼市川新田を帰り路になりましたが、菜の花が盛りでございます、彼の市川新田の出外れの処に弘法寺と深彫のある一の石塚が建

つており、あれから右へ曲ると真間の道で、左右が入江になつており、江には片葉の芦が生えて居りますが、あれは何處にも生えて有ります。其処に真間の継橋といふ名高い橋がありますが、立派かと思うと、板と板と両方から継合せたから継橋というのだそりで、何にも面白く有りません。東の方は手児名の社、その後は瓶の井より水が流れ、これより石坂を登ると、弘法寺の堂の前に二葉の紅葉、秋の頃は誠に景色の好い処でござります。小左衛門は丈助を連れて入江に付いて一筋道をやつて来ると、今船から上つたというような姿で、人足が法被を腰に巻き附け、小太い竹の息杖を突き、胴中を細引で縛つた長持を二人で担ぎ、文身といつても能い文りではございません、紺の木綿糸を噛んで吐き附けた様な筋彫で、後からギシ／＼やつて参りまするから、細路ゆえ二人が避ける、人足がよろけるとたんに丈助の持つて居た蒔絵のしてある瓢へ、長持の棒ばなが当りましたから堪りません、瓢は碎けて酒がこぼれる。すると丈助は屋敷に居りました見識が商人になつても失せませんから横柄に、

丈「ヤイ人足待て、怪しからん奴だ、旦那さまに相済まん、一番結構なお瓢箪へ長持を打つ付けやアがッて、毀しちまって、不埒至極の奴だ、気を付けて歩け」
人足「ナニー、安ヤイ下せ、生意氣なことを云うな、汝ツちは酒を喰つてヒヨロ／＼蹠け

て歩くから悪いんだ、其の瓢箪が百両百貫するもんか知らねえが、手前てめえが打つ付けて置きやアがツて何を云やアがる」と云いながら打ち掛る。

小「これは怪しからん、乱暴なことを申す、余程酷い奴だ、粗忽ひどだから物を毀すも宜しいが、自分で不調法をして置きながら打つてかゝるという事が有るか、不埒な人足だ、以後たしなめ、此の度は免すからサツサと往け」

人足「ナニーこの老爺殴じつてしまえ」

と原文に三嶋安という東海道喰い詰めの悪党わるですからきゝません、いきなり息杖おを取り、左右からブーンと風をまいて打つて掛け、

小「おのれ」

と云いさま後うしろへ飛び退りながら細身の刀を引抜き、刀脊打みねうちに原文の肩をドンと打ちましたが、腕が冴えておりますから余程応こたえたと見えまして、アツと云つて転りながら横道へバラ／＼と逃げる。

安「この野郎」

と打つてかゝる処を、ひツ払ぱらつて腕を打つ、打たれて三嶋安は斬られたと心得、キヤツ

と云いさま同じく細道へ逃げ込んでしまうのを、追い掛けもせず跡を見送りながら、

小「悪い奴だからチト懲^{いたづら}してやらんといかん」

丈「不埒至極の奴でござります」

小「それは御用の長持ではないか、会符^{えふ}でも立つて居^おるか」

丈「酷^{ひど}い奴でございます、私は虫^{わたくし}が知らせましたので、このお瓢箪は余り宜いから持つて出まいと存じましたが、本当にいけない事をいたしました、継ぎ合すことは出来ますまい

か」

小「粉に欠けたものが何うなるものか、捨てゝ置け〜」

丈「デモ勿体のうございますから……」

小「何故^{なぜ}大地^{ぢびた}を甜^なめる、汚ならしい、塵^{ごみ}でも這入つてるといかないから止め……御用の会符^おでも立つて居^おるか見ろ」

と云いながら長持の傍^{そば}へ寄ると、長持の中でヒーと女の泣声がいたします様子。

小「丈助」

丈「ヘイ」

小「長持の中で婦人の泣声がいたすようだが、あんな悪い奴らだから、事に寄つたら女で

も勾引かどわして担いで来たかも知れんぜ」

丈「なんとも云えません、ヘイ……この薦の葉の処が、大きく欠けましたんですから、是だけ何うかしたら直りそうなもので」

小「瓢箪はもう大概にしろ、仕方がないワ、早く此の縄を解いて見ろ」

丈「へえ」

と是から丈助が縄を解き、蓋を開けて見ると、長持の中には一人の娘が縛られて、猿轡さるくわと申して口の中へ何か小さい片布きずれを押込み、其の上を手拭にて堅く結り、島田鬚はがツクリと横に曲り、涙が伝わつて襦袢の半襟が濡れて居ります。着物は黄八丈の唐手の結構な小袖に、紫縫むらさきじゆ子に朱の紋縮緬の腹合せの帯でございますが、日暮方ひくれがたゆえ暗くつてはツきり様子は解りませんけれども、誠に上品な器量の宜しい娘でござりまする。

小「私は通りがゝりのものだが何も心配せんでも宜しい、札は後あとでも宜しい……ナニ勾引されたと……成程こういう娘を勾引すような奴だもの、人の物を毀して無闇に打つてかかる処じやアない……何しても娘むすめつこ子 怪我が無くつて宜かつた、丈助長持は其処へ捨て放しにして置いて宜しい」

とはから娘を連れて宅へ帰り、行灯を点けて娘の様子を能く見ると、年齢十八九にもなりましようか、品の好い、おんもりとした世にも稀な美人でござります。

二十

小「いえもう其様そんなにお礼を仰しやらんでも宜しい、先ずマアお怪我がなくつて宜よかつた、御

両親は嘸御心配をなすつたでしよう……ナニ江戸から勾引かどわかされたとえ」

娘「はい、私はわたくし浅草田原町あさくさたはらまちのものでござります」

小「うむ／＼浅草の田原町で」

娘「この下総の矢切村わたくしに私の乳母が居りますとのことゆえ、それを尋ねてまいりまする道で、帝釈さまの手前の土手のところに駕籠屋が居りまして、しきりに乗れ／＼と勧めますので、供の老爺おやじが申しまするには、足も疲れたらうし、まだ道も余程有るから乗つたが宜かろうと申しまするゆえ、私も彼のような悪い者とも存じませず、家来の老爺も並の駕籠屋と存じまして、うつかり乗りましたのでございますが、駕籠の方は早いものでござりますから、供の老爺が幾ら駆けても追附かれんように昇夫かぶつやが急ぎますので、私も駕籠の中

で心配致して、供の老爺が来るまで少し待つておくれと申しましても、聞き入れませず急ぎまして、私を森の中へ担ぎ込み、かねたく予て企んだものと見えまして、森の中に長持がございまして、その蓋を取つて私をたかでこていまし高手小手に縛めて中に入れられましたが、其の時は殺されことかと存じて居りますると、それから私を船へ乗せる様子は長持の中でも存じて居りましたが、實に現のうつような心持で参りましたのでございましたが、貴方さまのお助けで、思掛けなく危あやうい處のがを免めれまして、誠に有難う存じます」

小「それはく、御家来が廻案じて居られるでしよう、お前さんはお器量が宜いから悪い奴らが企んで、左様な事をしたのであろう、どうも誠にお前さんはお人柄で、御尊父様も廻案じて居られましようから、私が送り届けて上げるから宜しいが、御尊父は何御商法をなさる、何うも人柄の好い嬢さんだ」

娘「はい、親父は町道場を出して、剣術の指南を致しますものでござりまする」

小「フン剣客けんかく先生かえ、道理でお人柄が好いと思いました、私も嗜わしの道だから随分懇意なものも有りますが、何流でござるか」

娘「はい、一刀流でござりまする」

小「今流行だからね、一刀流の名高いお方には随分知る人も有りますが、失礼ながら親

御の尊名は何と仰しやるな」

娘「はい 石川藤左衛門いしかわとうざえもん と申します」

と云われて小左衛門は驚き、

小「エヽ石川藤左衛門……ウヽ左様ならお前は其の娘のみゑかえ」

みゑ「はい貴方は何うして私の名を御存じでいらっしゃいます」

小「是は何うも実に不思議だ、伴わたり小三郎と許嫁いひなづけ の約束を致した嫁とも知らずに助けたが、石川のみゑかえ、これ丈助、石川のみゑじやと……エヽモウ瓢箪はよいにして置け、
かね 予て話した伴の許嫁の娘であるぞ」

丈「それはお目出度い事でございました」

みゑ「はい、誠に思い掛けない事でお嬉しゆう存じます」

小「それは實に図らざる事であつたが、まあゝ宜かつた、私は稻垣わし 小左衛門だよ」

みゑ「あれまア伯父さま、貴方さまをお尋ね申して、芝のお屋敷へ参りました処が、御浪人なすつたとの事で、方々お尋ね申しましたよ」

小「左様か、私も御尊父をお尋ね申したいと心には思つて居たが、只上州じょうしゅう からすがわ
へん 辺に住むとのみ聞いて、確とした処を存ぜんことゆえ御無沙汰に相成つたが、私も不図し

た事でお暇には成つたものゝ、お前は少い時分から小三郎に許嫁をしたもの故、お父様が浪人しても、忤の方へお前を貰おうと、其の相談もしたいと思つて居つたが、江戸においての事は知らなかつた……ナニ浅草の田原町へ町道場を出して……彼の、フン、あのくらいの腕前的人は当令余り無いテ、私も今では見らるゝ通り斯様な荒物渡世をして、何うやら斯うやら其の日を送る身の上と成りました、栄枯盛衰は浮世の習いとはいながら、実に変り果てたるわけだて、御尊父は御壯健かえ、誠に壯健な方だが、相變らずお酒も飲めるかえ……ナニ泣くか、何うした、其様に泣かんでも宜い、何うした、何か間違でも有つたか」

みゑ 「はい、昨年十一月三日の暮れ方でござりまする、王子の権現さまから帰り掛けに、お父さまは何者とも知れず、日暮ヶ岡にて鉄砲で撃殺されました」

小「エヽ……イヤそれは何うも……ウン遺恨だネ……ウン尋常に遣つたら中々五人や八人掛つたつて討たれる様な石川氏ではないが、飛道具では何うも致し方が無い、併し卑怯至極な奴だ、何でも夫^それは知つて居る奴に遺恨を受けたものだね、併しお前は幼年の折にお母さまがおかくれに成つてしまい、親一人子一人の石川氏が然ういう事に成つては誰を力に致すか」

みゑ「はい伯父さまも御存じでございましょうが、旧く居りまする勇助ゆうすけと申す老爺おやじが、たとえお父さまがおかげに成つても、稻垣さまと許嫁のお約束になつて居りまするから、お連れ申すと申しまして、芝のお屋敷へ参つて伺いますと、伯父さまも旦那さまも御浪人なすつたとの事ゆえ、何う致そうかと存じて泣き明して居りますると、勇助が氣を取直してくれまして、そう心配しない方が宜しい、この矢切村にしのと申しまして私に乳をくれました婆ばが居りまするから、その乳母たよを便つて参りまする道で災難あわに遇いましたが、思い掛けなく伯父さまにお目通りをいたしましたは、全く親父が草葉の蔭から守つてくれましたのでございましょう」

小「至極左様、大きにそうかも知れない、併し心配するな、私は殿様から預り中に、御家わし御伝来のお刀を紛失ふんじつ致し、それがために恃は少し心当りがあつて美濃へまいつた、尤も手掛りが無ければ、何時帰るか知れんと云つて出たが、今に音信たよりは無いけれども、遠からず帰国致そうが、そうすれば小三郎のためにも舅の仇たる悪者を尋ね探して、必ずお前の怨みも石川氏の怨みも晴させる、私の眼の黒い内は力になるから心配せずにおいて、丈助御馳走は兎も角、早々百姓を頼んでナ、これの家来の勇助がウロ／＼探して居るだろおうからな、早速近辺のものを頼んで、手分をして勇助の行方を探させろ」

というので方々探しましたが、一向知れません。五日の間頓と手掛りがございません。すると五日目の日暮方にお百姓が一人這入つて参り、

百「御免なせえまし」

丈「イヤー清助さんおいでなさい」

百「此間鴻の台を見たいという話だからお寺へ頼んだ処が、何んだか浪人者が山へ匿ねたとか云うんで、八州さまが調べに来て八ヶましいので、知んねえものは入れねえだが、おらが納所へ頼んでネ、真間の根本にいるお侍さんで、商えをして居る、固え大丈夫の人が山を見てえと云うんだがと頼むと、そんたら連れて来うと斯ういうわけで己ハア先方へ頼んで置いたから、私イ案内して連れて往くべえと思つて來たアだ」

丈「それは有難う存じます、今仕事をしまつたのかえ」

百「只た今野辺仕事をしまつて來たばかりだ」

丈「旦那さま、予てお頼みの清助さんが参りまして、總寧寺さまへ頼んで案内をして上げようと申して来ましたが、これから貴方いらつしやいませんか」

小「それは何うも御親切な事で誠に有難う存じます、私も壯年の折に一度見たこともあつたが、實に絶景の処で、何うかもう一度見たいと思つていたが、それは誠に有難い、丈助

お前それじゃア留守を頼むよ」

丈「私は此の土地に生れながら灯台下暗しで鴻の台はとんと存じませんから、何うか御同道を願います」

小「左様か、それでは、みゑ、お前は留守居をして、若しかいものかい買物かいものかい買かいが来たら、今日は余儀ないことで他出致しました、御用向みようむきがござりますならば明日願ねがひりますといつて……宜いか」と是から瓢箪に酒を入れ、残菜ざんさい入に有合ありあわせのものを詰め、身支度みだりをいたし、清助といふ百姓の案内で、少し遅くなりましたけれども真間の根本をなだれ上りあがに上つて参ると、總寧寺の大門までは幅広の道で、左右は大松おおまつの並樹なみきにして、枝を交えて薄暗きところを三町ばかりまいりますと、突当りが大門でございますが、只今はまるで様子が違いましてが、其の頃は黒塗の大格子おおごうしの大門の欄間は箔置はくおきにて、安国山あんこくざんと筆太に彫りたる額が掛つております、向つて左の方に葦酒くしゅ不許入さんもんにいるをゆるさず山門かいだんせきとした戒壇石かいだんせきが建つて居ります。大門を這入ると、半丁ばかりは樹木は繁茂致して、昼さえ暗く、突当りに中門ちゆうもんがござりますが、白塗りにて竜宮の様な妙な形の中門で、右の方はお台所から庫裏くりに繋つております、正面は本堂で、曹洞派そうとうはの禅林ぜんりんで、安国山總寧寺と云つては名高い禅寺でござります。

百姓「玄堂さんく、此間頼んで置いた根本の荒物屋の老爺さまを連れて來たから、
玄堂さん案内して上げておくんなせえ」

玄「イヤ勝手に這入つて往きなさい」

百「案内は出来ねえかえ」

玄「案内は出来ねえ」

百「わしらも時々枯枝を取りに來て道イ知つてゐるから、私が案内をしますべえ、サア参めえりましよう」

小「何うか願います」

とはからだんく山手へ附いて参りまする。

小「若い時分に一度見たことは忘れんもんだ、これは太鼓塚……これは夜啼石とて里見在城の折に夜なゝ泣いて吉凶を告げたという夜啼石だ、これは要害の空濠で、裏手の処は桜ヶ陣と申して、里見在城の折には搦手で在つたという、何うも實に好い景色の処だ」

と云いながらだんく山手へ附いてまいりますると、鐘ヶ淵という処に出まする。

小「オヽ見覚えがある、これはその鐘ヶ淵といい、これは鐘掛の松と申して、里見在城の

折にはこれへ陣鐘を吊して打鳴したという、其の時北條が攻め入つて松を斬落したので、陣鐘が此の淵へ沈んでしまい、今に此処に其の陣鐘が沈没致して水中に存して居るそうで、
 黄門光園卿こうもんみづくにきょうが毛綱でこれを引揚げようとしたが揚らなかつたという、鐘ヶ淵と唱え
 る処だ、或は豊島刑部左衛門秀鏡とよしまぎょうふさえもんひであきらの陣鐘にして、船橋の慈雲寺の鐘なりともいう

丈「へい成程」

小「此処が大見堂たいけんどう」という二代の上様じょうやうが大いに見るという額を掛けられた処である、御府内一目に見ゆる処と仰しやつた故、摺火打すりびうちで煙草を呑む事はやかましい場所じや」

丈「へえ、誠にお精くわしいことで、實に好い景色でござりますナ、何だか鴻の鳥が巣を喰つたから鴻の台と申すとかいう事を聞きましたが、本當でございましょうか」

小「いや、是は国府の台で、千葉之介常胤ちばのすけつねたね舎弟國府五郎胤こくふろうたねみち道の城跡であると申すを、此の国府の台を訛なまりつた伝えて鴻の台と申すのだろうが、慥か永禄の七年甲子きのえねの正月七日八日の戦いは激しかつたという、向う葛西領の敵手は北條氏綱氏康父子ほうじょうじようじかなが陣を取り、此方は里見安房守義弘さとみあわのかみよしひろ、太田新六郎康資おおたしんろうやすもと、同苗美濃守資正入道おなじくみののかみすけまさにゆうどう三樂齋さんらくさいなど頗る処のものが籠城をして居る、其の頃は鉄砲が流行らんから矢戦であつたが、此方は遂に矢種が尽きたゆえ矢切村と申す、其の時に鴻の鳥が浅瀬を渡つたという、これは虚か実うそほんと

か分らんが、川幅は広いけれども鴻の渡るを見て北條の軍勢が浅瀬を渡つて、桜ヶ陣より一時に取詰めた処から、かゝる名城たちまも忽ちにして落城したというが、時節ときだのう、其の日は恰ちょうど今こんにち日の如く夕暮で、入日いりひの落るを見て北條が歌を詠じたと云う……えゝ何とか云つた……オヽ……「敵は打つ心間まゝなる鴻の台夕日詠ながめしかつ浦の里」と詠よんだと申すて丈「へえ成程、お精しいことでいらっしゃいますな、誠に好い景色の処でござりますな」百「おらアはア時々木を切りに来るが、斯まんなハア詰らねえ処を何だつて江戸けふ者は錢つかイ遣けつて見に来て、焚火イなどして酒工くん飲んで帰かる人なんぞが有るけれど、考かんべえると可笑かしこしいだよ」

小「酒といえ巴瓢箪わいとうだんを持つて來たろう、一杯めしあがれな」

百「私は酒わい大でえ嗜すきで」

小「お嗜すきなら沢山たんとめしあがれ」

百「お前さまが此方こっちへ越してから荒物屋やうぶつやを始めたが、酒おおでも干物ひものでも廉やすいんで大評判おおひやうだよ、調法ひょうぽうだつてよ、仕入おらが皆江戸物もんを買つて来るだから好こねえだいでや、此間こねえだの干魚ひものなざア大層てえそううまかつたが、チト甘過おらるだ、己おのア方どでは口のツン曲ゆきるようでなければ喰てつたような心持ごころいしねえんだ、あんたの処のの酒さけは宜うがんすねえ……これはお酌有難うごぜえやす、へえ

私は酒大嗜でござえやす」

小「沢山召上つて下さい、丈助モツト大きな物へ入れて来れば宜いに」

丈「貴方は沢山召上りませんし、それに三合入と申しますが、このお瓢箪は中々這入るもので、大丈夫四合は這入りましよう、清助さん、これを摘んでみなさいよ」

清「はい、これは何うも、何んだえ日光唐辛かえ」

丈「ナニ伽羅落で、まあ上つて御覧じろ」

清「……これは塩ツ辛くつて宜うがんす、貴方の処に一節切という看板が掛つてるから買つて見ようと思つてゐるのだが、あれは鮒のスキミだらうね」

小「ハヽアあれは一節切という笛の名でな、私は少しばかり指田流の笛を吹くから、ひよツとしてまた心有る人が習いに來ようかと思つて看板を出して置くのサ」

清「イヤ笛なら駄目だ、村のもんに幾らも上手が有るよ、上の又七郎などが、鎌倉から小点から段々と大間へぶツ込んで往くところは實に魂消たもんだぜ」

小「私のは馬鹿囃の笛とは違うのでな」

丈「旦那様一曲お調べ遊ばしましては如何でございます」

小「何んぞ遣ろうかの、吾妻獅子のような長いものはいかんが、夕空の曲でも調べようか

の」

丈「へい何うか願います」

小「今日は丁度霞立つてゐるから、水面を見ながら、向うは葛西領、此方は山風の一節切、これは文屋の康秀ぶんや やすひでが吹いた笛で、先殿せんどの飛驒守さまへ笛を御教授申したところから拝領こつちした品だが、私は何処へ往くにも首へ掛けて放さんが、昔鴻の台の城主里見安房守の吹いた笛は嵐山と申す、今此の方が此処で山風の笛を吹くというは誠に妙だナ、面白い、昔乘よしう宗ようそうという一節切の名人が有つて、谷に臨んで吹いたらば、猿が笛の音ねを聞きにまつたというが、殿さまへ御指南を致すとき水に向つて吹くと誠に好い音色が致す、久々で忘れんために一曲調べましょウか」

と云いながら笛を取り出し構えましたが、小左衛門は松の根方へ足を掛け、歌口しめを沾して吹き出しましたが、その音色は尺八よりは一際静きわかで、殊に名人の吹くこと故に、心ないお百姓まで心耳しんにを澄まして自ら頭おのづぶしらを下げて聞くことになりますと、夕霞は深く立つて、とんと景色は見えませんが、穏かな好い日でござります、新利根川の流ながれに響いて何とも云われん能い心になり、興に入つて頻りに夕空の曲を調べて居りますと、大見堂うしろよりソツと出でたる侍は、黒い頭巾まぶたかぶを目深に冠り、ドツシリした無紋の羽織着流しで、四分一ぶい

えの大小を落し差しにいたし、つかくと小左衛門の後へ忍び足でまいり、興に入つて笛を吹いて居る稻垣小左衛門の腰のあたりをドンと出し抜けに突くと、小左衛門は不意を打たれたから堪りません、逆tronボウを打つて鐘ヶ淵へドブーンと陥りましたが、落ちながらも剣術の上手な人ゆえ油断が有りません、グルリと体を捻り、彼の侍の頭巾の上から髪をムツと捕えて放さぬゆえ、其の機みに頭巾の紐が切れましたが、切れなければ俱に引摺り込まれる処を、彼の侍は誠に運の好い奴でございます。松の根方へ片手を掛けて身を引く途端に落ちて往く様子を見ると、小左衛門は左の手に一節切を持ち、右の手に頭巾を持つたなりモンドリを打つて高嶺たかねから市川の流ヘドブリと落入りましたから、丈助も百姓も憐りしてかたまつてしまい、彼の侍の様子を見ることが出来ません。暫くして丈助が怖々ながら首を上げて様子を見ると、頭巾が取れたから顔はありくと見えます。年齢三十五六にして色白く、鼻筋通り、口元の締つた眉毛の濃い、青髭の生えた大おおたぶさ髪で、二十日も剃らない月代頭さかやきあたまでござります。漸く起上つて膝に付いた泥を払い、大小の抜けかゝったのを揺り上げ、松の根株へ片足を掛け、小左衛門が落入つたかと見おろしましたが、夕霞が深く立つてはっきり見分けられませんから、彼の侍が鐘ヶ淵の水面を覗き込む途端に安国山總寧寺の夕勤めの鐘の音が、微かにコーンくと聞えました。この侍は何者

か、一寸ちよつと一息つきまして申し上げます。

二十一

かの稻垣小左衛門を突落した侍は、金森兵部少輔かなもりひょうぶしょうゆうの家来で、百六十石頂戴致しました大野惣兵衛おおのそうべえと云うものでございますが、幼年の折から何うも心掛けが善くないため、遂にお屋敷をお暇いとまになりました。斯く追放仰付けられたのも、稻垣小左衛門が殿さまへ申し上げたことがあるに依つて、己がお暇になつたと、飽あくまでも稻垣を怨んで居ります。これを遺恨に只今稻垣を鐘ヶ淵から突落しましたが、小左衛門の死骸が市川へ落入つたか落入らないか夕霞が深く立つて、頓と分りませんから、膝に付いた泥を払いながら跡さがへ退ると、百姓が慄え上つてブル／＼して居りまするを見て、

侍「これ、これ」

百「ハイまつびら真平御免なせえ」

侍「其の方は先程からそれに居つたか」

百「ハイさつき先刻から此処に居りました、真平御免なせえまし、ハイ」

侍「イヤ何うもしやせん、少々遺恨有つて斯く致したことであるが、必ず此の事を口外致すな」

百「ハイ口外致しません」

侍「コレ〳〵一寸ちよつと此処こぢゆへ來い」

百「ハイ〳〵」

とブル〳〵慄えながらまいる。

侍「其の方は泳ぎを存じて居おるか」

百「ハイ、ここ此の村おいたで生立ちましたから、少ちつけえ時分から新利根川へへ這入はいつちやア泳ねぎましたから、泳ぎは知つて居おやす」

侍「左様か、もう少し傍そばへ来い、少し申し聞けることが有るから」

百「ハイ」

と何心なく侍の傍へ寄るや否や、侍が腰を捻つて抜き討ちに百姓の肋あばらへ深く斬り込む。

百姓はキヤーと悲鳴を上げる間もなくドンと足下そつかに掛けたから、百姓もモンドリを打つてドブンと落入りました様子を見て、懷から小菊を取り出し、大刀の血のりを拭つて鐘ヶ淵ゆへ投げ込み、ピタリと鶴鳴りをさせて鞘に收め、悠々と安国山の大門を出て往きますから、家

来の丈助も跡からそつと見え隠れに大門を出て左へ切れ、細道の処まで附けて参り、

丈「申し／＼大野さんえ、旦那エ、旦那」

大「オヽ丈助、早速の伝言で首尾好く往つた」

丈「へえ宜い塩梅でござります、あなた國綱の刀を佩しておいでなせえますか」

大「シイー、他へ預けることも出来ん程の名刀で有るから困つて居たが、丁度拵えが合つて居たゆえ、斯の如く差 料にして居るから、他へ知れる気遣いはない、大丈夫だ」

丈「旦那さま、石川の娘は中々怜憫でしつかりして居りますから、容易にお手に入れることは出来ませんぜ、併し私が何うか工夫をして見ますが、腕、ずくで抱いて寝ようとすれば、舌を噛み切つて死んでしまうくらい小三郎に情を立つて居ますから、私が甘く工夫をし、旦那のお手に入れるようになりますが、其の時にはしつかり御褒美をおくんなせえ」

大「宜しい、これはホンの心ばかりだが、褒美の印だ、取つて置け」

と幾らか金子を紙に包んで丈助に渡す。

丈「へい／＼今は褒美も何も入りません、小左衛門さえ死んでしまえば、彼処のものは縁の下の蜘蛛の巣まで皆な私の物だ、石川の娘の極りが附けば、またお前さんの処へ御沙汰を致しますぜ」

大「何分頼む、骨を折つてくれ」

丈「ヘイ大丈夫でござえます、当季何処においでなせえます」

大「手前の方の事の極りが付くまで、国分の萩原束の処に居る心底だ」

丈「彼奴は喰い酔くらッてばかり居てお喋りだから、うツかりした事は云えませんよ、ヘイ左様なら」

と兩人別れましたが、悪い奴は悪い奴で、此の丈助は大野と共謀ぐるになり、表に忠義と見せかけて小左衛門を鴻の台へ引出す手筈をいたしたので、かゝる悪人とも知らず、忠義なものと心得て目を掛けたが過まりで、情ないかな稻垣小左衛門は四十九歳を一期として、一節切と頭巾とを持ったなり落入りました。只今は川岸の土が崩れて余程平坦たいらになりましたが、其の頃は削りなせる断崖がけで、松柏しょうはくの根株かしらへ頭を打付け、脳を破つて血に染つたなり落ると、下を通りかゝつたは荷足船で、彼の仙太郎等三人が松戸へ刀の詮議に往つたが、手掛けがなく空しく帰つて参る船の胴中へ、小左衛門の死骸がドンと落ちましたから、重三郎も安吉も肝を潰して、

安「ヤア大変だ！」

仙「何んだ、立つて騒ぎやアがつて」

安「だつてサ血だらけな老爺さんが降つて來たからサ老爺さんの降るような天氣じやアねえのに」

仙「ナニ馬鹿なことをいう……オ、＼鴻の台から落おちこちたんだナ、喧嘩おうかをしたか遺恨おひどか知らねえが、老爺さんを酷ひどいことをしやアがる、組打ちくみうちでもしたか相手の奴の冠り物くわんりものをしつかり握つつて居るが、指を折らなけりやア中々取れねえくれえ一生懸命に押えて居るが、妙な真まっくろ黒の頭巾かぶとじんだなア、相手は侍さむれか知ら、詫おかしな物ものを持つてる、笛ふえか知ら、重さんお前は知つてるだろう、これは何だえ」

重「これは一節切と申しますが……オ、是れはお屋敷やしきへ出たとき拝領はいりょうの山風と云う一節切だと仰しやつて、御自慢で二三度お見せなすつた笛ふえだが」

と云いながら死骸しがいをよく見て肝かんを潰つぶし、

重「ウー稻垣とうがの旦那たんなさま

と死骸しがいに取とり縋すがりました。

仙「オイ重さん何うしたんだ」

重「エヽ親方、これは稻垣とうが小左衛門こざゑもんさまと仰しやつて、金森きんしんさまの御重役ごじゆうやくで、國綱くわんねのお係おけいりのお役人おぎやうにんでございますが、其の刀の為にお咎めおとめを受けて、御浪人ごろうにんなすつたと云うことは

微かに聞きましたが、何処にいらっしゃることが御様子も知らずに居りました……誰が旦

那さまを殺しましたか」

とん

仙「frm……それは何にしても飛だ事だつた……お前この頭巾に見覚えが有るか、誰の
だか分るか」

重「誰のだか分りませんが見覚えは有ります、お屋敷の御重役がお揃いに、あの芝口の紀
の善ぜんという袋物屋あづらへ逃こしらえてお拵ごしらえに成つた頭巾でございます、御覽なさい、此處に印いんが押
して有るのは見けんもん聞の時に大勢が同じような頭巾だから解らなくなるといけないと云うの
で、裏に白羽しらは二重ぶたえのきれを縫いつけて、それへ各々の朱印を附けて有るのですが、誰の
だか分りません」

仙「能く見ねえ、誰たれのだか分りそなものだナ」

重「私が見ちや分りませんが、これは此の小左衛門さまの御子息の小三郎さまという方が
御覽なさるか、また御重役方に聞きますれば分ります」

仙「フン、何なんにしても死骸の遣り場に困つたな」

安「これが親方わつちと私ばかりだと、係り合あいになるといけねえから投ほうり込んでしまう処だが、
重三さんが乗つっていたので死骸の分るというのが不思議です……アヽ、また向むこうへ一人落ち

て来ました、今日は滅法界めっぽうけいに人の降る日だ」

仙「ハヽア此の鴻の台は上矢切こゝだ、此辺に悪い奴が匿かくれて居るのかも知れねえ、何か手係りになる事も有ろうから、船を市川口へ繋つけよう」

というのを重三郎と安吉が止めましたが聞きませんで、詮議に山へ上りましたが、何の手係りもなく空しく帰る事になりましたが、小左衛門の死骸の遣り場がないから船へ乗せて、仙太郎が伊皿子台町の宅へ帰つて参りましたが、屋敷へ知らせて好いいいか悪いか知れません、と云つて何時まで斯う遣つても置かれないと云うので、直ぐに白金台町の高野寺でらへ頼み、仙太郎の縁類みよりの積りにして葬式も立派に致しましたから、小左衛門の死骸のことは誰たれにも知れんわけでござります。お話二つに分れまして、丈助は空そら涙なみだを零こぼしながら根本の宅へ帰つて参りますと、おみゑは案じて居ります。門口から、丈「嬢さま只今帰りました、申し工嬢こうよさま只今帰りました」

みゑ「あい、明きますよ」

と云いながら紙燭てとぼしを点つけて土間へ下りてまいり、直すくに戸を明け、

みゑ「お父とうさまもお帰りになりましたか」

丈「はい」

と座敷へ上り、

丈「お嬢さま、何とも何うも申し上げようはございません、嘸さぞあなたさまもお驚きだろうと存じますけれども、申し上げんことはお解りにはなりますまいが、旦那さまは鴻の台の鐘ヶ淵から何者とも知れず突き落されて、川の中へ落入りました」

みゑ「えゝ……それはまさア何うした訳で」

と次第を聞くと、丈助がなまぞらを遣つて瞞つかかしました。佞弁ねいべんは甘くして蜜の如しという譬たとえの通りで、誠しやかに遣るのは丈助の得手でござりますから、おぼこ氣ぎのおみゑは眞実の事と思ひ、

みゑ「アゝ情ない、お父さまは去年の十一月、何者とも知らず鉄砲に撃たれ、非業の死を遂げ、稻垣さまのお宅へ参ると間もなく、舅しゅうとう御ごさまも亦斯ういう非業な死をなさるとは何たる事か、私のような因果なものは世にあるまい何うしたら宜かろう」

と声を惜しまず泣伏しますから、丈助は腹の中でしめたと思ひましたが、表面は眞実そうに、

丈「私も御当家へ奉公致し、及ばずながら忠義一団に勤めて居り、今日もお供をして参りながら、旦那様が斯ういう事になりましては、實に何んとも申訳がございませんから、

その悪侍の跡を追いかけましたが、侍は桜ヶ陣の繁みへ逃げ込み、遂に影を見失いどうもお嬢さまに顔向けが出来ませんから、一思いに腹を切つて死のうかと存じましたれども、私の死ぬのは厭いませんが、あなたが入らしつてまだ五六日しか経たないのに、旦那さまの死骸が知れなく成つた其の上に、私が腹を切つて死にますれば、何の為に帰らんかと、西も東も御存じのないあなたゆえ、嘸お困りだらうと存じますると、私は死ぬにも死に切れませんから、兎も角若旦那さまも程無うお帰りでしようから、若旦那の仰せに任せ、手前は主人の供をしながら、当の仇を見遁すとは怪しからん奴だから腹を切れと仰しやるか、手討にすると仰しゃるか知れませんが、何と仰しゃつてもそれまでと覺悟を致して、惜しくもない命を生延びて帰りましたが、私を悪いと思召しますなれば直に斬つて下さいまし

と空涙を零して巧く遣りました。

みゑ「今更外に力と頼む人が無いから、若旦那のお帰りまで待つておくれ、何にもお前の不調法というでも有るまい、皆前世の因縁事だろうから待つておくれ」

と死を止めるを幸いに丈助も其の晩は寝んでしまい、翌日に成りますと、おみゑが不図考え、山を越すと矢切村だが、大方家来の勇助が乳母の処を使つて往つて居るかも知れな

いから、連れて往つて呉れと云うので、是から丈助が供をして上矢切、中矢切、下矢切と段々山を下りてまいりますると、這入口はいりぐちの榎の有る家を見て、

みゑ 「此処だよ」

丈 「此処があなたの乳母の家ですか、思いがけない事でございますナ、此処は私の生れました家でございますが、私は若い時分から道楽を致しましたので、父親おやじも母親おふくろも田舎気質たぎの固いものでござりますから、久離切きゆうりつて勘当され、今では生れた家でも足踏あしごみをする事が出来ませんので、私の母親は屋敷奉公をして來たという話を聞いて居りましたが、私は此家へは這入わたくしこゝれません」

みゑ 「あらまア丁度宜いじやアないか、お前が乳母の子なら縁繫えんつながりの処へ奉公して、忠義に固く勤めたというので、舅御おじごさまもお悦び遊ばしてのお話が有つたから、私が乳母に詫わごとをして上げるから決して心配せずにおいですよ」

丈 「へえ、それは有難うござりますが、中々に固くつて寄せ附けますまい、わるく固ござりますから」

みゑ 「私が詫わごをして上げると云うに、宜いからおいでよ」
と中へ這入り、

みゑ 「お前少し其処に待つておいで……ハイ御免よ、私に乳をくれたおしのの宅は此方かえ、乳母の家は此方かえ」

恭 「私の叔母さんの家は此処だよ……叔母さん何だか綺麗な女が来て、私に乳をくれつて……お前大きな形^{なり}をして乳を呑むと味噌ツ歯になつちまうよ」

しの 「誰方^{どなた}だか知りませんが、どうぞ此方へ這入つてお異んなせえまし、塩梅^{あんばえ}が悪いから立つて往けねえでがんす」

と云うから、おみゑはずツと上へ昇り、

みゑ 「何うもまア見違えるように、お前年を取つたねえ、私だよ」

しの 「はい、何うも眼惡くつて日暮方ははツきり見えませんが、誰方でがんすかえ」

みゑ 「石川のみゑだよ」

しの 「おやマニア何とまア見違え申しやすよう^{でか}に大くおなんなすつてマア、何処においでなせえましたかえ、五六日前^{めえ}に勇助どんが己ア家へ駈込んで来ましてネ、お嬢さまは此方へ來ねえかと云うから、イヤ来ねえと云うと、それはえれえことに成つた、駕籠へ嬢さまを乗せたら何処かへ担いで往ツちまつて解らねえんだ、ハテ何うしたら宜かろうと云うから、随分道も能くねえが、悪い駕籠屋が嬢さまは器量好いだから勾引^{かどわか}しやアしねえかと云つ

たら、勇助どんが男泣に泣くてやく、魂消てハア斯う遣つては居られねえつて駆け出でから、マア待ちなせえと、名主どんも有る村だから、名主どんへ届けて、お役人さまの手を借りてお探しなせえつて、それから毎日松戸流山から小金ツ原まで探しちやア帰つて来て、知んねえつては泣くだよ、私もハア心配して神信心して居やしたが、何処に、エ……あれまア真間の根本といえ巴山を越せば直ぐだよ、知んねえと云うのはどう云うわけだか……おゝ自分の申す事ばかり申してまだ御挨拶も致しませんで、先ず御機嫌好うござえます、誠に御無沙汰ばかりに成りました、私もハア段々年は老るし、旦那さまは御浪人なすつて上州の方へ往かしつたとべえで、お宅が知んねえもんだからお尋ね申す事も出来ねえんでがんすが、あんたには乳を上げたから何だか我子の様に思われて、定めて大くおなんなすつたろう、何うなすつたろうと云つてネ、お案じ申す事がござえますが、ハア見違えるようにおなんなすつてね、マア能く尋ねて下せえました」

一一二

みゑ 「私は親類便りの無い身に成ったのよ」

しの「そうだつてね、お父さまは鉄砲で撃ツ殺されたつて、何とハア魂消た訳でがんすな、お便り少ねえ嬢さまゆえ、嘸哀さざかなしかんべえと勇助どんと話しいして居やしたが、実にお気の毒なわけで、何とも申そうようは有りません、あんな好よいお方さまをね：あんたさま、今まで真間の何処においてなせえました」

みゑ「私が勾引かどわか」されて殺されようとする処を、私の少ちいいうちに許嫁に成つて居る、稻垣小三郎様のお父さまの稻垣小左衛門さまというお方が、御浪人なすつていらしつて、その方に助けられて御厄介になつて居ると、また其の小左衛門さまというお方が、昨日悪者のために鐘ヶ淵から突き落されてしまい、段々死骸を探したが今に知れないの」

しの「ホイヤ、マア、何とマアたまげますナ、情ねえまア、あんたさまは何とハア御運の悪いお方だかえ、併し今に勇助どんが帰つて来たら飛とびッ返るよう^{けえ}に悦びましよう、私も附いて居やすから御心配ごしんぱいなさらねえでいらっしゃいましよ、何うかお供があらばこつちへお入れなせえましよ」

みゑ「乳母ばあや、アノお前に逢うのが間が悪いと云つて這入り兼て、表に立つて居るのだが、何うか私に免じて逢つてやつておくれでないか」

しの「はい、誰どなた方かハア知んねえが、お這入んなせえましよ、お嬢さまのお託なら何んな

人でも免^{ゆる}されねえばなんねえから、まあ這入んなせえましよ」

と云われて丈助はきまり悪^わる氣^げにオズくしながら這入つて参り、

丈「御免なさい」

と云いながら腰に差して居た脇差を抜いて傍^{そば}に置き、慄^{いんぎん}懃懃に両手を突き、

丈「誠にお目にかゝれた義理じやアございませんが、お嬢さまが詫^{こと}をして遣ると仰しやるので、面白ない顔を拭つて参りました、へエ丈助でございます」

しの「アレ此の野郎……この野郎、汝^{うぬ}、何うして此處^{こけ}え來た、お嬢さま、あんた何うして此の野郎を連れて入らつしゃいました、此の野郎、汝、何んだと、面白なくつてお目にかかる義理じやねえと、義理や人情^{ひとじょう}ということを汝^{われ}工知つてるか、此の畜生野郎め、うぬ、お嬢さま是れは私には只^{たつ}一人の悴^こえますが、若い時分から道楽べえぶツて仕様がねえので、あんた、父さまが心配^{しんぱい}して塩梅^{あんばい}が悪く成つたのは此の野郎が二十四の時でござります、婆^ばアや枕元^こへ來うよと云いますから、何だえ老爺さまというと、悴の丈助は迎も汝^{われ}がの力にはなんねえ駄目な奴だから、己^{おら}ア死ぬと汝^{われ}工困るべえと思つて金工二十両貯^{とて}もて置いたから、此れでちツとベ工、田地^{でんじ}イ買つて己^{おれ}死んでも葬式などを立派にしねえでも宜いから、汝^{われ}工食い方に困らねえようにするが宜^え工と、後の事を遺言しやすから、私^{わし}イ泣

き入つて居る中に、能く寝り就いてしまいやすと、この野郎が裏から這入つて立聞いしてえたもんと見えて、這入つて来やアがつて、その金工引攬つて逃げ出す音に目工覚して、後姿を見れば此の野郎でがんすから、魂消て口い明いたつきり、おツ閉ることが出来やしなかつた、すると老爺さまが怒つて早く名主どんのお帳へ付ける、親の首い縄ア掛ける餓鬼だと云つて久離切つて勘当してしまうと、父さまが口惜しがつて、只た一人の忤だアが、己ア別に悪い事もしねえのに、何うしてあんなやくざな餓鬼が出来たか、もう縁側の端ッ辺へも寄付けてはなんねえと云いやしたが、お嬢様が連れて來たアだから逢うだけ逢つて遣るから、サツサと出て往け」

丈「へイ、何とも言訳の申そようよはざいません、孝行のしたい時分に親はなしという比喩の通り、私が御勘當に成りましてから、お父さまはおかくれに成つたと聞き、一人のお母さまゆえお目にかかりたいと思つて居りましたが、私が改心を致さなければお詫ことは出来ないから、屋敷奉公をして身を立てようと思いまして、金森家の御重役稻垣さまへ奉公致し、真鎰巻でも二本差し、奉公大事に勤めて居りますると、旦那さまには御運悪く御浪人なすつて、実は此処へお伴れ申したいのですが、お母さまの前へ対し此方へ足を踏み込むことが出来ないので、真間の根本へ来て居りましたが、商売の買出しから、旦那さ

まの漱ぎ洗濯まで丹誠して、御介抱申し上げて居りましたゆえ、丈助や、手前のお蔭で己は助かる、再び屋敷へ帰参することも有れば、屹度侍に取立つて遣ると仰しやつて入らつしやる事は、お嬢さまも御存じでございますが、昨日私がお供をして鴻の台へ参りましたところ、何者とも知れず旦那さまは鐘ヶ淵へ突落され、其の儘死骸は知れず、お嬢さまが乳母を使りたいと仰しやるからお供をして来て見れば、私の実家ゆえ、這入りかねて居りますると、詫ことをして遣ると仰しやいますから上りましたので、お目にかゝれた義理じやアございませんが、眞に善人に成りましたことは、お嬢さまが御存じでございますが、何うかこれで御勘弁なすつて下されば、これから心を入れ替えて、お側に居て孝行を尽したいと思ひます」

みゑ「舅御さまも、丈助を家来とは思われんくらいと仰しやるほど辛抱人に成った事は、私が請合うから、何うか堪忍してやつておくれ」

しの「はい、汝は本当に辛抱人に成ったかえ、何んとマア魂消たな年は取ろうもんと、汝はもう幾歳に成る」

と指折かぞえて、

しの「今年はもう三十一に成つたえ、マアどうもネ本当に殿さまが家来とは思わねえと云

うくれえの辛抱人に成つたか、おいまア他の者が詫^{ほか}ことをしたつて勘弁は出来ねえんだが、御主人の嬢さまのお詫ことだから、父さまの位牌^{いへい}へも詫ことをしてやり、名主殿処^{どをこ}のお帳も消すようなことにしようが……そう云えば尤^{もつとも}らしくなつたナ、肩巾^{でか}が大きく成つてや、少し様子が死んだ父さまに似て居る、立つて見ろや、少し坐つて見ろ、一廻り廻れや」

といろ／＼なことを云いまして、親だから直に騙^{だま}されました。その内勇助も帰つて来ましたから、丈助は得意の僕^{ねいべん}弁を以て、是からお前さんと共に忠義を尽しましよう、若旦那さまがお帰りになりましたらば、石川さまと旦那さまの讐^{かたき}を探して仇^{あだ}を報いますよう、及ばずながらお互に若旦那とお嬢さまへお力添^{ちからぞえ}をして、若旦那のお屋敷へ御帰参の叶うように心掛けようではございませんかと云うと、勇助は正直な人ゆえコロリと瞞^{だま}されて、丈助という人は眞実な者と思つて居りまする内に、二日程経ちますと、東海道藤沢から稻垣小三郎より父小左衛門へ宛てた書面が届きましたゆえ、披^{ひら}いて見れば、藤沢の煙草屋に逗留しているが、刀の手掛りが有つたから段々探すと、去る豪農の方にお刀のある事が分つたれど、これを手に入れるには金子が二百両なければならんから何うか早々金子二百両だけ丈助に持たして届けて下さるように、三日程遅れると手に這入りませんという意味の手紙でございました。

二十三

急な事ゆえ只今と違い、二百両という大金の才覚は容易に出来ませんから、丈助も心配して、

丈「己に女房があれば、夜鷹に売つても金の才覚をしようもの……あゝ二百両という大金を才覚のしようは無し、このお刀が手に這入らなければ若旦那は生涯埋れ木にお成りなさるゆえ、此処で取損なうは残念なことだ」

と誠しやかに申します。これはおみゑが小三郎の手筋を知りませんから、ひそ 窺かに大野惣兵衛と謀しめしあわせ、小三郎からの書面こしらを拵えて送りましたので、勇助は馬鹿正直の人ゆえ大層氣を揉み、母も心配致しましたが、金の工面が出来ない。するとおみゑが、

みゑ「何うか私を売つて其の身の代しろとやらでお刀を取り戻し、お金を才覚して若旦那へお手渡しをして、其のお刀が手に入るようにしてあげて下さい、併し女子はいがそういう処へ身を沈めては、亡なられたお父さまには済まないが、おつと 良人のためになる事なれば左のみお叱りもあるまい、のう勇助」

と涙ながらに私の身を廓へ売つてくれろと頼みに、

勇「ハイ／＼、わたくし私が附いて居りながら左様の事をおさせ申しては、御両親さまのお位牌に對して私が済みませんが、旦那さまのためには替えられません、左様なら手前が田原町に居りました時に、裏に居た女銜のゼゲン小市こいちという男を存じて居りましたから、これへ参つて談をいたして見ましよう」

とはから勇助が出掛けで參り話をすると、丁度山口屋で女子こどもが欲しいというので、それに小市はおみゑの形恰好は精しく存じて居りますから、直に承引きすくいひ、先方でも二つ返詞へんじだろうが、金は幾ら入るのだと聞くから、二百両入るというと、兎も角お連れなさいといふので、勇助は立帰り、此の話をして、是れからおみゑは乳母のおしのにも暇いとまごい乞うけひをして駕籠に乗り、泣なきの涙で別れを告げ、丈助勇助が附添いまして、江戸の田原町の小市こどもの手から山口屋へ参つて話をいたしまして、玉を見せると、品といい器量といい、起居振舞たちいふるまい裾捌すそばき、物の云い様まで一つも点の打ち処どこのない、天然備わつた美人で、山口屋の主人もお侍のお嬢さまが夫のために自分から身を売りたいという心に惚れて、宜うがす、そういう訳なら判はんだい代や金利を引かず、手取二百両に成るように致しましたと、親類得心の上で相談が附き、証文を致し、二百両の金子を丈助に渡し、

みゑ 「若旦したた那小三郎さまにお目に懸つたらば能くお伝ことづけ言をしておくれ」

と手紙を認めて小三郎に送る、其の文面にもお刀をお手に入れるために、済まない事とは知りながら、お断りも致さず、私は自儘に泥水に身を沈めましたが、一旦斯様な処へ這入りました身の上ゆえ、たとえ年が明けてもお側に参ることは出来ますまいけれども、親族便りのない身の上を不便ふびんと思召し、お小間使いなりとも、御飯ごはん焚たきなりとも厭いといませんから、年季が明けた暁はお目を掛けて下さいまし、殊に父藤左衛門を討つた仇は何者か存じませんが、相手は侍に相違ないと存じますから、とても女子の細腕で仇を討つことは出来ませんから、何うぞお助太刀下さるように是のみ頼み入るという処の、細かい手紙でございます。これへ金子を添えて渡すを受取り外へ出ましたが、勇助は気抜がしたようになります。これへ金子を添えて渡すを受取り外へ出ましたが、勇助は気抜がしたように成りまして、丈助と二人で葛西の柴又の帝釀うしろうの後の土手へ掛り、四丁ばかり参つて、なだれに下りると下矢切わたしの渡わたでございますが、田舎の渡しは滅多に渡る人が無いから、夜に入つては陰々として居ります。勇助は気抜のしたようになり、

勇 「丈助さん、イヤ何うも私は何んだか手の内の玉を取られたと云うのは此の事かと思うよ、お少ちいさい時分からお守をしただけに別れが辛うございました」

丈 「然うだらうね、オイ船頭さん船を矢切へ遣つておくれな、船頭さん」

百 「船頭は居ましねえよ」

勇 「居なくつちやア困るな」

百 「イヤ文助さん」

丈 「イヤ、これは喜代松さん、船頭は何処へ往つただな」

喜 「船頭は曲まがり金がねへ馬鹿囃子の稽古に往つただアよ」

丈 「それは困つたが、お前船を漕ぐ事が出来るかえ」

喜 「対岸むこうへ往くぐらいは知つてゐるだが、一人で往くのも勿体もつてえねえと思つて人の来るのを待つていた処だ、丁度宜いからお乗んなせえな」

丈 「じゃア勇助さん乗ろう」

と是から船に乗ると、百姓もやいが繫縄ほどを解いて棹さおを揚げて、上手うわての方へ押し出し、船杭ろぐいを沾しめしてだんくと漕ぎ始めたが、田舎の渡船ぐらい氣の永いものは有りません。

喜 「宜い 塩梅あんべえに天氣イ能く続くね」

丈 「お前は何時までも若いね」

喜 「モウ年とを老じよろうつちまつて仕様つけようがねえだ、若え時分に一緒に松戸の樋の口くちへ通う時分にやア一晩うまいでも女郎じよろう買うけえをしねえと気が済まねえで、一度などは雨あめが降つた時に蓑みのを着て往つ

た事が有つたが、まるで門訴もんそでもするような姿で、お女郎買に往つたツケが、若え時分と
いうものは仕様わざがねえもんだね、今じやアお前の婆さんめえが悦んでるぜ、恃は固く成つて私
が仕合せだつて、無えもんとした恃が帰けえつて来て儲かりましたつてよ、正直な婆さまだか
らね」

丈「ハア、若工わけ時分には散々お母ふくろに苦労をさせました：勇助さん此の水を御覧なさい、能
く澄んでるでしよう、透通すきとおつて底が見えるぐらいだのに、旦那さまのお死骸ばからが何処を探
しても知れねえといいうのは不思議で、其の癖出なくつても宜い百姓の清助の死骸あがばかり揚あが
つたから、私は何うも何んだか水を見ると心持が悪くなりますよ」

勇「然うだらうね、成程澄んでる」

丈「アヽ、あんな大きな鯉が泳いでる」

勇「ドレ何処に」

「アツ」
とうつかり水を見る油断みすまを見済し、後から丈助が勇助の腰をドント打つて川の中へ突つきお
落おちとす。勇助は

「アツ」

と云いながら水中へ落おち入りました。一刀流の剣術遣いの家に旧く勤め免許ふるをも取つた腕

前ゆえ、討合うちあいでは敵かたわんが邪魔かなになるのは此の勇助、泳ぎを知つて居るかと聞くと泳ぎは徳利とくりの仮声こわいろでブク／＼だというから、何んでも水で殺すよりほかに仕方が無いと決心して、矢切の渡場わたしばで喜代松とめぐらいう船頭と共謀くみになつてゐるとも知らず、迂闊うつかり乗つた勇助を、川中でドブリを極めたのでござります。

喜「エー、うめえな、斯う云う事でなければ錢儲けはねえな」

丈「早く急いで漕ぎねえ」

と向岸むこうぎしへ急ぎますと、勇助は泳ぎを知らん処ところでは有りません至つて上手で、抜手ぬきで

切つて泳ぎながら、

勇「己を欺いて水中へ落し入れやアがツて、此の大悪人め、船を返せ／＼」

と追掛けでまいるのを見て、船頭の喜代松は真青まっさおに成り、

喜「泳ぎを知んねえ処か……これは大変てえへんだ、上つて来りやア殺されるかも知んねえ、お

前能く聞いてから遣れば宜かつたのに」

丈「こん畜生、ナニ汝助うぬけて置くものか」

といふうち勇助は遂に船まで泳ぎ附こべりけ舷あへ手を掛けて船を上ろうとしましたが、上つてまいれば忽ちに勇助のために斬殺さばされますので、丈助が鏑さびた一刀を引抜き、勇助の頭脳あたま

へ割わりつ附つきける。

「アツ」

と云いさまで手を放し沈みましたが、船底を潜くつてまた此方こちらの舷わんへ手を掛け上りに掛けられたが、今は丈助も死物狂いでござりますゆえ、喜代松の持つて居た水棹みさおを取つて勇助の面部めんぶつを望み、ピューと殴る。其の内船は漸々ようやく向河岸むこうがしへ着きましたが、勇助はまた泳ぎ付き、舷わんへ手を掛け、船の中へ飛上とうとする処を、喜代松に水棹を以て横に払われ、バタリと倒はげれたが、また丈助を狙つて上つて参りますする処を、丈助が狙い打うちに切つけ、たゞみかけて禿かぶたる頭の脳のうずい脢のづを力に任せて割附ける。

勇「アツ……ア、おのれ丈助、能くも己かを欺いて斯かる処へ突つき入れたな」

と云いながら死物狂に成つて上のぼる処を、水棹で払われ、また続いて斬り掛けました事ゆえ、勇助も年が年なり、数ヶ所すかしよの手傷に身体しんたい自由ならず、其の儘船こうがの中へ転ころり込み、身みを震わし、それなりに成る、上のぼへ乗しかゝり無茶苦茶うぢきに止めを差しました。折から朧月おぼろづき夜よゆえ向河岸まで能く見えます。

丈「オヤ喜代松、気が利かねえじやアねえか、サツサと手伝つて殴れば宜いのに、茫然ぼんやりして居やアがつて間抜だなア」

喜「己だつてハア魂消た、泳ぎを知んねえどこじやアねえ、あのくれえ泳ぐものは此の村にも沢山ねえ程上手だから、上つて来ればお前も己も打つ斬られると思つたら、魂消ちまつて棹を取ることも何も知んねえだよ」

丈「えゝ、大きな声で喋るな、此の血だらけの死骸は他に仕方がねえから、河中へ漕出し深水へ沈めにかけるより仕様は有るめえが、何か重い物を身体に巻附けたいと思うが、あの団子を売る葭簀張の処に力持をする石が有るから、縄も一緒に探して持つて來や」

喜「えゝホウ、実におツかねえたつて何うすべえかと思つてたよ」

丈「愚図々々喋らねえでも宜いから早くあがれよ」

喜「おゝ」

と喜代松が岸へ上りますと、先程から此の葭簀張の処にノソリと立つて居たのは金重の弟子の恭太郎という馬鹿な男で、と見て喜代松は憮り致し、喜「誰だ、エ、誰だ、そこに居るは誰だ」

恭「おいらだよ」

喜「丈助どん／＼」

丈「えゝ」

喜「おめえら^{うち}宅の恭太兄いが彼処に立つてゐるだアよ」

丈「ナニ恭太が、何うして来やアがつたか知ら、恭太」

恭「えゝ」

丈「手前何うして此処へ來た」

恭「己^{おひ}らはあの草団子を喰いてえと思つて叔母さんに錢^{おあし}を貰つたから買^{かい}に來たら、日が暮れて夜はねえツてえから塩煎餅買つて、先刻^{さつき}から喰いながら此処に立つてたのよ」

丈「手前何^{てめえ}か見やアしねえか、此の伯父さんと己^{おひ}と種々^{いろく}船の中^{なか}で訳^{わけ}が有つたんだが、手前そんな事は氣が附くめえのう、何も見たんじやアなかろうなア」

恭「何だか^{おら}ア知らねえけど、勇助さんという老爺^{おじい}さんを殺した事は知つてゐる」

丈「馬鹿だつて油断はならねえなア」

喜「だから己^{おひ}が云わねえこツちやアねえ」

安「御免下さい……御免下さい」

しの「はい誰方」

安「御免下さい」

と上り端に両手を突き丁寧に辞儀をいたし、

安「先達て一寸おたずね申しましたが、春木町の紀伊國屋の手代安兵衛でござりまする」

しの「おゝ然うだつけや、誠にお見それ申しましたよマア、構わず此方こつちへお上んなせえましよ」

と云われても前に怖氣おじけが附いて居りまするから、怖こわ々台所口から上つてまいり、

安「先達は御立腹が解けませんで私は何ういたそうかと存じました処、お寺さまのお名前だけ承わりましたから、直すぐに法泉寺さまへまいりまして、私が主人の代だいに御法事をいたしましたが、それで仏さまの御立腹が解けましたか解けませんか存じませんけれども、主人の心だけの御法事御供養をいたしました事は、定めてお聞及びでもございましょうが、何うかこれで一つ御勘弁を願いたいのでございまする」

しの「はい、村の者が江戸の大でえじん尽つくだか知んねえけど、豪えれえもんだ、田舎には沢山たんとねえ

法事だつけツて、村の若えもんや子供を招ばつて餅い撒えたり、錢い撒えたりして、坊さまを夥多呼んで、大した法事だつて、それから二度めに法事いした時には、中山のお上人さまを招ばつて御祈祷をしたてえから、紀伊國屋でも魂消て若草の法事いするような心に成つたかえと思えば、私も少しは胸が晴れやしたよ」

安「誠に有難うござります、就きましては段々と伊之助の足も痛みますので、お医者が何んでも足を切らんければ癒らんと申しまするゆえ、主人も心配致しておりますが、男のことゆえ大主人は諦めましても、只た一人の忤の事ゆえ、母親が諦めませんで、叔母さんのお心持が解け、怨みが晴れなけりやア仏さまの怨みの晴れようはないわけだと申しまするので、ヘイ、何うか一つ叔母さまのお怨みをお晴し下されば誠に有難いことゆえ、実は叔母さまが私の方へでも入らしつて、病人に会つて下さるようなお思召になれば、病気も全快致しましょうかと存じまして、続いてお詫ことに出ましたのでござりまするが、御勘弁に相成りまするならば何うか一つ願いたいもので」

しの「ナニ、そんなに謝らなくつても宜えよ、先達はお前さんにえれえ事を云いましたが、若草は私のためには一人の姪で、実は私の兄は鍊鑛治をして江戸の湯島に居やしたが、離れてるから私も近しく往きもしねえけど、其の兄の一人娘で、死ぬ時に私へ遺言して、

汝の娘にしろつてえから、私も彼にかゝつて、死水を取つて貰うべえと思つてゐる只た一
 人の若草に、あゝ云う死に様をさせたは伊之助ゆえと思うから、私も煮えるように肝が焦
 れてなんねえだが、お前さんより他段々の話で私いだけは勘弁もしようけんど、死んだ若草
 は勤めの中で伊之助さんより他に男はねえと思え詰め、夫婦約束の書付まで取交せ、末は
 必ず斯うというわけになつてたのに、伊之助が無沙汰で女房にようぼうを持つて、其の上手紙一本
 よこさねえで、吉原のよの字も、若草のわの字も厭だというような不人情な心なら、己が
 死ねば三日経たねえ内に伊之助を取殺すつて、身を振ふるつて口惜しがつたよ、その苦しい中
 で伊之助さんの胤の赤子たねねつこを産んだが、そういう中で産れた赤子だから育つわけはねえか
 ら、一聲ふたごえみごえ三声泣いて直ぐにおツ死んでしまつた、それを見ると若草は血が上あがつておツ死
 んだから、死んだ若草に死んだ赤ん坊を抱かして早桶へ入れて、此の矢切村へ持つて来る
 までと云うものは、私がハア船の中へぶツ転がつて泣くほど口惜かつたから、実は私も祈
 りましたが、おまえの方で法事供養をするくれえに思わば、私は勘弁もしようが、若草は
 成仏が出来ぬから、若草に詫いするだらば他に仕様は無ねえが、若草の浮うかぶようにして遣
 つてくんなさい」

安「へゝ何ういうことに致しましたらば浮ぶようになりましよう」

しの「夫婦約束を反古にして、起請というのは己ア知んねえが、熊野の権現さまへ誓を立てる」と烏ウ三羽死ぬとかいう話を聞いてるが、それだから死んだ若草を生きて居る心で、伊之助さんと若草の位牌と婚礼して、若草に沙汰なしで持つた嫁子を離縁してくんなせえまし、影も形もねえけども、口惜いと云う執念は残つてたから、私から若草の執念を晴らすようにしべえから、若草の位牌と婚礼の盃をしてくれたらば、私も勘弁をしましようよ」

安「ハイ、お位牌と婚礼を致しますかナ……成程、如何にも御尤さまでございますから、何うか工風を致しましよう、兎に角、主人へ話して見ましょう」

しの「兎に角と仰しやつても、また何時あなたがおいでなせえますか知んねえから、私は今でも宜いんでがんすが……」

安「それは誠に恐れ入ります、斯ういう事は早い方が宜しい、実は明日か明後日是非とも足を切らなければアならなくなつて居りまする事ゆえ……左様ならば直においでを願いましよう」

とはから田舎氣質のかたぎの律義な婆アゆえ、若草の位牌を背負つて安兵衛の跡に従いて堀切の別荘へ参りました。安兵衛は直に宅へ連れ込もうかと思いましたが、お雪の兄の岡本政七

が来て居りまするので、極りが悪いから、おしのを隣の家へ預けて置き、安兵衛だけ這入りました。

主人「おや／＼安兵衛御苦勞、明日のういよ／＼先生が伊之助の足を切るんだが、親類立合でなければ切らんと云うので、傍^{そば}で見るのは厭だけれども、仕方がないから船で出掛けた來たが、お前若草のお墓参りにでも往つたのか」

安「へえ、先達てあなたも彼ア云う怖い夢を御覧なさり、また何処で伺つても、御鬪^{おみくじ}を取つても死靈と生靈という処は怖いように中つてますナ」

主人「本当に怖いようだ」

安「私は現に其の婆さんの怖い姿を見た上に、薪割^{ボツツ}を打付けるとまで立腹したんですが、その婆さんを一目見たので祈つてゐ事が解りましたよ、婆さんの怨みも死んだ花魁の恨みも晴れさせすれば、若旦那の御病氣は御全快になりましようと思ひ、御足^{おみあし}を切らぬようによ種々考えまして、怖々ながら今日婆さんの処へまいりますると、先達ての大した法事の様子も婆さんの耳に這入つて居りまして、大きに心もちが解けた様子ゆえ、段々と話を致しました処が、己は勘弁もするが、死んだ若草の怨みは晴れないから、若草が生きている積りで位牌と婚礼をして貰いたい、それから若草花魁と若旦那とは夫婦約束の書付

まで取交せた仲だのに、書付を反故にし、若草に無沙汰で他より嫁を貰つたのが立腹で死んだのだから、其の嫁を離縁してしまつて、花魁の位牌と杯さかずきをしてくれたらば、若草が成仏するだろう、私の怨わしのうらみも晴れるというのですが、是は田舎氣質の婆さんだから屹度晴れるかも知れませんよ、お呪まじな咀くさえ利きますから、実はその婆さんと一緒に連れてまいりました処、万年町さんが来て居らつしやいますから隣の彌兵衛やへえさんの宅たくへ婆さんを預けて置きましたが、御嫁子およめごを離縁なすつて、お実家さとへお帰しになりますれば、若旦那おみあしの御足おひあしを切らすとも御全快になりましようと思ひますが、如何いかがでしよう」

と云うと、主人宗十郎は氣色けしきを変えて怒りまして、

主「コウ、安兵衛どん、お前は何歳いくつにおなりだ、え、何歳いくつになるよ」

安「へえ、わたくし私は四十五歳そろばん」

主「ふざけなさんナ、おまえは十露盤そろばんを取つたり帳面あてびんを扱つたりさせられれば一廉いつかどの人間だけれども、人を馬鹿にするも程が有るじやないか、位牌と婚礼をしろつて馬鹿へへしい、そんな事を眞まに受けて此処まで連れて来る奴もねえもんだ、そんな事はいかねえから矢切の婆さんを帰してくんnaよ」

安「へえ……どうもそれが帰すと云うわけにはまいりません」

主人「なにが参りません、安兵衛どん能く考えて見な、万年町のお雪は子供の時分から私の方へ嫁に貰う約束をして置いたものだ、それを悖が自分の勝手に女郎と夫婦約束をしたのだから、お雪の方で怨んで宜い筋だ、殊に去年の秋から来て居て、彼の通り親切に悖の看病をするのは何うだえ、まだ年もいかないのに塩物しおものだち断をしたり、断食だんじきをして座敷の内でお百度を踏んで祈念を凝すこら貞信の心を、神さまも守つて下さるかして、あれがお百度をあげる内は伊之助がトロ／＼寝られるという、あんな結構な嫁を何咎なにとがも無いのに離縁して、影も形も無い位牌と婚礼をするような馬鹿々々しいことを、婆さんに云われたとて、真に受けて帰つて来るのは余程間抜な男だ、なりませんから帰してくんなさい」

安「重々御尤もでござりますけれども、先達て貴方も夢を御覧なすつたでしよう」

主人「酷く疲れた時にやア夢を見ます、怖いと思うから夢などを見るのだ、なりませんよ」

安「只今に成つて婆さんに帰つてくれると申しますと何んなに怒おこるか知れません、私の喉笛のどぶえへ喰い付きそうな権幕ですから」

主人「婆さんに喰い殺されてしまいなさいよ」

安「これはどうも……私も悪氣わるぎで致しましたわけではありません、ねえお母さま」

母「申し旦那え、安兵衛だつて悪氣でお婆さんを連れて来たのではありません、先達のお

伺もあゝいう事に出たし、斯うじやないかと私も思つて居りますくらいですし、禁厭も有りますから、義理をいえば貴方の云う事は御尤もでござりますが、禁厭同様の積りで験しに雪の処を仮に離縁として、禁厭に遣つて御覧なさいませんか」

主人「お前までが然ういう老耄^{もうろく}したことを云いなすつては困るよ、それだからお前が皆な彼様^{あんな}な道楽者にしたのだ、チビ^く私に隠して遊びの金までお前が遣んなすつたのだ」母「何んぞ^{あれ}といふとあなたは私の所為^{せい}に成さいますが、当人が病身だと云つて、十九の時にあなたが彼を連れて往らしつて、あなたが芸者を買つたと云うじやア有りませんか、あなたがお若い時分のお馴染^{なじみ}の、柳ばしのお糸^{いと}という婆ア芸者を呼んだじやア有りませんか」主人「そんなことを今云わないでも宜いから、矢切の婆さんを帰しなよ、そうして斯んな詰らん事でお雪を離縁する事が出来るかえ、私の悴の病気が癒したいからお雪を離縁して、位牌と婚礼させるなんてえ馬鹿^{ばっか}しい事が、好い年をして己の口から万年町の兄に云えますか、私には云えない、本当に馬鹿な話だから、サツサと帰しなよ」

安「へイ驚きましたな、帰れと云うのが一番怖いので伊兵衛お前然う云つておくれな」

伊「私には云えません、何ういたしまして、私が叔母さんを突ころばしたんですからな」

主人「ぐずく云つてずに早く帰してしまいなよ、誰でも宜いから早くそう云いなど云う

に

安 「誰だツて……困りましたな」

と皆心配致して居りまする処へ、襖を明けて這入つて参りましたは岡本政七でございま

す。

二十五

政「お父さん、誠に御無沙汰を致しました」

主人「おや／＼これは毎度また遠い処を御親切にお見舞なすつて下さり、誠に有難う存じまする、追々陽気になりましたな、船でおいでではあらうが、遠い処ゆえ中々容易なことでは有りません、毎度また結構なお土産を有難うございまする、何んだかとうとう足を切ると云うので、厭々ながら出て参りました、私は血など出るのを見るのは大嫌いだが、仕方無しに出て参りました」

政「飛んだ御難病で嘸御心配な事でございましょう、少々お父さまにお願いがございまする、私のためには只た一人の可愛い妹でございますから、伊之助さんのような人に添わし

て置く気は有りませんから、是までの御縁と思召しまして、今の内ならば何うでもなりますから、何うぞ御離縁を願います」

主人「へえ……それは何んで離縁をしろと仰しやいます」

政「何うも伊之助さんに添わして置くわけにはいかないので」

主人「それは何の御立腹で」

政「何の立腹もありませんが、足を切つてしまふ不具かたわの亭主を妹に持たして置くのが厭でございますから、何うか満足の人間を亭主に持たせたいのです」

主人「これは怪しからんことを仰しやる、それはお前さん余りな事を仰しやりますじやアございませんか、お雪は私の處へ遣よこしてしまえば、其の家を家とするが女の道で、左様そうじやアありませんか、最早貰もらつてしまえば私の娘だ、たとえ兄にいさんでもお前さんの勝手に離縁は出来まい、また私の方でもお雪に離縁が出せないか考えて御覽ごらうじろ、出せないじやア有りませんか」

政「出せないと仰しやつたつて私は嫁に遣したんじやア有りません、只伊之助さんの看病に遣したんです、不具の亭主などを持たしては置かれません」

主人「そんな事を云つたつて世界の人に不具は有りませんか、夫婦に成つてから亭主が腕

を折るとか足を挫くとか、眼が潰れるとかする度に夫婦別れを致しますかえ、私は出しませんよ」

政「出すも出さんも有りませんよ、私は連れて参ります、媒介人は有りますが、まだ結納の取替せも婚礼も致しません、只許嫁の誼みで病気中看病に遣しただけです、合せ物は離れ物だから私は上げる氣は有りません、是でも私は万年町の名前人だから、私がなんと云えば破縁になるので、当人が何と申そうとも私は上げられません」

主人「イエ私は出しません」

安「まあ／＼宜うござります、旦那さま、まあお静かになさいまし」

政「私は何処までも連れてまいります」

主人「イエ何うしても私は出しません」

安「旦那まああなたは彼方へ、万年町さん、どうも主人は彼の通りな昔氣質の人物ゆえ、無一国な事を申しまして、誠に相済みませんが、どうか一つこゝの処だけを……」

政「此処の処だけも何も有りません跛足の亭主などを妹に持たしては置かれません、本当にお前さんの処へ縁付けて置くと、親類中に祝儀不祝儀の有つた時に、ピヨコ／＼跛足を引かれて来られちやア、私が困りますよ」

主人「籠^{べらぼう}棒^な……然^そういう了簡なら猶出せません」

政「そんなこと言ツたつて斯んな処には置かれませんよ」

安「まア〜彼方へ」

とお父さんが居ては面倒^{ゆえ}宥^{なだ}め透^{すか}して船へ乗せ、本郷春木町へ帰しました。そこが女親は甘いものでござりますから、

母「安兵衛や、お父さんが義理立をするは宜いが、只^{たつ}た一人の悴^{かたわ}を不^ふ具^ぐにしても嫁が出されないと腹を立つも義理でございましようが、悴が死んでも嫁は出せないとお云いだが、悴が死んで嫁^{むこう}が入りますか、本当に、併し私は伊之助に勧めても去^{さりじよう}状^{じよう}を書かせようと思つてる処へ先方^{むこう}で連れて帰ると云うのは幸いだ」

と母親は伊之助の枕元へ参りましたして段々説得致しますと、伊之助は去状で此の苦痛^{のが}が免^めれるなら、百本でも書きたいくらいでござりますゆえ、そんならばと云うので三行半^{みくだりはん}ゆえ訳は有りませんから、サラ〜と書いて安兵衛の手に渡すを受取り、政七の居る座敷へ出てまいりました。

安「万年町さん、エ、仰せの通り若主人伊之助に御離縁状を書かせて持つて参りました」と差出すを受取り、

政「お父さんが出さないと云つても伊之助さんさえ離縁状を書いて下されば、それで宜しい」

安「いえ、何うか是はソノ当人の病氣が全快致しますまでのホンのおまじない同様の訳でござりますから、当人の病氣が全快致しました上は、又何の様にもお話合を附けます事ゆえ、何うか御立腹なく願います、実は当人も出す氣のないところを無理に勧めて書かせましたのですが、是は只仮にホンのモウ反故同様のもので」

政「何をいうのだ安兵衛さん、お前も立派な人じやア有りませんか、離縁状を取らなければ他わきへ妹を縁付けることが出来ませんから貰う離縁状、反故には出来ません、冗談云つちやアいけませんよ、お前さんの方では病氣のなお癒るまでとか、おまじないの為とか思召しようが、当方こぢらでは眞面目に取りますから左様そう思召し下さい……雪や、雪、一寸ちよつと出で」

雪「はい」

と広間で不動さまへお百度を踏んで居りましたが、先程からの様子を薄々聞いて居りましたから、涙ぐんで出てまいり。

雪「お兄あにいさま、お呼びなさいましたか」

政「はいお出で……安兵衛さん妹の道具は後から取りに遣します、船が待つて居りますから直に此の衣服で連れて帰ります……雪、伊之さんの処から離縁状が出ましたから直に宅へ帰りましょう、其の衣服でおいで、着物を着替るのも面倒だから」

雪「はい……私は何で御離縁になりました」

政「何だつて離縁状が出たのだ」

雪「何の咎で私は出されますのでございます」

政「何の咎もないが伊之さんの気に入らんから出したのだろう」

雪「お気に入らんと仰しゃつても、私は是まで御看病をいたし、今になつて御離縁をされますような覚えはございませんのに、御離縁になりますというは何ういうわけでございますか、悪い廉がござりますならば幾重にもお詫を致しましようから、貴方からも若旦那さまへお詫をなすつて下さいまし」

政「詫」とも何もいらない、もう離縁状を取つちまつたから仕方が有りませんよ、去られた家には片時も居られるわけのものでは有りませんから、一緒においでなさい」

雪「イエ、私は参りませんよ」

政「そんな事を云つては困りますよ、あんな不具のかたわの亭主を持たしちやア置かれません」

雪「大きなお世話でござります、不具でも何んでも私の亭主でございまする、あなたのお世話には成りません、来年は必ず全快致しますよ」

政「そんな事を云つては兄さん[あに](#)が困りますよ」

雪「あなたのお困りなさるのはあなたの御勝手次第で、御離縁をお取り遊ばすなら何故一応私に話をなさいません」

政「それは重々私が悪いけれどもね、種々世間の義理ということが有りますから、さアおいでよ、不具の亭主なぞを持たして置かれますか」

雪「私は参りません」

政「そんな事を云つては困りますよ」

雪「困ると仰しやつても、あなた私が当家へ参りまする時に何と御意遊ばしました、お前は伊之さんのようなあんな善い立派な亭主を持つて誠に仕合せだ、伊之さんは男も美し、才氣の有る人ゆえ、それだけの働きが有るから、他に妾ぐるいをなさるまいものでもないが、たとい何んな事が有つても惰氣りんきをして離れるような事があれば、二度と再び顔を見ない、紀伊國屋の家を出れば兄妹きょうだいではないとあなたが御意遊ばしたことが有りまするし、それに女は縁付かたづいてまいりました家を家とするが女の道だと仰しやつたお言葉を守つて、

私は御看病をして居りまするものを、悪い廉も無いのに去られるわけは有りません、もし悪い廉がござりますなら幾重にもお詫をいたしますから、何うか其の御離縁状を若旦那にお返しなすつて下さいまし」

政「書付を返すというわけにはまいりません、もう取ツちまつたんだから」

雪「あなたが御勝手にお取んなすつたので、お父さまも私を出す思召はない御様子なのを、あなたが無理に喧嘩仕掛をして書付をお取んなすつた事を私は薄々存じて居ります」

政「安兵衛さん、彼方あつちへ往つて下さいよ、お前さんが其処に居ちやアいけません……お前

が此処に居ると伊之さんの病氣が癒らんのだよ」

雪「いえ、私は一生懸命で不動様へ御願ごがんがけ掛をして居りますから御全快になりますよ」

政「ナニお前さえ此処を出てしまえば、伊之さんの病氣は癒ると云うのだよ」

雪「いえ、私は死んでも此家は出ません」

政「困りますねえ、お前は今まで兄さんの言葉を背いたことはないじゃアないか、第一私

の恥にもなり、お母つかさんも心配なすつて入つしやるから、伊之さんばかりが男じや有りません、立派な処へまた縁附けるから一緒に往つてくれないと私が困りますよ」

雪「参りませんよ」

政「何故そ�だ」

雪「今まであなたのお言葉を背いた事は有りませんが、今度に限つて私は背わたくしきます、出ゆて行けと仰しやるのは御無理でござりますから」

政「困るじやア有りませんか」

雪「困ると仰しやつても私はもう七月なつに成りますもの」

政「それは知つてるよ、知つて、云うんだから、兄さんが重々無理だが、能く考えて御覧、お前が此家こゝに居ると伊之さんの病氣が癒らないから、お前を出しちまつて、死んだ花魁の位牌と祝さかずき言の真似事まごごとするとか、婚礼の真似事をすれば癒ると云う事なのだよ、けれどもお父さんは義理が堅いから、仮令たとい伊之助は死んでも嫁の離縁は決して出来ないと云うのだから、お前が何処までも剛情を張つて、これなりで居れば、お前は宜かるうが、伊之助さんの病氣が癒らないで足を切つたら何うする、お前もそれ程大事な亭主の病氣が全快しないのではいけますまい、お前の悪くないことは私も知つて居る、寝る目も眠らずに看病をして居るくらいのものに出て往つてくれると頼むのは、實に悪い、わたくし私が悪い、けれども、何うしてもおまえを連れて帰らなければならぬ私の義理に成つて居るのだよ、お父さんが悴は死んでも出さないと仰しやるからつて、私はおまえを置いては往かれませんから、

私のいう事を聞いてくれなければ、宜うござります、兄さんは帰りがけに船の中から河の中へ飛び込んでしまいます、それでも宜いかえ、往つておくれよ、お前は離縁状を取つて去られても貞心な立派な嫁だ、私も困るから往つておくんなさい」

雪「はい……まいります、まいりましよう」

と涙ながらに漸^{やつ}と申しますと、政七は態^{わざ}と大声で

政「不具の亭主を持たしちゃア置かれないと、サツサとお往^いでよ……番頭さん〜」
 安「へえ何うも何とも何うも誠にお気の毒さまな訳でございますが、種々茲に何うもソノ変なことがござりまするので、実にお嬢さまへは何ともお気の毒さまな訳で相済みませんが、ホンの当分おまじないを致します間^まと思召しを願います」

雪「どうぞアノお母さまにそう仰しやつて下さいまし、痛む方の御足^{おみあし}へ斯う枕を取外す時には、何うも男の手では痛いから、女が宜いけれども慣れない中は痛いと仰しやつて、わたくし私はばかり仰せ附けでございますが、私が居りません後は、恐れ入りますけれども、今晚からお母さまにどうぞ私に代つてお柔らかにお枕の取替をなすつて下さるようにお言伝を願います、まだ種々申したい事も有りますけれども、哀しくて胸がふさがり、何も申すことが出来ませんから、何うぞそれだけ仰しやつて下さいまし」

安「何うも変なことになつて居りますのでございまして、何ともどうもハヤ」

政「馬鹿／＼／＼しい、早くおいでなさい、離縁を取つてしまえば其の亭主の足がおつペし
よれようとも構うものか」

と態と暴々しいことを云うのも此処の義理を思うからで、腹の中では不便とは思いま
したが、拠なく政七は妹の手を引いて出てまいる。後へ入れ違つて矢切の婆さまが這入つ
て来るという、これから位牌と婚礼でございます。

二十六

さて此の度のお嘶は位牌と婚礼を致す処でございます。位牌と婚礼を致しました者は天
下に二人で、其の頃の紀伊國屋の息子と若草という遊女の位牌と婚礼致し、近くは澤村
田之助たのすけが芸者の位牌と婚礼致しましたが、おかしな訳でござります。今田舍氣質かたぎの婆さ
まが正直に若草の位牌を脊負しょつて這入つてまいりました。

安「さア何卒叔母さんこうしやく此方こちらへお這入りなさい、御遠慮なしにずツとお這入りなさいまし、
エ、お内儀かみさんえ、矢切村の叔母さんがおいででござります」

内「おや、さア何卒此方へ……お初にお目にかかります、私は伊之助の母でございます、わたくし此の度はまた悴が年の往きません故何かと行届かん勝で、安兵衛が、私に打明けて話を致しますれば、斯んな事にも成りますまいものを、皆なお前が行届かないからだつて小言を申して居りました、それにあなたも御立腹なさり、花魁も伊之助の胤まで孕して苦労をなすつたという事ですが、それ程までに悴を思つておくんなすつたは、御商売柄には似合わない真実なお人だつてね、私どもが知つて居りますれば、何の一人や二人の妾を置く人は世間に幾らも御座いますから、どうでも成つたものを、誠に惜しいことをしたつてね、後悔致しましたが、今更仕方がございません、けれども、それがために斯んな病気に成りましたのですから、あなたの心も解けて御得心の上入らしつて下すつたのでしようから、私も大きに安堵致しました、何うか幾久しく、これからは伊之助の眞実の叔母さんにお成んなすつて下されば、伊之助も又あなたのお力に成りまする心得でございますから、幾久しゆう願います」

しの「これはお初にお目にかかります、私は矢切の婆アでござります、今度は又飛んだ行違えから伊之助さんがえれえ病になつたと云うは、私どもで怨んでるという訳なんで、何とはア諦めの悪い婆アだと思えなさるか知りましねえけども、若草も実は伊之助さん

の事でいろいろ辛苦尽して、勤めの中で病み煩い、私も若え時分にア随分苦労をしたでござえます、がそれも得心の上なんでがんすから懲然かわえそうげだと思召してね、影も形も無え若草と婚礼しろつてえのは無理な訳でござえますが、それに今承りますれば咎とがも報むくいも無え嫁ツ子さんが離縁になつて兄さんが小言をいいながら船へ伴へれ込むと、嫁さんが私のような詰らん身の上は無えつて、泣きながら船へ這入へえるのを見て、何んとハアお氣の毒なわけだアと思つて、私イお隣で泣いていましたが、死んだ若草に意見の仕様も諦めさせ様も無えから、形も無えものを生きて居る心持で婚礼でもして下すつたら、若草も成仏して、伊之助さんの病やめえなおも癒なおろうかと存じまして、私が参つた訳でござえますから、何んにも何うか婚礼の真似事だけをネ番頭さん」

安「へイ宜しゆうございますが、御内儀さん、若旦那様も御病気の服装なりでも何んでしようから、一寸御紋付物か何かのお支度を成さいましては如何いかです」

内「あれの物は一通り此方の土蔵に来て居るから出して着せましよう」
と黒斜子の五所紋くろななこいつところもんの上へ行儀霰ぎょうぎあられの上かみしも下しもを着け、病耄やみぼうけて居る伊之助を、
袴こしらへ寄掛ひきずりを拵えて、それなりズルく座敷ひきずへ曳摺ひきずり出しますと、

伊之助「もし叔母さんおいでなさい、誠に私は行届かない事から、叔母さんにまで御立腹

をかけて何とも申訳が有りません、みんな私が悪いんですから、何うか私の業病の癒るようにお前さん守つておくんなさい」

しの「はい……えらく痩せたね、誠にお前様を見ると私は思え出しますが、若草もお前様の児まで出来して何うも案じるとも案じねえとも、昼夜お前様の事をいい／＼泣明しておツ死んだアから、^{かわえそう}懶然だと思つて婚礼をして遣つてお呉んなせえ、ね番頭さん」

安「へー左様で何でも早い方が宜しゆうござります、伊兵衛や灯火^{あかり}を持つて来ねえ、お料理や何かの支度は出来たかえ」

伊兵衛「湯葉の大きいのがございませんのでお平^{ひら}が出来ません」

安「お前何を説^{あつ}られたんだ」

伊兵衛「何をつてお料理を拵えますんです、お精進にて」

安「精進じやアない、御婚礼だから蛤のお吸物に尾^{おがしら}頭つきでなければ出されません」

伊兵衛「でもお位牌との婚礼ゆえ残らず御精進にいたしました」

安「生きて在らつしやるつもりでするんだから、本当の婚礼の式でなければいけません、

尾頭つきに何かお芽出度いものでなければ成りません」

しの「いえ何でも宜うがす、無駄だから、それに位牌^{いへい}を戴ける机を一脚^{ひとつ}」

安「へい／＼畏りました、伊兵衛や机を一つ持つて来てくんナ」

伊「へい」

と机に花立や線香を持つて来ました、

しの「いえナニ花立や線香は要りません」

安「生きていらつしやる積りだから、そんな物を持つて来ないでも宜いに」

とはから婆さんが机の上に位牌を飾る、其の内にお料理も出来ました。

しの「さア何うぞ番頭さん、あなたが盃を若草から先へ酌いで遣つておくんなせえまし」

安「へえ此のお盃はお机の上へ載せますか、斯様なことは初めてでござりますから何うも勝手が分りません、これへ酌ぎますか」

しの「はい」

安「宜しゆうございます」

と机の上へ据置いた若草の位牌の前へ盃を置き、なみ／＼酒を酌きました。

しの「ア、宜うござえます、これ若草汝は伊之助さんより他に男はねえと思え詰めて夫婦約束までしたが、お互に物の間違えから児まで出来して、汝え先へ死んだが、今じやア伊之助さんも汝がに済まねえといってな、義理いある嫁まで離縁して改めて汝と盃いする

ツてえが、此の煩つてる身体で嫁ツ子を出せば何のくれえ不自由だか知んねえのに、離縁して汝と盃いするツてえから汝も是から伊之助さんを、影身に附添うて、何うともして伊之助さんを守らねばなんねえぞ、これで汝の思う心も届き伊之助さんと盃いすれば斯んな嬉しい事は有るめえ、己も嬉しいから汝飲んで伊之助さんがに献すささだアよ若草」と田舎氣質かたぎしちの婆さまが、さもなく位牌の前のところに若草が、病やまい耄ぼうけた姿でこう首を伸べ、片膝ひざを立てゝ其の上へ手を載せて生きて居るように云うので、伊兵衛も安兵衛も人々から種々怖い事ばかり引続いて有りますのですから、ぞツと総毛立ちました。

伊兵衛「南無阿弥陀仏」

安「何だ御婚礼に念仏をいう奴が有るものか」

と云つてると、不思議な事には誰も机の傍へ寄りもしないのに、位牌の前に据えた盃がひツくりかえり、酒が溢こぼれてポタしたく滴りました。

安「お盃がひツくりかえって、お酒が溢れたのは御意に適わんのではござりますまいか」

しの「ナニ若草が飲んだで御座えましよう、飲んだら汝われえ直に伊之助さんがに献すささだアよ」

安「へえ召上つたのでござりますか」

しの「あなた盃を取つて献あげて下せえな」

安「私は何うも取りにくうございます」

と云うは怖いからで、叔母が取つて伊之助に献し、
しの「酌いで進げて下せえよ」

といふので安兵衛が酌をする、伊之助は痛む方の足を出し盃を口元まで持つて参ります
と、不思議な事には軒端(のきば)から一陣の風がドツと吹き入りますと、今まで点いて居ました
灯火(あかり)が一時に消えましたから、伊之助もぞッとするほど身の毛立つて、思わず持つて居ま
した盃をバタリと取落すと、痛む方の足へ酒が掛りまして、其の染(しみ)る事というものは一通
りなりませんから、

伊「アゝ痛い」

と思わず発した声にまた驚き、

伊兵衛「南無阿弥陀仏(ムツヅル)」

安「また念仏を始めた、灯(ひ)が消えたから早く灯火(あかり)を持って来な」

伊兵衛「へえ」

と怖々出て往つたが慌てゝおりますから、火打を出してカチ／＼うちつけ漸やく灯火(よう)
点けてまいり、座敷の燭台へ移しました。するうちに始まりは大層染みたように思いまし

たが暫く過ぎると前より少しは痛みが去つたようではございます。
 伊之助「實に不思議な事だ、大きに凌ぎよくなつた……兎に角今晚はお泊んなさい、芽出
 度く祝すから」

というのですが、芽出度いとは云い難いわけで、すると其の晩は伊之助の足の痛みが大
 きに軽くなりましたが、枕元には婆アも看病人も附いて居ります。これは只今申します
 ると神経病とでもいうのでしょうか、あり／＼と若草が伊之助の枕元に坐つて居りまして、
 伊之助の腰のもとへ来ては細い手を出し、伊之助の腰を撫摩り致しまする姿を見た者が、
 三人有つたといいますが、只今斯様なお話を致しますると嘘のようで。これから段々伊
 之助の足の痛みも一日増しに快方に赴きました處へ、又上手なお医者が来て診察をして此
 の薬をお用いなさいと云うので、だん／＼全快して参りましたから、叔母には多分の手
 当をして上げようと申しましたが、堅くつて中々受けませんので無理やりに持たして田舎
 へ帰し、時々泊り掛けに遊びに来て下さいと親類同様にして帰したから、此方の納まりは附
 きましたが、詰らんのは岡本の妹娘のお雪で、咎も無いのに離縁をされ、くよくくして親
 の傍に居り、近処へも出ることが出来んというは、七月のお腹なかで去られたは何か悪い事
 でもして来たんじやアないかと、世間の口を思い計りて湯に往くことも出来ませんから、

兄が宅へ湯を立てゝ入れるような事にして居りましたが、歳のゆかん娘氣に思い違ひを致し、一層尼にでも成ろうと心を決し不団家出を致しましたが、向島の白髭の傍に蟠竜軒という尼寺がござります、是へ駆込んで参りましたが、其の頃道心堅固の尼が居りまして、名を美惠比丘尼と申して、年齢は五十四でございましたというが、まだ水々して居りまして、一寸見ると四十一二ぐらいで御座います、誠に若く見えます。木綿ではございますが、鼠の着物に鼠の腰衣を着け、氣力の有りそうなお比丘尼でござりまする。大層お弟子も在りまするが皆因縁の悪い者ばかり弟子に成りますのですから、満足の者は一人も居りません、嘔穢おしがなつんぼるい或は悪い病を受けて鼻の障子が無くなつて、云うことが解らなくつて、足が歩く度にヒヨコたび跛足ひづこを引いて、時々転んだりするようなやくざものばかり居りまするが、門番は無いから門を這入り、こわ／＼台所口へ這入つた頃は、もう日がトップリと暮れました。奥の方では看經かんきんを致すものもあり、本堂でお經を上げて居るものもありまして、種々いろく働いて居りまする。

雪 「御免なさいまし……御免なさいまし」

尼 「はい、何方どちらからおいでだ」

雪 「私は誠に因縁の悪い身の上の者でござりますから、尼に成りたいと存じまして、態わざ々参りましたもので、何うか尼様へお願ひなすつて、お弟子になすつて下さるよう、何うかあなたからお願ひ遊ばして下さいませんか」

尼 「何方のお人じやえ」

雪 「深川の方の者でござります」

尼 「そうですか」

と云いながら奥の方を振向き、

尼 「思行さん、妙桂さん、アノ一寸和尚様ちよつとさんに告げてお呉れな、深川の方の娘さんじやそうだが、十八九に成る方で、因縁が悪いからお弟子になり、剃髪して尼に成りたいと云つておいでだから、一寸和尚様に告げてお呉れえ」

妙 「ファイ」

と鼻の障子の無くなつた尼が和尚の居間へ参り、

妙 「お師匠はん何んひやか深川辺ふかかわへんの者やとひゆうて、十八九ひゅうはつぶになる娘で御座おはえまふ

が、誠に因縁が悪いはら、尼に成りたいと申ひて来まひたが、如何致まひよう
美惠「おまえの云う事はちよツとも解りやせん」

と云いすて、暫らく手を膝に置き、眼を閉じて考えて居りましたが、

美惠「イヤ／＼その娘さんは因縁が悪うて尼には成られんから、お帰し、懷妊の身の上で有りながら尼に成つても無駄な話だ、身重の身体で尼に成られるものか、断つて帰しなさい」

と低い声で云うようだが美惠比丘尼の云うことはピーンと台所まで響き、お雪の耳を貫ぬくように聞えましたから、お雪は心の中で、

雪「アヽ恐れ入つたお智識様、成程私は身重の身体で尼に成ろうと思つたは迷いで有つた、アヽ因縁の悪い身のうえ、一層の事一思ひに身を投げて死ぬより他に仕方がない」

とおろ／＼泣きながら蟠龍軒を出て、向島の土手伝いに帰つて参りますと、ポツリ／＼と雨が顔へ当ります。只今は八百松^{やおまつ}という上等の料理屋が出来ましたが、其の時分あの辺は嬉しい森と云いまして、樹木の生茂りて薄暗^{うすくろ}うございます。枕^{まくら}橋^{ばし}へかかると吾妻橋が一目に見えます。お雪は我家の方を向き、

雪「お母さま、お兄^{あに}様、先立ちては済みませんけれども、私は何の顔下げる何う世間の

人に顔が合わされましよう、伊之さんは逆も添えない私の不運、不孝者とお叱りもござりましようが、不便の者とと思召して下さいまし、南無阿弥陀仏／＼と口の中にて称名を唱え、枕橋の欄干へ手をかけて、ドブンと身を跳らして飛込みにかかると、後に手拭を鼻はなっかぶ被りにした男が立つて居りましたが、この様子を見るより早くお雪を抱止め、

男「姉さん泡を喰らつちやアいけねえ、何だか様子が変だと思つた……これサ待ちねえとうに……それは何うせ能々のことこに違えねえ、何だかわけは解らねえが、マア待ちねえ」というに、安やい」

安「へイ」

男「一寸此処へ来ねえ」

安「何でござえやす」

男「身投だ」

安「エヽ出ましたか、氣味の悪い」

男「この娘さんだ」

安「ウン、綺麗な娘さんだ」

雪「誠に相済みません」

男「娘さん、そう無闇に泣いてばかり居ちゃア仕様がねえ、訳は大概極つてゐる、亭主に嫌われて離縁され、世間へ顔向けが出来ねえとか、内証に情夫が出来て親に面目ねえんで死ぬのか知らねえが、今の若さで親に先立て済む訳のものじやアねえ」

安「本当にそうです、親兄弟に歎きをかけては済まねえ……美しい女ですね」

男「私は斯んな胡散な形姿をしてえるから、怪しい奴だと思おうが、私は伊皿子台町にいる船頭で、荷足の仙太郎という者です」

安「本当です、伊皿子の仙太郎親方という恐ろしい気象の親切なお方だから大丈夫だ、平氣のへのへで居ねえ」

仙「何だ平氣のへのへてえなア兎も角も船の中へお伴れ申せ」

安「宜うござえやす」

仙「危ねえから娘さんの手を曳いて上げな」

安「私がかえ得心づくりで斯んな美しい娘さんの手を曳いたのは生れて初めてだ」

仙「何だ背中へ手を掛けるな、一生懸命でおいでなさるのに」

と云いながら、枕橋を渡つて、向うの枕橋を渡りにかかると、又土手ツヅチで首を縊る

うとしている者が有りまするのを仙太郎が目早く見つけ、

仙「首縊りがあるぜ」

安「へエ、今夜は滅法界^{めっぽうけい}に人の死ぬ晩でげすナ」

仙太郎は首を縊ろうとする男の腰車を担ぎ抱止めて、能々見ると刀屋の番頭重三郎ゆえ悔り致し、二人を同伴して我家^{わがいえ}へ立帰りましたが、荷足の仙太郎の宅は伊皿子台町でございますが、只今もつて残りおりまする豆腐屋がありますが、彼の家は草分けだと申すことで、旧い家でございます。その豆腐屋の一軒置いて隣が仙太郎の宅で、好い家ではございませんが、表には荒い格子が嵌つて、台所には腰障子が嵌めてありますて、丸に仙太というのが角字^{かくじ}でついて居ります。鬼の女房^{によらぼう}に鬼神の譬え、似たもの夫婦でございまして、仙太郎の女房お梶は誠に親切者でございますから、可愛相な者があれば仙太に内証で助けて遣りました者も多くあります。丁度申下刻^{なつさかり}に用を終つて湯に往くというので、鳴海の養老の單物^{ひとえもの}といえは体裁^{ていさい}が宜いが、二三度水に這入つたから大きに色が醒めましたが、八反に黒縄子の腹合せと云つても、山が入つて段々縫い縮めたから幅が狭く成つて居りまする、其の上にお召縮緬^{めしぢりめん}の小弁慶の半纏^{ひつか}を引掛け、手拭糠袋^{ぬかふくろ}を持って豆腐屋の前を通りかかると、六十の坂を五六つ越したかと見える巡礼の老爺^{おやじ}が、汚れ果てた单物

の上に負笈おいざるを掛け、雪卸しの菅笠すげがさを冠り、細竹の杖を突き、白い脚半も汚れて鼠色に成つたのを掛け、草鞋はを穿き、余程旅慣れた姿の汚ない姿で、三十三番の内美濃の谷組の御詠歌を唄つてまいりましたが、巡礼の御詠歌を唄うは憐れなものでござりまする。すると向うからガフーリ／＼朴齒ほうばの下駄を穿き、鉄骨の扇を手に持ち、麻の怪しい脊割羽織あわを着、無反むそりの大小を差し、何処で酒を飲んだか真赤まっかに成つて、頬から腮へかけて一ぱいに鬚の生えて居る恐ろしい怖い顔の侍が、ヨロ／＼ツと踉よろけてまいり、巡礼の老爺さんに當つたから、老爺おやじが転ぶと侍が其の上を飛び越して向うの泥濘ぬかるみへ転がりましたが、自分で突当つて置きながら怒おこりまして、巡礼を捕らえ続け打ちに殴ぶちましたから、禿頭へ傷が出来ましたが、侍は尚お足を揚げて老爺じいさんを蹴返しました、物見高いのは江戸の習いゆえ大勢人が立ちましたが、誰有つて止める人も有りませんから、仙太郎の女房が見兼て中へ這入り、威たけり狂つている侍に向い、

かぢ「まあ待つておくんなさいお腹も立ちましょうが」

侍「イヽヤ勘弁相成らん、不埒至極の奴だ、往来の妨げをして、侍たる者の袴はきへコレ此の通り泥を附けて、拙者おりかづみの折屈のめを突いたから俯やつやまつたのだ、勘弁相成らんから八山やつやまへ参れ、斬殺ぶっぱなして遣るから」

かぢ 「然うでも有りましようが、斯んな老耄よぼされた老爺おやじを斬つたつて殴つたつて仕方がないじゃア有りませんか、それは重々悪いから此の通り私が謝りますから、どうぞ勘弁して下さい、斯んな者を斬つたつて、なにもお前さんのお手柄にも成りませんじやア有りませんか、成り代つて私がお詫をしますから勘忍して下さいな」

侍「イヤ、了簡相成らん」

かぢ 「お前さん何んですね、そんな事をいうと品川の女郎衆じょうろうしゆが笑いますよ」

侍「ヘン何を笑う」

と云いながら思わずおかぢを見ると、歳は三十二三で小粋な女でざいりますから見惚れみとて、

侍「これは何うも、お前は感服だねえ、斯様に大層見物もいるが、誰も皆恐れ入つて止めに這入るものが無いのに、女の身として聊いさゝか憶する氣色けしきも無く、速すみやかにこれへ出て挨拶あいさつをなさる御様子といい、御器量と云い實に感心した」

かぢ 「感心も何も有りませんから私のいう事をきいて、私にまけて下さればお多福の鼻が高く成りますから、斯んなものにからかわずに、早く品川へでも往らしつて、顔を見て、あの娘むすめを悦ばしてお上げなさいよ」

侍「イヤ何うも感服だね、様子の宜い御家内だ、宜しい全體勘弁を致すわけじやアないんだが、女の身として侍を恐れず、中へ這入つて挨拶する胆力に感服いたしたから、宜しい勘弁致そうが、お前にお世話に成つて是なりに別れるのも甚だ何うも私の気が済まんからどつか何処へ往つて一杯遣ろう、工、一寸一ぱい」

かぢ「いけませんよ、まあ戴いたも同じことですから許して下さい」

侍「宜いじやアないか、一寸何処かで一ぱい遣ろう、お手間は取らせん少しの間」

かぢ「いけません、困りますもの、後生だから勘忍して下さい、私のようなお多福でも亭主が有りますもの、お前さんのような粹なお侍と差でお酒なんかを飲むと、親指が嫉妬を焼いて腹を立ちますよ、お前さんがもつと男が悪ければ宜いけれども、余り様子が宜いから迷わアね」

侍「一々どうも旨いねえ、そんならば御尊宅へ出よう、お宅で御亭主の前で御家内へ一
献上へん上げたい、斯様々々のわけで御挨拶をして下すつたから、それなりお別れ申しては済まない、亭主のあるお身の上ということだから、左様なら御亭主の前で飲んだら宜かるうという訳でまいつたと申して、御亭主へも面会して、三人で一緒に飲ろうじやないか」
かぢ「狭くつていけませんよ鼻が聞つかえて這入られませんよ」

侍「イヤ是非ともお宅へ出よう、何うか先へ立ツてつて下さい、お宅は何処だ」

かぢ「お宅だつていけないの、此の坂を下りてちよいと向うへ曲つて、また左へ曲つて、一廻り廻つて向うの横町に附いて往くと、菓子屋だの蕎麦屋だの種々なものがあるから、其の間を這入つて、突当りが手水場だから、其の傍の井戸へ附いて左へ曲つて、右へ往つて変な処ところをクル／＼廻つた角でございますのサ」

侍「些ちつとも分らん、籠棒な、それじやア別れに致そう、左様なら、誠に御無礼」

とガラ／＼高下駄を引摺りながら往ゆきますと、見物が馬鹿ヤイ、助平侍などとからかうものが有ります。お梶は巡礼の老爺じいさんに向い、

かぢ「どうも酷いめに逢つたの、可愛相に大層傷が附いたの」

巡礼「はい、御新造様有難うございます、あのお方が踉けて来て突当りましたから、私が前へ転ぶと、私の上を飛び越して転がつたのでござりますのに、私を下駄で踏んだり蹴たりなさいました、私は蹴られても踏まれても宜うございますが、負笈には三十三番のお札所を打つてまいりましたから、お札が這入つて居りますゆえ、あ彼の人の足でも曲らなければ宜いと存じまするくらいです」

かぢ「足からも血が出るようだよ」

巡礼 「突飛ばされた時に石へ膝を突掛けましたので」

かぢ 「おう／＼大層黒血が流れる、私の宅はツイ一軒隔うちいて隣だが、直すくに癒る宜い粉薬こぐすりが他處よそから貰つて来てあるから宅へおいで」

と無理やりに連れてまいりまして、薬を取り出し、老爺さんの膝に振かけて遣り、

かぢ 「其の上を手拭で巻きな……そう手拭を引裂ひッさいてはいけない、幾らも有るから新しいのを遺るよ」

巡礼 「はい有難う、御新造さま、誠に結構なお薬と見えて少し痛みが去りました」

かぢ 「宜い薬だよ売り物には無いのだ、お前は芝の新網しんあみか橋本町辺から出るのかえ、何処かお前修行に出るところが有るだろう」

巡 「いえ、私は世わたくし帯しよたいを持つて居りまして日々修行をいたす身の上では有りませんが、四国の大八箇所、卅三番さんざんばんへもお札を打ちまして、漸く江戸へ帰つて参りましたが、何うか江戸の大八箇所へもお札を打ちたいと存じ、方々廻り、此の白金の高野寺が打納めでござりますから、お詣りをして此処へ来かかりましたところ、お侍に蹴られましたから弘法さまのお叱りではないかと、日々浮ぶ悪い心を思い直して心配して居りますが、誠に有難う存じます」

かぢ 「何処へ泊るのだえ」

巡 「別に家もございませんから、お寺様のお台所へ寐かして戴いたり 寺中の観音さまのお堂のお縁端へ寐たりいたして、何処と云つて定まつた家はありません」

かぢ 「なにか因縁が悪いんだね、今夜は己の家へ泊めてやろう、少し志す仏さまが有るから、お汁に野菜でお飯でも喰べな」

巡 「いえ、何ういたしまして、斯んな穢い老爺を」

かぢ 「あれサ、宜いから泊んなよ、おらん家の亭主は慈悲深い人だから何も気遣するにやア及ばねえ、事に依ると單物の一枚ぐれえくれるぜ、遠慮しねえが宜い、親方が帰つたら己が話をして遣るから」

巡 「はい大きに有難う存じます、助かります、お志とあれば頂戴致しましよう」

かぢ 「そこの井戸で水を汲んで、足を洗つて此方へ上んな」

と是から上へ上げ、御馳走をしまして、

かぢ 「それじやア疲労てるだろうから、あの二畳へ往つて木片こっぱを隅の方へ片付けて、薄縁すべりを敷いてお寐ね」

とお老爺さんを寐かしましたが、お棍は貞女でござりますから、亭主の帰らんうちに寐

ません。そのうち段々夜が更けてまいりました。

二十八

仙「おいお梶」

かぢ「あい、寝やアしないよ、今明けるよ」

と戸を明け、

かぢ「あんまり遅いから何うしたかと案じて居たよ、安さん御苦勞」

安「誠にお案じでございましょう、エヽ拋ない事があつて、へい」

かぢ「重さんは何うした」

安「宜い 塩梅あんべえに居たんで」

かぢ「何処に」

安「何処にたつて枕橋で首を縊くくろうとしてえたんで」

かぢ「あらまア何うも」

仙「這入つてから云え、立つてゝグズくづく云わなくつても宜い、重さんこつち此方へお這入りな

せえ

重「へい」

とオズ／＼這入りました。

かぢ「重さんまア何うしたんだねえ、私は亭主あにいに何んなに小言を云われたか知れやアしないよ、死んでしまうという置手紙が出たもんだから、死ぬ程のことだのに、様子の知れねえことが有るものかって、私は本当に眼の球の飛び出るほど亭主に小言を云われたよ、そんな軽はずみな事をして」

仙「上りもしねえ内からぐず／＼云うな、まア上ろう、お嬢さんこつち此方へお這入んなせえ」

かぢ「おや／＼おいでなさい」

仙「お、この嬢さんは枕橋から身を投げて死のうと云うどこをお助け申したのだ」

かぢ「何処のお嬢さんです」

安「何処のお嬢さんたツて、親方が此のお嬢さんを助けて來たんです」

かぢ「あらまアどうも、親方が命いのち賭がけで氣を揉んで、お前のために騒いで居るのに、浮

氣をして心中なぞをするのなんのつてサ」

仙「何をいうのだ、そうじやアねえ、グズ／＼余計な事をいうな、お嬢さんマア此方こつちへお

上りなさい、お梶此のお嬢さんは番頭さんばんつの御主人さまの、万年町の刀屋のお嬢さんなんだよ」

かぢ「それじやア奉公をしているうちから深い中でいたのかえ」

仙「然そろじやねえよ、いろ／＼深いわけがあつて身を投げようとする処を助けたんだ、妙じやアねえか、兩人ふたりを助けて船へ乗せると、互に顔を見合わせて、オヤ万年町のお嬢さんか、重三郎かというわけで、おつれ申して来たんだ、心中じやない別々なんだよ、緩ゆるくり話をしなければ解らねえが、コウ重さんお前も不思議な縁で、去年の正月五日の晩万年橋の欄干で首を縊ろうとするところを助け、恩にかけるんじやアねえが、宜いかえ重さん、お屋敷へ刀が納まれば宜いと思つて、目途の無い事でもねえというのは、売る事も質に置く事も出来ねえから、当分はあの侍さむれいが差料にして居るに違ちがえねえと思つて尋ねて居たが、盜んだ奴なりの形は己が知つてるし、顔づらア安さんが知つてるから直じきに知れるだらうと思つてたが、いまだに分らねえから、お前めえが何時までも己の厄介やっけえに成つてるのは気の毒だ、一層死んだら親方に難儀を掛けめえ、苦労をさせめえと云つて死のうとするんだから、己に義理を立てての積りだらうが、重さんが死んで仕舞えば万年町のお店たなへ何と云訳が出来よう、人の奉公人を助けたら知らせないと云うことはねえから、無沙汰で番頭さんを引留めて置いた云

訳に、お刀を探し出してお店へ往く積りだつたが、お前が死んでしまえば刀の目利をする者がねえ、己にやア分らねえ、然うじやアねえか、こう段々遅れに遅れたんだから、何うでも斯うでも刀を探し出さねえ内は万年町のお店へ往く事が出来ねえんだから、仙太も苦しい身の上に成つたは、よもやにひかされたのだ、番頭さんも神信心をして一生懸命に成つてゐるから、何うか刀が出るだろうと思うんだが、出ねえまでもお前を連れてツて詫ことをしなけりやア己が押付おつづけかねえんだから、死ぬのは止めておくれ、そう泣いてたツていけねえ、気を確りしねえ、男らしくもねえ」

重「はいはい、何とも申し訳はございません、これまで種々御苦労を掛けた親方へ、何時までも御心配を掛けては相済みませんから、私さえ居ませんければ御迷惑も掛けまいかと思つて、ツイ心得違いをいたしましたが、どうぞ御勘弁を願います」

仙「侍へ喧嘩を吹ツ掛けるなんてえ氣違きちがえじみてるが、これも皆みなお前のためだ、この嬢さんは他に何んとか云ツたつて、そうち紀伊國屋という滅法に立派な家へ嫁かたづけ付いたのが、其の若旦那とかいうのが滅法に美しい男なんで、他に情婦いろはが有つて、其の情婦が死んでしまつて怨んで祟つて何うとかして化物ばけものが出るとかいうので、此のお嬢さんと夫婦に成つてれば、其の若旦那の病やめえが癒らねえから、仕方なしにお離縁になつたが、大きな腹ア抱

えて世間に顔向けが出来ねえ、外聞げえぶんが悪くつて生きて居られねえッて、枕橋から身を投げるところを助けて、船へ乗ろうとすると、又重さんが首を縊ろうとしてえたから、また助けて船へ入れると、オヤお嬢さん、オヤ番頭かと云つて主従しゅうじゆう遡あうというは妙な事ではないか、そこで己の考えには、お嬢さんを万年町のお店たなへ送つてつて上げて、実は番頭さんは重々済みませんが、番頭さんを連れて来ましたと、お嬢さんをお助け申した廉かどで、番頭さんがお店へ帰れば方々手蔓けえも有つて、刀の詮議も仕やすかろうと思うから、御主人へ話を付けるまでは、死ぬの生きるのツて軽はずみな事をしちゃア困るぜ」

と云つてる処へ、二畳の障子を明けて出て来たのは最前の巡礼の老爺じいさんでござりますが、ものをも云わざ重三郎の襟首いりしゆを取つて引倒して脊中せきちゆうを打ちました。

仙「何だく」

かぢ「この老爺さんは何うしたんだ、寝惚ねぼけたのかえ」

仙「何だ此れは」

かぢ「先刻さっき豆腐屋さむらえの前で侍に殴ぶたれていて、可愛相だから連れて来て泊めたんだが、何だよお前」

巡礼「はいはい、これは親方さんでございますか、まだ御挨拶もいたしませんで、此の者を手込に致しまして誠に相済みません」

と暫く泣き沈み、涙を拭きまして、

巡「ヤイ、手前何うして此処に助かッてる、己は手前が此処に居ようとは知らずに居たが、
へー親方、私はこの重三郎の親父で、羽根田に居りました梨子売の重助と申すものでござ
います」

仙「エヽお前が重三さんのお父さんかえ、何うも妙だなア」

重助「ヘイヽお嬢さま、後で御挨拶を致します、此のお嬢さまは御存じで居らつしやい
ますが、去年の正月七草の日に、お嬢さんとお内儀さんが私の処へ入らつしやいまして、
重三郎は大切なお刀を取られてしまい、申し訳なさに万年橋から身を投げて死んだろう、
死骸は知れないがとのお話で御座いますから悔り致しました、私も他に子供もない只た一
人の恵でございまして、来年の暖簾を分けて下さると云うのを楽しみに、年寄の身で重い梨
子を担いで商売を致し、便りに思つて居ります此奴が、身を投げて死んだと聞いた時は、
寧^{いっ}そ一思いに死んでしまいたいと思いましたが、まさかに死ぬにも死なれず、前世の
約束ごとゝ思いましたから、家^{うち}を仕舞つておい笈^{すく}を掛け、罪滅^{つみほろぼ}しのために西国三十三

番の札所を廻りましたのは、ひよツと面目ないと思つて田舎にでも匿れてゝ、喰うや喰わずに瘦せ衰えて居はしないか、それとも淵川へ身を投げても、観音さまの御利益で海辺へ流れついて居やアしないかと思つて、観音さまへ無理な御願を掛けてよう／＼と四国を廻つて、一年半ぶりで江戸へ帰つて来て、此処で侍に殺されるところ、此方のお内儀さんに助けられ、此方さまの御厄介になつたわけだが、此処のお家に手前が助かつて居るとは、実に夢のようことでござります、はい、今彼処で聞いていれば、親方さんが手前の命を助けて下さるのみならず、命賭けで刀の詮議までして下さる御親切、それを無にして駆け出したということだが、手前のように死にたがる奴はねえ、そんな事をして此方に済むかえヤイ」

仙「老爺さん待ちねえ、お前の云うことは尤もだが、まア安心しねえ重三さんは去年の二月こツそり羽根田へお前を探しに往つたら、だしぬけに居なく成つたから、大方身でも投げて死んだろう、海へでも飛び込んだかも知れないというので、親父が然ういうわけに成つちやア生きては居られねえつて騒ぐのを止めて置いたんだが、重三さんはお前を死んだと思ひ、お前は重三さんを死んだと思つたのが、互にたすかつてゝ、遇うてえくれえ目出度え事はねえから、何も打つにやアあたらねえ、誠に妙なわけだ」

重助「はい／＼何ともハヤ御親切さまのお心掛け、お礼の申し上げようもございませんが、ツイ腹立ち紛れに手込な事をいたしました、どうか御勘弁を願います」

仙「ナニ勘弁も何も入りやアしねえ」

安「親子とも助かつてゝ無事に遇うてえのは、こいつア妙だねえ、何だつて親子主従しゅうじゅうが死のうとして、枕橋とづでお爺さんとうじが首を縊ろうとしたり、お嬢さんが巡礼になつたり、重さんしげさんが身を投げたりして皆助みなすかつたんだからね」

仙「何を間違つたことを云うのだ」

安「成程おんなな同じしようだから間違います」

仙「こりやアね工とつお爺さんとうじ、斯うしようじやアねえか、丁度宜いいことがある、此の詫ごとに万年町いに往く時に……」いつア宜い、なんにしよう、老爺おじさんがお嬢じゅうじょさんを助けた積りで往きねえナ」

重助「どう致しまして嘘はいけません、四国を歩きます時などに嘘うそを吐いては旅は出来ません」

仙「四国とは違わアな、お前まへが枕橋とづを通りかかつて、お嬢じゅうじょさんを助けたことにしよう、お前まへがきかれねえなら己じが喋るが、其の廉で己じの詫ごことをお老爺とうじさんがするんだ、それか

ら重さんの詫ことをして元々通りに納まる事にしようじやアねえか」

重助「何分宜しゆう願います」

仙「なにしても目出度えから一杯爛けねえ、併し明日の朝ではお嬢さんが近所へ対して間が悪いだろうから、日暮までにお連れ申すという手紙を先方へ出して置こう」と仙太郎の慈悲から図らざることで親子主従が無事に助かりましたが、短夜ゆえ忽ちに明けまして、翌朝仙太郎が子分に手紙を持たしてやり、嬢さまは私が屹度お送り申しますからお迎いには及びません、私が参るまでお宅にお待ち下さいということを書いて送り、日暮から所有の船へ梨売重助とお雪を乗せて漕ぎ出し、万年の河岸へ船を繋つて陸へ上り、

仙「此家かの」

ゆき「何だか極りが悪いようで」

仙「嬢さんも老爺さんも少し待つておいで、工御免なせえ」

小僧「へエ、おいでなさい」

仙「今朝手紙を上げて置きました伊皿子台町の荷足の仙太郎というもんで」

小「へエ」

仙「今朝手紙を出して置きやした伊皿子の仙太で」

小「へエ」

と云つてると、奥の方で主の政七が、

政「常吉や何だえ」

常「へエ、何んだかアノ兎のベンタラコが今朝ほど手紙を上げたつて」

政「そんなお名前が有るものか、エ、なに、今朝手紙……伊皿子の親分がいらしつたので
はないか」

と店頭みせさきへ出て参り、

政「へエ、入らつしやいまし、何方どちらさまから」

仙「エヽ、お初にお目にかかります、今朝手紙を上げた伊皿子の仙太郎でござえます」

政「これはくさアどうぞ此方こちらへ、お言葉に従いましてお待ち申して居りました」

仙「少しお前さんに逢い難い人にくが有るんですから、お嬢さんだけ先へお這入んなさい」

政「さア何うぞ此方こちらへ」

仙「そう御丁寧かえでは却つて困ります、粗忽ぞんぜえもんでござえますから、ヘイ、お初にお目に
かります」

政「これは始めてお目通りを致します、かね予て御高名のお噂は承わつて居りますが、初めまして、エヽ此の度はまた妹いもとの事に就きまして御真実に今朝ほど細々との御書面ゆえ、仰せに従いまして迎いにも出しませんで、はこばせお足勞はこばせを受けて誠に恐れ入ります」

仙「そう左様然らばで口をきかれると強氣ごうぎと困るんですが、末永く何分お心安く願えます……えゝお嬢さん此方こっちへお這入んなせえ、お嬢さんはお連れ申しましたが、どうか小言を仰しやいませんように願えます、親御や御兄弟衆ごきょうでえしゆは思い過しをして小言を云うもんだが、また駈け出すようなことがあるといけませんよ」

政「御尤ござります」

二十九

仙「お嬢さん能く考えて御覽なさい、去られたつて、浮氣ふきをしたの、悪い事をして追い出されたのでは有りません、云わば亭主のために出たので、些ちつとも恥かしい事はない、殊に只の体じやアない、もう是れ七月なつという身重の身体でありながら、軽はずみな事をしては、腹へ宿した胤たねは紀伊國屋の旦那の胤じやア有りませんか、お前さんは兎も角も腹の胤

まで闇から闇へ遣つては去られた御亭主に済みますまい、何にも知らねえ私の様なものゝいう事だから、生意氣な野郎と思召しましようが、何うかきいて下せえ、お嬢さん御得心でござえますか」

雪「はい、はい」

仙「じやアお嬢さんも御得心ですから、何にもお小言は仰しやいませんように」
政「へエ／＼仰せに従い何にも申しません、お母さんアノ仙太郎親方が」

母「おや／＼これはどうもお初にお目にかかります、此の度はまた段々有難う存じます、もう私は昨晩からマンジリとも寝はいたしませんで、心配致して居りますと、今朝程のお手紙でホッと致しましたが、近所の者は神隠しにでも逢つたのだろうかと申しましたが、まさかそんな事もあるまいが、何ういうわけで出たかと申して居りましたので、誠に有難う存じました……お前此方へお這入りよ、何ういうもんだ、私は何んなに心配したか知れないと、あのくらい意見をしたのに、何も其様にくよ／＼思うわけは無いじやアないか、私に相談もしないで黙つて駆け出して」

仙「お母さん、然う小言を仰しやつてはいけません」
母「イエ何にも申しません、誠に有難うございました」

仙「実はね此のお嬢さんを助けたのは私ではない、助けた人が他に有るのです」

政「へエ誰方さまで」

仙「オイ老爺さん、重助さん此方へお這入りよ」

重助「はい／＼」

と恐る／＼座敷へ這込み両手を突きまして、

重助「誠にハヤお目にかゝれた義理じやございませんが、皆様お達者で誠にお嬉しゆう存じます」

政「オヤ羽根田の重三郎の父親おやじが来ましたよ、お母さん」

母「オヤ呆れますね、身を投げたとか海へ這入つて死んだとかいう者が有つたが」

重助「へい、実は一年半ばかり四国西国廻りをいたしまして、漸く江戸へ帰つてまいり、思い掛ないことで仙太郎親方のお助けを蒙りましたので」

仙「ナニ後あとは己から種いろく々お詫ごめんことも申し上げるから宜い、お嬢さんが枕橋から身を投げ

ようとするとところへ、此の人が江戸へ帰り、通りかゝつてお嬢さんを助けたので」

重助「イエ然ういう訳じやございません」

仙「余計な事を云つちやアいけねえ、就きまして私がお詫ごめんことをしにやアならねえのは、

全体重助さんに云つて貰うのだが、口が利けねえっていいますから、私の詫ことを私が喋りますが、此方の番頭さんは去年の正月五日の晩に、刀を取られて面目ねえって、首を縊ろうとするところを私が助けて、今まで匿まつて達者で居ますので」

政「へえーお母さん重三郎が達者で居りますと」

母「フーム、重三^{じゅうざ}が達者でおりまするか」

仙「それに就きまして、刀せえ出ますればお詫^{めえ}ことが出来ると思つて、^{わつち}私に少し心当りがありますから、よもやに引かされて今まで延々^{のびく}になりましたが、だんく永くなればなるで、尚お刀を持つて来なければお前さんに顔を合わせる事が出来ねえと、一年半も尋ねあぐんだが知れねえんだけれども、今まで人の奉公人を無沙汰で家へ引摺り込んで、匿つて置くは、訳の分らねえ奴と御立腹でござえやしよう、重々^{じい}私が行届きません、誠に済まねえが、此の老爺さんに免じて何うか御勘弁を願^{ねが}えます」

政「はい、何う致しまして」

重助「それに侍の姿^{なり}も御存じで、手掛りが有るというので、侍に突当つて喧嘩をなすつて、刀を抜ぎ取つて詮議をなすつて、桦のために命賭の御苦労をなすつて下さいましたとのことで」

政「それは誠に何うも恐れ入りました、有難う存じます」

仙「旦那え、妙な事が有ります、私が刀の詮議に市川の方へ往くと、高嶺から船の胴の間へ落ちた死骸は、稻垣小左衛門さまという人で、片手に一節切を握り、片手には黒羅紗の頭巾を持つて血まぶれに成つて落ちたので、重三郎さんが知つてたから私が引取つて、白銀の高野寺へ葬つて、遺物のかたみの頭巾と一節切は預かつてあります」

と前の次第を細やかに話しますと、政七は大きに驚き、また親切を喜びまして頻りに感心致しました。其のうち酒肴が出てまいります。

政「親方何にも有りませんが、一口献げて兄弟同様の誼みを結びとうござります」

と酒が始まりましたが短夜のことゆえ、大きに遅くなりました。

政「今晚は遅くなりましたからお泊んなさい」

仙「船を河岸へ繋けてありますからお暇を致しましょう」

政「でもございましょうが」

と無理に止められて、重助と一緒に店二階へ寝ましたが、人の家は何うも寝附の悪いもので、モジツカして居りまする内に、段々更け渡り、世界が寂といたし、聞えるものは河岸へ中の浪の音、微かに茶飯屋と夜蕎麦壳の声のみで、寂と更けますると小声で云つても

聞えます。

男「神妙^{しんびょう}にしろ、ジタバタしたつて仕方がねえ、汝の家^{てめえうち}にア五百や六百ねえことはねえ、命が欲しけれア金を出せ」

という声が仙太郎の耳へ這入りましたから、これはてつきり下へ泥坊が這入つたな、こいつは大騒動だと思い、

仙「オイ老爺さん^{じい}」

重助「ハア／＼」

仙「オイ重助さん起きなよ」

重助「はい／＼これは何うも、ツイとろ／＼と疲れて寝ました、お早うござい」

仙「早くはねえ、まだ夜中だ、下へ泥坊が這入つて、金を出さなけりやア叩ツ斬ると云つてるよ」

重助「へ工泥坊が何処から這入りました」

仙「何処から這入つたか分らねえが、慌てゝ騒ぐといけねえぜ、キヤアとかパアとかいうと斬られるから静かにして居ねえ」

と云いながら四辺^{あたり}を見ましたが、手頃の棒が有りませんから、三尺^{さんじやく}を締め直して梯

子の上り端まで来ると、上り端に六尺や半棒木太刀などが掛つて居ります。能く商人の家には有りますが、何の役にも立ちません、煤掃の時に畠を叩くぐらいのもので、仙太郎はこれを見て半棒を下して片手に提げ、抜足して、そッと梯子を下りて縁側伝いに来ると、障子が閉つて居りますが、泥坊が舌で穴を明けて覗いたと見えまして、小判なりに平つたく穴が明いておりますから、仙太郎が覗いて見ると、顔を包んだ侍が二人、一人は着流しでござりまする、目深に冠り物をして、きら／＼長刀を畠へ突立て。

賊「ジタバタしても役にやア立たねえ、金の有ることを知つて這入つたのだ、金工出せ／＼」と云つてる奴は余程胆の据つた者の様子。

政「ハイ／＼只今手元に有合せた金子は有りません、皆な職方へ渡しまして、手元には漸く四五十両しかございませんから、何うか是で御勘弁を願います」

と憮ふるえながら云うと、

賊「エヽ虚言うそを吐け、五十や六十の目腐れ金は入らねえ、其処に寝ているのは何んだ」

政「これは母でござります」

賊「島田鬚あたまが見えるが美しい女のようにだが何んだ」

政「これは私の妹でござりまする」

賊「抱いて寝ても宜かろう」

政「これは亭主のある身のうえ、殊に懷妊して七月なつに成りまするもの、何うぞ御勘弁を願います」

賊「妊娠こもちか、色気が無ぬえナ」

乙賊「何うせ役にやア立たねえから、諦あきらめて、命が欲しけりやア有あり金残らずサツサと出して仕舞仕舞つたが宜かんべえ」

と一人の田舎者が与くみして居ります、仙太郎は覗いて見ると長いのを政七の眼前めさきへ突き附けて居る奴は余程度胸の善よさそうな奴で、後あとへ下さがつて居る二人の奴は提灯持と見えまして、手に持つた刀の先がブル／＼震えて居りますから、此の度胸の据つた侍から先へ殴うろうと思ひ、八角に削つた半棒を持ち、五人力の力を極きわめて賊の車骨を狙つて打込みますのお話でございますが、一寸ちよつと一息。

三十

仙太郎が岡本政七方へ泊りました晩に、強盗が三人押入りまして、強談をいたして居り

まするから、仙太郎が欄間に掛つてありました赤檜の半棒を取つて、そツと忍んで、二階の梯子段を下り、縁側伝いに来て障子の外から覗いて見ますると、三人ともきら／＼する長いのを政七の鼻の先へ突き附け、頻りと威し文句を並べ掛けつて居りますが、其の内に深く顔を包んで上座に居る奴が頭で、かしら 他は手下と見えますから、此奴から先に片付けよういうので、仙太郎が五人力の力を半棒に込めて、ものをも云わざ飛び込んで、突然に腰の番つけいをしたゝかに打ちますと、パタリと横に倒れました、すると一人の着流しの奴がバラリと身軽に庭へ飛んで下りて逃げ出しました。尤も泥坊は皆逃げ所を明けて置くものだそうで、一人の田舎ツペえのおかしい言葉の泥坊は、提灯持と見えまして、この有様を見ると

「ワ一」

と云いながら腰が抜けて動けなくなつてしましましたから、仙太郎が続け打ちに無闇に打ちますゆえ、政七はこれを見て驚きましたというのは仙太郎が助けに出たのを泥坊が一人殖えたのだと思い、ブル／＼慄ふるえて居りました。仙太郎は力に任せて二人の賊を続け打ちに打つて居ります。

甲 「アイタ： 御免蒙る、全く貪の盜みでござる、命ばかりはお助けを願う、どうぞお免

お助けを願う、全く貧の盜みで、御免アヽ痛いヽ・貧の盜みで」

仙「嘘を吐け、こんな光る物を引ツこ抜いて、人を威おどかしやアがツて物もの取とりをするからにやア人を叩ツ斬り兼ねえ奴だ、ふん縛つて突出つきだすから然そう思つてろ：旦那何処もお怪我はりませんか」

政「ハイヽ有難う存じます、誰どなた方かと思ひましたら仙太郎親方でござりますか、實に私は昨晚わたくしとけ／＼寐ませんから、今晚はグツスリ寐ましたところへ、突然だしぬけに抜刀ぬきみで頬ほを打たれましたから、驚いて目さまを覚して見ますると、あなた鼻の先へぎらぎら致します刃物をつきつけられましたから、私は口も何も利けませんよな訳で」

仙「御尤ごぜえます、庭からでも這入つたんでしょうが、本当に油断も隙もなりやアしません、戸締りを能くして置かなくつちやアいけませんぜ、一人逃げやアがツたが、此ん

畜生 ヤイ此の野郎

甲「御免なさい、真平御免なさい、拠よんどころなく頼まれて這入つたので」

仙「拠よんどころなく竊ぬすつ盜とうに頼まれて這入へいる奴が有るか、ヤイ此ん畜生、頭巾さむれえを取り、よう、何処の奴だ、ヤイ侍さむれえ、頭巾さむれえを取り」

と云いながら、無理無体に泥坊の冠かぶつていた頭巾ひつばを剥はぐと、面目ないから下を向いて

居ります。

仙「番頭さん、オイお願ねがえだが縄を持つて来ておくなせえ、縛ふんじばちまうから」と番頭が細引を持つて来るを受取り、二人ともグル／＼巻に縛つて置いて、一人の奴の頭巾を取ると、ちよん鬚頭の野郎で、おなじく下の方を向いて居ります一人の侍は大結髪ふさで、頭を上げず頻しきりと下ばかり向いて居りますから、

仙「ヤイ、名前を云え、ヤイ名前を云わねえか、何処の野郎だか所を云えよ、ヤイ」

甲「浪人の身の上で、喰い方に困りまして、悪いこととは存じながら、ツイ心得違いをいたし、斯様な邪非道のこと相成りましたが、向後は速かに善心に立返りますから、幾重にも御憐愍ごれんみんをお見遁みのがしを願います、苟も侍たるもの、何程零落したとて繩目にかかりましては、先祖へ対し家名を汚し、此の上ない大罪だいざいでござりますから、何うか幾重にもお助けを願います、向後は速かに改心いたしますゆえ、何うぞお見遁しなすつて、お裏口からそッとお逃しなすつて下さいまし」

仙「誰が逃す奴が有るものか、容易に云わねえな此ん畜生、ヤイ、手前てめえはなんだ百姓だナ、此ん畜生さむれえ、侍の風かなんかしやアがツて生意氣な奴だ、ヤイ、此の大結髪の奴の名前なめえを手前云え、何」

乙「私はハア拠なく頼まれやして這入つたんだから、何うか御勘弁を願えます」
 仙「手前は何うでも宜いが、此奴の名前を云えよ、何処の奴だ、云わねえと打ッ殺すぞ」
 乙「へえナニ、申しますく、私は下矢切村の渡場の船頭で喜代松と云うもんでござえ
 ます」

仙「ナニ渡場の船頭だ、どうか、シテ此の侍は何か 矢張手前の田舎か」

喜「へえ、それは国分村の人でござえやす」

仙「名前を云えよ、名前を云わねえかよ」

喜「どうぞ御勘弁を願えやす」

仙「云わねえな、うぬ、云わねえと打ッ殺しちまうぞ」

喜「云いますく、萩原束という浪人者でござえやす」

仙「一人逃がして惜しい事をしたなア、お爺さん、おい爺さん、もう宜いから下りて来ね
 えよ、おい」

重助「へえく、家根へでも逃げ出しましようか」

仙「もう宜いから下りて来なよ」

重助「何処から逃げますか」

仙「逃げるんじやアねえ、泥坊を生捕つたから下りて来ねえというんだ」

重助「誠に強いお方でござりますな」

仙「泥坊を捕えたから下りて来なよ」

重助「はい／＼畏りました」

とブル／＼慄えながら二階から下りてまいり、

重助「旦那マアお怪我が無くつてマアお目出度う存じます、私は何處から逃げようかと思つて居りました」

政「親方そう泥坊をぶん殴つて、慄いに殺しては却つて係り合になりますから、ふん縛つて突出したら宜しゆうございましょう」

仙「うん、ナニ国分村の萩原だと、聞いた様な名前だな、此ん畜生ヤイ面ア上げろヤイ」と云いながら大結髪を握んでグイと頭を引上げると、盤台面の眉毛の濃い鼻の下から耳へ掛けて一ぱいの髭で、何ういうことが額の処に十文字の小さい刺青が有ります。仙「オヤ此の野郎見たような面だなア」

と い う と、侍は驚いて

束「これは何うも、誠にどうも、エヽ再び御面会致そとは心得ませんでした、何うかお

助けを願う、重々恐入りました」

仙「此ん畜生ちやくせい：オ、違ちがえねえ、手前てめえは此の春矢切の渡場で町人を斬るの殴はるのツてつてる処ところへ、己おのが這入はいつて手前てまへを殴たたき倒し、向後斯そんな事をすると聴かねえって、見覚えのために手前の額ほへ十文字の刺青さりせいをして遣おとつたが、まだ悪事が止まねえナ此ん畜生ちやくせいめ」

束「誠にはや何とも恐れ入はいりました、再度尊公様にお目に懸まつろうとは存じませんでした」

仙「此ん畜生ちやくせい、旦那此の春私わづちが重三じゆうざさんと安やすという駕籠昇かこあがきを連れて、松戸まつどへ刀の詮議ときぎに往つた時に出で会くわした侍さむれえなんなで」

重助「お前さん了簡違りょうかんちがいでござりますぞ、泥坊なづぼをなさるとは何たるお心得違わたくしいで、私は四国西國しきくを歩いて來たが、四国には泥坊と云うものはございませんよ、お泥坊さんお聞きなさい、弘法さまの戒めで人に物を盜ぬすられても必ず旧もとの家いえへ帰ることになるという、持つて逃げても矢張りやつぱり窃ぬすまれた家うちへ戻つて来るという、それが弘法さまの御利益ごりやくで」

仙「そんな事を盜ぬすつとう賊賊に云つたつて仕様にくわがねえ、悪々わたくししい顔面つらアしてえやがるナ」

重助「オ、この侍だ、親方きのう昨日おお宅から一軒隔わたくしいて隣の豆腐屋の前で、私わたくしを下駄わたくしで踏ふんだ人はこの侍でござります」

仙「ヤイ此ん畜生ちやくせい、何故なぜそんな事をしやアがつた」

束「昨日は誠に失礼、あの折は喰べ醉つて居りまして、だんく御無礼を申しました」

仙「此ん畜生ヤイ」

とまた拳を挙げて打ちました。

政「親方のお打ちなさいますの**ぶ**を私が見ておりますのも心持が悪うござりますから、縄を掛けて、裏町に御用聞をする新吉しんきちという人が有りますから、早速人を遣つて知らせましよう」

仙「一人逃げた奴が有るが、其奴のそいつ名前なまえを白状しろ」

束「それはどうぞ御勘弁を」

仙「何うせ素ツ首の飛ぶ身体じやアねえか、云わねえと打たッ殺たたすぞ」

喜「あれは己ア村の丈助おらといもんですが、此処な家うちは金も有り、家の様子を知つてるから大丈夫でえじょうぶだ、己が案内あんねいをするから来う、汝え一緒に往つて沢山盗めば、余計に立ち前めえくれべえといふから、拠なく私は頼まれて参りやしたので」

仙「フーン……旦那丈助と云う奴にお心当りが有りますかえ」

政「親方、なんでございます、稻垣さまの家来に丈助といふ奴が有りまして、折々私どもへ使いに参りましたが、事に寄つたらば其奴が這入つたのかも知れません」

仙「其の畜生に違えねえ、ふン捕めえれば宜かつた、いめえましい事をしたな、ヤイ、丈

助という奴は何處に居るか分らねえか、云えよ此の百姓、云わねえかよ」

喜「私がハア村の矢切に居たアだけんど、矢切に帰られねえ訳が有つて、些とも帰らねえ

が、堀切の傍の八ツ橋畠に知つてゐる人が有つて、其処え寝泊りするてえ話だが、はツきり

何處に居るか知ンねえだよ」

仙「そいつは手先を頼むも面倒だから私が踏^わづか^{づか}捕めえて遣ろう……モウ寝られもしねえから起^{おき}ちまつて、もう一遍お酒を戴こう」

と是から酒を飲んで居る内に夜が明けましたから、二人の泥坊は早々南のお役所へ突き出してしまい、仙太郎は船に乗つて堀切の傍の八ツ橋畠へ遣つてまいり、だんく様子を聞きましたが、とんと手掛りが分りません。二人は日ならずお調べに相成りますると、束は是まで数度人を害したこと也有り、又喜代松は矢切の渡場で丈助と申し合せ、勇助を殺したる事を残らず白状致しましたゆえ、二人ともに斬罪になりましたが、實に悪い事は出来ないもので、こゝで仙太郎が重三郎の詫ことをいたし、主人の処へ出這入の出来るようなことになりましたが政七の云うには、却つて私どもに居りまするよりは、親父も帰つて来た事ですから、親子の者に世^{しよたい}帶^たを持たして、通い番頭にしようというので、高橋^{たかばし}を

曲ると直^{すぐ}に二軒目に明家がございまして、幸い造作も附いて有りますから、早速これを借りて、重三郎は日々万年町のお店たなへ通うことになりました。お話二つに分れまして、紀伊國屋伊之助でございまする、追々病氣も全快いたしまして、歩く方が心持が宜よいから、却つて旅なぞをいたす方が病氣も早く癒るであろうと云うので、不動さまへお願がんがけ掛けをしたことも有るから、お礼まいりかた／＼往つて、帰路かえりに中矢切へ廻つて、法泉寺へ往つて、若草の追善供養の法事もし、序ついで下矢切へ廻り、叔母おばにも会つて来ようという積りで、これから吉原のお松こわだという婆ア芸者と、幫間たいくわまちの正孝と、清八せいという下男を連れて成田へ参詣に出掛けまして、小和田の原へかゝりました頃は、日の暮々でござりまする。

正「エヽ旦那え、旦那え」

伊「さッさと歩かなくつちやアいけねえぜ、大変に遅くなつちまつたのに、お松にからかうも程が有るじやアねえか」

正「でげすがね、お松が若がつて、余よ程可笑しいんできア、両りょう襷づまを取つて白縮緬ひもの褲ふんどしをピラツカせて、止せば宜いのに鼠甲斐ねずみがいき絹の女脚絆ゆわを掛けて、白足袋に麻裏草履ゆわを結むすい附けにして、馬が来ると怖いよーツて駈け出すんですが、馬の方で怖がつてるんで、あのからいな化物は有りませんや、本当に面白いんで」

伊「そう彼女あいつにからかうなよ」

正「若がつてゐるんですから、婆アと言われるのを厭がつてゐるんで」

伊「今日は船橋の海老屋へ泊ろうか」

正「あなたは途中でお買物を成すつたので、清八どんですか、大きな釜を提げて重たがつてますぜ」

伊「師匠、彼かれは蓑簾張よしすっぽりの茶見世に居た道具屋のハタ師が持つていたんだが、彼かれがほんものなら強氣ごうきと儲かるぜ」

正「へえ、なんでございます」

伊「おいらの眼が届かねえか知らねえが、話には聞いてる、これが蘆屋あしやの姥うばぐち口の釜と云つて、織田信長から柴田が押領したという釜なら、どんな事をして捨売りにしても五百両がものは有る、旨くいけば少なくつても何百両にはなるだろうと思うのだ」

正「へえ是はどうも恐れ入りやしたな、幾らでお買いなすつたえ……一両二分で買つたものが五百両になれば、これは大したことでござりますねえ」

伊「真物でなくつても筋が宜い釜だから屹度儲かる積りだ」

三十一

正「旦那なんざア違いますね、一寸休んで煙草を喫んだり何か為てえる内に、お目が利いてるもんだから、此のくらいな掘出し物をなさる事があるんですが、本当にこれが五百両になれば不動様の御利益ですね、儲かつたら金の祝いと云つて仕着をお出しなさいな、羽織の紋や何かに金はいけませんな可笑しい、金屋堀*の六右衛門さんの家の仕着見たしきせようですが、浴衣を染めて金の模様……これも困りますが、何か金の祝いと云つて……全體男娼いかげまを買つて遊ぶのが宜いんですが、何か面白い趣向がありましょぜう」

伊「何うかマア一つ大景氣な事をしたいから儲かれば宜い、氣を附けて往いきねえ」と云つてゐるところへ昇夫かげやがまいり、

昇夫「どうせ船橋へ帰かえりですが、お廉く願ねがえ度てえもんで、けえ帰りですから一杯いつべ飲めりやア宜いんで、けえ帰り駕籠こざえやすから、お安く乗つておくんなせえ、まだ船橋まで余よつ程ほど有りますぜ」

正「いけねえよ若衆わかいいしゆさん、それは御免を蒙わっしらう、私たちは皆足が達者みんなで、あと婆さんの新造しんぞうなんざア足が達者で、馬と一緒に駆けて歩くくらいのものだ」

昇夫「御冗談仰しやらずに、お願えですから、ホンの飲のみしき代のりしろが有れば宜いんです、何うせ
帰けえるんですからお安くやりやしよう」

正「成田へ来て駕籠へ乗るてえのは強氣ごうきといけねえ、本当ならお前達めえたち二人を駕籠へ乗せて、
私わっしゃたち等そ二人で担かつぎたいくらいのものだ」

昇夫「ウーン然うか、担かついで貰もらおう、担かついでおくんねえ、船橋まで幾らで担かついで往いくか知ねえが、担かついでツつて貰もらおう、サア担かつげ」

正「これは驚いた、コそ何なにをいうんだよ」

昇「何なにをいうつて、担かつぎてえというから担かつげというのよ」

正「これは恐れ入いったつた、うツうつかり洒落たびかごもいえねえナ」

昇「何なにせおらツたらつちア旅たび駕か籠ごを担かつぐものだ、洒落たびかごなんぞ知ねえるものか、洒落たびかごは知ねえ」

正「若衆わっしゅ、そう突つっかゝつて来られちやア困るぜ、吉原にも成田の講こうじゅう中なかが極きわつて、正しょう
五九月には参詣まいに往いくのに、お前達も成田街道で御おまんま飯めしア喰くつてる人間ひとじやアねえか、私わっし
は吉原の帮ほう間かんで、旦那に途中のダレの無いようにお供ともをして來たんだから、ちよいと担かつご
うぐらいの洒落たびかごも云いおうじやアねえか、それをヒツひとこに取とつて担かつげなんぞと云いうのは酷ひどい
ねえ」

昇 「汝えは幫間か何んだかおらツちは知らねえ、どうせ昇夫だから洒落なんざア知るもんか、おらツち二人を乗つけて担げよ、サア担がれよう、ヤイ担げ／＼」

正 「これはどうも驚いたねえ」

伊 「師匠、お前が悪い、重いものを持つてるもんだから足元を見るのだ、それに女連だからよ、駄洒落などを云うから宜くない、少しばかり鼻薬を遺んなよ」

正 「へえ、幾らか遣りましよう、私が言い損なつたんですから、今日は私が散財致して旦那に御迷惑は掛けませんが、誰だツて云うじやア有りませんか、当然の洒落で……サア若衆さん、私が悪かつた、ツイ言い損なつたのだがお前も気ぜんの悪いとこ、此方も不動さまへお参りに往つたんだから、種々不同が有るが、お前どうか是で一杯飲んで機嫌を直しておくれ」

と幾らか紙に包んで差出すを見て、

昇 「何を云うんだ、おらツちは錢金を貰おうと云うんじやアねえ、汝ツちが担ぐというから担げというのだ」

と云いながら拳を固めて正孝の頭をコツリ、正孝は頭を押えながら、

正 「オヤこれは、拳骨はひどいね若衆さん、これで不足なら一緒に何処へでも出よう／＼」

伊「おい／＼何処へ往こうツたつて小和田の原中じやアねえか」

正「だから若衆さん、私が悪いから謝まつてのに、いきなり拳骨はひどいじやアねえか」

と云うのも聞かず、原文に三島安という東海道喰詰の悪党ゆえ、左右からつか／＼と進み寄り、物をも云わず一人が正孝の胸倉を取り、一人が伊之助の袖を押えたから、正孝も伊之助も真青に成る。芸者のお松も原中へペタリと坐つて仕舞い、清八は釜を持つたなり尻餅を搗いてしました。二人の昇夫は、相手は女連れで金も有りそuddだし、殊に高価の貨物を提げてるという事をチラリと聞いたから、間が宜くば暗い処へ引摺込み、残らず引ツ剥うという護摩の灰の二人で、誠に悪い奴でござります。するといつの間にか後方に立つて居りました人の行装は、二十四節の深編笠を冠り、鼠無地の着物に同じ色の道行振を着て、木剣作りの小脇差を佩し、合切袋を肩に掛けて、余程旅慣れて居ると見え汚ない脚半甲掛草鞋でござります。この様子を見るとツカ／＼と出て来まして、正孝の胸倉を取つて昇夫の利腕を押えました、昇夫は痛いから手を放すと、

虚無僧「彼方へ往け……御心配なさいますな……悪い奴だ、此の方々は成田の道者ではないか、手前たちは成田街道で其の日を送る駕籠昇の身の上で有りながら、道者へ対して無礼を云掛けるとは免されん、捨置き難い奴なれど、修行の身の上なれば免して遣わすか

ら、サツサと往け

甲昇「此ん畜生ちきしよう、何処から出やアがつた、此ん畜生ヤイ、出抜けに出やアがツて此ん畜生」

乙昇「此奴こいっは佐倉の町で笛を吹いてやアがつた乞食だ、この原中で旨え仕事をしようとい
う中へ這入へえつて邪魔アしやアがつて、此の野郎から殴うてしまえ」

と左右から小太い竹の息杖を押取おつとつて打つて掛りましたが、打たれるような人ではない、
ヒラリと身を交わしながら、木劍作りの小脇差を引抜き、原文の持つてゐる息杖を打払い、
踏込みさまズーンと肩口から乳の下へ斬下げる。斬られて原文は其の儘バタリと斃たおれる。

三島安は此の有様を見て、

安「オヤ此の野郎」

と云いながら息杖を持つて虚無僧の両足を払いますと、虚無僧はヒラリと飛上り、三島
安の頭上から力に任せて切込めば、面部へかけて割付けられ、アツと云つて片膝突くとこ
ろを胴腹へ深く斬り込みましたから、二人とも其処へ倒れる、虚無僧は其の上へ片足かけ
て脊筋から肋へ深く突き通し、鍔元の血振あばらいをしながら落着いて後へ退りました。人を斬
つて置きながら顔の色も変りませんのは余程胆たんすわの据つたもので、此の時に伊之助も正孝も

危ういところは免のがれましたが、鼻の先でザクリ、バタリ、ブーツと血ちけ煙ぶりが立つたんですから、慄ふるえて居りました。

伊「師匠お礼を云いなよ、何方どちらのお方が存じませんが危あやういところをお助け下さり、誠に有難こごう存じます、師匠お礼を云いなよ」

正「何うも斯んな嬉しい時には何ともお礼の出る訳のもんじやアございません、ヘイ、何方のお方様か存じませんが、誠に有難うございます、實に命の親で……どうか私はお助わたくしけ願ねがります」

虚「イエ〜あなた方は何うも為しやアしません、何しろ飛とんだ御災難で、御婦人連れですから、間あが宜ければ追剥しがをしようと為し掛けた悪い奴わたくしで」

正「全く追剥に相違有りません、私の胸倉わたくしを取りまして懷中へ手を入れて、胴卷きものまきが有るかと思つて探した様子と云い、泥坊なづぼに違たがい有りません」

虚「私は昨年の春彼奴等あいつらを羽根田の浜辺で一度見たことが有りますが、一遍は助けて遣わしましたが、向後のために成りませんかと心得斬つて捨てましたが、悪い奴ゆえ此の儘まいつも仔細とづけありません、届かえにも及びますまい、却きりどくつて斬きりどく徳とくぐらいのものでしよう」

伊「後あとでお係り合になるといけませんから、金子は何程掛つても宜しゆうござりますから、

お届け遊ばしては如何でござります、私ども剥がれますところをお助け下さいましたのでござりますと申し立て、決して御迷惑に相成らんよう、何の様に金子を遣つても厭いは有りませんから」

虚「イヤ／＼斬徳で届けるには及びません、手が血染(のりじみ)になりましたが、悪いお手拭いが有りますなら戴きたい」

伊「へイ、正孝持つてるだろう」

正「ヘイこれに」

と差出すを受取り見て、

虚「斯んな結構なお手拭でなくツても宜しい」

伊「ナニ結構でも構(かま)やア致しません」

正孝は口の中(うち)で、

「少々高い、エヽなに、アノ花会の手拭でござります」

彼の虚無僧は刀の血(のり)を拭つて刃に障りはせんかと刀を見て鞘に納め、

虚「決して左様にお礼を仰しやるに及びませんが、少々御無心がござります」

伊「へえ、何んな事でも否(いや)とは申しません」

虚「実は手前、遠国へ参つて居り、久々にて当地へ帰りました者で、少々心当りの者が有つて此の辺へ参り、成田へも参詣しましたが、此の辺に悪者が忍んで居るという噂が有つて、八州の捕方とりかたがまいつて厳しい詮議が有るので、一人旅の者は何処の宿屋でも泊めてくれませんので、誠に当惑を致します、就きましては手前は決して胡散うさんの者では有りませんが、姓名は仔細有つて申し兼るが、お連れ下さるまいか、何うかお連れの積りで合宿あいやどを願いたいので」

伊「へえ宜敷よろしゆうござりまする、何んな事が有りましても、私は助けて戴きましたので、其のくらいの事はお安いことでござります、おまつや清八は何処へ往つちまつたか知ら、師匠わたくし皆んな見えなくなつたね」

正「おいお松さん、ア、原中ヘピツタリ坐つてまさア、オイ坐つてるだんじやアない、サツサと往いかないと斬徳くわ」

と是から皆々伴れ立つて船橋の佐渡屋さどやへ泊り、お湯に這入りましてから伊之助は、

伊「師匠わたくし々々是へ来てしみ／＼お礼をいいなよ、旦那さま誠に有難う存じました、嘸さざお疲れでございましよう」

正「今日こんちのような有難いことは今までには無いので、この旦那さまには年来御覇廻に成り

まして、羽織から着物帶煙草入駒下駄まで残らず拵えて戴いた時も随分嬉しかつたが、その時より今度の方が余程嬉しゅうございました、物を貰いたいってえ幫間の了間は此のくらいのものでございますが、實に今日ばかりは何んだか私はポツとしちまつて、夢中で居りましたが、それではいけねえと、一生懸命になつて歩いてまいりましたが、旦那さまが笠を脱^とつて、長いお刀へ手を掛けて、御立腹なすつた時には、私も隨分お武家方のお腹立にも出^{でつくわ}会しますが、ちんくの御立腹とは違つて、お顔の色が變つたと思うと、鼻の先でぴかくサクーリは驚きました、ヘイ、私は始めて人殺^{あれ}を見ました、ヌーツというと血がブーツと吹き出しました」

虚「あのお話は御内々^{ごないく}に」

正「へイ、ナ成程斬徳く^ツてな事に成つてますから、うツカリは云えませんが、私の役は余り宜い役じやアありません、芝居だとつツころばしで家櫛^{かきつ}か我童小團^{がどうこだんじ}次どこの役で、今考えると面白いが、旦那は立役^{たちやく}で、後から出て笠を脱^とつて昇夫^{ぼう}を投り出して、笠を小脇に抱えてカラーリと見得があれば、舞台で狂言でしても立役が出ると宜い心持だから、親玉ア成田屋アと声を掛けたいが、それが当人だから何のくらい嬉しいか知れません」

虚「あのお話は余りなさいませんように」

正「へい／＼成る程斬徳／＼ツてえ事に一切なりますんで」

虚「御主人何うか別段に御酒ごしゅやお肴を沢山御馳走下すつてはいけません」

伊「何う致しまして、何にもお構い申しません、海老屋と違つて何にもありません」

虚「御主人あの床の間のお荷物の所に一節切が二管有りますが、あれはあなたがお吹き遊ばすのか」

伊「いゝえ、これはホンの道具ちつを些ちつとばかり掘出しものを致しました時に、込んで買いましたが、笛をお吹き遊ばして居らつしやるようでござりますが、お入用なら差上げても宜しゆうござります」

虚「少々拝見を願います、中々好い笛のようで」

伊「へい」

と差出す二管の笛を手に取つて見ますと、一つは響ひづきと朱しゆめい銘で出て居り、一つは初音と銀銘で出て居りますから驚きました。この虚無僧は稻垣小左衛門の伴小三郎でござります。

稻垣小三郎は、これは私が父小左衛門から笛の稽古をする時に、私が響を吹くと親父が初音を吹いて教えてくれた此の一節切、どうして此処に有ることかと驚きまして、虚「これは何処の道具屋でお求めになりましたか、此の他に何か道具が出やア致しませんか」

伊「へえ、実は私は此の釜が掘出物の積りで釜を見込んで居りまするんですが、笛はホンのお供で取りましたので」

と云うから其の釜を見ると又驚きました、というは、先殿飛騨守さまから拝領の蘆屋の釜ゆえ、是はどうも思い掛けないことと考え、

虚「これは実は私の家に有りました品でござりまするが、幾らでお求めに相成りましたか知らんが、私に取つては大切な道具でござるが、お求め遊ばしたお直段を仰せ聞けられますれば、手前から其の価あたいを差上げますから、何うか手前へお譲ゆずりを願いたいものでございます」

伊「へえ、貴方様のお屋敷から出ました品で」

虚「手前は只今は修行者の身の上になり下り零落いたしましたが、これは親父が上より拝領したもので、替箱かえばこが有り、二重三重の函はこへ箱書付はこがきつけも附いて居たものが、どういう事

で斯様なことになりましたか頓と分りませんけれども、右の次第ゆえ何うか手前へお譲りを願いたいもので」

正孝は傍から伊之助の袖を引き小声で、

正「旦那、旦那」

伊「えゝ何んだよ」

正「上げてお仕舞いなさい、わたくし私の命を助けて下すつたお礼に上げて下さいな、一両二分と思やアしませんぜ、五百両のお礼をする積りで上げて下さいよう」

伊「黙つて居なよ、余計な口を出さねえでも宜い……へい私共は何も此の品でなければならぬと云う訳で求めたのでは有りませんし、お屋敷から出来ましたお品なら命を助けて戴きましたお礼に何か差上げたいと思つて居りましたとこゆえ、そんな物で宜しければ残らず差上げたく心得ます」

虚「イヤ／＼高金の物で有るからたゞ戴くわけはございません」

伊「代は申し上げることも出来ないほど實に安く買いましたゆえ」

正「旦那さま御心配は有りません屁の平氣で……屁ということはうツかり云うとしくじりますが、大丈夫ですから黙つて貰つてお置き遊ばせ」

伊「貴方の方では御大切なお品ゆえ何うか御心配なくお受け下さいまし」

虚「左様でござるか、それは誠に有難いことで、手前ことは只今の身の上では仔細有つて姓名を明すわけには参りませんなれども、御尊名を伺い置きまして、手前世に出ますれば御尊家へお礼に出たいから、どうか御尊名の処を仰せ聞けられるように、お宅は何方で」
伊「手前は本郷春木町の、紀伊國屋宗十郎の姓伊之助と申しまする」

虚「本郷春木町の……ア、左様か」

とこれは出入町人岡本政七の妹娘と許嫁だとかいう話が有つたが、さては紀伊國屋の伊之助と云うものは此の男かと思いましたが、はすはにものは云いません。

虚「何れ世に出れば御尊家へお礼に罷り出る」

と約し其の晩は寝てしまい、翌朝は連立ちて出ましたが、伊之助の連は八幡から横に折れて中矢切村の法泉寺へまいり、若草の法事を致し、叔母にも会つて帰りました。此方の虚無僧は釜を提げて市川を越え、逆井を渡り、本所に出まして、二ツ目の橋を渡り、深川の万年町へ参り、岡本政七に面会しようと云うので万年町差して参ります。お話は戻りまして重三郎は仙太郎の世話で、高橋を曲ると直に二軒目の明家を借り、世帯を持ちまして昼は万年町の店へ通い、粟田口國綱の手掛りも有ろうかと、仲間の小道具屋を廻り、

また深川八幡へ心願を掛けまして、頻りと刀の行方を詮索致して居りますが、今に手掛
りもございませんことで、或日重助は少し買物が有つて出ましたが、ポツ／＼雨が降り出
して来ましたから、番傘を差して横町から出て来ますと、降が強く成りました。と見る
と向うの家の軒下に修行者が立つて居ります。自分も永らく四国西国巡礼して居りまし
たから、旅疲れの人を見ると、自分の旅で難儀をしたことを思い出すと見えまして、

重「申し御修行者さん～、お前さんは余程遠国を歩いて來たお方と思います、脚半の穿きよ
うと云い草鞋の穿き振りと云い、余程旅で苦労なすつたお方でなくツちやア然う云う
ような身揃えの出来るわけのものじやアないが、余程遠くを歩いたお方でしょう」

小「はい、九州辺を遍歴へんごくつて余程長旅を致し、久々にて御府内へ立帰つた身の上でござい
ます」

重「そうでしよう、私の宅はツイ此処を曲ると直に二軒目でございますがねえ、幸い心ざ
す仏さまが有りますが、あなた笛を吹いて修行をして居らつしやるから、矢張虚無僧
さんと同じような者ですかねえ」

小「まあ／＼ぼろんじの流れを汲みますもので」

重助「それじやア此方こつちへおいでなさい、何にも有りませんが茶飯が出来ましたから、味噌なんづ

汁けでも温めて御飯を上げたいから。心ざす仏さまへ御回向なすつて下さいな」
 小「お志しとあれば御免を蒙つて罷り出ましよう」

重助「あなた雨具は有りませんか」

小「イ工所持して居りまするが直に晴れようかと存じまして見合せて居りますので」

重助「中々大降になりましようよ、今時分の雨は降り出すと容易に止まないから、汚ない家うちですが、まあ此方こうちへおいでなさい」

小「それは有難う存じます」

重助「矢つ張笛を吹いて御回向が出来るんでしようねえ虚無僧さん」

小「はい、それは回向の曲、手向たむけの曲と云うのが有りますから、笛で手向おたむけは出来ます」

重助「然うですつてねえ、私が旅を致しました時に、虚無僧さんと合宿あいやどをしたことも有りますが、其の虚無僧さんの話に邪慳じやけんいつこく一国なことをいう家うちで回向をする時は、笛で馬鹿野郎ヤイと吹いても知らないから、からかつて遣る事が有るてえましたが、本当ですかね」

小「随分左様なことが無いでも有りません」

重助「然うでございましょうね」

と話しながら我家の門口へ参り、

重助「さアお這入りなさい、四国ではねえ只泊めてくれるのに、修業者しゅぎょうじやでも御へんどさんく」と申して、主あるじが足を洗つてくれるが、誠に人気の穩かな国で、それと云うのも弘法さまが何百年か昔にお戒め置きなすつたからでしようが、私は今日は四国の者の積りで貴方の足を洗つて上げましようか」

小「どう致しまして、それは恐れ入りまする、どうか盥たらいへ水を頂戴して自分で洗う方が却かえつて勝手でござりまする」

と是から盥へ水を汲んで持つて来てくれましたから足を洗つて奥へ通りまして、重助は仏壇ほとけだんへ灯明ともしびを点けて線香こうこうを立て、

重「さア此方こちらへ」

というので小三郎が仏壇の前へ坐る。

重「その真まんなか中に在るお位牌いはいがなんですから、何うかそれへお手向てむかひを願います」

小「畏まりました」

重「御回向ごくわうが済むと後で御膳ごぜんを上げますよ」

小「誠にお志しの深いことで」

と云いながら懐から取出したのは昨夜団らす紀伊國屋の伊之助から貰つた初音という一節切でござりまする。今唄口を濡して手向の曲を吹こうと思い、ふと仏壇を見ると、隅の方に立掛けて有るのは山風の一節切で、その傍に黒羅紗の頭巾が有りまする、山風と蒔絵をした金銘が灯明の火影に映じ、金色がキラ／＼見えまするゆえ、小三郎は不思議に思いますて、

小「御主人／＼」

重「はい／＼」

小「このお仏間に一節切が立掛けてありまするが、これはあなたの御所持の品かな」

重助「おゝ成程お前さんも笛を吹くから直にお目が附きますな、これは今日の仏さまの遺物でござりまする」

小「へい、遺物でござりますか」

と云いながら手に取上げて見て惄くりいたしました。というのは、先殿飛驒守公から父

小左衛門が拝領したる品にて、常々机身放さず秘蔵にいたし、何処へ往くにも首へかけ懷へ入れて歩いたほどの物が、どうして此處に立掛けてある事かと訝しみながら、

小「御主人少々伺いますが、此の笛を所持したものゝ命日と被仰おつしやつて見ると、誠に思い

がけないことでござりまする、これは他に少ない品でござるが、何う云うわけで此方さまに有りまするか、とんと手前には分りませんが、この笛を所持いたして居りました人は何と申す人ですか」

重「私どもには笛の事なぞはさっぱり分りませんが、何でもこれはやかましい物なんだそ
うで、殿さまから拝領した笛なんだとかいう事を私の恥は能く存じて居りますが、これを
持つて居たお方は、もと旧は金森様というお大名のお重役で、稻垣小左衛門という方で、その
お方がお吹きなすった笛だそうです」

小「フレーム、その小左衛門は何処に居りまするか」

重助「その小左衛門さまと云うお方はね、この笛と其処に在る黒羅紗の頭巾を持ったなり
でね、悪い奴にでも欺だまされて突き落されたものか、鴻の台の鐘ヶ淵から逆トンボウを打つ
て血みどり血がいになつてお落ちなすつて、お亡くなりなすつたので」

小「エヽ小左衛門がなくなりましたか」

と云いさしさめ／＼と泣き沈みましたも道理で、親一人子一人の小三郎ゆえ、実父のおやじ
死去した事を聞き、堪こらえ兼ねて男泣きに泣き出し、涙が膝へハラ／＼と落ちまするのを重
助が見て、

重助「お前さんお泣きなさいますね、失礼な事をお聞き申すようですが、あなたは稻垣小三郎さまと仰しやるお方では有りませんか」

と云われて驚き気を取直し、涙を拭つて笑顔を造り、

小「いえ／＼手前は左様な者ではござらん、なれども手前も少々指田流の笛を吹きまするが、二と及ぶ者のない名高い稻垣小左衛門が左様の横死を致したかと同流の誼みでござるゆえ誠に惜しい事をしたと思い、見ず識らずの方なれども余り力が落ちましてツイ落涙をいたしました」

重助「いえお前さんお隠しなすつちやいけません、あなたが小三郎さまなら、貴方のお帰りを私どもの悴はお待ち申して居りまする、私どもの悴は万年町の岡本と申す小道具屋の手代で、重三郎と申しまするが不調法をいたしお屋敷の大切なお刀を失したのでお係りの稻垣様が御浪人なすつたばかりでなく、左様な死にようをなさいましたのも皆な私が不調法から起つた事と、日々そればかり申し暮して居りまするが、私はその重三郎の親父で重助と申します者でござります」

小「ハイ……左様か、それは何うも思い掛けない、お前が重三の親御かえ」

重「それ御覧なさい、だからお隠しなすつてはいけませんと申しましたので」

小「実は斯様な修行者の身の上になつて居ながら、姓名を明かすは父の恥、故主の恥と心得て明らかに申さなかつたなれども、重三の親父なら他言は致すまいが、実は手前が稻垣小三郎でござる」

重「はい／＼これは何うもはや」

と云いながら、後の方へ身を摺下り、懇懃に両手を突き、

重「誠にお初にお目にかかりまするが、若旦那様がお帰りになつて此の事をお聞き遊ばしたら、嘸お力落しだろうとお噂を申して居りました」

三十三

小「手前少々心当りがあつて、一年半ほど諸国を遍歴り、九州までまいつたが、少しも刀の手挂りもなく、少々気になることが有つて、一ひとまず先江戸へ立帰つて、芝の上屋敷へまつて聞けば、親父はお暇になつたとの事、尤もそれ程のお咎めもあるまいと思い、旅先から再度書状も送つたが、父より更に一本の返事のないも道理、同役の者に聞いて見ると、昨年の春より父は葛飾の真間の根本に居るということゆえ、参つてだん／＼尋ねたが、と

んと様子が分らず、帰つて来る途中にて岡らすお前に呼入れられ、我親の位牌と知らず仏間に向つて回向を致し、思わず此の山風が眼に這入つたばかりで不思議に知れたる実父の横死、その命日に当り、此方へ呼入れられるとは實に父の引合せで、お前の家へ来るようなことになつたのかも知れん、誠に女々しい奴と思し召すか知らんが、此の度ほど力の落ちたことはない、誠に残念な事をいたした』

と云いながらまたさめ／＼と泣沈む。

重助「へい／＼御尤もさまでございます……私どもの恥は貴方様のことばかり申して、誠に情ないことをした、私がお刀さえ失さなければ、チャンとしてお屋敷においてなさろうもの、私が不調法から斯んな非業の死に様をなすつたと申しましては、毎日仏さまへお線香を上げる度に恥が泣くのでございますよ、昨年の正月五日の晩にお刀を奪られ、申し訳がないつて万年橋で首を縊ろうとする処へ、通り掛つたのは、伊皿子台町の荷足の仙太郎という誠に気丈な親方で、其のお人が助けて下さいまして、其の刀を取つた侍の容恰好も見て居るし、それに見知り人も有るから何んのお手先を頼むには及ばん、己が探すと仰しやつて、御親切に侍に突当つて刀を抜き取つて、人のために命賭でお刀の詮議をして下さいましたが、まだ知れません、けれどもその仙太郎親方のお蔭で重三郎も私も漸く万

年町のお店たなへ出這入の出来ることになりましたが、不思議な事には、仙太郎親方と、
恵と一緒に松戸へお刀の詮議にまいりますると、船の胴の間まへ落ちたのはお父とつさま様のお死
骸けでございましたが、御浪人なすつて入つしやるからお屋敷へ知らせる事も出来ませんか
ら、何うしたら宜かろうと心配のうえ、仙太郎親方が自分の伯父様の積りにして、白金の
高野寺へお葬とむらい式なさいましたが、御門主が来て、どうも立派な御葬ごそうしき式で有つたという
話でござります、随分お屋敷の御葬式でも、あれには敵かなうまいという程で、立派な御供養
がありましたが、仙太郎親方も貴方にお目にかかりたいと其の事計り申してゞすが、誠に
御親切なお方さまじやア有りませんか」

小「はい、親どもの死骸を引取つて葬式まで出して下さるとは實に恐れ入つた事で、何う
かお目にかゝつてお礼を申したいもので」

重助「時々入つしやいますが、伊皿子台町いでですからお出いでなすつても造作も有りませんが、
今に恵も帰つて参りますから、何うか今晚は私の処へお泊り遊ばして、恵に御案内致させ
ますから、明日仙太郎親方の処へ往つてお会いになつたら宜しゅうございましよう、なか
くおどこぎ侠氣きのお人ゆえ、またお力になる事も有りましよう……旦那様、此の頭巾の裏に白
い布きぬがあつて、それへ印いんとかゞ押してあるそうです、此の品は恵の申しますには、お屋敷

でお揃いに出来た頭巾ゆえ仇敵かたきの手掛りになるかも知れない、大旦那は組討でも成すつたものか、紐が切れたのを持つたなりでお落ちなさいましたとの事で、後日の証拠に取つて置こうと、親方が取ろうとしましたが、固く握つておいでゆえ指を一本ずつ折つて、漸く頭巾を取つたというくらいでございました」

小「左様でござりますか」

と慌てゝ頭巾の裏を返して見ると、白羽二重の布きれが縫付けて有りまして、それへ朱印が押してござりますのを熟つく／＼々み見て、

小「誠に何うも思い掛けないことで、これは実父が突落される臨終いまわの一念で放さずに居たものと見える、あゝ天命は遁れ難いもので、これは分りました……ウーム彼奴あいつの所為しわざであらう」

重助「知れましたか、誰でございます」

小「これは矢張同藩でござつて、大野惣兵衛という奴だが、壯年の折柄心掛けが宜しくないでの、実父から一言殿様へ申し上げた処からお暇になつたので、それを遺恨に心得、実父を欺いて高峯たかねから突落すとは卑怯な奴で、大野が所為と知つて居たらば濃州から帰るのではないかつた、大野が親族は国に在るて」

重「悪い事は出来ないものでござりますな、其の事を仙太郎親方や重三郎が聞きましたら
喧嘩さざわ悦びましょう」

小「これが大野惣兵衛と知れましたからには、私は直わしに出立致して、遠からず大野惣兵衛
の生首ひつしを引提ひっさげて帰かつて来たならば、其の功に依つてお屋敷へ帰参かみさんが叶うかも知れません」
重「へえ、これはお導みちびきでござりますな、何にしても今晚はお泊り遊ばせ、今に恃も帰かつて
参りましょからうから」

小「イヤお前には初対面おだし、重三おでも居れば厄介そそに成りますが、重三が遅く帰かつて来る
ようでは氣の毒だから、私は是から万年町の岡本方へ参つて一泊致し、明朝また来て重三
にも会いますから、いらん物は預かつて置いて下さい、これは重くてならんが、大切の釜
だから其の積りで確かり預かつて置いて下さい」

重「成程初対面でござりますから、それも然うでございましょう、万年町のお店たなへお泊り
遊ばすなら、重三が帰かつて来ましたら、お店へ差出す事に致いたしましよう……これはお履きは
難にくいか知りませんが、此の下駄をお履きなすつて、傘をさして往いらつしやいまし」

といいながら傘から下駄まで揃えて出しましたから、これを借り、

小「くれ／＼も仙太郎親方にお礼を云わなければ、どうも気が済まんようで」

重助「はい／＼仙太郎親方がお聞きなすつたら、どんなにお悦びか知れますまい、左様なら御機嫌宜う」

小「大きに御厄介になりました」

と表へ出ました。武家はメソ／＼泣かないものだが、外へ出ると小左衛門の横死を思い出し、胸に迫つて流石さすがに猛たけき氣象だが、才口／＼涙を落しながら、番傘を片手に持つたなりクヨ／＼と思い詰め、高橋を渡つて靈岸の方へ曲る道へ下りにかかると、向うから駆けて来た一人の男は仙太郎で、闇くらさは闇し、互に顔は知らず、間違まちいの出来る時には仕方がないもので、仙太郎が駆けてまいる途端に小三郎に突当りましたが、きかない氣象だから、仙「ヤイ氣をつけて歩け、間抜け奴ぬめ、この頓痴氣とんちき」

小「何だ怪けしからん奴だな、手前の方から突当つて置きながら悪あつこ口こうを申すとは無礼至極じきな奴だ、此こちら方いは避けて歩いて居るに」

仙「なにイ此の間抜けめ、下を向いてグズ／＼歩いて居やアがるからだ」と云いながらツカ／＼と寄つて来て、

仙「この野郎」

と小三郎の胸ぐらを取り、五人力の拳骨で押え付けられた時には、流石小三郎も息が止

りそなりました。通常の者なら蹠けて倒れるところでございますが、小三郎は柔術も剣術も名人な人ゆえ力足ちからあしを踏止めて、懷中より一節切を抜出し、仙太郎の利腕をモロにグツと落しますと、痛いからバラリと放すところをば、機とたんをうたしてドンと仙太郎を投げる。仙太郎は始めて投げられて口惜しいけれども暫くは起る事が出来ません。

小「斯様な無法のことをすると、暴あらい侍だと此の首を打落されるぞ、以後たしなめ」

とコツ／＼一節切で仙太郎の頭を打ち、逃げもせず急ぎも致しませんで、泰然と番下駄を履いたなり往つてしまふ。仙太郎は口惜しいの口惜しくないのツて何うも我慢が出来ませんから、急いで重助の処へ駆けて参り、

仙「爺さんちよつと一寸明けてくんna、何か手頃の棒を出しねえよ」

重「親方何んでござります」

仙「何でも宜いやアな、早く出しなつてえに、今喧嘩をして來たんだ」

重「喧嘩は止して下さいましよ、怪我でもするといけませんから」

仙「チョツ、エヽ早く出しな」

と叱られましたから有合せた棒を出して渡すを引ツ取つて、其の儘駆出し、高橋を渡つて海辺大工町うんべだいくちょうを曲り、寺町から靈岸前へ先廻さきまわりをして、材木屋の処に置れて居て、侍

の向う脰はずねを打ぶつ払ぱらつて遣おとろうと思い、頻りと覗ねらつて居りますると、向うから小三郎がクヨ／＼しながら下を向いて遣つて参ります処を覗い詰めて、いきなりに、

仙「覚えたか」

と云いながら腰車骨こしぐるまを覗つて横に払いました。是からどうなりますか。

三十四

仙太郎は小三郎に逢いたいと思い、待つて居りますが、小三郎も仙太の侠氣おとこぎに感服して逢いたいと思う二人が、知らぬ事とは申しながら、仙太郎が赤檸あかがしの半棒で打込みましたが、武辺の心得ある侍は油断のないもので、片手に番傘を持つたなり、ヒラリと四五尺ばかり飛び上つて空くうを打たせ、下りながら木劍作りの小脇差を引抜きますと、刃やいばの光が鼻の先ヘピカリと刀尖きつさきが出たから、仙太郎は驚いて棒を投ほうり出したなりで、無茶苦茶に逃戻り、

仙「オイ爺さん明けてくんnaよ」

重「ハイ私は何んなにお案じ申したか知れませんよ、お願ひだから喧嘩やは止めて下さい、

私が死んでからして下さい」

と云われ仙太郎は悄々と、

仙「己はもう喧嘩は止めだ、若い時分はもう少し強かつたが、年を老ると怯むから、うつかり喧嘩は出来ねえ」

重助「あなたが権幕を変えて出て往つしやいましたから、私は跡で何んなにヒヤくして居たか知れません」

仙「なに、新橋の汐留の川岸から船が出ると、跡から芸者か丈助さんく」という声があるから、其の中に丈助さんという奴が居たので、丈助と云うのは手掛けの名だから、先の奴の顔を知らねえから重三さんに見せてえと思つて、万年町のお店へ往くと、此方へは来ねえというから、此方へ来ようと思つて高橋を渡ろうとするが、突然つた奴が有るから、ナニ此の野郎殴り付けるぞ、何んだ手前気を付けろと、生意気なことを云つたから、胸ぐらを取ると、小癪なことをするなツて己を抛り投げて、棒で己の頭をコツ／＼やつて往きやアがつたから、口惜しくつて堪らねえから、棒を持つて先へ廻り、車ツ骨をやろうと思うと、酷い強え奴で、ピヨイと頭の上まで飛上りやアがつたが、天狗を見たような奴だ、下りて来ながらスラリと抜きやアがつたから、危険だから逃げて來たが、魔がさしたん

だなア、もう喧嘩ア止めだ」

重助「お前さん、人の宅へ来て 頬^{ほつ}_{かむ}被りしたなりは酷いじやアありませんか」

仙「オヽ然うだつけ」

と頬被りの手拭いを脱ると、ジョキリと手拭ぐるみ鬚^{まげ}のイチがそげて居りましたから、手を当てゝ見て、流石の仙太郎も肩から水をかけられるよう^に、ゾツと総毛立ち、仙「爺^{とう}さん喧嘩ア止めだ……こいつは止めだ、滅法界^{めっぽうけい}に強え奴^{つえ}もあれば有るものだ、飛びながら抜きやアがッたが、刀尖が己の鬚へ当つて手拭ぐるみ殺ぐ^そというの^は、刀劍^{きれもの}も善いのだろうが、何のくれえの腕^{うで}前^めだか知れねえ」

重助「おヽ怖い事、おまえさん、もう少し下なら何うなさる」

仙「パクリと柚子味噌^{ゆず}の蓋を見たように頭を殺がれるか、もう少し下ならコロリと首が落ちるんだ、オヽ怖かねえ、喧嘩は止めだ、酷い奴が有るものだ」

重助「冗談じやアありませんよ、シタが彼の稻垣小三郎様^あが帰つておいでなすつたよ」

仙「エヽ若旦那が何うして」

重助「此の先の軒下で笛を吹いて居た修行者が有つたから、四国的心持でお泊め申し回向を願うと、仏壇に立かけて有つた一節切を見てお聞きなすつたから、これくと申上げる

と男泣にお泣きなさるから、貴方は小三郎様かと云つても初まりはお隠しなすつたが、私は重三の親父でござりますというと、実は己が小三郎だとお打明け下されたが、其の時は私は何うも胸が一杯になりましてね」

仙「ウン／＼嚙さぞお力落しだつたろう……それからお前アノ何を云つてくれたか、小左衛門様の死骸とむれいを引取つて葬式めつぱうけいを出した事を、お侍さんを町人が無闇勝手に引取つて葬式おこを出したつて、滅法界めつぱうけいに怒ると困るがなア」

重助「いえ何うして怒るどころじやア有りません、誠に御親切なお方さまだ、お目にかゝつてお礼が申したい、實に感心なお方だ、侍も及ばんと仰しやつてございました」

仙「然うか、シテ何処へお出でなすつた」

重「重三が居ないから、万年町へ往つて泊ると仰しやつて、もう少し先刻岡本へいらつしやいました」

仙「留めて置けば宜いに、それにアノ頭巾を見せたか」

重助「へえ、頭巾をお目に掛けたら、何とかいう人だと仰しやつたが、チャンと目標めじるしが有つたのが解つて、仇討あだうちに出ると仰しやいましたよ」

仙「然うか、何にしても会いたかったなア、これから万年町のお店たなへ往つて来ようか」

重助 「明日の朝おいでなさると仰しゃつたし、悴も今に帰つて来ましようから、又人に突当つて喧嘩でもなさるといけませんから、今夜はお泊んなさいな」

仙 「じやア然う仕様が、何だか氣色が悪くつていけねえから酒を買つて来てくれ」

とはから酒を飲んで其の晩は重助の家へ泊りましたが、翌朝早く起き、手拭を頭へ巻いて朝湯へまいりました。跡へ入違つて重三郎と稻垣小三郎が連れ立つて帰つてまいりました。

重助 「何うした、滅多に宅うちを明けた事はねえに、昨夜ゆうべ帰らねえもんだから大変に心配をしました」

重助 「昨夜は万年町のお店たなへ泊りました」

重助 「おや／＼若旦那さま、これは何うも、私は御一緒とは存じませんでした、さア／＼何うぞ此方こちらへ」

小 「昨日は図らざる事で段々御厄介に成りました、あれから万年町へ参ると重三も来合せて、段々話も尽きないゆえ、重三は親父が案じるから帰ると云つたが、どうせ明朝は私も往くから一緒に参ろうと申して無理に引留め、お前に案じさせて誠に相済みません」

重助 「いえ、どう致しまして」

重「だんくわたくし私の不調法をお詫び申した処、お諦めの宜いお方ゆえ、皆定まる約束事だろうと仰しやつて、何とも別段やかましい事も仰しやいませんで、それから店の主人も斯様なお行装みなりにお成り遊ばしてお氣の毒でと、種々いろくお話が尽きない処から、ツイ遅くなりまして帰られませんでした」

重助「まあ然うでございましたかえ」

小「何うもね實に万年町の政七も誠に眞実な男で、仮令浪人して困ろうとも、私の宅の奉公人から出来たことゆえ、あなたお一人ぐらいは何うでも致しますから、何処へも往かずゆに二階に居てくれると云われ、誠に忝かたじけない力を得たようなものだが、私も仇討ごんとうに出立せんければならぬが、手に入つた品々は重役に預けて置き、私は一度濃州の郡ぐんじょう上じょうへ立越えます心得である」

重助「左様でござりますか、それに重三や昨夜仙太郎親方がお前に逢いたいとおいでなすつて、間もなく跣足はだしで駆出して、暫らく経つて帰つておいでだからお泊め申して……おや親方お帰んなさい、今親方の噂うわさをしているところで……申し若旦那これが仙太郎親方でございます」

小「おや／＼これはお初にお目にかかります、手前は稻垣小三郎と申す不束ふつかの浮浪人此

の後ともに幾久しく御別懇に願います」

仙「これは何うも、私はいけぞんぜえ者の仙太郎と申す、通常なら旦那様方にお目通りなんざア出来る身の上ではござえやせんが、私のような人間へお交際なさるようじやア御運の無ねえのでござえやすが、お父様のことをお聞きなすつて、嘸お力落しだろうつて、あなたのお噂で夜を更かし、直きに夜が明けちまつたよだなことで」

小「万年町でもお前さんのお志の程を承わりまして、實に感服いたしました、御無礼な儀だがお身分とは違い、何うも見ず識らずの者を助けて下さるのみならず、人のために命を棄てゝも刀の詮議をして遣らうとは、實に侍も及ばん処の御氣象、如何にも珍らしいお方だと言つて感心して居りました、又親共の横死の折には御懇ろなる御葬式で、これノ＼と精しく万年町から聞きましたが、何とももつてお礼の申し上げようはありません、千萬忝うござりまする」

仙「何ういたしまして、昨夜も爺さんと話をしたんですが、無闇にお侍の死骸を引取つて、伯父の積りで葬式を出しましたから、若旦那が怒りやアしねえかツて心配して居るんです」
小「どう致しまして昨夜も重三へ申しまするに何ともお礼の申そうようはないが、何うか其の伊皿子とやらのお宅へ参つて、しみ／＼お礼を申し上げたいと申して居たのですが、

幸いおいでございまして、何ともお礼の申そうようは有りませんのに、若旦那などと仰しやつては却つて困ります、只今には笛を吹いて修行をして歩く身の上ゆえ、乞食も同じことで、あなたの方がお身柄はずつと高いので、殊に私は兄弟もなく、また親戚も至つて少ない身の上でございますから、此の後とも私を子分とも思召して、小三郎とお呼び捨てなすつて、末永く力に成つて下さるよう、貴方を侠客おとこと見掛けて願います」

仙「それはどうも飛とんだ事」

と云いながら手拭で涙を拭き、

仙「誠にどうも勿もつて体ねえ話でござえます」

とまた手拭をねじつては涙をふき／＼頭を擡あげ、

仙「こんないけぞんぜえものゆえ、貴方たちにお目にかゝつても御挨拶ごえささつも出来ねえ人間だから、馬鹿な野郎と思召しましようが、重さんに逢つてからは随分永え間の話ですが、私は其の侍の容恰好も知つてるから、岡ツ引に頼まねえで詮索なげした処から遅くなつちまつて、店たなへも済まなく成つたのですが、お父様とつさまを殺した野郎は分りましたか」
小「はい、これは大野惣兵衛といつて矢張金森家の藩中で、三百石取つた奴なれども、心掛けの善くないものゆえ、殿のお側へ置いてはお為になるまいと、一言御前体ごぜんたいへ親父か

ら申し上げた事が有るので、それがためにお暇になつたのを遺恨に心得、親父を欺いて殺したものでしようが、親父も一人や二人討つて掛ろうとも無慚に殺されることは有りませんが、何うかいう係蹄に掛つて、左様な横死をいたしたので、誠に残念なことでございますから、私は直様仇討に出立致し、遠からず大野の生首を提げてお屋敷へ帰つたらば、親方へはまた手前何の様にも御恩返しを致します」

仙「お願ひですが一緒に私を連れてつて下さいな、私は助太刀に従つて一緒に仇討を遣りてえね」

小「エヽ何う致しまして」

仙「何うか供に連れてつて下さい」

小「供と仰しやつても、御家内様も子分衆もあるお方が、お宅は明けられますまい」

仙「ナニ、彼奴あいつは私の居ねえ方が却つて悦びやす、私が居ると種々な難儀をしている者を引摺込むので、留守の方がのうへするつてえます、それに野郎共が船え漕いでますから喰うにやア困りませんから、お願ねげえですが一緒に連れてつて下せえ、助太刀に」

小「手前は誠に未熟不鍛錬の腕前でござりまするなれども、大野の如き仇を討ちますのに助太刀を頼んだと云われては、故主こしゆへ対して手前が済みません、又同藩の者へ外聞という

わけでも有りませんが、助太刀のことはお断り申しまする」

仙「成程これは外聞が悪かろう、船頭なんぞに助太刀を頼んでは、お侍さんじやアそ^{さむれえ}う……じゃアお供だけしてえね、途中で泥坊や追剥でも出た時にはぶん殴りてえね」

小「いや道中は却つて穏やかなもので、御府内の方が却つて無法な悪い奴が居りまする、現に昨夜も高橋のダラ／＼下りで理不尽な奴が突当りましたが大力な者でした、手前が其の手を振解^{ふりほど}き投げたのを遺恨に心得先へ廻つて横町から突然に腰を払われましたが、あの力で打たれては堪りませんが、手前も油断なく飛び上つて、威しのために小脇差を引抜いたら驚いて逃げたが、理不尽な奴もあれば有るものです」

と云われて仙太郎は心の中^{うち}で驚き、両手で頭を押えながら、

仙「モシ旦那……昨夜のはあなたかね……これは何うも爺さん飛んでもねえ事をした」

重助「それ御覧なさい」

と云われ仙太郎は頭を搔きながら、

仙「旦那ア何うも面目次第^{しじ}もねえ、だしぬけにエイと遣つたのは実は私^{わづち}なんで」

小「おや然うとは存じませんで甚だ御無礼を致しました」

仙「いや、此方^{こっち}が御無礼で、帰つて見ると鬚が殺げて髪を結うことが出来ねえんだが、旦

那工実に私ア驚きやした、あなたは華奢な細そりした小さい体躯だから、実はお案じ申したんですが、鬚をジヨキリと斬るくれえの腕前だから、仇が五人や十人出ても大丈夫だ

小「あなたも中々の大力でお強いで」
仙「余り強くもありません、もう少しで柚子味噌になるわけで、頭を殺がれるところだつた」

小「誠に危ないことでした」

仙「私も殴たなくつて好いことをいたしました」

小「手前も斬らなくつて好いことを致した」

と歎きの中の可笑味で、互いにドツと笑いになりました。小三郎は其の晩重助の宅へ泊つて、翌朝早く白金の高野寺へ参り、父小左衛門の法事供養をいたし、それから家老渡邊外記にも面会致し、蘆屋の姥口の釜に一節切を預け、表向きに大野惣兵衛を附覗い、敵討出立のお話でござります。

さて稻垣小三郎は、図らずも蘆屋の金並に山風の笛が手に入りましたから、早速右二品を渡邊外記という金森家の重役へ預け、仇討の免状を殿様より頂戴致しまして、公然仇討に出立致しまして、其の後再度渡邊外記始め万年町の岡本政七、荷足の仙太郎、梨壳重助等へ心に掛けて書面を送りました故に、小三郎は達者で居るということが分ります。仙太郎も政七も安心致して、小三郎の帰国を待つて居りますと、其の年の十一月頃から絶えて音信がございませんゆえ、何うなすった事かと皆心配致しましたが、何処から何処へ参つたことか、鞆を探して歩く身の上ゆえ、頓と其の行先が分りませんので、梨壳重助も心配して、お手紙一本お寄越しなさらぬ訳はないのですが、旅で煩つて在つしやるのではないかと案じられるから、売ト者に占て貰つたり、お伺を立てたりして居ります。其の頃向島の白髭に蟠龍軒という尼寺がございまして、それに美惠比丘尼という人が有りまして、能く人の未来の吉凶禍福を示しますので、これに帰依する信者も多分にございます。この比丘尼は坐禅をいたして大悟徹底し、事を未然に悟る妙智力を備えて居ります。智識に成りますると山で坐禅をいたして居りましても、里のことは明かに分るという、応験化道極りなく百千年の前まで看ぬくというえらいお比丘尼で、五十余年でございますが、年齢よりも十歳も若く見え、でっぷりして色白く、婦人の身でありながら

種々なことを致します。お弟子もいかいこと居りますが、お弟子と同じように働き、立木を伐りまして薪などにいたす事は労苦ともしませんと云う、実に妙な尼でござります、重助は此れへ毎日～参りまして、

重「名前は出しませんけれども、お尋ね申しますが、或お方が旅へ出まして、いまだに音信おが有りませんが、御無事でいらっしゃいましょうか、お比丘さまお示しなすつて下さいまし、私は實に案じられてなりません、まだお年若ゆえ、御病氣とした処が御全快になりますれば、何とかモウお音信たよりが有ろうと存じますのに、いまだにお音信が有りませんのは何うしたのでございましよう」

と聞かれて、美恵比丘尼は暫らく考えて居りましたが、

尼「いや老爺さん、心配おしでない、いまに音信たよりが有ろう、不図邂逅めぐりあうことが有るけれども、旅へ出て難義をなすつておいでの様子、殊に病難も見える」

と云われ、重助は力を得たから立帰つて、仙太郎や政七へも此の話を致し、何卒小三郎さま道中にて凶事のないようとに神信心を致して居りました。さて小三郎の許から絶えて音信の無いわけで、小三郎は不図した感冒かぜが原因で寐つくと逆上をいたし、眼病になり、だん／＼嵩じて、末には霞んで見えないどころではなくバツタリ内障眼そこひのようになります、

して、手紙一本書く事も出来ませんから、刀の詮議も仇敵の探索も心に任せず、誠に残念に心得て、實に私は薄命の身の上であるが致し方はないから、一節切を吹いて人の軒先へ立ち一錢二錢の合力ごうりょくを受けながら江戸表へ立帰ろう、もし大野惣兵衛の居処が分れば、私は盲目ゆえ逆とてあだも仇は討てんから、屋敷の者を頼んで本懐を遂げよう、途中でも種々能い医者に聞いて手当もしたが、とんと其の甲斐がない故、此の身の上を政七や仙太郎に知らせたならさぞ心配致すであろうから手紙一本遣らないが、此の眼病では逆も刀の詮議も仇敵の所在ありかも知れよう道理はない、世に捨てられた私の身の上、慄なまじいに生恥いきはじを搔くよりも寧いっその事一思いに割腹して相果てようか、それとも此の眼病が治る事も有ろうかと種々考えましたが、イヤくすぐ逆も死ぬなら先祖の菩提寺へ詣で、亡父なきちへ我身の薄命の申訳をなして、直に其の場で切腹しようと、漸く心を決して、江戸表へ立帰つてしまひました。お話二つに別れまして、山口屋の音羽おとわでございます、是は稻垣小三郎の許嫁で、石川藤左衛門の娘おみゑという天下に勝れた美人でございますが、小三郎へ操たたを立て、他のお客様は枕をかわせ肌を許しませんというが、誠に無理な事で、傾城遊女の身の上で、揚代あげだい金きんを取つて置きながら、お客様に肌を許さんとは余り理のない話でござります。能くお客様が立腹致しません。只今ならば直に警察署へ訴えになりまして相当の御处置が附きますが、

其の頃は初会というと座敷限かぎりと云つて、顔を見たばかりでお客様が得心で帰り、二会目に馴染が附き、漸くお床と云う、それでも厭なら二度三度も振ることが有りますが、振られてもお客様は人が好いから得心で帰り、あの花魁は振るから感心だ、振るというのは見識が高いからだと云つて悦んで居たお方が昔は沢山有りましたが、誠に馬鹿氣たもので。遊びに往くのに妙な装なりをしたものです。天明の頃彼の千蔭ちかげという歌詠みがございましたが、此の人は八丁堀の与力で、加藤と申す方でございまして、同じ与力に吉田という人がございます、華美な装をして吉原へまいりましたことがなにやらの書物にございましたが、千蔭先生は紫縮緬の紋付の対ついで、千蔭緞子の下着に広東織の帯を締めて遊びにまいったということが、今の目で見ると狂氣きちがいじみて居ります。吉田さんは黒縮緬の羽織に対服御納ついふくおなんど縮緬の下着に、緋博多の帯を締めたなんですが、此の上もない華美な扮装こしらえでございます。其の時に千蔭先生は稻本のいなぎという名高い花魁を買って居りました。吉田さんも同じいなぎを買って居りますが、互に知らずに居りました処、図らず互にいなぎを買っていることを聞き、ひらけて居りますから、

千「貴公も買って居るそしが私も買つて居る、これは甚だ不都合で、一人の遊女を兩人ふたりで買うのはお互に心持が宜くないから、あれ、彼は貴公に差上げよう」

吉「いや貴公に」

と互に押附け合つたが、内々は惚れて居るから、

吉「左様なら花魁に極めて貰つたら宜かろう、花魁のいゝ方を取らせよう」

とはから番頭新造へ話をいたし番頭新造から此の事をいなぎに話すと、いなぎも承知し、二人共に仲の町の山口巴屋に並んで腰を掛けて居る処を、私が好いた人の手を引いて連れて往くのが真にいゝ人ざますよ。という返事が来たので、

吉「若もわしが色男に取られたら何を散財しよう、黒縮緬の羽織を幫間へ残らず出そうじやアないか」

千「もし私を情人に取つたら紫縮緬の羽織を仕着せしよう」

と互に約束をいたし、両方とも百枚ずつ誂えまして、山口巴屋に腰を掛けて、兩人とも花魁の来るのを待つて居りまする処へ、花魁がニヤリと笑いながら来ましたから、互に己かくと考えを附けて、のり出すと、花魁は千蔭先生の手を取つてすーと茶屋へ連れて往きましたので、吉田さんは赤面いたしましたが、昔の人は粹だから腹は立ちませんが、何しろ仕様がない、千蔭さんは情人に取られたから、拵えた百枚の羽織を幫間へ総羽織を出し、屋形船で中洲へ乗り出す、花魁が中で琴を弾き、千蔭先生が文章を作り、稻舟

という歌が出来まして、二代目名人荻江露友が手をつけて唄いました。吉田さんは百枚の羽織を脊負込んで遣り場が有りません、紫縮緬が仲の町へ行渡つて居りまして仕方がないから、深川へ往つて、さて斯うくいうわけで弾かれたが、百枚の羽織の遣り場がないから、深川の芸者に残らず着て貰いたい、恥を搔いて間が悪いから吉田の顔を立つて着ておくれという、おゝ嬉しいこと、吉田さん私が着よう、私も着ようと深川の芸者が残らず羽織を着たから、深川の芸妓を羽織衆くと称えるような事になりましたので、貰わぬ者まで自分で染めて黒縮緬の羽織を着たという、誠に華美なことで。昔は振られるのを悦ぶのが流行りましたのですが、今なら何のくらい怒るか知れません。悪くすると若衆を打擲致すなど、いう乱暴なことになりますが、振られて粋がつてたんですけれども、これは余り好い心持ではございません。然ういう華美な装を致しますするのを、延享年中の流行言葉で伽羅な装と云い、華美な装をする人を伽羅な人と云い、ちょっと様子の好い事を伽羅じやアないかと云い、持物が伽羅だと、着物が伽羅だと、男振りが伽羅だと云いましたが、何が伽羅だか分りません、一体人間が伽羅だ了簡が伽羅だと云うんですが、何んだか少しも分りませんから、伽羅と云う事を段々聞いて見ると、贅沢という言葉であるという。其の頃「此の露で伽羅墨練らん白牡丹」と云う句が有り「吉原の

「奢始めは笠に下駄」という川柳が有りますが、仙台侯は伽羅の木履を穿いて吉原へおはこびになり、水戸さまは籠甲の笠を冠つてお通いなされたと云いますが、伽羅は大した事で、容易に我々は拝見が出来んくらい貴い物で、一木三名と申しまして、仙台の柴舟、細川の初音に大内の白梅、此の一木三名を木履を作つて穿くような事は出来ませんが、お立派な下駄が脱ぎ捨てゝ有つたのを豆腐屋の亭主が拾つたが、其の頃の流行言葉で伽羅な下駄だと称えたのかも知れませんが、伽羅伽羅という言葉は誠に好い言葉でございます。只今ではオツと云いますが、オツというのも好い言葉でございます。其の時に伽羅大尽と云う人が華美な装をして来ましたが、紫緞子の羽織を着て緋博多の帯を締め、金造りの大小を差し、紫無地の壁チヨロの深い頭巾を冠つて吉原町へ這入りますが、何時でも取巻の二人ぐらい連れて、一本差で、立派な家来が附いて参りまするのだが、山口屋七郎右衛門方の抱え遊女音羽は、實に勝れた太夫で、彼を身受けしようとか手に入れようかと思つて、足を近くまいりますが音羽は誠に厭やで、何うも虫が好きません、傍へ來られても慄つと致しますから振ります。いくら來ても振つて／＼振り抜きますが、お客様は来て来て来抜き、紋日の仕舞い何やかやまで行届かし、少しも厭らしい事を云わずに帰ります。音羽の方では振つて帰すのゆえ手当は能く致しまして、何んな事でも否とはい

いません、飲めない口だがチビ／＼酒の相手を致し、

客「花魁茶会をしようじゃないか」

音「宜うざます」

客「花月かけつをしようか」

音「宜うざます」

客「花を活けようか」

音「宜うざます」

客「碁ごを打とうか」

音「宜うざます」

将棊と云えれば将棊を指すのですが、真に巧いもので、双六すうろくを振り歌を詠みます。かの伽羅大尽からだいじんが筆を執つてスラ／＼と認めた歌は「音したに聞く音羽の滝のことあやも見なれぬ袖に浪のかくらん」というので、笑いながら音羽の許もとへ出すを受取り、しみ／＼見て、此の歌を読んで居りましたが、

音「筆を貸してくんまし」

と色紙を取つてスラ／＼と筆を染め、

音「これは私の心ざます」

と云いながら伽羅大尽へ渡すを取上げ読んで見ると「寄る辺なき袖の白波打返し音羽の滝の音も愧かし」という返歌でござりまするから、伽羅大尽は尚お惚れまして、

客「何うだ藤六」

藤「何うも実に感服でげすな、是に於て花魁の何うも……實に取敢とりあえず即答の御返歌にな
るてえのは、大概の歌詠うたよみでも出来んことでござりますのに、花魁は歌囊うたぶくろ俳諧囊ひがいのう何ん
でも天稟てんびん備わつた佳人かじんなんで、大夫がお通いなさるも無理はないテ、何うもこれを花魁
の前でいうと太鼓を持つようでござるが、大夫が夢中になつて通つても宜しいんで」

客「いや花魁は私の傍へ坐つて居るのも厭だらうが、私は嫌われても何ういうものか花魁
の顔を見て居るだけでも心持が宜しい、と云つて何も厭がるもの無理に枕を並べろとい
うは野夫やぶ、只気に入つたものと並んで居るだけでも心持が宜しいて、なア、山田」

山田「實に手前は矢張其の通りで、貴方はお嫌いか知りませんが、男同士は是は別わたくしで、私
は何んだか貴方に惚れてますよ」

客「己に貴様が惚れてるというのか」

山田「へえ、只モウ貴方の傍に斯うやつて坐つてれば心持が宜いのですから、それがため

に何時でもお供をしてまいるわけですが……これは何うも此のお歌は花魁手前が頂戴致したいね」

音「それは眞に出来が悪うざます、人に見せておくんなますな、黙つてゝくんまし」

と云いながら立ち上り、ニヤリと笑つたなり次の間へ立ち、瀧の戸たきとという番頭新造とヒソ／＼話を致して居りますので、どうも仕方がない。伽羅大尽は来て／＼来抜くが、何うも虫が嗜すきませんから振るも道理、此の者は実父石川藤左衛門を二河島田圃みかわしまたんばに待受け、鉄砲にて打殺した大野惣兵衛やまとという者でございますが、八橋周馬と偽名致し、伽羅大尽といわせておりますが、音羽は幼年の時は一つ屋敷に居りましたが、大野の顔を知りませんから、近しくまいりますが、父の仇あだとも知りません、或時雪の降る日に碁を打つて居りましたが、愛想だから態わざと二三日音羽が負けて対手の快いように致します。

伽「アヽ勝つた」

と悦んで居る処へ酒を勧めたからグツスリ酔えいが廻り、伽羅大尽は碁盤の上へ俯伏うつぶしてスヤリ／＼と眠つてしましました。隣座敷で番頭新造が、

番新「花魁え、おまはんは本当に感心じやアありませんか……あら伽羅さんは碁盤の上へ俯伏うつぶして寐てしまつたよ、額に碁石の痕あとが付きますよ、おまはんは幾度遣つても伽羅さん

には敵かないのねえ、讐を取つてやんなましよ」

と云う声に驚き、ふと目を覺しキヨロ／＼身辺を見廻しながら溜息を吐き、

伽「ア、何を」

番新「おやお目が覺めましたね、厭ですよオホヽヽヽヽ、額に碁石が二個くツついてますよ」

伽「ア、大層醉つた好い心持だ、肝を潰したが今何んだか讐を何んとか云つたが何んだ」

番「ナニ花魁がおまはんに二度負けたから、わっし私が讐を討つて遣んなましと云つたんざます」

伽「そうか……ア、少し酒を飲み過して……山田今日は帰ろう、金吾も帰ろうかな」

山田「是からですか、今晚は貴方御一泊遊ばせな」

伽「イヤ少し気分が悪いから帰ろう」

と何時になくぐず附かずに帰りましたが、脛に疵持ちや笛原を走れぬという比喩の通り

で、音羽の親藤左衛門を殺した身の上、若し此の事が知ればせぬかと思うからで、茶屋から番傘を借り、山田が差かけ、渡を越えて向島の土手へかゝつてまいりますると、向うから破れ切つた編笠を冠り、細竹の杖を突き、旅慣れた行装で、脚半甲掛も汚れて居りまする、ちら／＼と降る雪の中を杖に縋つて来た者は稻垣小三郎でござります。

三十六

稻垣小三郎が江戸へ這入つて来ましたのは、白鬚の蟠龍軒にいる美恵比丘尼は何でも能く中あたるが、別して病氣のことなどは功者だということを聞いたから、これへ往わがつて我業病の全快するか為みないかを占いして貰わんと、トボこちらく遣つてまいつたもので、此方こちらは山田藤六が、

山田「さアく、土手へ上りましよう」

と土手へ上る途端に突当りました。其の頃侍は威張つたもので、町人や何かを見ると無法に見下し、

山田「コレ気を附けて歩け間抜め、氣を附けて歩け、無礼ものめ」

小「これは怪けしからん、私は盲人わたくしでござりますから、斯様に路傍みちばたへ附いてまいりますのに、お目の見えるお方こひつでありながら、貴方あなたの方から手前へ突当つて置き、彼是仰せられるは御無体かと心得ます」

山田「此奴こいつ、高慢なことをいうな」

とドンと突きましたから、小三郎はヨロ～と蹠けて泥だらけの杖よろづを彼かの伽羅かという結構な身装みなりへ当て、泥を附けましたので、

伽「コレ山田、なんだ目の悪いものを突転ばして、コレ見ろ」

山田「これは……怪しからん奴だ、大夫の結構な召物へ泥を附けて」
小「あなたが空飛したから私が蹠けたので、盲目でござりますから何のようなことを致しましたか存じませんが、それを彼は仰しやつては困ります」

山田「此奴理窟ツボいことを申して、盲目じやアあるまい」

小「杖を突いて歩いて居おるものを、盲目でないとお疑りなさるは御無理でございましょう」

山田「まだ理窟を申すか、偽盲目にせめくらか改め遣る、笠かさを取りれ」

と云いながら小三郎の冠かぶつた編笠ひつとへ手を掛け、無理に引取りましたから、小三郎は輪ばかり冠かぶつたなりで、

小「あなた何をなさるんです」

と云いながらズツと寄つて来る顔を見て、大野惣兵衛はぞつといたし、此奴己を讐と附け狙い、国表へ出立したことは先頃ほのかに丈助から聞いたが、此奴何ういう事で眼病に成つたか、内障眼そこひのようだが、此處で逢つたは僥倖さいわい、此奴があつては枕を高く寐ること

は出来んから、此處で討果してしまえば丈助もこつちやくち此方も安々と眠られる、幸いのことだと思ひ、雪は益々降出し、日の暮方ゆえ往来は止つて居りますから、

八橋「これ／＼盲人」

小「ハイ」

八「手前は盲目かも知れん、また此の者が何うしたか存ぜんけれども、予が服へ斯様に泥を附けて、其の上に理窟を申し、杖を以て手向い立だてをすれば許さんぞ」

小「誰だなた方様かは存じませんが、手前は盲人でござるゆえ、誰方が側にいらつしやるか心得ません、不調法が有つたら御勘弁下すつても宜しい訳、全体侍たるもののが弱いものいじめをして歩くは宜しくないこと、あまりお情ない、俄にわか盲目で感の悪いものを突つきとば飛とばすとはお情ない人々だ」

八「まだ口答えを致すか、此の者に何ういう事があつたか知らんけれども、手前は此れに立つて居るのに、服へ泥を附けて置きながら彼是と無礼を申せば斬捨てるぞ」

小「さアお斬りなさい、これは面白い、さア斬られましよう、手前は盲人でございますが、何咎とがもない者を無闇に斬つて済みますか、さア斬られましよう、怪しからん事を仰しやいます、罪ない者を斬るということはありますまい」

八「イヤ仮令盲人たといでも無礼があれば斬つても宜しい、許さんぞ」

と云いながらズラリと引抜く太刀の光りに、傍に居た山田藤六びっくが恎りいたしまして、

山田「大丈夫マアお待ち下さいまし、御立腹は御尤ですが、如何にも感が悪いと見えまして、
変なところを覗ねらつてる様子は全く盲目に違ちいありませんから、お手討は余りお情ない……
コレ謝まれ、全体手前まへが宜しくない、盲目滅法界に人さまのお身柄も分らんから無闇なこ
とを申して、このお方は拙者しょくしゃの主人同様の大切なお方だから謝まれ〜」

小「イエ何も謝まる訳はありません、拙者しょくしゃの方では何も無礼は致しません」

八「だから許さんと申すのだ」

山「でげしようが……ア、危ない、マア〜〜全く盲人めぐらでござりますから」と宥なだめて居りますが、中々聴きません。

小「何をなさいます」

と云いながら古竹の杖を持つて無闇に振廻しますが、盲目もうもくでこそあれ真影流の奥儀おくぎを極きわ

めた腕前の小三郎、寄り附かんように振廻す。

山田「コレ危ない、左様なことを致すからお手討に逢うようになるのだ……あなためくら盲目などを斬つて罪を作るでもござりますまい」

八「まだ手向いをするか、もう捨て置けん、斬らんで置こうか」

と云いつゝ飛込んで一討にと小三郎へ斬り掛りました其の刃の下へ、鼠の頭巾を冠つた人が這入つてまいり、小三郎を後に囲いながら、

尼「私は通りがかりのものでございますが、何うか御勘弁なすつて下さいまし、全く盲人の様子、殊に感の悪いものでござります、盲目根性と云つて、なにか剛情な事を申しまして、お詫ごとをいたす術も心得ませんゆえ、お腹立でもございましようが、なり代りまして私がお詫をいたしますから何うか御勘弁を」

八「手前だちの知つて居ることじやアない」

尼「私は白髭の蟠龍軒にいる尼でございまするが出家の身の上として、今斬られるということを聞きまして、其の儘見捨てゝ往くわけにはまいりません、人を助けるのは出家の役、全く盲人で、殊に感の悪いゆえ粗忽そそくをいたした上に、剛情なことを申して居りまするから、御立腹は御尤もでございますが、何うか私にお免じ下さいまし」

と詫びる。山田藤六は何うかして斬らせたくないと思つて居るところ故悦びながら、

山田「能く中へ這入つてくれた、誠に忝ないかたじけ、大夫尼が這入りました、此奴が剛情を張るもんだから大夫がお腹をお立ちなさるのだ、コレ尼お止め申してくれ」

八「なにも手前の知つてゐる事じやないから何も云うには及ばん、何うあつても斬らんければならん」

尼「どうぞ御勘弁を」

八「御勘弁たつて勘弁相成らん」

尼「もしもお聞済みなく此の盲人を斬ると仰しやれば、出家の身の上で此の中へ這入り、左様でござりますかと此の儘に身を引く事は出来ません、仕方がありませんから此の上は此の者の代りに私をお斬り遊ばして下さいまし……お前さんも黙つて居れば宜いのに、返し言をするから先方でも御立腹なさるのです……併しあなた私が斯う衣の片袖を此の者へ掛ければお助けなさる筈、お武家さまだけに御存じで入らつしやいましょうがな」

八「いらざる処へ飛んだ者が出てまいつた、宜しい、出家が中へ這入つたこと故其の衣に免じて許してやるが、無礼者め以後たしなめ」

小「わたくし私が何時無礼を」

尼「まあ／＼それはお前さんが善くない、然ういう性質だから眼も悪くなる、心を静かにしないで猛り狂うと、却つて逆上して眼に障る、何事も私にお任せ」

小「はい／＼」

山田「尼、誠に忝ない」

八「コレ盲人理窟張つたことを申すと了簡せんぞ、尼さツさと連れて往け／＼
尼「さア／＼お前さん、私と一緒においで」

とはからなだれに美恵比丘尼が小三郎を連れて白鬚の方へ参るのを八橋周馬が見送つて
居りましたが、

八「山田」

山田「へエ」

八「白痴め何んだつて取支えて詫口なんぞを利くんだよ」

山田「ですが全くの盲人をお斬り遊ばすつて常に似合わんことを仰しやいますから、大き
に驚きました」

八「手前だちは何も知らんからだ、山田少し耳を貸せ」

山田「へエ」

と耳を口元に差附け、

山田「へゝ……左様でござりますか……フーン成程」

とコソ／＼暫く囁いて居りましたが、慾というものは怖いもので、度胸のない奴ですが、

山田「宜しい、それでは今晚蟠竜軒へ忍び込んで様子を伺いましょう」

と是れから二手に分れて八橋周馬は堀切の八ツ橋畠へ帰り、山田藤六は蟠竜軒へ躡けてまいりました。此方こちちらは左様の事とは知らず帰つてまいりますと、多勢おおぜいのお弟子が、

「お帰り遊ばせ〜」

美恵比丘尼は小三郎を三畳ばかりの部屋へ通し、

かんきん

尼「さア〜此處へおいで、私は彼方あっちへ往つて看經かんきんをしまつてから緩々ゆるくと話をいたしましたが、お前さん、軽はずみな事をなすつてはなりませんよ、お前さんに会いたがつて、毎日の様に当寺うちへお参りに来る人があるから、その話もしましようが、ひよつと私が間違つて居るか知りませんが、お前さんの眼病ひどを酷く心配して居る様子ゆえお痛いたわしう存じます、あんな荒々つっかしい侍に突掛ると並の身体ではないから、心を柔しく持たんとお身を果すことになりますよ」

小「千万忝のうござるが、如何にも無法で、木履を持ちまして私の肩を蹴つて、二度目にはまた耳のところを蹴ましたから、捨て置かれんと存じました、仮令修行を致す身の上でも、かかる下郎のために父母ち、はの遺体を汚けがされたは如何にも心外でございます」

尼「いや皆みんなそれは約束事でよい人も零落おちぶれる事も有れば、また心掛けの善く無い人でも

結構な暮しをして、日々のこと^{にちく}に困らないのは前世の因縁であるから、何事も気を永くして時節の来るのを待たなければならない、また病も治らん事はありませんから緩りお寝なさい、明日は会いたいと云う人が屹度^{きつと}あした来ましょう、其の人に逢えばお前さんの身も立ちましようからよ」

小「千万忝けない」

尼「何んぞ上げましようか、寺だからお肴も何も無いが、温かいお粥でも拵えて雑炊のようなものを上げましよう、私は穀類はいけませんが蕎麦搔^{そばがき}は喰べるから有りますよ」

小「誠に御真実に有難う存じます」

尼「お寒からうから、もつと火を沢山持つて来て上げな」

とはから行灯^{あんどう}を持つて参り、夜具を貸して寝かしてくれました、美惠比丘尼は居間に這入り看経を仕舞い、蕎麦搔を少し喰べてから薄い木綿の座布団を内^{ない}仏の前へ敷き、足を組んで坐禪^{かんぱう}觀法をいたし、無心になつて頻りと公案をして居りますが、雪は夜に入り深くなりますから一際しんと致しています。其の内にお弟子の尼達も昼の疲れと見えまして、皆スヤリ／＼と寝附く。中には鼾^{いびき}の強い者もあります。すると台所口から忍び込んだ山田藤六は、そつと縁側伝いに来て、障子越しに長^{なが}も

物で突殺せば、大野惣兵衛から五十両褒美をくれるというので、慾張つた奴で、剣術は少し心得ておりますが、至つて臆病者でござります、怖々様子を覗いて、小三郎は何を思いましたか不図起き上り、旅荷を引寄せ、合切囊の中から取り出して、大野惣兵衛の冠つた頭巾と、傍には國俊くにとしの木劍造りの小脇差を置きまして、小さい位牌うやぐを恭しく飾り、実父稻垣おとね小左衛門が最後のときに握りつめたる仇かたきの頭巾を手探りで前へ置き、懃懃に両手を突き、

小「ア、残念でござります、お父とうさま誠に残念でござります、小三郎薄命にして斯かる眼病に相成り、御尊父の妄執を晴らす事もお刀の詮議とうぎをいたすことも此の盲目もうもくでは思いもよらず、又大野惣兵衛しゆっかいに出会いたす時あるとも、一ひとかたな刀とて怨むこともかなわぬとは、神仏にも見離されしか、斯かくの如き尾羽打ち枯した身の上になり、殊に盲目の哀しさには、口惜くちおしくも匹夫下郎ひつぶの泥脛どろずねに木履を持つて」

と云いかけて身をふるわせ、

小「足下そつかにかけられ、如何にも残念に心得ます、御両親より受けました遺体けがを汚せし不孝の罪、いかに盲目なればとて口惜ながら手出しも出来ず、此の儘に何時まで長らえ居りしても、素もとより稻垣の家を興す認めはござらん、生甲斐めうひのない我が身の果、死する時に死

せざれば死に勝るの恥あり愁いに生恥をかいて稻垣の苗字を絶し、殿さまの御家名を汚します不孝不忠の小三郎、只今此の処において切腹いたし相果てまする、場所も幸い尼寺、仮令仇は打ち得ずとも、悪人大野惣兵衛を組み敷いて首を搔き取ります心得で、只今この黒羅紗の頭巾を突き破り、惣兵衛の首を搔取り、直様此の場で切腹いたし、草場へ参つた其の上で本意を遂げざるお詫をいたします、あゝ残念でござります」

といいながら、かの黒羅紗の頭巾を左の手に握り詰め、片膝へ敷据えて、右の手にて木劍作りの小脇差を引抜き、十分の怒を面に表わし、見えぬ眼にて黒羅紗の頭巾を睨みつけながら、

小「吾身不肖にして本懐を遂げずとも、秦の豫讓の故事に擬らえ、この頭巾を突き破るは実父の仇大野の首を搔き取る心思い知れや、大野惣兵衛」

と彼の頭巾をズタ／＼に突き破り、國俊の小脇差を持ち直して我腹へ突立てようとする処へ、何時か忍び込んだ山田藤六が障子越しに、小三郎を突殺そうと覗つておりまするが、山田藤六が突かなくつても当人は腹を切るので、当人が腹を切らなくても、後に突殺す奴が来て居るから、稻垣小三郎の生命の助かりようは御座いません。

三十七

只今美惠比丘尼が坐禪觀法中、稻垣小三郎が自殺をしようとするところへ、山田藤六が忍び込んで、これを刺殺さしころそうといたします。夜はしんくと更け渡り、雪は益々降りしきる。北窓に当る雪折竹の音サラ／＼と聞きこえまするが、物音の思うように聞えんのは、余念が有るゆえに音を聞分けることが出来ませんので、草葉ですだく虫には種々有りまするが一緒に啼ないて居りますると、何いづれが鈴虫か、松虫か、機織はたおりか、草雲雀くさひばりか、とんと分りませんけれども、余念を去つて沈着おちついて聞きますと分りますから、年を老つた人が夜中に蟻の這うのも分るというは、心が据すわつておりますと、細かい物でも眞の闇に見えるという、これを心眼と申しまして、精神たましいが沈着おちついて無心になれば何でも速かに分りまするものと見えます。雪の降るのを聞いて居て、今何れだけ積つたというのも分るそでござります。美惠比丘尼は能く分ると見えまして、坐禪中に小三郎の自殺しようとするのも、山田藤六とうしろうが後から小三郎を突き殺つきそうとして居ることも、隣座敷に居りながらちゃんと見るが如く分ると見えます。今藤六が障子越しに突込みに掛る途端に大喝だいかついつせい一声で、

尼「喝一」

と云いました。死したるものゝ吐くを死喝といい、生きたるもののが吐くを生喝といふ。この大喝一声は實に天地へ響く大声でございまして、ガードと云つたときには氣の弱いものは胆を挫きもひしがれます。獅子出で吼ほゆる時は百獸脳裂すと云うて、王獸が怒つて吼える時は小さい獸の頭が碎けると云うぐらいでございます、と比喩たとえにも申しますことで、釋迦がいう事は羅漢でさえも脳裂するくらいの力が有つたといいます。今只たつた一言美惠比丘尼の「ガーツ」という一喝が山田藤六の耳へ響きますと、パタリと尻餅つを搗いて氣絶致しました。と云うと嘘のようですが必ず氣絶するということです。稻垣小三郎は剣術も上手で胆力の据つた人だが、耳元を突き透した一声に思わず知らず國俊の小脇差を取落したところへ、美惠比丘尼が小さい鉄くろがねの如意を持つて出て参り、小三郎に向い、美惠「まあ何ういうもので其様な心得違いをなさるのじや、そんな事をするといけないから私がくれ／＼云つたのだ」

小「お道場を汚けがそうといたし誠に相済みませんが、生甲斐のない此の身の上、強しいてながらえて居りますれば家名を汚し、主名を辱かしめ、實に此の上ない大罪、なにとぞみのがすつて、御当庵にて自殺いたし相果てますれば、手前幸いの死しごころ処でござります」

美惠「いや、いくら死にたいと云つて腹へ刀を突込んでも、死ぬ時節が来なければ死なれんものじや、また死ぬ時節が来れば何程助かりたいと思つても助かることは出来んものじやから、慌てゝ死のうとするは迷いじや、宜くない思いちがいじやゆえ、まあ／＼脇差をお渡し」

と無理に取上げ、後うしろを振向き、

美惠「知ち行こうや、妙桂みょうけいや、出ておいで、泥坊なづぼうが這入はいつたよ、戸締りを宜くして置かないからだ、妙達みょうたつや、宗榮そうえいや」

なかと呼びましたから、お比丘さん達みんなが皆出て来て見ますると、拔身ほを投なげり出し、板の間の処に眼を廻して居りまするものがありますから、

知「何うしてマア此処へ賊賊が這入はいりましたろう」

妙「拔身を持つて居ますよ」

宗「腰にもまだ差して居ります」

美惠「そつくり其の儘グル／＼卷にして藪の中へ投り出してしまいな、また這入るといかんから」

とはから多勢おおぜい寄つて集たかつて藤六とうろくを縛つて外へ突出しましたが、藤六は終夜凍よつびえるよ

うな目に逢いました、此方こちらは美恵比丘尼しきが頻りに小三郎の死とを止め居りまする内に、夜よも明け渡り、翌日あしたになりますると、雪の明日あしたゆえ快晴でござります。已刻半時分に参詣に来ましたのは高橋に居りまする梨売重助で、図らず小三郎に巡り逢い、

重「あなたはお情なない、何故なぜ私の処お尋ね下さいません、仙太郎親方も万年町の旦那だんなさまも貴方の事ばかり申してお案あんじ遊まわばして在いつしやいますから、兎わも角く私わたしの処まで入いっしやいまし、何のどよう様な事ことでもお力ちからになりましよう、あなたが軽はずみな事をなすつて下さいますと、跡なげきのものゝ嘆なげきは如何いかばかりか知しれません、兎うも角かづも」

と云うので蟠竜軒はんりゅう軒を連れ出し、高橋の宅うちへ帰かつてしまい、急に仙太郎や万年町の主人を迎むかいにやりましたから、皆みな來きまして驚おどろき、情みない御眼病おめんびで有ある、兎うも角かづもお世話よしを致いたましよう、と其の頃みんの名医めいぎを頼たのんで段々と手当てあを致いたしました処ところが、お医者いしか者の云いうには、ナニ丹誠だんせいしたら治はらんことも有あるまいが、余程逆上よくじょうをして居ゐるし、殊ことに悪い血けが有あるが、手当てあをして見みようと云いうので、岡本政七わたくししたくが私の宅うちへ引取ひきつて何の様ようにもお世話よしをしようと云いえば、仙太郎そばが傍そばから斯ふくろういう旦那だんなゆえ、お嬢おひめさんやお母おふくろさんがちやほちやほやすると御心配ごじんぱいでもなさるといけないから、却うつて別うちにお家いえを持たして上げる方が氣兼きあわせがなくつて宜よかろうと云いうので、方々探たすと、深川扇町ふかがわおうぎまちに明家これが有ありましたから、此家こへ小三郎を移いらせ、

雇い女を一人附けて気楽に暮させ、使い早間には何うせ遊んでいるからと安吉を附けて置き、政七も仙太郎も重三郎も折々来ては、小三郎の心を慰めることを申しますが、小三郎は只々鬱^{ふさ}いで居まして、何時までも厄介に成つて居るは氣の毒だと云つて、何にも商売は知らんが、少々は指田流の笛を吹くから、習いに来るものが有るなら教えてやりたいと云うので、門口へ指田流の 標^{ひょう}札^{さつ}をかけて一節切の指南を始めましたが、品の善い芸は習う人は稀でございます。たま／＼木場辺の子供衆^{あたり}が二人三人まいりますが、これを相手にして居ると、お嬢さんが稽古にまいりますので、奉公人が多勢附いてまいりますから、月々可なりに手当をしてくれるゆえ、大きに小遣取りになります。其の年も果て、翌延享三年二月二十九日の晩に、浅草馬道^{うまみち}から出火いたし、吉原へ飛火^{とびひ}がしました。或いは飛火がしたのではない、吉原からも出たのだと申します。此の火事で吉原が類焼したために、深川に仮宅が出来ましたから、深川の賑い^{にぎわ}は實に大したことで、小さい女郎屋は馬道山谷辺の船宿の二階などを借りて、立退中稼^{たちのきちゅう}がせて居ります。其の頃評判の遊女屋山口七郎右衛門の仮宅は深川仲町^{なかちょう}で、大した繁昌でございます。仮宅の時には好い花魁を買えることがあります。只今と違つて昔は尚おゴタ／＼拳^{こゝそ}つてまいり、名高い花魁を買つて見たいと、身分の無いものは悪才覚をして山口屋へ登りますが、立退中ゆえ

万事届きませんでござくさして居りまする。

客「何うしやアがつたんでえ、わけしゆ
若え衆」

と無闇に手ばかり叩く。

若「へい／＼」

客「オヽ若え衆」

若「へい／＼」

客「返事ばかりしてえやアがる、冗談じやアねえぜ、オイ若え衆、こつちへえ
此方へ這入んねえよ」

若「へい」

と障子を明けてお辞儀をする。

客「其処じやア話が出来ねえから此方へ這入んねえ」

若「へい」

と首を擡げて恥り致し、びつく

若「旦那わるいたずら悪戯あくぎ」をなすつては困ります、畳を残らず揚げて段々積み重ねちまつて、其の上に乗つてらつしつて何う致したんでございます」

客「オヽ若え衆、少しものをなくしたから畳を残らず揚げて見たが知れねえから、これか

ら天井板をひつべが引剥して探して見ようかと思うから、踏台か何か持つて来てくれ」

若「へい／＼何か紛失りましたか」

客「まア此方へ這入んねえ」

若「でも這入られません」

客「足の親指で爪立つて這入んねえ」

若「へイ」

と中へ這入りながら、

若「何が紛失りましたか知りませんが、斯んな悪戯をなすつてはいけません」

客「先刻の、番頭新造が花魁を一寸連れて來たかと思うと、直に居なくなつちましたん
だが、慥に此処へ這入つたのに違えねえものが居なくなつて見れば、この座敷は己が借り
たもの、此処の主人が大金を出して抱えた花魁なら、大切な預り物よ、それが紛失つては
己が済まねえから、畳を揚げたり天井板をひつべが引剥して探そうというのが分らねえか、此処に
小さい簾笥が有るから引出まで明けて探したが、何にも無え様だ」

若「御冗談を仰しやつては困りますナ、女郎衆は継針や二朱金では有りませんから、ピ
ヨコ／＼畳の間に隠れることはありませんのに、煤掃す／＼はきでも始まつたような事をなすつて

は困ります、ホンの立退中の仮宅でございますから行届きません勝でしょう、此の通りゴタくして居りますのに、わるふざけ悪戯をなすつては困ります、好い花魁は私どもの自由にはなりませんので、ヘエ」

客「籠棒奴べらぼうめ、出されねえものなら何で客にして上げたのだ」

若「でございますが、好い花魁になりますとお初会の処は大概お座敷限りでけえ」

客「生意気なことをいうな、仲の町の茶屋で顔を見て座敷限で帰るくれえな事は知つてゐるが、立退中だつて斯んな宅うちを借りていやがつて、座敷もねえもんだ、物置き見たようなものだから叩つこわ殴しても宜いんだ、何うせ錢の有る人間じやアねえから、足を近く來るのではねえや、てえそ大層な花魁だと名高いから、斯ういう時でなけりや会う事は出来ねえと思つて、態々わざく来たんだのに、早く出さねえと殴るぞ」

若「乱暴でげすな、お殴りは困ります、ヘイく、もう今にお出でございましようが、花魁は御病身でげすから、お癪が痛くなることが折々有りますから、ヘイ」

客「なんだ、お癪が痛くなると、ヘン籠棒め、てめえ手前じやア分らねえから、もう少し訳の分る奴をよこせ」

若「別に分るものは居ないので」

客 「手前より些^{てめえ}とは分るもののが有るだらう」

若 「些^{ちつ}とぐらい私より分るものは居ります」

客 「分るのが有るなら其の分るものをよこせ」

若 「丑刻過^{ひけすぎ}は不寢番^{ねずのばん}の係で新助^{しんすけ}の係りではございませんから私の係りになります」

客 「丑刻過は不寢番の係くれえの事は知つてらア、吉原の事を知らねえ人間だと思うのかえ、おつウ指図^{さしざん}がましい、教えるような変なことを云やアがるが、吉原の作法を知つてゐるか」

若 「吉原に奉公致して居りますから大概の事は存じて居ります」

客 「それじやア吉原町は以前は何処に在つたか手前^{てめえ}知つてるか、昔慶長年中の相州の浪人で莊司甚右衛門^{しょうじじんえもん}というものが願つて、遊女三千人の御免の場所を建置^{たてお}かれる事になつたが、其の前は常磐橋御門から道三橋^{どうさんばし}の近辺を柳町^{やなぎまち}といつて、又鎌倉河岸に十四五軒あつて、麹町^{こうじまち}にもあり、方々に散ばつて居たのを、今の吉原へ一纏^{ひとまと}めにしたので、吉原というのは、其の頃葭葦^{よしわら}の生えて居たのを埋立^{うめた}つたから葭原^{よしわら}というのだが、後に江戸繁昌を祝して吉の字を書いて、吉原と読ませるんだという事を聞いてるが、一體は花魁に大層^{てえそう}な装^{なり}をさせては済むわけのものではねえのに、朝飯^{めえ}前には持上らねえような帶

を締めて、大層な装なんぞしては済むめえ、
う旧時の願い立もとたてとお触出しのお書付に違つてるんだ」

若「誠に何うも心得ませんで、ヘイ」

三十八

客「何にも面倒なことをいうのじやアねえ、花魁に会わせりやア宜いんだ、己おらア伊皿子台町まちの者で、遠い処から來たものだから思いやれよ、手前てめえの面つらは乙ウ青いなア」

若「へえ病身でげすから」

客「何か宜い薬でも飲んで身体をしつかりしねえ、厭にブテふとく肥つてやアがるナ、青あおぶれだな」

若「どうでもようございます」

客「只花魁の身の上が聞きてえのだから、早く呼んで来てくれ」

若「中々私わたくしなどの手には乗りません花魁で、何か申しても返事も致しません、主人が言葉を掛けてもいけませんくらいなので、ヘエ、私は花魁方に使われて居る身の上でございま

すから」

客「こん畜ちき生しょう殴殴るぞ、腕わんがリュウ／＼鳴めるぜ」

若「腕わんなぞを鳴めらしては困ります」

客「能く主人に然う云いつてくれ、これつ限きりしか来ねえお客様と見くびつてるだろううが、己おのは花魁はなゐが來ても床しゆいそぎのじん助じんすけとは違ちがうから、やぼを云いうのじやアねえや、山口屋さんぐの音羽おとひと云いつちやア名高い花魁はなゐで、大おほしたものだ、亭主ていしゆのために身みを売うけつたというから、其そのの身みの上話じようはを聞ききてえと思おもつて來たんだから、一寸一寸会あわせせろ」

若「へイ、只今直じきに、少々立込たちこんで居りますから、明あけがた方がたままでにはお廻りになりましょうう」

客「お神輿みこしでも待ちやアしめえし、お廻りになるつてやアがる、殴殴るよ本当に、仲なかどんは止めちまや、可愛相かわいあいに青脹あおふくれで、頭髮あたまを剃すつちまいねえ、衣きぬの勧化かんげぐれえはしてやらア」

若「へ、何いれまた」

と云いい捨て、往ゆきました。

客「オイ冗談よのじやアねえぜ、オイ、逃のがてしまやアがつた」

するとまた隣座敷となりざで、

客「若い衆さん、ちよいと若い衆さん、其処をお通りかえ、若い衆さん、ちよつと御尊顔を拝したいね、あなた」

若「へエ、これは何うもお淋しゅうございましょう、生憎立込みまして、花魁は只今じきおいでになります」

客「成程明方までにはお廻りに成りましようから、それまで目を覚まして待つてましよう、あなたは青くはありませんね」

若「お隣ずからで聞いて居らツしやつて、おひやかしなすつては困ります」

客「誠に弱つたね、何か隣の真似をするじゃアないが、我々共が花魁を買い上げて、抱こして寐んね仕ようと云つちゃア些ちと增長した申し分だから、然うは云わないが、只花魁に一寸会つて見たいので、歌を詠んだり碁を打つたり、花を活けたりして高尚ということを聞いたが、だん／＼聞けば剣術の先生のお嬢さんだと、お屋敷さんだとかいうことだが、何ういうわけで斯んな苦界へ沈んだかと御様子が聞きたくつて来たんで、決して何うしようの斯う為しようのという訳ではありませんが、隣でバタ／＼畳を揚げるというので、何分にも寝られません、あの騒ぎですものを」

若「へい、誠に御迷惑な訳で、まるで煤掃すは見たようで、畳を積み揚げて、御丁寧に其の

上に布団を敷いて坐つてゐるんですぜ、天井へ頭が支えて居りますので、誠に驚きました」

客「あゝ云うものを相手にして無理なことを云われゝば、誰だつて虫があるから、何を云
やアがる、手前ばかりがお客様じやアねえと突掛りたいとこだが、青脹れといわれても何と
いわれても逆らわずに居て、氣の折れてるところは實に感服しやした、恐れ入りやした、
これは何うしてなか／＼苦勞をしなければ出来ないわけだが、お前さんも余程苦勞をし
たね、やつぱり道楽のあげく、親兄弟に見放され、拋なく斯んな処へ這入つたのでげしよ
う、お前さんがまだね息子株の時分に、様子の好い花魁のとこへ足を近く通つた末に、花
魁に乙な臭いが有つたところから病を引受けたんでげしよう其の何うも青く白いのは、種い
ろ／＼なことを御存じでしよう、親がやかましくつて勘当をされ、親類には見放され、拋な
く斯んな処へ這入つて、濡雑巾を握んで板の間を這つてゝ、番頭新造や何かゞ我儘をいう
ことを聞いてるような身になりさがつたのでしよう、女のために責め殺されて死にたいと
いう念が有りましょう、お前さんはそれが願いでしよう」

若「へへへへなに願いと云うわけではありませんが」

客「何でもお前さんは沢山遊んだ人に違ひない、さん／＼親不孝をした揚句、斯ういう
処へ這入つたんでしよう」

若「へへへ」

客「然うでしよう、少し声がしやがれてるし、いつちゅうぶし一中節いちちゅうぶしを習やつたろう……あれは端物はものだがいゝねえ、英一蝶はなぶちよの画えに其角きかくが贊さんをしたという、吉田の兼好法師の作の徒然草とげんそうを」

若「へえ何方どちらさまで」

客「お耄とほけでない、唄ぱらつたよ、お前が撥ぱらを持つて、花魁の三味線でお前が変な声を出して唄ぱらつたという噂うわが残のこつてるよ」

若「御冗談ばかり仰おほせしゃいます」

客「何うもお前は本当に苦労をした人に違ちがいないが、お前が客で遊びに来る時分には、女郎衆そばが傍よに居ゐた方が宜よいか居ゐない方が宜よいか、何方どちらが心持こころが宜よかつたえ」

若「へいへい」

と頭あたまを搔掻き、

若「真綿で首を締めるように仰おほせしゃいましては困ります」

客「只ちよつと花魁にお目にかゝれば宜いいいんで、私は伊皿子台町わたくしじゃア有りませんよ、深川万年町の先へでござります」

若「ヘイ／＼」

と云い捨て、出て往ゆき、

若「花魁工／＼」

音羽は次の薄暗い座敷で丈助に向い、

音「丈助どん能く来なました」

丈「其の後は存外御無沙汰を致しましたが、只々お案じ申し上げるのみでございますが、何分お音信たよりさえも出来ませんと、若旦那さまも、あなたさまの事をお案じ申し上げ、日々あなたさまのお噂ばかりでござります、此の度たびはまた吉原町御類焼のことを承わり、お怪我がなれば宜いがとお案じでございますが、若旦那が色里へお這入りなさる事も出来ませんゆえ、早く往つて様子を見て来いと申し付けられ、吉原へ往つて見ますと、焼跡のみで分りませんから、段々聞きましたれば、当所こちらへお立退きに成ったということを承わりましたから、取とり敢あえず罷まかり出ました」

音「そう、私も毎日神信心をして若旦那の事ばかりお案じ申して、お刀がお手に這入つたら、もうお屋敷へお帰りになりそうなものだと思つて居りますよ」

丈「へい、それが又あなた悪者に欺だまされてお刀を持って往かれ、永い間旅で御苦勞をなさ

いました」

音「若旦那は嘸御難儀、それにお前方も共々難儀をしたろうね」

丈「悪者のために欺かされましたが、漸くの事でお刀はお手に這入りました、それには種々手蔓をもつていたしましたから、其の方へ遣物^{つかいもの}や、何や彼^かやで沢山物も掛りました、永い間あのお刀ゆえ若旦那の御辛苦というものは一通りでは御座いませんでしたが、急に当廿日までに芝のお屋敷へ御帰参に極りました」

音「それはまあお嬉しい事で、私はそればかり案じて居ましたが、それはまあ何よりの事で、それに勇助は達者で居りますか」

丈「へい……勇助さんも永い間の旅で、年齢^{とし}が年齢^{とし}でございまして、私と違い大層苦労をなすったので大きに衰えました、お嬢さまにお目に懸りたいが、此の頃は持病の疝氣で腰もたゝず、そう致すことも出来んから宜しゆう申し上げてくれろとの事でございました」

音「勇助はドツと寝ているか……それで能く来なましたね」

丈「就きまして只今では高輪^{たかなわ}八ツ山の前にお漁^{りよう}などに往らしつた時分、お馴染の船宿の二階を借りて居らつしやいまして、御帰参のお支度にかゝつて居りますが、故郷へは錦を飾れの比喩^{たとえ}ゆえ、切めてはお帰りの時には立派にしたいと若旦那^せさまも仰しやいまするし、

私たちしどもお立派になつてお帰りになるよう致したいと存じます、それに差支えますと云うは、明後日渡邊外記さまにお目に懸らなければなりませんから、お上かみしも下でお召も御紋附に致し、お大小の処もあゝいう訳で、お脇差一本でお出向に成りましたのですから何やら彼やら差支えますので、至急金子百両入用に付いては、勤めの中へ再度無心をいたし、苦労を掛けて済まんが、他に何うも頼み入れる処もないからと仰しやつてで、其の代りお屋敷へ帰参すれば直すぐにお身受に成つて、御重役様が媒なこうど人で芽出度く夫婦になるので、これは小三郎さまからの御書面でござります」

と懷から手紙を出して音羽に渡し、

丈「右の訳ゆえ誠に恐れ入りますが、今晚の中に金子百両だけ御才覚を願いますよう、丈助も若旦那さまに成り代つて共々にお願い申します」

音「あい、然うざますか」

と云いながら文を取上げて封を押切り、読んで見ますと、女房に手を下げて頼むが如き文面で、何うしても丈助の企みとは、是れまでも欺むかれて居りましたゆえ知らぬも道理でござります。其の文中に何う有つても今晚中に百両の金子が無ければ、明後日渡邊外記に面会する事が出来ん、如何に尾羽打ち枯すとも斯かる見苦しき身装みなりで重役に対面もなら

ず、屋敷の聞えも宜しく有るまい、殊にお刀を渡邊外記へ渡して、殿様へ御覽に入れるのも、何かと何うも今の処では不都合で有り、また家来共にもそれ／＼身装の手当もせんければならんが、屋敷へ帰れば直に才覚してお前の身受をいたすから、何うぞ百両の金をこしらえて丈助に渡してくれると云う文面ゆえ、貞実の音羽でござりますから、音「心配しますな、何うか私が才覚をしようから待つて居てくんまし、大引け過までには何うかして見ましょう」

丈「いえ明けまで宜しいのでございます」

音「少し待つて居なまし」

と立上り、此の席を出て自分の座敷へ来て、次の間の方へ番頭新造を呼んで相談致しましたが、音羽の許へ来る客は有りますけれども、二回目の返つた例がないから無心をいう人がありませんが、此の番頭新造は親切ものゆえ、種々心配いたし、

番新「花魁無理だよ、能く考えて見なまし、おまはんは別に取り留めたお客もないのに、此の類焼やけの中で又しても／＼そう／＼内所ないしょ_{はなし}へ談はなした処が、おまはんが年季を増したのも幾度いくたびだか知れない、亭主のためとは云いながら、丈助さんの来る度にチビ／＼上げたのも巨きい事じやアないか、今度また急に百両、おいそらと云つても、斯んな立退中ざま

すもの、碌なお客はありやアしまへん、あんな乱暴もんの置を揚げたり、布団を脊負^{じょ}たり、廊下を駈けたりする奴ばかり来るんざいますものをそんなお客を相手にしたつても仕方がないじやア有りまへんか」

音「何かして工夫を」

番新「エ、それだつて内所へは云えないもの……」

と暫く考えて居りましたが、やがて何かうなずきました。

三十九

番新「一人ねお金を沢山持つている客人があるのござんすよ、先刻私がねお召を着替なまして広袖^{ひろそで}へ浴衣を重ねて貸したのさ、初会客だが、目の悪い二十五六の好い男の、品のいい人だが、初めて斯んな処へ来て様子を知らんから何分頼むよと云うから、今花魁に然う云いますが、着物を畳んで置くから出しなましと云つたら、斯んな汚い着物だから置まなくつても宜いと云うのを、無理に取つて寝巻と着替えさせると、お酒は飲めないと云うから甘味を出して遣つたら、斯んな甘いお菓子まで手当をされて斯んな嬉しいことはないが、

音羽の身の上は何ういうものか聞きたいと云うから、花魁はお屋敷さんのお嬢さんですが、
 種々訳があつて亭主同様の人のために苦界に沈んでるんざいますと云つたら、能く然う
 云つておくれ、亭主のために斯んな辛い思いをしていることを、其の亭主が聞いたら懸悦
 び、金があれば直に身受をするだらうつて、お前さんのことを思いやつて涙ぐんで居たが、
 本当に可愛相だアね、其の人が着物を着替る時に、紺縮緬の胴巻がバタリと落ちたら慌てゝ
 匪すから、私ア取りやアしないつたら、ニヤリと笑顔をして居たが、彼は何んでもお
 金をボツ／＼虎の子の様に貯めたに違いないんでしょうが、あの目の悪い客衆が百両ぐら
 いお金を持つてるようですから、彼が馴染の客ならどうでもなるがねえ」

音「無心を云つて見てくんましよ」

番新「でも私には無心は云えないわ、馴染でも何でもない人だし、誠に彼様装をして、一
 生懸命にチビ／＼貯めて持つてるんですから、貸せなんぞと云つたら肝を潰して見えない
 眼でもまわすといけないからさ、無駄だよ、斯んな好いお茶や甘味を食べたことはないと
 云うくらいだからいけまへんが、花魁無駄として、おまはん無心を云つて見なましな」

音「それ／＼中橋の繁さんが来ていると云うじやアないか」

番新「あのは人は色男がつて、好い装をして、持物に凝つて、お金の有る振をしていて、お

金は持つてないが、私は繁はんの処へ往つて機嫌を取つて来るから、おまはん彼の目の悪い人の処へ往つて、気休めの一言も云つてやんなましよ、宜うざますか」

と瀧の戸という番頭新造は出て往きました。後で音羽が箪笥の引出から出しましたは嗜みの合口でございます。其の内に引過ぎに成りましたから、禿も壁に寄り掛つて居寝りを致して居ります。音羽はそッと行灯の許へ来て鞘を払つて合口を見ますと、鎧も出ない様子ゆえ鞘に納めて懷へ置し、

音「どうも亭主の為には替えられない、こんな苦界へ沈んだのも稻垣様ゆえ、その稻垣さまが百両のお金が無ければ一生埋木になつて朽ち果てるど、よくくなればこそ女房の私に手を突いて頼むような此のお文を見ては此の儘に捨てゝ置く事は出来ない、ふりに登つたお客様なれどもお金をたんと持つて居るとの事、目の悪い客衆に会い、私の無心を諾いて下さるが、若し否と云わば仕方がないから其の目の悪い客衆を刺殺して百両のお金を奪つて丈助に渡し、若旦那さえ世に出れば私は縄に掛つて解死人に立とも、私の身は何う成ろうとも、何うか若旦那の世に出るように」

と良人を思つて良人を思つて一団意に屏風の中に居る目の悪いお客様と云うは即ち稻垣小三郎で、深川扇町に居りますが、山口屋の抱え遊女音羽というものは、

浅草田原町に町道場を出して居た石川という剣術遣いの娘だが、許嫁の亭主のために身を売つて、他の客には肌を触れんという名高い花魁だ、度々無心に来る毎に良人に金を送るとは貞実な者だと、いう噂を聞いたが、石川の娘で許嫁といえば私より他に無い筈だが、幼年の折に別れて顔貌を知らぬに付け込んで何者かに欺むかれ、斯る苦界に沈んで居るとは如何にも不憫、盲目の身で会つても益ないが、何うかして此の金をやりたいというので、渡邊外記から餞別に貰つた百両を包み、重三郎に頼み、ちゃんと自分の名を書いて渡そうと思つて登つたのでございますから、早く打明ければ宜かつたのに、それ程私を思う石川の娘おみゑに、私が稻垣小三郎と云え巴、斯様に盲人に成つた姿を見たら嘸嘸くことだろうから、今晚は帰る方が宜しいと、百両の金をそつと寝巻に包んで、コソ／＼帰ろうと致しますする処へ、音羽が合口を持つて、良人のために此の客衆を殺そうと思い、一生懸命に怖々ながら屏風を明けて中へ這入り、稻垣小三郎を殺そうと致しまして、嗜みの合口を取出し、鞘を払つて行灯の許へ来て見ると、まだ鎧も出ぬ様子ゆえ、ピタリと鞘に納めて懷へ入れ、部屋着の服で屏風の許へ来て立つて居りました。情ないことには互に顔を知りませんから、亭主の為に亭主を殺しにかかりましたので、實に小三郎の身の上は危うい事でござります。すると次の間に立つて居りましたのは番頭新造の瀧の戸で、

番新「花魁工」

音「あい……びっく恂りしたんざます」

番「ちよいと此処へ来なまし、まあ沈着おちついて其処へ坐つてくんましよ」

音「あい、おまはんは中橋さんの方へ往つたんじやア有りませんか、何うして此処に居なましたの」

番新「少し氣になることが有るから帰つて來たんざますが、花魁今おまはんが懷から脇差見たようなものを出して、行灯の前で、こう鞘を払つて、おまはんが見て居たのを、私は何をしますかと思つて、廊下の障子を明け掛けたが、怖いから立つて見て居たんざますが、おまはんそんなものを懷へ入れて往くからには、彼の屏風あの中の客衆を殺す気なんざますか」

音「静かにしなましよ」

番新「沈着いてくんましよ、能く考えて見なまし、おまはんは小三さんこさの事というと氣違のようになりますが、あの目の悪い客衆わりを殺せば、仮令たとい小三さんが世に出ればとて、人を殺しちやア斯う遣つて居る事は出来まへん、解死人に立たなければなりますまい、能く考えて見なまし、亭主のために苦労をして、幾ら添いたいからと云つても、人を殺しちや

ア小三郎さんと添えることは出来ないじやアありませんか、後先見ずの無分別なことを
してくんなります、逆せのぼ上げつて仕舞うんざりますよ、本当に馬鹿らしいじやアありませんか、
しつかりと沈着きなましよ」

といわれて音羽は沈着きはらい、言葉静かに、

音「瀧の戸はん、能く考えて見なまし、何んわっし私が悪党あがでも、眼の悪い客衆を刃物三昧し
て殺そうというような恐ろしい心は有りまへんよ、ふりに登あがつた客衆ゆえ無心を云つても
お金を貸してはくれまいから、若し貸さないと云つたら、今夜に迫る手詰てづめの金、逆も生き
ては居られないから自害だまをすると欺だまかして、無心を云つて見ようかと思うんざます」

番新「いえ、嘘うそを吐きなまし、そんなことを云つても、おまはんの顔色ちがが異つてるよ」

音「後生お願ねがいだから、そんな大きな声でいうと客衆に聞えるから静かにしてくんなりまし
よ」

番新「聞えるたつて、あの茫然ぼうとして居る柔やさしい人ひとで、お酒さけが嫌いだというから、甘味あまで
お茶おちゃでも飲んで、呉ごんなまし、生憎あいにくお客様おとこが立込んで花魁はな魁もおまはんに煙草たばこ一服吸い附け
て飲ませる間まもないのだから、腹ア立つか知りまへんが、是に懲りずに又来てくんなりまし
よと云つたら、少しも厭らしい甚助じんすけらしい事をいわないで、今日ふりに来たのは只花魁はな魁

の名高いことを聞いて来たのだが、花魁の身の上が聞きたい、以前はお屋敷さんだろうと聞くから、私ははつきり知りまへんが、種々訳があつて斯んな所へ来ているんざいます、その許嫁の亭主の為にといい掛けると、下を向いて考えてたくらい可愛相なんざいますよ、^あ彼の人を殺す……」

音「シツ……静かにして呉んなましよ、私は人を殺すなんという事はありまへん」

とコソ／＼話をして居りましたが、幾ら小声でいつても大引近い頃ゆえ手に取るように屏風の中へ聞えましたから、小三郎は驚きまして、

小「此処に居ると殺される、^{わし}私を小三郎と知らずに殺す心になるも、何者かに欺されて、私のために私を殺そうという音羽の眞実、寧^{いっ}そ私が小三郎だと名告^{なの}ろうか……イヤ／＼^{おちぶ}愁^{なま}じいに打明けて身の上を話したら、是程までに思ってくれる音羽ゆえ、私が俄盲目^{にわかめくら}に成り、笛を吹いて修行をする身の上に零落^{おちぶ}れ果てたと聞いたら、嘸嘸く事で有ろうから、身の上を明かさずに帰る方が宜かろう、就いては渡邊外記から餞別として貰つた此の百両、盲目に在つて益ない金ゆえ、良人のために苦労する音羽にやりたい」

と思い、重三郎に頼んで上書^{うわがき}まで致して有る包^{つみきん}金^金を胴巻からこき出して、そつと寝衣^{ねまき}にくるみ、帶を締直して屏風の中から出ながら、

「私は帰るからね、其処らに道行振みちゆきぶりが有ろうから取つておくれ」

番新「アツ、アヽ出て來たよ、……お願ねがいざます後生だから沈着くわんいて、くんなまし」といい捨て小三郎の傍そばへ参り、

番新「今漸く花魁おはめが來ましたの、今お茶を入れて何か甘味あま味を取りますから緩ゆくり遊んでいつて呉わんなまし」

小「私は此處おに居られん用事お事が有つたのを頓とと忘れて居たが、今思い出したから直すくに帰ります、それから彼処あそこへ寝衣まるを円めて置きましたが、あれを能く振ふるつてね、だいなしに成つて居るだろうから、振ふるつて見れば分るけれども、大方皺クチャに成つて居ようから、能く置んで置いておくんなさい」

番新「少し話はなが有るから待ちなましよ、おまはんは沈着くわんいて呉わんなましよ」

音「若しぇ、おまはん生憎よ今夜はお客様うきやが立込たみこんでお話はなもできず居たんまますが、漸々ようよう今客衆みんも皆な帰かつたから、まあく緩ゆくり話はなでもしましようから、待ちなましよ」

小「イヤ〜今夜は是非帰からんければならんが、四五日内にまた尋ねて來ますから、お前、身の上を大切にして、宜よいかえ、夜更よふかしをするしようばいだから身体からだに障さへらんようにして、宜よいかえ」

番新「だけれども花魁も心配していなますから、今夜は泊つて往きなましよ」

小「然うしちやア居られない」

番新「じやア何う有つても帰んなますの」

といながら、音羽の袖を引き小声で、

番新「花魁あの事を聞いたんざますよ、うつかりした事はいえませんね」

音「あのね、おまはんは何処へ帰りますの」

小「あい、私はあの扇町というへ帰ります」

音「扇町という処は何処なんざますえ」

小「やつぱり深川の内で中木場を越えて四つ程橋を渡ると直に往かれます」

音「そう……それじやア是から何処へ出て帰んなますえ」

小「是からマア私は眼が悪いので狭い道は歩き難いから、やつぱり土橋を渡つて中木場の横町を曲ると真直に出られるから、然う往く積りです」

音「屹度直に扇町へ帰んなましよ」

小「私は直に帰ります」

音「少し待つておくんなまし、いう事がありんすから…瀧の戸はん、後生お願ひなんざま

すが一本燭^つけて来てくんまし」

と無理に小三郎を引止めて置き、音羽はそッと抜け出して丈助の匿^{かく}れて居る暗い座敷へ参りまして、

音「丈助どん」

丈「へエ、誠に何うも毎度参りましては御無心を申し上げ、御迷惑な事は若旦那さまもお察しでございますが、能々^{よくよく}と思召して下さい、御無理なお願いでございますが遅くなりましても聊^{いさゝ}か厭^{いと}いません、夜明けまでにさえ金子が出来ますれば、若旦那さまの在らつしやる高輪までは造作は有りません、船で帰つても訳はないのですが、御才覚のお手懸りがございましたか」

音「あい丈助どん、私も種々と心配したんざますが、何をいうにも立退の中なり馴染の客衆は無し、何うしてもお金が出来ないざますが、今夜ふりに登^{あが}つた客衆は百両ばかりのお金の塊を持つてるんざますが、初会のお客に無心をいつたつて貸して呉れよう道理は有るまいが、俄盲目の身の上で有りながら、私の心持でも推^{すい}した様子で、急に帰るといい出したから、何処へ帰るんざますと聞いて見たら、扇町という処へ帰るんだが、中木場という処の土橋を渡れば真直に出られるという帰り道まで聞いたんざますが、私は此家を出るわ

けにはいきまへんから、おまはん其の目の悪い客衆の跡をソツと躡けて往つて、人の居ない処で其の持つて居るお金を貸してくれと、わっし私になり代つて頼んで見て呉んなまし、若し貸さないといつたら仕方がありまへんから、丈助どん、殺生つみのようだが其の目の悪い客衆を殺しても其のお金を奪つて若旦那へ上げて呉んなまし、おまはんには決して難儀は懸けまへん、其の罪は私が引受けて解死人とやらに立とうから、何事も皆若旦那のおため、私は斯ういう因果の身の上で泥水に沈んで見れば、たとえ仮令年が明けても若旦那のお傍へ往くことも出来ないような賤しい身に落ちたのざますから、若旦那さえ世に出れば私の身の上は何うなつても厭いいとません、おまはんには難儀をかけないから、若し無心をいつて諾きかない時は、すさき洲崎の土手あたりの淋しい処で……なア、ようざますか、なア」

丈「へエ……宜しゆうございますが、何う致しまして、あなたにも御迷惑はかけません：…ア、命を捨てゝも若旦那を世に出したいという其の御貞心を、若旦那様がお聞きなすつたらば、さぞ御落涙なされましよう……何んなお客でござりますえ、盲目なら造作ア有りませんが」

音「其の内廊下へ来るだろうから少し此処に待つておいで」
丈「宜うございます」

番新「ちよいと花魁え……じゃアおまはん直に帰りますの」

音「おまはん何うでも帰りますかえ」

小「私は直に宅へ帰ります、大きにお世話になりました、また四五日内に来て緩々話を致すが、何分用事のあることを打忘れて長居を致した、また来て話をしましようから、今夜は止めずに帰して下さい」

音「然うざますか、誠に済まない、待ちなまし、危のうざます、さア手を曳いて上げようから」

と音羽が小三郎の手を曳いて、瀧の戸と二人で漸くに小三郎を二階から下して廊下を通るのを、丈助が暗い処から延び上り小三郎の姿を見て驚き、此奴こいつ小三郎だナ、成程眼が悪くなつて江戸へ帰つたという話を此の間大野から聞いたが、何処に居るか様子が分らねえで居たが、少ちいせえ時分の許嫁で、互いに顔を知らねえから殺してくれると音羽の頼みを幸い、洲崎の土手でばらしてしまい、大野の処へ往つて己が小三郎を殺したから褒美をくれろといやア、百両ぐれえ出るに違ちがえねえ、都合にほん二両有れば大阪へ往つて何んな商法にでも取附けると、主人と知つて主人を殺す大悪人の丈助が、しめたと腹の中で悦んで居りましたが、小三郎は神ならぬ身の左様の事とは存じません。

音「そんなら何処へも寄らずに土橋を渡つて洲崎の方へ往きなましよ、佐助さすけどん送つて上げなまし、氣を附けて往きなましよ」

小「あい／＼」

と出て行きました。

四十

瀧の戸は気になるから跡へ取つて返して、床の上に円めて有つた寝衣を振つて見ると、ぱたりと落ちた百両の包み金、音羽ひづくも悔りして、

音「ほんざますえ」

番新「花魁、見なましよ、今の客衆がお金を置いて往きなましたの、あらまア何うも可愛相じやアありまへんか、眼の悪い身の上で虎の子の様にして貯めたお金なんだよ、ぐず／＼して此処に居て殺されでは大変だ、命有つての物種だと思い、貯めたお金を置いてツたんざいやしうが、お氣の毒だよ」

音「どれお見せ」

と云いながら手に取上げて上書うわがきを見ると、金百両石川藤左衛門娘みゑどのへ、許嫁稻垣小三郎よりと書いて有りましたから、また恥り、エヽと呆氣あつけに取られ、オド／＼しながら、

音「瀧の戸はん、見なましよ稻垣小三郎さまから私のところへ届けてくんまましたお金わっしですよ」

番新「何を云うんざります、小三郎さまからお金がなければならねえッて、丈助どんを頼み、書附まで添えて無心によこし、今夜中に才覚しろというのは無理な小三さんだと思つてた、その小三さんが、お金を置いて往いくとは何ういうわけなんざいましょう」

音「何ういうわけなんだかさつぱり分りまへんが、私は大変な事をしたんざいますよ」

番新「何うしましたの」

音「おまはんに云つたら叱られようが」

と云いさし、顔へ袖を宛あてゝ泣き沈み、

音「丈助どんに頼んであの客衆のあとを躡つけさせ、無心を云つて若し貸さない時には殺してお金わっしを奪つてくんまし、私が解死人に立つて、帰り道まで教えたんざますが、何うしたら宜うございましょう」

番新「あらまア、可愛相に、小三さんがあの眼の悪い人を頼んでお金を持たしておまはんの様子を聞きによこしたのかも知れないよ」

音「私は少い時分に別れたから小三さんの顔は知りまへんが、品といい様子といい、誠に実の有りそうな人だつたが、若しや彼の目の悪い客衆が小三さんなら何うしたら宜うございましよう」

番新「それ見なまし……あらまア、待ちなまし、何処へ駈け出します、藤助どんも伊助どんも寝ず番も居るから出られるもんじやアありまへん」

音「でも私が往かずに居て殺さしては済みまへんから、何うか工夫して私を遣つてくんまし」

番新「そんなら少し待ちなまし」

と番頭新造の瀧の戸が、駆け出して他の室から持つて来て、

番新「これが丁度宜うざます」

と差出す品を見れば、仲木場の寺町辺の坊さんが内証で浮れに来た者ので、長合羽に頭巾がありましたから、音羽は櫛笄を取り、島田鬚を揉み崩して山岡頭巾を冠つて両棟を高く取り、長合羽を部屋着の上に着て、おかしな身装でお客の積りで瀧の戸が音羽の手

を曳いて、そッと遣手部屋の前を通る。遣手衆は枕を附け洒落本を読んで居りましたが疲れてかバタリと本を落して、スヤリ／＼と寝附いて居る様子ゆえ、音のしないように窃つと忍んで二階を下りてまいると、寝ずばんの藤助が居眠りをして居りましたから、これ幸いと籠の戸が音羽の手を曳いて、跣足で土間へ下りにかかるとき藤助が目を覚まし、

藤 「籠の戸さん誰方でござりますか」

番新 「今急に客衆がお帰りなはるんだが、藤助どん此処へ出ちやアいけないよ」

藤 「客衆がお帰りになるなら茶屋を呼びに遣りましょう、何方のお方で」

番新 「ツベコベと何も云わねえで引込んで居なまし……花魁の処へ往つて聞いて来なましよ」

藤 「お茶屋は何方で」

と云いながら様子が訝しいから瞳を定めて能く見ると、透通つて見えるような真白な足を出して、赤い蹴出けだしがベラ／＼見えましたから、慌てゝ立上りながら、

藤 「おや花魁じやアありませんか」

と云われた時には流石さすがに音羽もどつきり致しましたが、此の儘に止まれば見す／＼の人を見殺しにしなければならない、仕方がないと心を決し、握り拳を固め、予て習い覚え

た起倒流きとうりゅうの腕前はで藤助の横ツ面を殴る、殴られて藤助はアツと云つて倒れたが、

藤「何をなさいます花魁、何方どちらへお出でなさる」

と云いながら起上ろうとする処を、

番新「藤助どん、何うしました」

と云いながら藤助の結髮たぶさを取つて引倒し、

番新「花魁早く往いきなまし」

と大戸をガラ／＼と明ける。音羽は跣足でバタ／＼と洲崎の土手の方へ駆けて参りましたが、もはや間に合いません。小三郎は左様な事とは知らず、杖に縋すがつて土橋を渡り、仲木場の方の曲り角の柵矢来さくやらいの処まで来ますと、ドブリ／＼＼と浪除杭なみよけぐいへ打ち附ける潮の音が聞えます。丈助は忍んで小三郎の跡を躊躇あたけてまいり、四辺あたりを見ますとパツタリ往来ゆきも絶えました様子ゆえ、後から声をかけ、

丈「オ、お盲目さん、オイ其処へ往いく按摩さん」

小「ハイ、手前は按摩じやア無い、揉療治を致すものではないが、間違いでござりましょう」

丈「ナニ山口屋の音羽に頼まれて來たんだが、お前めえは懷に金え持つてゐるそなだが、何うか

悉^{そつくり}皆貸して貰^{もれ}えてえ、誠に無理な無心だが、急になればならねえ金だと云つて花魁も氣を揉んでるから、オイ按摩さん金を出しねえ」

といわれて小三郎はキツと身構え、

小「汝^{てまい}はなんだ、賊だな、音羽が左様のこと^{わし}で私に無心をいうわけはない、また金はもとより懷中には無いが、寄り附くと免^{ゆる}さんぞ」

丈「ナニ音羽に頼まれたのだ、若し貸さなければ殺しても金を奪^とるんだ」

小「ナニ此奴^{こいつ}が」

と云いながら柵矢来に寄附いて小楯に取り、腰に差して居た木劍作りの小脇差を引抜き、

小「寄れば免さんぞ、サア寄つて見る」

と真影流の奥儀を極^{きわ}めた名人に二ツ三ツ振廻され、此方^{こっち}は劍術も何も知りませんから中々寄り附くことが出来ません。

丈「生意気な事をしやアがる、感の悪い癖にジタバタ騒ぐと叩つ斬つて仕舞うぞ」

小「これへ参つて見ろ、己も眼が悪いから斬られようが、其の代り汝^{てまい}も殺し、差違つて死ぬから然う思^そえ」

丈「ナニ、此ん畜生」

と閃つく長いのを引抜いて振り上げたが、寄らば斬らんと小三郎が前後左右へ振廻して居りますから、寄り附けません。丈助は横着者ですから刀を抜いたなり息を殺して踞んで居りましたが、盲人の哀しさに、

小「ヤイ逃げ失せたか、ヤイ何処へ参つた、これへ寄つて見ろ、免さんぞ」

といいながら柵矢来を離れて段々前へ出まする処を、そつと後へ廻つて、丈助が力に任せて小三郎の右の肩口をしたゝかに斬りました。斬られて小三郎は片手にて疵口を押えながら、

小「此奴おのれ汝おのれ斬おのれつたな、何処おに居おるか」

と刀を振り廻す。丈助はまたちいさくなつて暫く息を殺して居たが、

小「エヽ残念な、匹夫下郎の為に不覺どれを取つて……ウーン何処かくに匿ねられて居おるか、これへ参れ」

とまたうつかり前へ出る処を後へ廻り左の肩口へ斬りつける。

小「エヽ汝おのれ

と云つたが敵いません事で、剣術は上手でも胆たんが据すわつても、感の悪い盲目のことゆえ、匹夫下郎の丈助の為に一一刀程斬られました。丈助は今度は突こうかと覗ねらつて居る処へ

バタ／＼＼＼＼と駆けて来ましたのは山口屋の音羽でございますが、此の足音を聞き附け、人が来たかと驚き慌てゝ丈助はバラ／＼＼＼と須崎の土手を折曲おりまがつて逃げてしまう。音羽は一生懸命に駆けて来て見ると、小三郎が血に染つたなりで小脇差を振り廻して居りまするので、怖くて寄り附く事が出来ませんから、遠くにて、

音「申しえ、私は山口屋の音羽わたしざますが、おまはんがお金を百両置いてツてくんまして、書附の様子では稻垣小三郎さまから私わっしにくれたお金わっしざますが、小三さんに頼まれて來たおまはんは何という人わっしますか、様子を聞かしてくんまし、誠に済みまへんことだが、小三さんがお金を才覚してよこせという手詰てづめに成り、罪のようだが若旦那わっしのためにはかえられまへんから、丈助どんに言附けて、おまはんを殺わっしそうとしたのも私わっしざますが、おまはんは小三郎さまに頼まれて來た人わっしか、ひよつとして小三郎さまでは有りまへんか」

という声も涙に出かねて、オロ／＼泣きながらいを聞いて、

小「エヽ……お前は石川のみゑかえ、能く來てくれた、私は稻垣小三郎わしでござる」

音「エヽ……小三郎さまか」

といいながら、怖いのも打忘れて傍そばに寄り添い、取り縋りすが、

音「何うしておまはんは今夜名指しで登あがつて置きながら、何故稻垣さまということを打明

けておくんなはいまへん、おまはんはお金を置いて往きなはるくらいだのに、何んで丈助どんにお金を才覚しろという手紙を附けて遣しました、実は私の身の上はこれくで、若旦那が東海道藤沢の簀屋たばこやから手紙を遣し、二百両のお金がなければ、粟田口國綱のお刀が手に這入らんとのことゆえ、お刀のために私は苦界へ沈みましたが、丈助が再度来てはこれくいちらんで、今までお金を才覚して送つて居りましたが、あなたは御存じないことか」と一伍いちぶ一什じゅうを語りました。

四十一

小三郎は音羽の話を聞いて驚きましたが、
小「アヽ……左様か、私は永らく旅に居て、頓と江戸表の様子は存ぜんで居たが、新参者に丈助という若党が居たが、其奴私の偽手紙そいつわざをこしらえてお前を騙し、斯様な処へ沈めたのであろう、私が旅で艱難かんなん苦労をした事や、お刀詮議のために辛苦をいたしたことを細やかに話したけれど、此処は往来なり、受けた疵も幸い浅いゆえ、兎も角私の仮宅なる扇町まで手を曳いて往つて呉れろ」

というので、音羽は手早く上締を取り、疵口を幾重にも巻き、小三郎を^{いた}劳わり、音「亭主のために亭主を殺すとは、えゝ何たる事か、私のような因果なものは無い」と泣きながら漸々に小三郎に聞きく扇町へ参りますと、表は一寸生垣になつて居る狭い宅^{うち}だが、小綺麗な家作で、昇夫の安吉が働きにまいつて居り、留守居や何かして居ります。

○「安吉どん明けて下さい、安吉どん、ちよつと明けて下さい」

安「へエ……眼の悪い癖に夜出るからいけねえんだ……へエ只今明けます」

と云いながら立つて参り、戸を開け、

安「お帰んなせえ、何方へ、お迎えに往きたくつても見当が分らねえから出る事が出来ねえんだ、お目が悪いから親方も心配してました」

小「誠に遅うなりました、今日^{こんにち}は少々仔細あつて仮宅へ往きました」

安「エゝ、仮宅なんぞへ往つちやアいけません……オヤ真赤になつて何うなすつたんです」

小「帰り路^{みち}に洲崎の土手で賊に出会い、過つて手傷を受けたので」

安「エゝ……いけませんね、私やア親方に叱られやす、黙つてポイと仮宅なんぞへ往つちやアいけません、眼の悪いときには一番毒だとね、私が叱られるから困りやす」

小「イヤ〜決して心配せんでも宜しい、傷は浅いから……お前こつち此方こつちへお上り」

安「お連が有るんですか」

小「わしうち私の宅だから遠慮はいらん構わずズッとお上り」

音「御免なさい」

と云いながら頭巾を取つて中へ這入ると立派な花魁姿ゆえ、

安「若旦那、なんですえ此女これは」

小「これが其の山口屋の音羽という遊女なんだ」

安「困りますね、眼が癒りませんよ女郎じょうろうなんぞ引張り出して来て、併しかしお若いから無理はねえが」

小「イヤ〜左様じやない、予て話をした石川の娘で、許嫁のみゑだよ」

安「エ、此のお嬢さんそが、然うでござりますか、仙太郎親方も様子を聞きたいつて往きましたつけ」

小「エ、左様か」

音「若旦那がまた種々いろくおまはんにお世話になるという事を道々聞いたんざますが、誠に有難う」

安「これは何うも思い掛けねえことで、お噂を聞いていましたが、夜中能く主人が出来ましたね」

小「イヤ／＼実は廓くるわを抜け出して來たのである」

安「マア兎も角疵口は大丈夫でございやすかえ」
 小「イヤ決して心配はない、丁度宜い薬が有る、先達せんだつて美惠比丘尼が負傷けがをする事がある、其の時に此の膏薬を貼れば悪血あくちが発して眼病が癒るといつて、十二枚膏薬を貰つて來たが、仏壇の引出へ入れて有るから出してくれ」

と是れから膏薬を貼つて居る処へ仙太郎が帰つて参りました。仙太郎は音羽の身の上を聞きたいくらい、名指しで山口屋へ登あがりましたところ、音羽が逃げ出したという事を聞き、驚いて飛んで帰つて参り、此の始末を聞きまして何にしても山口屋へ掛合なんうまで、花魁のみがく身匿しをしなくつちやアいけねえ、何うせ談はなしは面倒になり、年季を増す事になるかも知れねえが、万年町へ談をしてお身受けをすることに致しましたよう、大丈夫で、私が呑込みやした……負傷けがアなすつたか……丈助は剣術を知らず、刃物きれものも悪かつたか横に殺そいだぐれえだから心配はねえ、浅傷あさでだつたは勿怪もつけの僥倖さいわい、何にしても此処に居ちやアいけねえから、早く船へお乗んなせえ。と固より荷足船が參つて居りまするから、これへ小三郎音

羽の二人に安吉を乗せ、苦とまを掛けて、

仙「矢切の渡のお乳母さんの処へ往つてらつしやれば、何処へも知れず、身匿かくにしをするには至極宜よいが、別に心配はありますめえね」

音「何も心配は有りませんが、何にしても若旦那が眼が悪いんざますから、私は神かみ仏ほとけに願つて御全快を祈りましよう」

仙「お嬢さまさで嘸さでお悦びでござえやしよう」

音「實に斯んな嬉しい事はありまへんよ」

仙「私がお送り申したいが、人目に立たねえ方が宜いいから、私は直すぐに帰りますて、万年町と相談して花魁のお身受けの相談がピツタリ極つたら、私がお迎えに出ますから、それでコツソリ匿かくれていらつしやい」

安「お目を大切だいじになせえ、此処のところが肝心かんじですから、目には一いっチ毒どくだというから」

仙「余計なことを云うな」

とはから船を出して矢切の渡口へ船を繋つけ、上へあがり、おしのゝ門口へ参りました、音羽は勝手を存じて居りまするから中へ這入り、

音「乳母ア乳母ア、ちよいと明けてくんまし、乳母ア山口屋の音羽ざますよ」

しの「誰か表へ来たようだよ、恭太や明けてやれよ」

恭「あいよ」

と戸口へ立ち、

恭「さア這入んねえ」

とガラ／＼と重たい上総戸を明ける。

音「アノ山口屋の音羽ざますよ」

恭「やア叔母さん、あのね前來た花魁のお嬢さんが這入つて來たよ」

しの「おやまア何うも能くまア、さアお上んなせえまし、私もハア何うかしてお目にかゝりてえと思つて心配して居やしたが、能くまア来ておくんなせえました、此間は焼けた跡へ吉原へ駈けてまいりやんして探しやしたが、田舎もんだからハアさつぱり分らねえで帰つて来やしたが、深川へ仮宅が出来たつてえから、ちよつくらお尋ね申すべえと思つてる内に、段々日が遅れやしただ、能くまア、さア何うぞ此方へ……お連が有りやすかえ、何うぞあなた此方へお上んなせえまし」

小「御免下さい……初めてお目にかかります、手前は稻垣小三郎であるが、永らく旅をいたして居たから頓と江戸の様子が分らんが、これに乳をくれた乳母が居ると聞きまして、

態々くお前を尋ねて来ました」

しの「おやまア何うも、なんとハア魂消ましたね、誠にハア思い掛けねえ事でござえます、これは何うも始めてお目にかかります、私はおしのと申しやすやくざ婆アでござえやす、段々丈助が御厄介になります、あんな悪党野郎で御座えやすが、旦那さまの御丹誠で此の頃は正直に成りやして、親孝行や忠義てえ事を覚えやしたのも、みんな旦那さまの御恩だと、蔭ながら拝んで居りやすが、何んとハア貴方さまゆえにお嬢さまは、相談ずくとはいながら吉原へ這入つて、誠にハア何うも心配して居さつしやつたが、その甲斐があつて、斯うやつてお両人揃つておいでなさるてえのは誠にお嬉しいことで、よくまアおいでなせえました、丈助がお供で参りましたか」

小「いやく、まあ乳母や、いうも氣の毒な事だが、丈助はお前とは相違して悪人である」

とはから丈助の悪事の一伍一什話をしたときには、田舎気質のおしのは肝を潰してぶる／＼手を震わし、涙を膝へ落しまして、

しの「何んとまア、何うもまア、あの野郎魂消やしてや、嚙まア腹が立つとも悪い野郎とも、実にね悪党野郎でござえまして、牛裂^{うしおき}にしても飽足らねえ奴の親だから、坊主が悪けりや袈裟まで悪いという譬^{たとえ}の通りで、私の処なんどへお両人さまがおいでなさる訳はね

えのでござえましように、私だけを人間と思い、お嬢さまに乳をあげた乳母だというので、心持を直して能くまア尋ねて来ておくんなせえました、私イはア実に魂消やした、あの野郎は若え時分に道楽をぶちまして、其の根性は中々直らねえと親父が見限つて勘当しやして、決して宅へ寄せ附けるなと遺言してなくなりましたが、大切なお嬢さまが入らしつて詫言をなさるから、全く改心したと思つて免して遣りやしたが、あの野郎私を欺しやアがつて、皆なあの野郎の企と知らねえで、永え間お嬢さまに苦しみを掛けて、其の上に嬢様から頼まれたからつて、御主人さまのお顔を知つて居ながら、殺すべえとしたは實に狗畜生にも劣つた彼の野郎……宜うがアす、此の村にも役人も目明しも有りやすから、それを頼んであの野郎を探し廻つて、そうして宅へ引寄せて、あなたさまはお眼が悪いし、嬢様は軟弱えから又あの野郎に逃げられでもすると仕様ががんせんから、強え人を頼んで来て、あの野郎を捕めえて置き、お前さまたちの怨みの霽れるようにしますべえから、緩くり宅に居て下せえまし」

といいさして泣沈みました。

音「私も實に欺かされたが、丈助はあれ程の悪人とは思いがけないことで」
しの「本当に然うでござえまする、私は何の因果でござえましよう」

と話してゐる處へ表の戸をトン／＼。

男「御免なさい、ちよつと明けておくんなさい、お母さん明けておくんなさい」
しの「誰だかえ」

男「エヽ丈助でござります」

と云われて、おしのは低声こづえになり、

しの「丈助が来やアがつた：今明けるだが締りイ附いてるから、もう少し待ちてろ：若旦わかよ
那お嬢さま、丈助が此処こけへめえりやしたが、若旦わかよ那さまはお目が悪し、お嬢さまは軟弱かよわ
から、あの野郎には敵かないません、何うぞ少しの間此処こけに匿かくれて、おくんなせえよ、私わしイ、
ハア兎にも角にもあなた方にお怪我しをさせねえようしに為しましようから……今明けるから待
ちてろ、恭太や、ちよいと此処こけへ來う」

恭「エヽ、なんだ」

しの「今丈助が此処こけへ這入へいつて來ても、お両人ふたりさまが泊つてゐるといふ事をいうじやアねえ

よ」

恭「アヽ、何んともいやアしねえや、誰も彼処あすこに居やアしねえつて」
しの「馬鹿め、早く明けて遣んな」

というので恭太郎が土間へ下りてガラリと戸を明けると、丈助は一本差し、羽織を着て実体らしく、

丈「お母さん誠に暫く」

と這入つて参りました。

四十二

小三郎と音羽の二人が、反故張障子の内の二畳の部屋に隠れて居るとは知らず、丈助は母親おふくろを首尾よく騙し遂せる心得で、わざと猫なで声で、

丈「お母さん誠に御無沙汰をいたしまして、お母さん、何うも都度ほづ書面を差上げなくつちやアならねえんでございますが、むずかしい字で書いては読めもしまいから、ちよつと様子を知らせたいと思っても、何分御主人さまに附つきツ切りゆえ、参る事も出来ないので、存じながら大層御無沙汰になつて、誠に相済みませんが、何時もお変りなくお健すこやかで私も満足致しました」

しの「まあ何うして此処こけへ来た、誠に思おもえがけねえことで、私も会いてえくわしと汝われがの事

べえ思つてたアだが、若旦那さまやお嬢さまは何うしたアだ」

丈「へい、早速お知らせ申しますが細かい話は聞くのも御面倒でしようが、実は若旦那小三郎さまのお手へ國綱のお刀が這入るばかりになつた処、悪い奴が中へ這入りましたお刀を転^{まな}買^{がい}を致しましたところから、それがために若旦那は九州の方へまで往か^いかつしやるような事で、ようく手に入りました、永い間の旅でしたが、只今では高輪の船宿で、伊勢屋と申す宅^{かた}においてますが、此の事を御重役渡邊様へ達して、渡邊さまからお上^{かみ}へ伺いました処が、早々召返すようにといふので、御苦勞遊ばした甲斐があつて、いよいよ御帰参になります、私も永い間辛労致しました甲斐が有つて、若旦那さまさえ御帰参になれば此の上ない事ゆえ、何うかお悦びなすつて下さいまし」

しの「それは何にしても芽出度えことだ、汝も骨を折つた甲斐があり、若旦那も永え間心しんべえ配^{くわい}をなすつた甲斐があり、お嬢さまも吉原のような、あんな恐ろしい処へ身をいれて、苦難^{くがん}をなすつた甲斐が有つたアだ、おれも心配して、汝がに会いてえと思ったが、然うかえ、若旦那が御帰参になるようになつたら、汝何うする氣だ」

丈「若旦那さまの仰しやるには、手前は一方ならず骨を折つてくれたから、侍分に取立てゝ遣ろうと仰しやつて下さいましたが、金子や品物でお礼を受けても使えばなくなつてしま

いますが、侍分にお取立になりますれば、此の身の幸い、また此のお刀がお屋敷へ帰つて見れば、若旦那さまは必ず御出世でございましよう、前には五百石お取り遊ばしたお身柄ゆえ、八百石か千石にもお成りなさるに相違有りませんから、私も大した御扶持ごふちが戴けましようから、然うしたらお母さんを斯んな処には置きません、直に屋敷へ引取つて柔らかい着物を着せ、置おき巨ご燐たつをして樂をさせ、是まで御苦労をかけたお埋合せに孝行をいたします」

しの「何とまあ嬉しい事だな、汝工われはア是まで道楽ウぶつて種いろ々心配くしんぱいさせたけんど、汝が殿さまの為に苦労したお蔭で、侍分にお取立になれば親を引取つて坐布団の上で樂をさせべえと、生れ変つたような柔しげな心に成つたかえと思うと、私わしイはア誠に嬉しいだよ、死んだ父さぞさまも嘸悦さぞぶべえとと思うと嬉し涙が出るだよ」

丈「実はお泣きなすつても宜いくらいで、真に私も骨折甲斐よが有ると思いまして、此の上ない悦びでござります」

しの「それに就いて、勇助どんは汝われと一緒に若旦那わづかへ従ついて出たが、勇助どんは帰けらねえが、なにか矢張り汝やつぱがと一緒けいか」

丈「へい、勇助どんは年を老つていますから、高輪の伊勢屋で若旦那のお傍に附いていま

して、わたしだけ方々駈け摺り廻つてゐるのですが、若旦那がお屋敷へ御帰参になるので、実に大騒ぎ^{わたくし}というのは、お衣服^{みなり}から、大小からお荷物まで拵えて、華やかにしてお屋敷へ御帰参になるようにしなければならず、また私も侍分に取立てるに仰しやるんですから、今まで違いますれば、上下^{かみしも}から小袖まで相当のものを買^{かいと}調^のえなければなりません、けれども若旦那のお買物に多分に費^かりますので、自分の支度金どころではありません、就^きましてはお母さんは誠にお心掛けの宜いお人ゆえ、少し金子のお貯えが有るなら私に貸して下さいな、それに親父が正月名主さまの処へ年始に往く時に差した、あの大切にしていた脇差がありましたが、あれで間に合うからお父さまの形見に下さいな、能くお父様がこれだけは己も武士の果の印だと御自慢なすつた事が有りましたが、あれをお譲りを願います」

しの「あゝ譲るとも、それに己^{おら}も心にかけて、此の畠や田地を汝^{われ}がに譲つても額^{たか}が知れるから、切めて金でも遣るべえと思つて、己が身の上では巨く貯めた積りだが、父様の脇差も汝より他に譲るものはねえ、今出して来て遣るから少し待ちてろよ、能くマア汝工はアそんな柔しげな心になつてくれたかと思うと、己アはア實に何だか飛立つ程嬉しいだよ」丈「左様でしょう、これは何んにお悦びなすつても宜しいので……恭太」

恭「エヽ何い」

丈「己の留守中にまた何か叔母さんに世話ア焼かせやアしないか」

恭「うゝん……今お前勇助さんが何処に居るつて然う云つたね」

と云われて丈助は驚き、

丈「旦那さまのお傍に居るのよ」

恭「うゝん叔母さん嘘だよ、勇助さんはね、矢切の渡場わたしばでね、この叔父さんが殺しちまつたんだよ」

と云われて丈助はいよ／＼ 弥々驚き、

丈「コヽ此ん畜生ちきしょう、ナ何を云やアがる、そんな馬鹿ア云やアがつて」

恭「ナニ本当だよ、身体へね石を巻き附けて、利根川の深え処ふけとこへ投ほうり込んだんだよ」

丈「コ此ん畜生、ナ何を馬鹿ア云やアがる」

しの「エヽ馬鹿な奴のいう事だから構うなよ」

恭「それからアノネ叔父さんが己にお錢おいらあしを四百くれて、黙つてろくツて、喜代松という船頭と二人で、曲金から附いて來た泥坊だから殺したんだッたが嘘なんだよ、勇助さんは疾とうに殺してしまつたから、生きて居やアしねえんだよ」

丈「バ馬鹿、此ん畜生何を云やアがるんだ」

しの「エヽ馬鹿な奴のいう事を取上げて余計なことを云わねえが宜え、恭太もまた何もい
うな……此んな愚な者おろかのいう事だから、何も汝われが小言をいうにやア及ばねえ」

と云いながら立つて戸棚から取出して来ましたは小脇差で、
しの「さアこれを見る、薄鏽は出たが、父さまの形見だ、また金も是だけ有るから」
丈「へえお母さまは何うも誠にお心掛けの宜いことで、有難う存じます」
と脇差を取上げ、

丈「中々立派なもので」

しの「少し汝われがに云い聞かせるが、己おれは何にも知らねえが、これは父とうさま様が御先祖さまから譲られた品だから、貧乏してもこればかりは放せねえ、貞宗さだむねとか何とかいう脇差わきちだつて、大切にしていたから、父さまが死んで以後出さねえもんだから、少し鑄たアだよ」

丈「へえ」

と丈助がうつかりして居る処を、おしのは手早く小脇差の鞘を払い、丈助の横腹よこべを
目掛け、一生懸命力に任せてウーンと突込む。

丈「アヽ：お母さん何をなさる」

と前へのめる。

しの「動きやアがるな此の野郎、うぬ、殺さねえで置くものか、うぬ、己ハア氣も何も違わねえ、汝え殺すべえと思つてる処へヌク〳〵と来やアがつて、此の野郎〳〵」

丈「ウーム……お母さん、何だつて己を殺す、何の咎とがで私を殺すのだ」
しの「誠にハア何とも言いようのねえ奴の癖に、能くまア己おらがの前で何の咎でなんてえ事が云える、汝われような鬼とも蛇じやともいいようの無え悪党の子を持つた己おれは、何うもお兩人さまに済まねえからよ、よくも〳〵己おらが乳を上げた御主人さまのお嬢さまを若旦那ふたりの為めだつて欺かして、吉原の山口屋だまへお女郎に売りやアがつて、其の身の代の二百両も若旦那いりようへ上げるてえのは嘘みんで、皆みな汝つかが費つかやアがつて、うぬ」

と刀でこじる。

丈「アイツ〳〵、アイテ〳〵、お母さん何うぞ免ゆるしてくれ、少し手を放してくれ」

しの「手を放せツて放すものか、何うせ汝われ工殺すべえと思つてるんだ……コレ汝はそればかりじやアねえ、今聞けば勇助たかひどんも汝が殺したゞな、それから度々嬢とけゆさまの処へ往きやアがつて、お嬢だまさまを欺くらかして偽手紙イなんぞをこせえて、若旦那さきおとづさまの入用いりようだつて嘘つきべえ吐いて、金を取つて費つかやアがつて、うぬ、昨日さきおとづの晩も汝え山口屋へ往つて、

お嬢さまを欺かして百両取るべえとしたアだな、其の時に若旦那さまが匿れてお客様に登つてゐるのを、お嬢さまは若旦那の顔を知んねえもんだから、亭主と知らずに汝がに殺してくらんろと頼んだ時に、汝は眼まなこがあるから若旦那を知つてべえ、若旦那てえことを知つてながら跡を躊躇つけて、洲崎の土手で若旦那さまを騙し殺しに殺すべえと思って、斬り掛けやアがつたとは、何んてハア何うも、呆れるとも呆れねえともいいようのねえ野郎で、其の上スク〜と此處へ来やアがつて、只た一人の此の己の死おれ金まで貪り取りに能く来やアがつた、うぬ」

丈「ウーム：ハツ、ハ……おめえ何うしてそれを知つてゐるのだ」

しの「知つてねえかえ、汝より前にお嬢さまも若旦那さまもおいでが有つて、婆ばあやお前めえと違つて丈助はこれ〜の悪党だが、廓を出て来たのだから少しの間匿れて居るんだと仰しやつて、おいでなすつて、汝がの企の段々を聞いた時は、實に魂消たとも魂消ねえとも、若旦那や嬢さまに対しても汝を助けて置くことが出来ねえから、お役人を頼んでも汝を縛つて、御公儀さまの御厄介に成つて、汝をおつ殺すべえと思つてゐるところへ、汝が來るてえのは罰ばちだ、只た一人の忤はむけを親の身として殺したんだぞ野郎、御主人さまへ刃向むけ立だてをしたんだから、汝は磔刑はりつけにあがる程の悪党だが、親の慈悲だからまだしも此の畠の上で、

お父さまの形見の脇差で斬殺きりころして遣るから、有難ありがてえと思つておつ死ちんでしまえ……ヤア、おつ死ちんでしまえ

丈「ウーム……ウームお母さん少し待つて下さい」

と云いながら片手で袖を握り溢れ出る血を押え、ハツハツと息を吐く途端に、中矢切の総寧寺の勤めの鐘がゴーン／＼と市川の流れに響いて聞えます。二畳の室の反故張り障子の内で、小三郎が一節切を取つて手向たむけの曲を吹きました音色が、丈助の心耳しんにへ聞えますと、アヽ悪いことをしたと、始めて夢の醒めた如く改心致し、母の手を握り詰め、ハツハツと外へ出るばかりの苦しき息をやつと遣う。

しの「目が醒めたか野郎、目が醒めたか、うぬ」

丈「ウーン……お母つかア少し待つてこんな、余り強く遣ると己おらア死んじまう、己おれの息が止つちまうと、若旦那かたきさまのお尋ねなさる仇敵かたきの匿れ家かくもお探しなさるお刀の手掛りも分るめえ、これまでの悪事のお詫ごとに残らず己おれがお話し申し上げてそうして死ぬから少し手をゆるめてくれ、ちいと手をゆるめてくれ」

しの「さアいつてしまえ、汝われ工知つてたらば残らずいッちまえ」

丈「ハツハツ、お母めえアお前やどのよう正直ものゝ腹へ己のよう不孝者が何うして胎たんつたか

と、目が醒めて見りやア、実に何うも済まねえことをした」
しの「済まねえ事をしたつて今氣イ附いたか」

四十三

丈「実は稻垣さまの処へ御奉公にあがつてる内に、稻垣さまの下役に大野惣兵衛という奴
が有つてノ、其奴(そいつ)が石川のお嬢さまに惚れて、時々己に鼻薬をくれちゃア種(いろ)々頼むから、
己も種々な悪事を謀(しめ)し合わせている内に、其の大野惣兵衛はお暇(いとま)に成つたが、浪人しても
己を呼び出しちやア頼む(く)と云つてはくれる鼻薬に、つい目が昧(く)れて、粟田口國綱も己
が手引をして盜ましたのだ、また石川藤左衛門さまを日暮ヶ岡で鉄砲で打殺させた手筈を
したのも皆んな己、それから鴻の台の鐘ヶ淵から小左衛門さまを突(つきおと)落させた手引もおれ
がしたのだから、石川さまの仇敵(かたき)も矢張り大野惣兵衛だが、今は八橋周馬と名を変えて、
田地や山を買い、堀切(そば)の傍の別荘に居て、金貸しをしているが、その大野惣兵衛の差料に
している刀が粟田口國綱だから、早く其の刀を取り返し、仇(あだ)を討つて御帰参になるようにし
て下せえ、今お前がいう通り、主人と知つて刃向(はむけ)え立(だて)をした丈助だから、磔刑(はりつけ)に上つて

も飽き足らねえ奴だが、畳の上でお母アの手に懸つて死ぬのは親の慈悲ということを、今初めて覚えた……ア、わかつた、お前も定めて悪かろうが、若旦那さまが此処これへおいでになつて、己の鬚ひげの毛を一本ひつく引こ抜き、五分だめしにしてお胸を晴して下さるようにお詫ことをして下さい、誠に悪い事をしましたから、何うかお詫ことをして下さい」

とハラはらくと落涙して泣き沈みました。

しの「今になつてそんなことを云やアがつて、漸く悪いことをしたと氣イ附いたか」

丈「わかりました、ハツはつく」

恭「叔母さん堪忍して遣んなよ、叔父さんが痛いたえツて大騒ぎイやつてるからよ」

しの「エ、黙つてろ、用にやア足りねえが、汝われも寧いっそ此の恭太郎見たように馬鹿にでも生れたらこんな苦労はしめえものに、生才なまざい覚かくが有るばかりで、斯んな悪をしやアがつて」といいさして奥の方をふり向き、

しの「若旦那はらさまもお嬢はらさまも、只今お聞きの通りの訳でがんすから、お嬢はらさま何うか此これへおいでなすつて、あなたの御存分になすつて、此の野郎の鬚の毛を一本ひつく引こ抜いてお胸はらを晴して下せえまし」

というのを聞き、反故張り障子を明けて出て来たのは、小三郎に音羽の二人で、

小「婆や其方は誠に男優りの氣質である、現在の一人の忤を手にかけて殺すとは、実につらい事であろうが、私や音羽に義理を立て、お前が手を下して斯う計らい、また丈助も先非後悔して、刀の在所、仇敵の匿家まで教えて呉れた其の功に愛でゝ、永く苦痛をさするも不便ゆえ、この小三郎が介錯して取らせるぞ」

丈「へい／＼誠に何うも面目次第もございません、面目次第もございません」

音「乳母ア始めの内は私はしがみ附きたいほど悪らしく思つたが、またお前の心根を考えて氣を取直し、今まで此の室に這入つてしま／＼泣いて居たんざますが、お前は嘸つらい事だらうね」

しの「はい……はい、貴方がた、何うぞ御存分に此の野郎をジキ／＼斬つてやつておくんなせえまし」

小「これ丈助、手前に斬られた疵口から悪血が発したため、眼病も大きに全快の端緒に赴き、少しづつは見えるように相成つたが、その八橋周馬とか申して堀切村に居る奴は、全く仇敵の大野惣兵衛に相違ないか、又國綱のお刀を差料にして居るに相違ないか」

丈「全くそれに相違有りません、實に面目次第もございません、大惡非道の私を悪いとも思召しませんで、若旦那さまが御介錯下さるとは有難う存じます……丈助は浮び上りま

す……他に子供も何も無い只た一人の母親でござりますけれども、母親は正直一団の少しも悪気のないものでござりますから、何うか不便のものと思召しましてお目をお懸けなすつて下せえまし……お母ア堪忍してくんねえ」

しの「今になつて慄じいにそんな事はいわねえで、黙つておつ死んでしまえ、何うぞ若旦那さま、何時までも苦痛をさせたくねえでがんすから首を打落して下せえまし」

小「おゝ、尤もの事」

と小三郎は立上り、小脇差を引抜いて丈助の領元へあて、呼吸をはかつて、

「エヽ」

と声をかけて打落すと、丈助の首はゴロヽと土間へ転がり落ちました。

恭「ア、彼の叔父さんは酷い事をする、丈助さんの首を斬ッちやつた」

しの「静かにしろやい」

といいながら仏間に向い、おしのは念佛を唱えて居ります。これから名主へ右の次第を届けて、丈助の死骸は中矢切の法泉寺へ葬り、事済みに成りました。処へ仙太郎が小三郎音羽を迎いに参りましたから連立つて帰りましたが、音羽の身受けの相談は極つたなれども、岡本政七方に居ては人出入も多いからというので、一人とも高橋の重三郎の宅へ参

つて居ました。おしの婆は只た一人の悴が斯ような悪人に生れ附いたのも前世の約束事だろうと思い諦め、所持の田畠を残らず人に譲り、恭太郎を連れて向島へ参りまして、白髭の蟠龍軒の美恵比丘尼の弟子になり、恭太郎諸共クリ／＼坊主になりまして、姪の若草もまた子供も然ういうことになるも皆約束事だらうと思い、綾瀬川の渡口へ庵室を作り、念仏を唱えながら礫を拾つて山のように積み上げるという、是から敵討になります。

稻垣小三郎は高橋の辺なる重助方へまいり、段々療治を致して居りまする内に、美恵比丘尼のいう通り、眼病も次第／＼に全快致しましたから、逃げられん内に早く仇討をしたが、粟田口國綱の刀を先へ取返して置き、それから大野を討ち果したいと、種々手を廻して心配して居りました、お話二つに分れて堀切の別荘に居る紀伊國屋の伊之助は、病氣全快してブラン／＼遊んで居りまするところへ、幫間の正孝が侍を一人連れてまいり、

正「今日は、御免：え、御免」

伊「誰方か知りませんがお上んなさい、誰だえ」

といいながら出て参り、

伊「イヤ師匠か」

正「えゝ今日は」

伊「構わぬずと庭から廻つて這入んなよ」

正「これは何うも、イヤお一人で……何うも好いお庭でげすな、お鉢前から下草誠に様子が好うがすな」

伊「そんなことをグズ／＼云わねえでも宜いからおあがりよ」

正「實に御様子の好いお庭で、三日ばかりお客様のお供で他へ往つてましたが、斯ういう廣々とした景色の好い所は見られません……お一人でげすか」

伊「みんな摘草^{つみくさ}に出かけたよ」

正「成田以来お目にかかりませんか、彼^あの時に若旦那が掘出物をなすつたが、あの釜は幾らでしたつけるべく一両二分ですか、それが二百両にもなると仰しやつたから、私も何うか彼アいう釜があつて安かつたらお目にかけて、二百両でなくとも五十両にでもなれば、帮間を廢める氣でげすから釜の有る度^{たんび}に買つて来ますが、碌なものは有りませんで、考えれば可笑しいなんと、昇夫^{かこかき}に取^と捕まつてね、あの時は、あなたも変な顔をなせえましたが、虚無僧さんが出て来て、編笠^とを脱つて、エヽと遣つたんですが、私は人を斬るを始めて見ました、實に驚きました……フヽヽ、若旦那、今日ね、仲の町の客で、何時も取^{てめえ}巻に来て、変に分らねえ奴なんでげすが、其の人が急に売りてえ刀があるんだが、手前^{てめえ}

方々へ出這に入るから世話アしてくれろつてえ言いますから、若旦那はお目が利いてゝ、大概堀切に居らつしやると思いやしたから、一緒に連れて来たんで、三百両ぐらいの価格は有るんだが、即金ならば百両でも宜いというんですが、それが三百両とか五百両とかになれば、私も大きにお世話の仕甲斐があるんですが、何うでげしよう」

伊「刀といえば己も買いてえ心持が有るんだが、其処へ其の品を持つて來たのか」

正「エヽ彼所に変な訳の分からねえ侍が居るんでげすが、祝儀のくれツ振が悪いもんでげすから、何処の茶屋でも忌がられる山田さんてえ人が持つて來ているんでげす」

伊「そんなら早く此方へお入れ申せば宜いのに……あなた何うぞ此方へ、お構いなくお這入り下さい」

山「いや御主人はお在宅で、御免

伊「さア何うぞ此方へ、お構いなく」

山「御免を蒙る……、これは立派なお住居で

伊「生憎誰も居りませんで……師匠菓子器の蓋ふたを明けとくと砂が這入つていけないから……あなた何うぞ此方へ、これはお初にお目に懸ります、私は紀伊國屋伊之助と申しまする至つて不調法もので」

山「手前は山田藤六という者で、始めて会います、正孝がねえ、予て贋負になるコレくの主人は大目利おおめきであるから、お世話を為ようという事だから、取敢とりあえず罷り出たいと思つても、お宅が分らんと申したら、お寮においてだらうという事で出ましたがね、此の品は手前上役の者が売るのだが、余程価値ねうちものなれども、此の度国表へ帰るに就いて、是は手放すのに誠に惜しいが、幾口いくぶりも有るから手放すのだと申し、刀屋に見せると、差料を売つたという事がぱつとしては宜くないというので、心配なしにオイソレと云つて、即金で買つてくれゝば百金で手放してしまつ、併し次第に因つて価値ねうちが有つたら、それだけの事にしてくれなければ困る」

伊「私は質を取つて居りますが、小道具の方に目が届きませんけれども、番頭に目の利いてるものも御座いますから、お品を拝見致しましてから御相談をいたしましょう」

山「品はこれへ持參致した」

伊「兎に角拝見致しましよう」

といいながら風呂敷を解くと、中に袋入りに成つておりますから、押戴よせき、

伊「拝見を」

と風呂敷包から取出して見ると、白茶地亀甲形古金襴の袋で、紫羽二重の裏が附いてお

りまする結構な打紐を解いて、ズーツとこき出すと、鞘は別に念の入れようは有りません
紹色で、丸繰形身入れ白に成つており、淵頭に赤銅七子で金の二疋の狂い獅子、
目貫は横谷宗珉の一輪牡丹に、鐔は信家でござります。鮫は占城の結構などころ、
柄糸は煮紹三分に巻き揚げ立派な物でござります。

伊「何うもお立派なもので」

山「我々には分らんが、売る当人は中々大した金をかけたのだろう、だが火急の事に相成
つて値売をしている訳にはいかんから、あなたの目利き次第で価値が有れば、一杯に買つ
て貰いたい」

伊「お刀身を拝見致します」

と是から鞘を払つて見ましたが、私は刀の見様などは存じませんが、先ず刀を真直に
立つて暫くの間こう遣つて見ると、刀脊の三つ棟に相成つてるカサネの厚い所を見て、又
こう袖を当てまして暫くの間鎌ぼうしゃま 尖みねから横手下物打から鎬しのぎ、腰刀の辺を見ますると、
腰刀みだれ深くいたして丁子乱ちようじみだ れに成つて居りまして、二尺五寸余もあります。

伊「誠に結構なお品のように存じますが、これは御銘は誰でござります、作名は確と有
りましような」

山田「それはもう正しい銘が有ります」

伊「誰でござります」

山田「誰だつて、それは云えんが、金子を出して渡せば速かに銘を明すみや_{あか}そう」

伊「左様なら一寸ちよつとおナカゴを拝見致しましよう」

山田「それはいけん、それがナカゴを何うも見せるという訳にはいかん、金子を渡してしまつてからなら何うでも宜しい」

伊「何分にもお銘が分りませんと誠に何うも困りますが、お銘を仰しやつて下さるよう願います」

山田「何うも然ういう訳にはいきません、うりてしか売人に確と頼まれて居おるんですから」

正「山田さん、ちよいとこれは何んてえ作銘だと仰しやいな」

山田「然ういう訳にはいかんよ、大夫から確と頼まれてるんだから、愈々いよ／＼買うと云つて金子を渡せば、ナカゴは見られるのだ」

伊「それでは少々お刀を拝借致しどうござります、番頭は少々心得ておりますから、番頭に見せるまで拝借を願います」

山田「然ういう訳にはいきません、直すぐに引取るのなら格別、何うもお前の方へ預ける訳に

はいかん」

伊「能く拝見致しました上では百両と仰しやつても、二百両にでも三百両にでも、五百両にでも頂戴致します……左様なら後刻番頭を同道致しまして、お宅さまへ出ますが、何処へもお渡しなく私わたくしかた方かたへお譲りが出来ましようか」

正「そんな事をするのも億劫おつかうでげすから、云わない積りで私まで内証で、耳打で、その作銘を一寸いって下さいな、云わねえくらい強氣ごうぎと訳の分らねえ事は有りやすめえ」

山田「然うはいかねえよ、それでは金子をもつて大夫のお宅まで来て下さい」

伊「へえ、金子を持参して遅くも夕景までには頂戴に出ますが、何方どちらさまでございます」

正「ナニ、あの、八橋畠そばの傍わきで、立派な御門が有つて、生垣に成つてお宅でげす」

山田「他ほかへお見せなさるんではいかん、金子と引替でなければならんよ」

伊「へえ畏りました、後程相違なく私が出ます……師匠お前少し跡に残つてゝくんな」

正「へい……山田さん御免蒙つてお送り申しません」

伊「誠に何うも、左様なら」

山田「それでは後刻」

と山田藤六は帰つてしましました。

正「あゝいう分らねえ奴なんで、時々変な洒落をいうんでげすがね、忌な心持になる洒落なんで……刀の銘を云つたつていゝじやありませんか、此方こっちで買うのだから、團十郎とか菊五郎とか左團次とかいわなければ給金が打てませんのにさ」

伊「あの刀に就いて少し心に当る事があるから、師匠氣の毒だが船を言付けるから一緒に万年町まで往つてくれないか」

正「へえ、何処へでも往きましょう」

と是から屋根船あづらを逃あつらえて万年町の岡本政七方の桟橋へ船を繫つけまして上り、門口から、伊「誠に御無沙汰を致しました」

政「おや／＼これは伊之助さん、能くおいでなさいました、私も一寸お尋ね申したいと存じながら、種々いろく取込が有つて、つい／＼御無沙汰をいたしました、私も彼方あつちの方へ保養かた／＼見舞ゆに往きたいと思つてましたが……おや、誰かお連れが有るなら此方こっちへ」

伊「ナニ彼は正孝という帮間たいくちもぢで、師匠此方へ上んねえ」

正「これは始めて、私は櫻川正孝と申しますほうかんで、春木町さまには毎々一通りなりません御顕わたくし員よを戴さきます……御当家は宜い御商売でござりますな、若旦那、此の位結構な御商売は有りますまい、お店はちいさ一寸箱の蓋ちよいどを取ると金目の

物が有つたり、ちよいと立掛けて有るお品でも千両二千両ツてんでげすから、此のくらい

結構な御商売は無いと思ひます」

政「さすがに 流石に職業しょうばい とはいながら、這入りながらお世辞は恐れ入りました」

正「いえ全く御世辞じやアないので、真から湧出わきだ したのでげす、ちよいと彼の箱の中あに在ある目貫を一つ取つても千両にもなるんですが、盜めば直すぐ に露顕あらわしますから瞞こまかすことは出来ませんが」

政「恐れ入りますな……先達せんだつ て心当りが有りましたから、段々と聞いて見たら、いけないんで」

伊「今こんにち 日師匠が連れて來た侍の持つて來た品が、其れではないかと思うんですが、予てかね のお話とは乱れが少し違うようですが、國綱が山の内に居た時の乱れは何うとか、此の間重さんの話でしたが、刀を売りに來たから、買いましょうが作銘は誰でげすと云つても云わないんですが、何うしてもそれに違ひないんです」

政「誠に何うも有難うござ いますが、何処からまいりましたので」

伊「八橋畠に居る人なんだそうで」

政「それは何うも、早速重三じゆさん を呼びに遣りましよう」

と直に手紙を認め、高橋へ小僧に持たしてやると、荷足の仙太郎も何か仲直りの交際で、子分を二人連れて重三郎の処へ来て居りましたから、重三郎が披き見て飛立つ程の悦びで、これから小三郎音羽だけは姿の見えないよう屋根船に乗らせ、仙太郎も重三郎も取敢えず政七方へ出てまいりました。

四十四

重三「只今はお手紙ゆえ取敢えず出ました」

政「今春木町が来て知らせたから直に呼びに遣つたのだ」

重「これは春木町さま、其の後は誠に御無沙汰をいたしました、此の度はまた御親切に有難う存じます、小三郎さまの仰しやるのには、上の手をもつて何んするような事では武士道が立たんと、其処に種々仔細がございまして、敵討をなさいませんければならない事に成つて居りますが、お刀を取つてしまわぬ内は踏込む訳にもいかないので、困つて居りましたのです、誠に有難う存じます、夫に相違ないので」

伊「重三さん、お前さんが私の手代の積りで往つて下さいな、私は金子を持って往きます

から、百両なら百両其処へ金子を出すから、お前さん其の刀を持つて先へ帰つて下さい」

重「誠に有難う存じます…さア仙太郎親方お上んなさい」

仙「御免なせえ」

政「おやく丁度好い処へ」

仙「今ね高橋へ来てると、此方こっちからのお手紙でしたが、何んとも何うも今まで苦労した

甲斐が有つて、此の上ねえ悦びで、まあ何ういう手蔓で其の刀を持つて來たので」

政「此處これに居る正孝という幫間たいこもちの世話で」

仙「お前かオイ正孝という幫間てえこもちはお前か」

正「へえ」

仙「てえこもち幫間なんてえものは彼方あつちへべつたり此方こっちへべつたりしてえやアがるから、向うの奴に何か吐ぬかすとたゞア置かねえぞ」

といわれ正孝は仙太郎の口の利きようの暴々あらしいのに驚きまして、けぢんな顔附きを

して、

正「へえ、泥坊物もんでげすかな、

かりあい

係合になりやすからお世話アしなければ宜かつた、驚

きやしたな」

仙「本当に冗談じやアねえぜ、向うの野郎に内通して何か云やアがると手前の首をヒン捻てめえねじツちまうからそう思え」

正「へえ首捻りや何かは驚きやす……おや、あなたはなんだ、オ、あなた、お前さんだ、誠に何うも」

とピヨコ／＼お辞儀をするので、

仙「何んだ／＼」

正「アノそれ、いつぞやそれ四年後の九月の廿日はつか、吉原土手で親方が中へ這入つて下すつて、侍がエーッてつて刀を引ひこ抜いた時に助けて下すつた親方に違あらわいねえようで」

仙「ウーン……あの時の帮間てえこもちはお前めえか」

正「モシ若旦那お札を仰しやいよう」

伊「私は親方には時々お目にかゝつているから疾ひとうにお札はいつちまつたよ」

正「酷ひどうござりますね、然そうなら早く知よらせて下されば宜いのに……その節は親方誠に有難う存じました、わたくし私は助かりましたが、あの晩に長次さんはポカリと斬られちました、あの時の御恩は私は死んでも忘れませんあの時には誰も中へ這入つて止め人がないところへ、親方が這入つて下すつて、無法といつては済みませんが、向うで驚いて手を放したの

で私は逃げられたので、それからというものは貴方のお顔が目に附いて、忘れませんが、お名前が知れないから只土手さま／＼つて、真に神の如く毎日／＼拝んでもましたが、此方こちちらにお目に懸るとは斯んな嬉しいことはありません、親方のためなら内股膏薬わたしどころじやア有りません、私は按摩膏に成つて親方の方へピツタリ粘著くつづいて離れませんので、お手伝いでも遣りましょう」

仙「それは有難い、何にしても斯んな結構なことはねえが、早くしなければ逃げられでもする」といゝねえから、早いが宜い、正孝も一緒に往きねえ、旦那は何うなさる」

政「私はまいりましても却つてお邪魔になるばかりで、何んのお役にも立ちますまいから御免を蒙りますが、重三郎と正孝さんとを伊之さんが連れて往つて、お刀を先へ取つてしまいなさい、それに親方は子分を二人連れて往くと仰しやるから」

仙「ナニでえじようぶ大丈夫でござえやす、遅くも今夜の亥刻時分までに帰つて来て、芽出度めでたく祝いをしましよう」

と仙太郎あとが先へ立ち、後から三人が桟橋へ出まして、これから船へ這入りました。

正「若い衆さんしゅお頼み申しますよ」

伊「師匠こつち此方こちへお這入り」

正「へえ御免下さいまし」

小「これは誠にお久しうお目に懸りませんが、何時も相変らず御機嫌能く、^{どなた}誰方もお變りなくつて」

伊「へえ、有難う存じます、貴方さまにも御機嫌宜しゅう」

小「これは正孝どの、久しう逢いません」

といわれて正孝はけざんな顔をして、暫く考えて居りましたが、

正「おや、是は、成田街道で笠を冠つて、笛を吹いてた方で……旦那誠に久々でお目に懸ります、これはどうも思いがけない、若旦那、あなたホラ私達を助けて下すつた旦那なんで……お礼を仰しやいよう」

伊「己は疾うにお礼は済んでるよ」

正「貴方のような皮肉なお方はありませんね、そんなら何故早く知らせて下さらないんで……あの時から何うも立派な方だと思い出ましたが、お大名さまでいらっしゃいますか」

伊「芝の金森さまというお大名の御重役で、稻垣小三郎様と仰しやるお方なんだが、お刀紛失に就いて虚無僧のような真似をして、散々御苦労をなすつたんだが、是から其のお刀を取りに往くのだ、斯ういう芽出度い事になつたのも、お前のお蔭だよ」

正「へい、道理で彼奴あいつはお刀ななの銘なまをいいませんでした」

四十五

正「これは何うもお立派な奥さまで、初めましてお目通りをいたします。わたし私は正孝と申す
幫ほうかん間まんでござりまする」

音「正孝はん、久しう会いまへんね」

正「おや……これは山口屋の花魁、これは驚きやした、種々な方いろんに出会でつくわしますな、花魁
え、何うもすつかり御様子が変りましたから間違いたんでげすが、花魁ばかりは何うも只
の花魁じやアない、お姫さまの筋の花魁だつていつてましたが、成程これは成田街道かたで昇あが
夫ごやを投げた方の御新造ちげに違ちがえねえ」

伊「許嫁いぢめのお方々あわせさまなんだが、互いに顔を知らず小三郎さまはお刀詮議のために遠国へ
お出いでの後あとで、お父とうさまを殺した奴は大野惣兵衛そいっつやつぱといふもので、其奴そいつが矢張りお刀を盗んで
持つてるばかりでなく、石川かたきさまを殺した奴ゆえ両家ともに敵かたきに成つて大野惣兵衛、然そういうわけだからお前と己と番頭さんと三人で先方へ往つて、価値ねうちに構わず二百両でも三

百両でも金子を投り出して其の刀を取上げてしまう、跡へ若旦那とお嬢さんが踏込んで往くという仇討かたきうちのつけの案内がお前だよ」

正「これは恐れ入りやす、これはどうも御免を蒙りましょう」

伊「御免を蒙るつてえ奴が有るかえ」

正「だつてサ敵討なんぞに幫間の出る訳のものじやア有りません、煤掃すはきのドンパタやる時でさえ何の役にも立ちませんもの、敵討の処へ往つたら腰が抜けて這つて逃げるくらいのものでげすから御免を蒙りやしそう」

仙「今若旦那や花魁の御恩は死んでも忘れねえと云つたじやアねえか、殴るぜ」

正「これは恐れ入ります……宜うございます私は死にますく、私は藏前の売うらないト者に占て貰つても、お伺いをしても寿命が短かい、目の上に何とかいう黒子ほくろが現われてるといいましたが、土手で斬られ損ない、成田街道でも殺されるところを助かつたのでげすから、三度の神は正直で、今度は殺されるんでしょうが、こんな事は正直でない方が宜しい」と云つて居る内に船つが著きましたから、

伊「師匠お前案内をしねえ」

正「宜しい」

といいながら端折はしおりを高く取りましたので、

伊「そんなに尻を端折はしよらないでも宜いじゃアねえか、さツさと這入んねえな、取次を頼みねえ」

正「えゝ、取つ附き、取つ附じやアねえ取次だ……お頼み申します／＼

と震え声でいう。

伊「変な声をするな、しつかり云いねえ」

正「お頼み申します」

山田「ど一れ」

正「オウびつく悔りした」

山「おや／＼これは何うも、大夫もお待兼だ、番頭さんを御同道かえ、正孝上んな、どうぞ此方こつちへ」

伊「へー御免を蒙ります……さア正孝往いきなよ」

と云われて正孝はかたまつてしまい、両手を合せて拝みながら、

正「私は何うぞ御免を」

といい捨て表へ駆け出してしまう。是から伊之助と重三郎は座敷へ通ると、お茶烟草盆

菓子などが出る内に、奥から出て来たのは八橋周馬で、何ういうことでござりますか水色に染紋の帷子かたびらを着まして、茶献上の帯を締め、月代さかやきを少し生やして居ります。年齢三十七八、色白く鼻筋通り、口元の締つた、眉毛の濃い、品の好い男で、ピタリと居り著いた処は成程五百石も取る見識が有り、其の上にこやかで、横着ものゆえ猫撫声を出して、周「さあ〜何うぞこれへ、始めまして手前が八橋周馬で、此の度火急に国表へ帰らんければならんので、丹誠して拵えた刀ゆえ惜しいものだが、然う〜幾口いくふりもは荷になつて持つて往くことが出来んに依つて拠ろなく払つてしまふのだが、他へ見せれば何程でも二つ返事で金子を出そうけれども、名高いものゆえパツと致すと宜くないから、作銘の処は云わないようになると言付けて遣つたために、お前の方へ手数てかずを懸け、誠に御面倒なことで」伊「いえ何う致しまして、私にはどんと目が届きませんから番頭を連れて参りましたが、少々其のお腰を拝見致しまして、其の上代価の所は二百両でも三百両でもお好み次第に差上げまする心得で」

周「ア、左様か」

と刀懸に懸けて有つたのを持つて来て伊之助に渡すを、受取り、又重三郎に渡す。重三郎は拵えなどは見は致しません、すぐに引抜いて見ましたなれども、粟田口國綱の刀は見る

鞘に收め、
たびみだれ
度に亂か違うものだから、心を静めて熟々見ますると、疑いもない國綱なれば、刀を

重「エヽこれに相違ゞゞいません」

周「コレ待て賊」

といいながら追掛けで出る処へ、音羽小三郎の二人は襟を十字に綾取り、端折を高く取り、上締うわじめをしめ、小長いのを引抜き物をも言わずツカ〳〵と進んでまいり、今八橋周馬が敷台口しきだいぐちへ下りようとする前に立たち塞ふさがりました。

「おのれ大野惣兵衛、吾は稻垣小三郎なるぞ、父の仇覚悟致せ」

小一おのれ大野惣兵衛 吾は稻垣小三郎なるぞ 父の併覺悟致せ』
と身構えた様子を見て山田藤六は肝を潰して、玄関の長四畳の処へペタ／＼と坐つてしまふ。八橋周馬は物をもいわず奥の方へ逃げ込む。小三郎は跡から続いて追いかける。音羽は女ながらも胆の据つたもので、今腰が抜けたて坐つて居る藤六を振り向かながら 一 刀あびせる。

藤
「ア」

という声諸共にパタリと倒れて息絶える。小三郎は追い掛けながら、

小「おのれ逃げるとは卑怯であろう、丈助と其の方と合体して國綱の刀を盗み取り、三ヶ年以前父小左衛門を鴻の台にて殺せし大悪人、立派に侍らしく、逃げ匿れを致さんで尋常に勝負を致せ」

音「王子権現の帰り路に、三河島の茂みに待受け、鉄砲で父を打殺したに相違有るまい、それのみならず丈助といい合せ、だまして私を廓へ沈め、のめくと客に成り、能くもゝのめくと此の身を受出し女房になれと云いおつたな、云おうようなき人にんびにん非人ねいわざ最早げる道はないから覚悟をしろ」

大野「オ、音羽か」

と言つたが惣兵衛も肝を潰し、だいとう刀の鞘を払つて振り上げたが、斬込む了簡もなく、只ウーンしきと云つてるばかり、小三郎は元より早業はやわざの名人ゆえ、

小「天命思い知つたか」

と斬り込むを、惣兵衛は一步退いてチャリしおぞと受け止め、チャごうと二三合合せ、少しの隙を覗ねらつて惣兵衛が庭へ飛び下り、パタごうと駆けてまいり、生垣を飛び越えて土手の方へ逃げ出す。

小「卑怯だ返せ」

音「逃げるとて逃がそうか」と跡から追い掛ける。惣兵衛は土手伝に綾瀬の方へ逃げて往くと、ガヤ／＼多勢黒山のように入が立つて居りまして、バラ／＼礫を投りました。此の石は矢切の渡口に居りましたおしのと恭太郎が、御名号を書いては積み上げたのが、山のようになつて居ります間へ置れて居るのは、恭太郎に昇夫の安吉、重三郎、正孝などで、バラ／＼石を投げると弥次馬も手伝つて投ります。大野惣兵衛は最早目が暗んで居りますから、先には助太刀が有ると思い、後へ帰ろうとしたが、後からは小三郎音羽が追い掛けて参るので、これは堪らんと思い、刀を持つたなりドブリと綾瀬川へ飛び込むと、葭葦の繁つた処に一艘船が繋いで居りましたが、苦^{とま}を揚げて立出たは荷足の仙太郎で、楫柄^{かじづか}を振り上げて惣兵衛の横面^{よこづら}を殴る。

大野「アツ」

といいながら此方へ泳ぎ著き、上りにかかる処を小三郎が飛び込んでズーンと惣兵衛の肩先深く斬り込む。

大野「アツ」

といつて倒れるところを音羽が一刀斬り附ける、小三郎は惣兵衛の髪を掴んで上へ引揚げ、

小「ヤイ大野、其の方は卑怯な奴であるぞ、何うあつても汝の首を提げて屋敷へ帰らねば武道がたゝぬ、實に悪むべき奴であるぞ」

音「天命思い知つたか」

と二人して止めを差しましたは實に立派なことでござります。小三郎は泰然として少しも騒がず後へ退く処へ、船から仙太郎も上つてまいり、

仙「お芽出度うござえます、お怪我はござえませんか」

小「仙太郎親方本懐を遂げて此の上の悦びはございません」

仙「何んとも何うも申そうようはございません、先ずまアお芽出度うござえやした、止めはお差しなすつたか、私も此奴じやア何のくれえ苦労してえるか知れやせんから、少しばかり斬らして下さい、重さんも此処へ来ねえ」

重「ヘイ／＼此奴でございますか、畜生め、四年以來このかた一通りならぬ苦労をさせや

アがつて、此ん畜生め」

といいながら鬚の毛を一本／＼引抜く、仙太郎も榮螺のような拳骨を固めポカ／＼殴り、

仙「安やい、手前てめえも此処へ來い」

安「誠にお芽出度うござります・此ん畜生ちくしょうめ、人に散々こええ思おもえをさせやアがツて」

と二ツ三ツ打つ。

伊「師匠此処へ来なよ」

正「私も一寸と向むこう脛すねの毛を三本ばかり抜きましよう」

と云つてゐるところへ、向うからバラ／＼と侍が駆けて参りましたから、小三郎は血に

染つた刀を提げたなり油断なく身構え、何者が来たかと思い、ト見ると重役渡邊外記あだうが先へ立ち、金森兵部少輔さまの御舍弟八良五郎様はちろうごろうがお野懸けの帰りで、稻垣小三郎の仇討あだうちのことをお聞き遊ばし、お出いでになりましたので、これから小三郎が粟田口國綱のお刀を殿さまに差上げました。金森八良五郎様もことのほかお悦びにて、稻垣小三郎は元へお召し返しに相成り、石川家も再興致しまして、音羽と小三郎とは夫婦になり、後に兩人の中に子をもうけ、長男を以て石川の家を相続させまして、八百石にお取立になりまして、家長く榮えましたが、伊之助は全快に相成りましたゆえ、岡本政七の妹いもとお雪よしを元々に婚姻致して、これも末長く中よく榮えました。また仙太郎は金森様のお舟ふな御用ごようを達いたしますという、末お芽出度いお話でござります。これで粟田口のお話は読切に相成りました。

(
拠酒井昇造速記)

青空文庫情報

底本：「圓朝全集 卷の三」近代文芸資料複刻叢書、世界文庫

1963（昭和38）年8月10日発行

底本の親本：「圓朝全集 卷の三」春陽堂

1927（昭和2）年1月28日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

ただし、話芸の速記を元にした底本の特徴を残すために、繰り返し記号は原則としてそのまま用いました。同の字点「々」と同様に用いられている一の字点（漢数字の「一」を一筆書き）にしたような形の繰り返し記号）は、「々」にかえました。

また、総ルビの底本から、振り仮名の一部を省きました。

底本中ではばらばらに用いられている、「其の」と「其」、「此の」と「此」、「彼《あ》の」と「彼《あの》」は、それぞれ「其の」「此の」「彼の」に統一しました。

また、底本中では改行されていませんが、会話文の前後で段落をあらため、会話文の終わ

りを示す句読点は、受けのかぎ括弧にかえました。

※底本に混在している「衛」と「衛」、「嶋」と「島」「鐘ヶ淵」と「鐘が淵」、「美惠」と「三恵」、「長次」と「長治」、「寶」と「寶」、「芦屋」と「蘆屋」、「劍」と「剣」は「剣」、「姫」と「姪」は、それぞれ「衛」、「嶋」、「鐘ヶ淵」、「美惠」、「長次」、「宝」、「蘆屋」、「劍」、「姪」に統一しました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：小林繁雄

校正：門田裕志、仙酔ゑびす

2010年10月18日作成

2011年2月13日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

粟田口霧笛竹（澤紫ゆかりの咲分）

粟田口霧笛竹（澤紫ゆかりの咲分）

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 三遊亭圓朝

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>